－千 葉 市－

堀之内城跡
免谷津遺跡
志保多遺跡

2003

例　　言

1．本書は、下記の３遺跡の発掘調査報告書である。

堀之内城跡　千葉市若葉区谷当町238番４他　（遺跡番号：若葉275）

免谷津遺跡　千葉市若葉区谷当町947番地４他（遺跡番号：若葉274）

志保多遺跡　千葉市若葉区谷当町1044番15他　（遺跡番号：若葉266）

2．調査は、千葉市土地開発公社による道路建設事業（谷当26号線整備事業）に伴い、千葉市教育委員会生涯学習部文化課の指導のもと、財団法人千葉市文化財調査協会（現財団法人千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター）が実施した。

3．発掘調査及び整理作業の期間、及び担当者・調査面積は以下の通りである。

堀之内城跡

確認・本調査　平成12年７月17日～同年10月30日　担当者：中山貴正　調査面積：1,508m^2/8,926m^2

（内本調査実施分：500m^2）

本　調　査　平成13年４月１日～同年９月28日　担当者：中山貴正　調査面積：5,200m^2

免谷津遺跡

確 認 調 査　平成11年８月16日～同年９月14日　担当者：長原　亘　調査面積：405m^2/7,183.88m^2

確認・本調査　平成12年７月17日～同年８月24日　担当者：中山貴正　調査面積：222m^2/890.24m^2

（内本調査実施分：260m^2）

志保多遺跡

確 認 調 査　平成13年７月16日～同年９月28日　担当者：中山貴正　調査面積：255m^2/2,011m^2

整 理 作 業　平成14年８月19日～平成15年３月31日　担当者：長原　亘

4．本書の編集及び執筆は、長原亘が行った。

5．堀之内城跡出土の人骨は、国立科学博物館（現：札幌医科大学）松村博文・東京都老人総合研究所谷畑美帆の両氏、獣骨を東京芸術大学植月学氏に分析を依頼し、それぞれに玉稿をいただいた。この場をお借りして謝意を表したい。また、鉄鍋の保存処理を川鉄テクノリサーチ㈱に委託した。

6．遺構の写真撮影は発掘調査担当者、遺物の撮影は青柳すみ江が行い、フィルム及びデジタルカメラで撮影したものを使用している。

7．出土資料及び調査記録などは、千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

8．発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々から御教示・御協力いただいた。記して謝意にかえさせていただきたい。千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会文化課、千葉市道路建設課、川鉄テクノリサーチ㈱、千葉市都市開発公社、芦田伸一、小野正敏、藤澤良祐、松村博文、谷畑美帆、植月　学、簗瀬裕一（順不同・敬称略）

凡　　例

1．図中では、下記のような略号を使用している。

住居跡：「住」、土坑：「土」、井戸：「井」、火葬土壙：「火土」、竪穴建物跡：「竪」

地下式坑：「地下」、掘立柱建物跡：「掘」、台地整形区画：「整」、土壙墓：「土墓」

2．遺構図中の標高は海抜高、方位は真北を示している。

3．遺構実測図の縮尺は、下記の通りである。

1/200：台地整形区画、1/100：溝状遺構

1/80：戦車壕状遺構・溝状遺構・掘立柱建物跡・台地整形区画

1/60：住居跡・地下式坑・竪穴建物跡、1/30：土坑・火葬土壙、土壙墓「土墓」

1/4：土器・石材　1/3：鉄製品　2/3：石器

その他は適宜、図中スケールに縮尺を記載している。

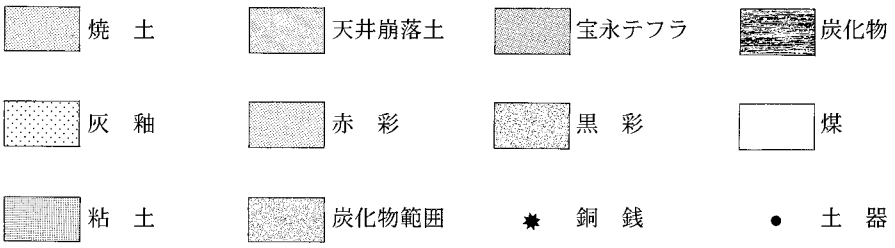
4．遺構の番号は、調査段階とは異なっており、新旧の対応関係を各遺構の一覧表中に記載している。

5．第１図は、国土地理院発行「千葉東部」(S＝1/25,000) を使用している。

第２図は、千葉県更科村全図（昭和15年８月作製）の谷当村・旦谷村部分を下図とし、トレースしたものを使用している。

第３図は、千葉市基本図「Ｆ－10」(S＝1/2,500) を使用している。

6．図版中で使用したスクリーントーンは下記の通りである。



7．遺物の時期を比定するにあたり、参考とした文献は下記のとおりである。

- 藤澤良祐1991「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」
  『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｘ』
- 藤澤良祐他2001「戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品」
  財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 簗瀬裕一、長原亘2002「千葉市生実城跡」財団法人　千葉市文化財調査協会

目　　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　堀之内城跡の調査
　1　調査の概要……5
　2　検出された遺構と遺物……10
　　a　地下式坑……10
　　b　土坑……12
　　c　火葬土壙……16
　　d　土壙墓……18
　　e　竪穴建物跡……19
　　f　井戸……19
　　g　炭窯……20
　　h　掘立柱建物跡……20
　　i　台地整形区画……21
　　j　溝状遺構……23
　　k　戦車壕状遺構……60
Ⅳ　免谷津遺跡の調査
　1　調査の概要……66
　2　検出された遺構と遺物……66
　　a　縄文時代の遺構と遺物……66
　　b　古墳時代の遺構と遺物……66
　　c　その他の時代の遺構（溝状遺構）……74
Ⅴ　志保多遺跡の調査
　　調査の概要と成果……74
Ⅵ　まとめ……76
Ⅶ　付編
　1　堀之内城跡出土の鉄鍋を被った近世人骨について（松村博文・谷畑美帆）……81
　2　堀之内城跡出土の獣骨について（植月　学）……85

挿図目次

第１図　堀之内城跡と周辺遺跡…… 2
第２図　谷当・旦谷地区字切図…… 3
第３図　遺跡調査区及び周辺地形図…… 4
第４図　確認調査トレンチ配置図及び
　　遺構配置図(1) …… 6
第５図　遺構配置図(2) …… 7
第６図　遺構配置図(3) …… 8
第７図　遺構配置図(4) …… 9
第８図　１・２号地下式坑……26
第９図　３・４号地下式坑……27
第10図　５・６号地下式坑・40号土坑……28
第11図　７．８号地下式坑……29
第12図　９・10号地下式坑……30
第13図　11～13号地下式坑……31
第14図　１・２・８・17～19号土坑……32
第15図　１号土壙墓・１号溝状遺構・３・４・
　　６・７号土坑……33
第16図　５・９～15・23・37号土坑……34
第17図　２号火葬土壙・20～22・24・26・
　　27・29号土坑……35
第18図　３号火葬土壙・25・28・
　　30～35号土坑……36
第19図　36・38・39・42～45号土坑……37
第20図　46～49・53号土坑……38
第21図　50～52・54～58号土坑……39
第22図　１号井戸・７号溝状遺構・66号土坑……40
第23図　59～65・67・68号土坑……41
第24図　69～72・76・77・79号土坑……42
第25図　73～75・78号土坑・11～13号溝状遺構…43
第26図　80～86号土坑……44
第27図　87～93号土坑……45
第28図　１・４～７号火葬土壙……46
第29図　８～12号火葬土壙・４号竪穴建物跡……47
第30図　１～３号竪穴建物跡・１号炭窯・
　　41号土坑……48
第31図　１・２号掘立柱建物跡……49
第32図　１号台地整形区画・４号溝状遺構……50
第33図　２号台地整形区画……51
第34図　３号台地整形区画……52
第35図　４号台地整形区画……53
第36図　３号溝状遺構……54
第37図　５号溝状遺構……55
第38図　戦車壕状遺構……56
第39図　堀之内城跡出土遺物(1) ……57
第40図　堀之内城跡出土遺物(2) ……58
第41図　堀之内城跡出土遺物(3) ……59
第42図　１号土壙墓及び出土遺物……60
第43図　免谷津遺跡トレンチ配置図(1) ……68
第44図　免谷津遺跡トレンチ配置図(2) ……69
第45図　免谷津遺跡トレンチ配置図(3) ……70
第46図　２・３号住居跡……71
第47図　１・２号土壙……72
第48図　免谷津遺跡出土遺物……73
第49図　志保多遺跡トレンチ配置図……75

表　目　次

第１表　地下式坑一覧……10
第２表　地下式坑主室データ一覧……11
第３表　土坑一覧……13・14
第４表　火葬土壙一覧……16
第５表　土壙墓一覧……18
第６表　竪穴状遺構一覧……19
第７表　井戸一覧……19
第８表　炭窯一覧……20
第９表　掘立柱建物跡一覧……20
第10表　台地整形区画一覧……21

第11表　溝状遺構一覧……23
第12表　堀之内城跡出土遺物一覧(カワラケ)……61
第13表　堀之内城跡出土遺物一覧(渥美)……61
第14表　堀之内城跡出土遺物一覧(常滑・甕)・61・62
第15表　堀之内城跡出土遺物一覧(常滑・壺)……62
第16表　堀之内城跡出土遺物一覧(常滑・鉢)……62
第17表　堀之内城跡出土遺物一覧
(在地産内耳土器)……62
第18表　堀之内城跡出土遺物一覧(瓦質土器)……62
第19表　堀之内城跡出土遺物一覧
(中世輸入陶磁器・青磁)……62
第20表　堀之内城跡出土遺物一覧
(国産陶器類)……62・63
第21表　堀之内城跡出土遺物一覧(瀬戸茶壺)……63
第22表　堀之内城跡出土遺物一覧(石材)……63・64
第23表　堀之内城跡出土遺物一覧(砥石他)……64
第24表　堀之内城跡出土遺物一覧(鉄製品)……64
第25表　堀之内城跡出土遺物一覧(瓦)……64
第26表　堀之内城跡出土遺物一覧(骨類)……64
第27表　堀之内城跡出土遺物一覧(銭)……65
第28表　堀之内城跡出土遺物一覧
(縄文時代～奈良・平安時代)……65
第29表　土坑の平面形と時期別集計表……78
第30表　堀之内城跡出土遺物集計(骨類を除く)…80
第31表　堀之内城跡出土常滑製品(甕・壺・鉢)
時期別集計……80
第32表　堀之内城跡瀬戸・志戸呂製品集計表……80

写真目次

図版１　堀之内城跡・免谷津遺跡・志保多遺跡航空写真・調査前全景・Ｃ区全景
図版２　堀之内城跡Ｄ区全景・ＦⅠ区全景・２号溝状遺構・ＦⅢ区溝②トレンチ・１～３号地下式坑
図版３　堀之内城跡３～７号地下式坑
図版４　堀之内城跡８～11号地下式坑
図版５　堀之内城跡12・13号地下式坑・１・２・３・６号土坑
図版６　堀之内城跡５・７～15号土坑
図版７　堀之内城跡16・17・20～24号土坑
図版８　堀之内城跡25～32号土坑
図版９　堀之内城跡33～35・37～43号土坑
図版10　堀之内城跡44～50・53～56号土坑
図版11　堀之内城跡58～65・67号土坑
図版12　堀之内城跡65～72号土坑
図版13　堀之内城跡73・75～77・79～81号土坑
図版14　堀之内城跡82～85・87～93号土坑
図版15　堀之内城跡１～６号火葬土壙
図版16　堀之内城跡５～７号火葬土壙・２号台地整形区画内火葬土壙群
図版17　堀之内城跡７～10・12火葬土壙・１号土壙墓
図版18　堀之内城跡１号土壙墓・１・３・４号竪穴建物跡・１号井戸
図版19　堀之内城跡１号炭窯・１～３号台地整形区画・１・２号掘立柱建物跡跡・４号溝状遺構
図版20　堀之内城跡２・３号溝状遺構

図版21　堀之内城跡３～７・９号溝状遺構・１号台地整形区画
図版22　堀之内城跡５・15～20号溝状遺構・戦車壕状遺構
図版23　免谷津遺跡１・２号住居跡・１・２号土壙
図版24　免谷津遺跡１・２号溝　志保多遺跡調査風景
図版25　堀之内城跡出土遺物(1)
図版26　堀之内城跡出土遺物(2)
図版27　免谷津遺跡出土遺物
図版28　堀之内城跡１号土壙墓出土鉄鍋及び頭骨

グラフ目次

グラフ１　土坑の平面形と時期の比較……78
グラフ２　中世土坑の平面形比率……78
グラフ３　近世土坑の平面形比率……78
グラフ４　堀之内城跡遺物集計(骨類除く)……80
グラフ５　堀之内城跡常滑製品時期別集計
(不明を除く)……80
グラフ６　堀之内城跡瀬戸・志戸呂製品
時期別集計……80
グラフ７　堀之内城跡瀬戸・志戸呂製品
種別集計……80

付編１図表目次

図１　堀之内城跡より出土したヒト頭骨……83
表１　頭骨計測値……84
図２　慢性の炎症性変化を示す鼻腔左辺縁……84
表２　歯冠計測値……84

付編２表目次

表　堀之内城跡出土獣骨の部位集計一覧……86

Ⅰ　調査に至る経緯

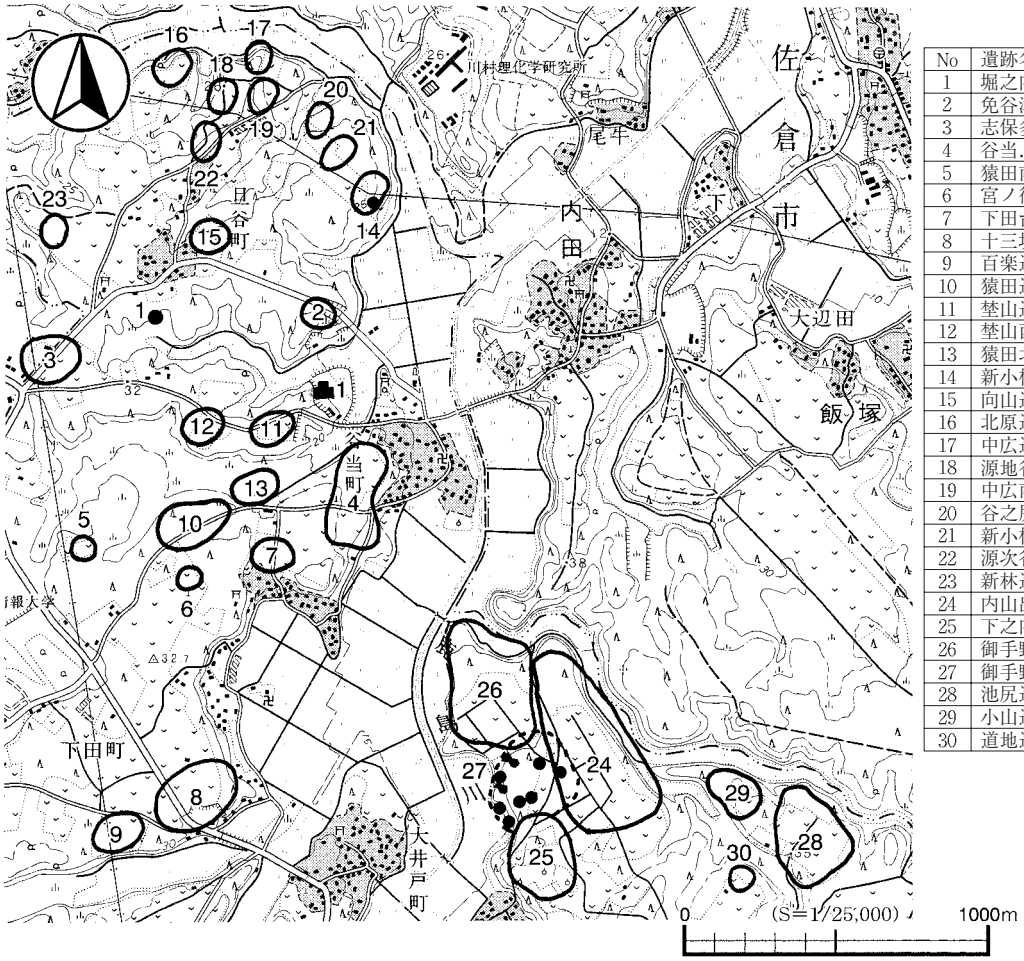
本遺跡群の発掘調査は、千葉市による「市道谷当26号線道路整備事業」に伴い実施された。平成９年９月16日付で千葉市長松井旭から千葉市若葉区谷当地内の総面積30,800m^2 の事業予定地内について、千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書（９千教文第391号）が提出された。市教育委員会文化課が現地調査を行い、照会地が堀之内城跡・免谷津遺跡・志保多遺跡として周知される範囲に含まれることを確認の上、「遺跡の所在する旨」、平成10年２月27日付の９千教文第391号で回答した。これを受けて市教育委員会文化課と千葉市との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果、事業及び調査対象地の見直しを行った上、書類の再処理を行った。この結果、事業対象面積6,800m^2 について、平成10年10月５日付で「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書(10千教文第424号)が再提出され、平成11年３月８日付の10千教文第424号で回答した。これを受けて市教育委員会文化課と千葉市との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果、6,300.75m^2 について遺構の分布範囲を把握するために数次にわたる確認・本調査を実施することになった。堀之内城跡は、平成12度(確認調査：1,508m^2/8.926m^2)、免谷津遺跡は、平成11(確認調査：635m^2/7,183.88m^2)・12年度(確認調査：222m^2/890.24m^2)、志保多遺跡は平成13年度(確認調査：255m^2/2,011m^2)に調査を実施した。調査の結果、堀之内城跡から中世の遺構群、免谷津遺跡から古墳時代前期の集落跡が確認された。これを受けた再協議の結果、遺構が集中的に確認された部分周辺をその年次毎に適宜、本調査による記録保存の措置を講ずることとなった。この措置を受け、堀之内城跡は平成12年７月17日～同年10月30日(本調査：500m^2)と平成13年４月１日～同年９月14日(本調査：5,200m^2)、免谷津遺跡は平成12年７月17日～同年８月24日の期間(本調査：260m^2)財団法人千葉市文化財調査協会に委託して発掘調査を実施することとなった。(文化課)

Ⅱ　遺跡の位置と環境

千葉市は、房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。市域の大部分が下総台地で占められており、各時代の多くの遺跡が台地上に展開している。大規模な河川は無いものの、市域北部には印旛沼に注ぐ鹿島川があり、東京湾に流入する村田川・都川・浜野川などとこれらに合流する生実川・葭川・坂月川の大小の支流が樹枝状に展開し、東京湾岸の河口付近に小規模な沖積平野・海岸低地が形成されている。

本遺跡群は、千葉市若葉区旦谷町と谷当町にまたがって分布する。旦谷町は千葉市が佐倉市と四街道市との市境付近に突き出している部分の先端に位置し、谷当町はその南側に位置する。この地域は、鹿島川西岸から樹枝状に入り込む小支谷（谷津）に囲まれており、集落はそれら谷津を見下ろす台地上に立地しており、遺跡群は標高約30～32m を測るその台地上に展開している。

近隣において、本遺跡群と時期的な特徴が近似する遺跡は、30箇所ほど確認されている。その中で、過去に調査が実施されている遺跡は２遺跡（４・６）しかなく、市内でも調査件数が少ない地域といえる。谷当・上ノ台遺跡(4)と宮ノ後遺跡(6)は、平成９年度に下田町７号線道路整備事業に伴う一連の調査が実施された。谷当・上ノ台遺跡からは、縄文時代の土壙３基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡１棟、中・近世の掘立柱建物跡１棟・土坑１基・溝状遺構６条、時期不明の土坑７基・溝状遺構３条が検出され、縄文土器片30数点、奈良・平安時代の土器片150数点、近世の金属製品（煙管など）



No	遺跡名	遺跡No
1	堀之内城跡	275
2	免谷津遺跡	274
3	志保多遺跡	266
4	谷当．上ノ台遺跡	256
5	猿田南遺跡	259
6	宮ノ後遺跡	258
7	下田台遺跡	257
8	十三坊遺跡	262
9	百楽遺跡	263
10	猿田遺跡	267
11	埜山遺跡	268
12	埜山西遺跡	269
13	猿田北遺跡	270
14	新小橋遺跡	271
15	向山遺跡	272
16	北原遺跡	276
17	中広遺跡	277
18	源地谷北遺跡	278
19	中広南遺跡	279
20	谷之尻遺跡	280
21	新小橋西遺跡	273
22	源次谷遺跡	282
23	新林遺跡	281
24	内山出口遺跡	291
25	下之内遺跡	293
26	御手野遺跡	294
27	御手野古墳群	295
28	池尻遺跡	297
29	小山遺跡	298
30	道地遺跡	302

第１図　堀之内城跡と周辺遺跡

４点が出土している。宮ノ後遺跡からは、縄文時代の土壙８基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡３棟・溝状遺構３条、中・近世の土坑７基・溝状遺構７条、時期不明の溝状遺構５条が検出され、縄文土器片10数点、奈良・平安時代の土器片100数点、中・近世土器片20数点・近世銅銭（寛永通宝）１点が出土している。

今回の調査対象地周辺の字切図を第２図に挙げている。その図を参照すると「堀之内」の字名は見出すことはできない。県遺跡分布図作成段階では、この図の「埜向」の字名が見られる平坦地に堀之内城跡として遺跡の所在を定めており、今回の調査地域とは地点的に異なっていたことがわかり、何故今回の調査対象地が「堀之内城跡」の範疇として捉えられるようになったかは不明である。つまり、今回の調査を機に第３図に示した範囲を堀之内城跡と認識することとなった。因みに、「堀之内」の字名は、現谷当町の中心域（第３図の東端、姨神神社よりも更に東側にあたる。）に見られる字名であり、県遺跡分布地図に掲載されている範囲も厳密な意味では該当しないものと考えられる。

堀之内城跡のＦ区に南隣する平坦地に旧真照院跡と伝承される場所がある（第４図参照）。現状でも盛り土に囲まれ、井戸らしき大穴が存在している。また、写真図版１の空撮風景でもその地点のみ方形に竹林となっていることで周囲の木々の緑と対照的に認識もできる。地元ではこの平坦地から南側に見下ろす地点にある「堂谷津池」には、この院にあった梵鐘が沈んでいるといった古伝承が伝わっている。現在の真照院は谷当町の中心域に所在しており、江戸時代に遷座したと伝えられる。

第２図　谷当・旦谷地区字切図

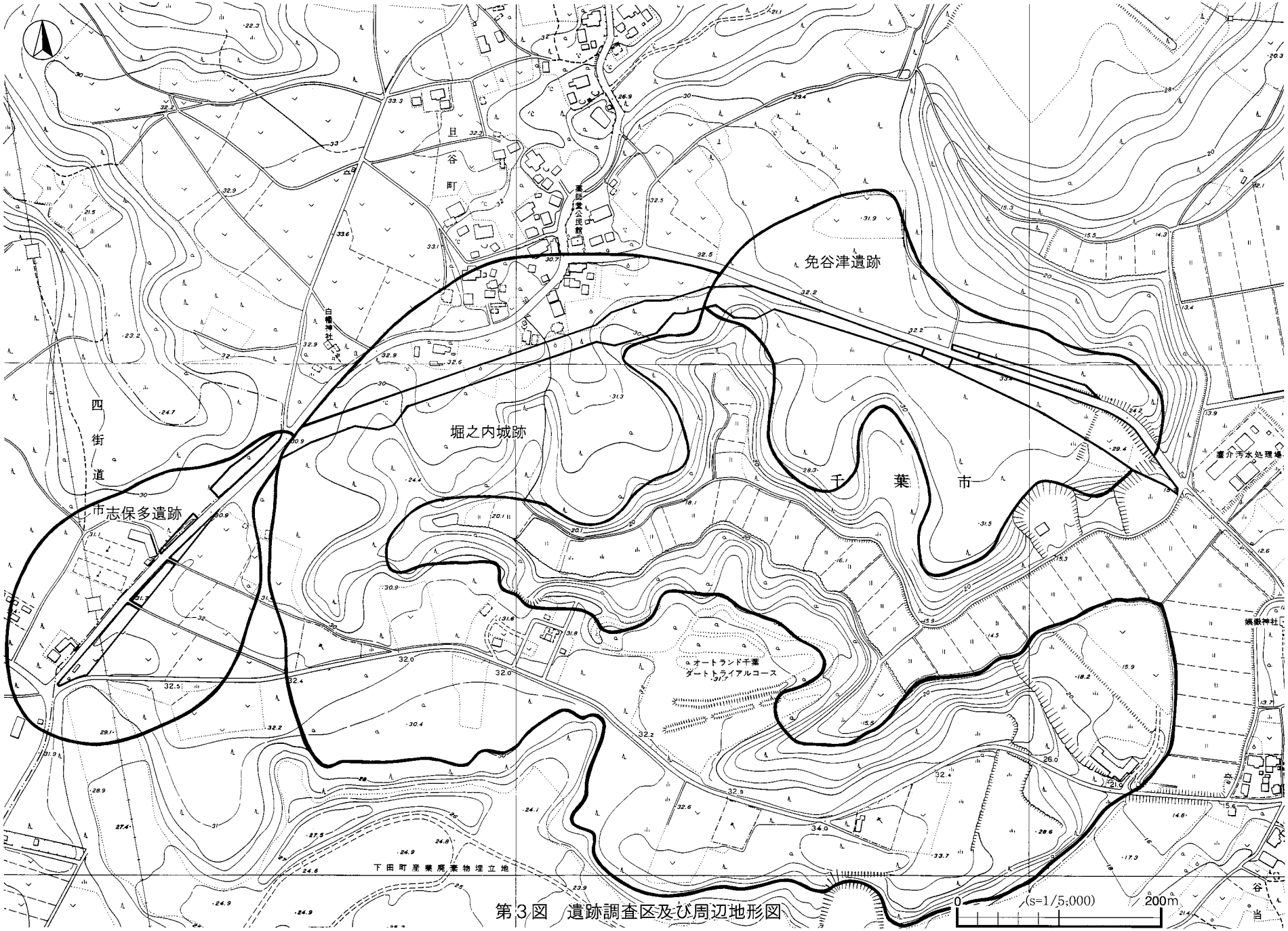
今回の調査域において多くの溝状遺構が検出されているが、これらの多くが本来、道路として機能していたものと考えられる。特に、２号溝（５号溝も一連の溝と考えられる。）は蛇行しながら東西に走るもので、地割図などを検証すると旧千葉郡旦谷村（現千葉市若葉区旦谷町）と同郡谷当村の村境道と合致すると考えられる。この道がいつから存在していたのかは、文献的には江戸時代までしか確認できず、今回の調査で遺構の覆土中に所謂「宝永テフラ」と呼ばれている1707年の富士山の噴火によって噴出されたと考えられている火山灰が確認されたことから、17世紀の末頃には存在していた可能性が高いことが判った。また、その堆積位置（高さ）から火山灰が堆積するかなり以前からこの道路が機能していた可能性が考えられるが、その上限は定かとはならなかった。

参考文献

千葉市史編纂委員会　「絵にみる図でよむ千葉市図誌」下巻　1993

和田茂右衛門　「千葉市の町名考」1970

更科郷土史研究会編　「さらしな風土記（更科地区の歴史）」1998



第3図　遺跡調査区及び周辺地形図

Ⅲ　堀之内城跡の調査

1　調査の概要

本遺跡は、鹿島川左岸の小支谷を遡った標高約32m を測る台地上に立地する。東側に免谷津遺跡、西側に志保多遺跡が位置する。B 区と FⅡ区の 2 地点では、比高差 7 ～ 8 m 測る谷が存在し、いずれも湧水が認められ、人為的な痕跡は全く検出できなかった。その他の地区からは、中世主体とする遺構が多く検出された。また、旦谷町と谷当町の村界古道（溝状遺構）も検出され、中・近世の土地利用の変遷がある程度解明された。

調査は道路整備事業に伴う調査であることから、平均幅10m 強の幅狭となり、東西に長い約240m 程の調査範囲となっている。第 4 図の左図にあるとおり、東から A 区～FⅢ区までの 8 調査区に大別している。これらの調査区は、確認調査時に元地形の形状に即して任意に設定したものだが、取り上げ遺物、図面等の記載はこの基準の上に記載されているものもある。

本調査段階は、D 区にあった工事用の区画杭RR41(国土座標系第Ⅸ軸、X=-395083、Y=344906)とRR42(同X=-395020、Y=345094)が20.001m であることを利用し、RR41杭を調査区表記の C20a 杭、RR42を C18a 杭として直角に10m 方眼のメッシュを設定した。

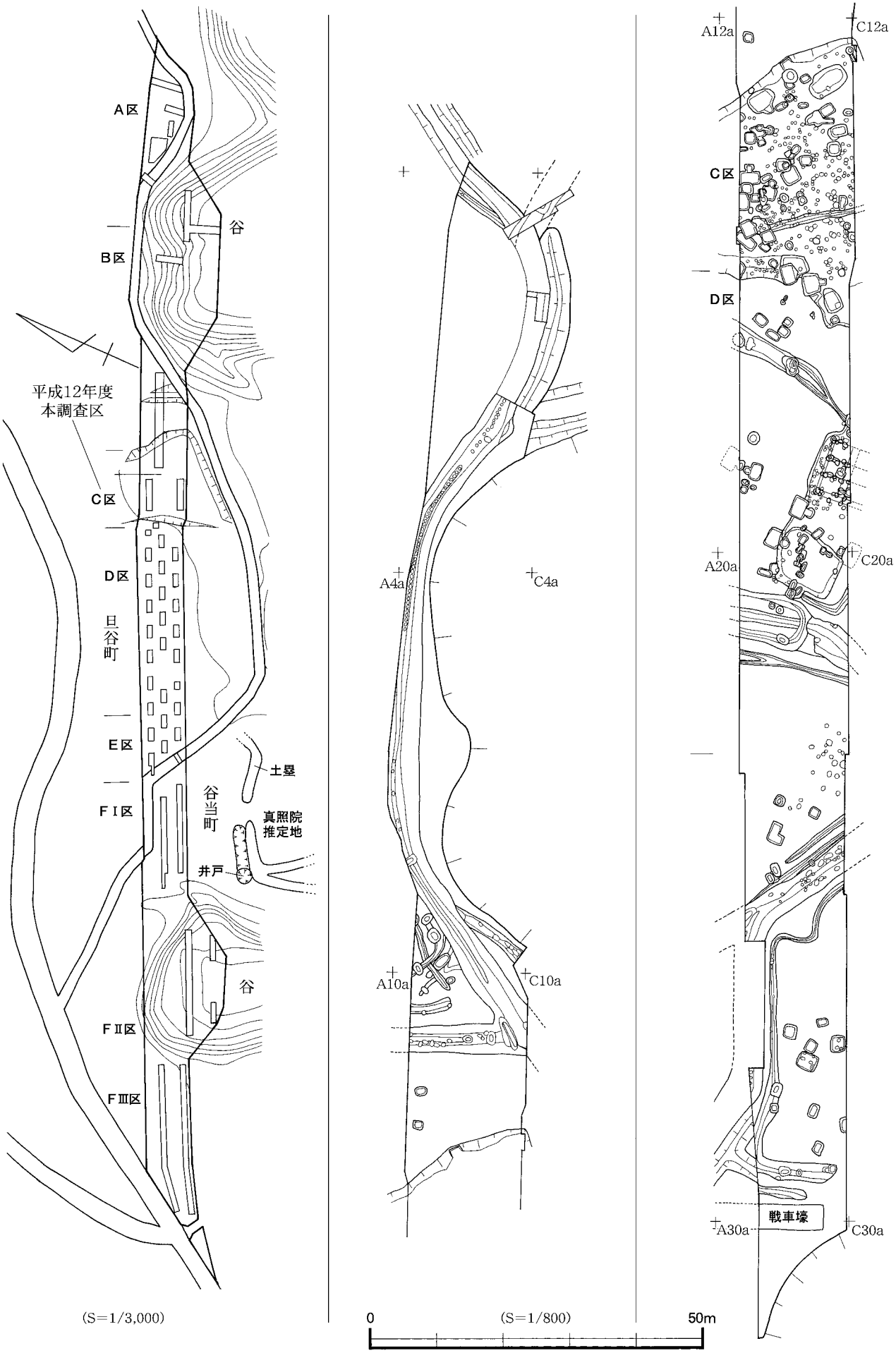
今回の調査では、中世～近代の遺構を多数検出した。地下式坑13基、土坑93基、火葬土壙12基、土壙墓 1 基、竪穴建物跡 4 基、井戸 1 基、炭窯 1 基、掘立柱建物跡 2 棟、台地整形区画 4 箇所、溝跡20条、戦車壕状遺構 1 箇所、ピット多数などがその内容である。これらの内、近代の遺構は土坑 2 基(25・84号土坑）と戦車壕状遺構である。近世の遺構は、 1 号土壙墓と 1 号炭窯、土坑 9 基となり、中世から近世のどの時期に比定できるかが不明な土坑が47基存在する。それ以外の遺構は全て中世に属するものと考えられる。しかし、遺物などの時期の判定基準が明確でないものは、調査担当者の所見を参考にしているため、必ずしも確証があるわけではない。

これらの成果の中で、近世の土壙墓から出土した鉄鍋を被った人の頭蓋骨は、ハンセン氏病患者であった可能性が指摘され、『悪病による「鍋被り埋葬」の風習を裏付ける人骨』として注目される(詳細は、付編 1 に掲載)。

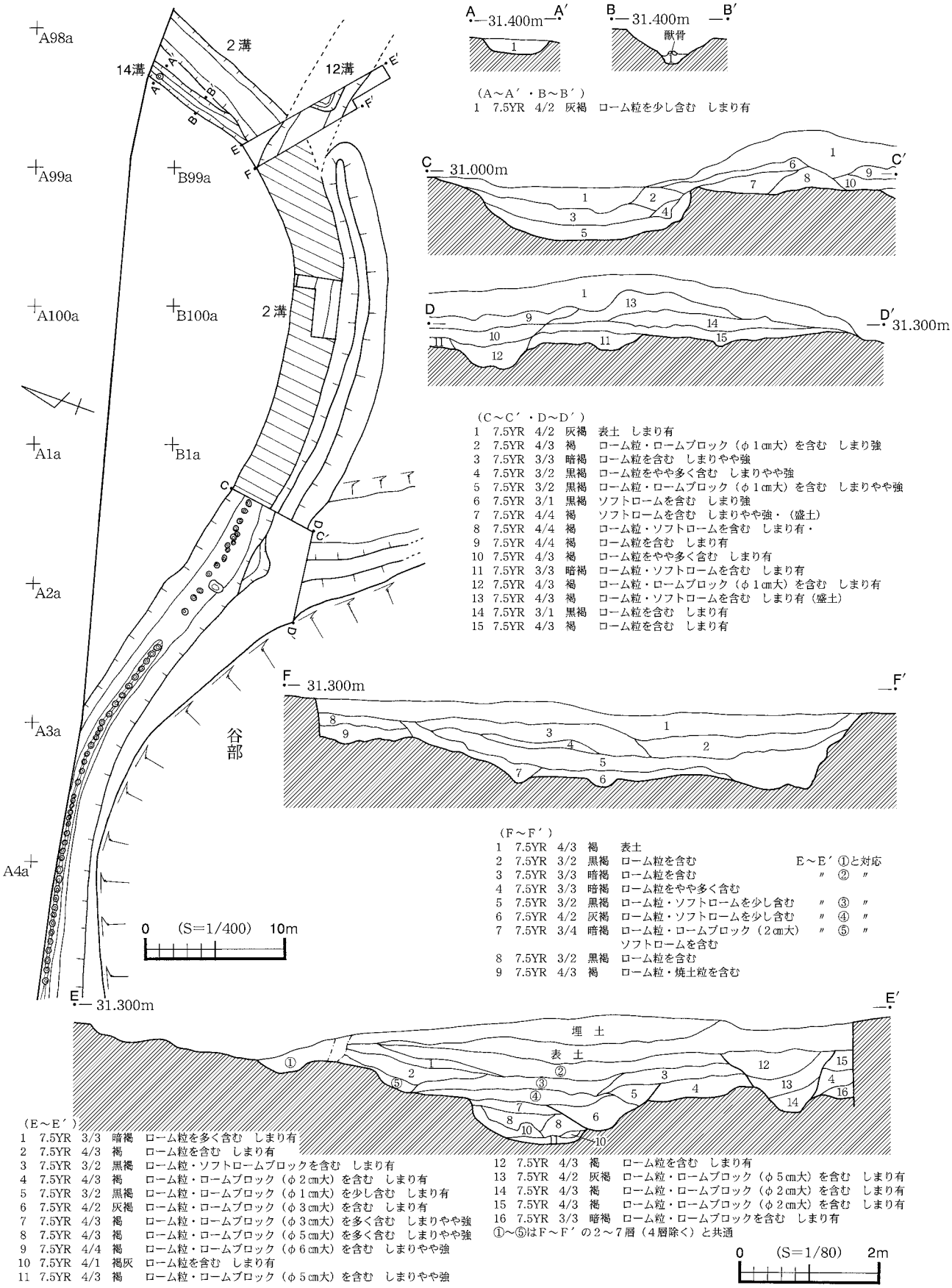
遺物は、カワラケ、常滑焼甕・鉢、渥美焼甕、在地産擂鉢、瓦質土器、国産陶器、中国産輸入陶磁器、砥石などの石製品、鉄製品、銅銭、骨類などの中世遺物を中心に、縄文土器、須恵器、土師器、鉄鍋、人骨、近世陶磁器、木製品などが出土している。

常滑焼と国産の瀬戸美濃陶器類の編年観を参考にすると、常滑焼甕・鉢は、 5 型式（13世紀前半頃）から12型式（16世紀後半頃）まで見られ、 5 ～ 6 型式と 9 ～10形式のものがやや比率が高い傾向にある。国産陶器は、古瀬戸前期Ⅲ型式から後期Ⅳ型式（15世紀中頃）の古段階までが見られ、後期Ⅰ～Ⅳ型式の古段階までのものが中心であり、大窯期の遺物は全く出土していない。これらのことから、中世の遺構の形成時期は、13世紀～15世紀中頃までに造営されたものが中心であり、近世遺構との直接的なつながりがない可能性が考えられる。なお、常滑焼甕・鉢の中に、破片を砥石に転用しているものが幾つか見出された（第40図-24・32・33・75・・6)。近世遺物と目されるものは、極微量であり、鉄鍋とそれに伴った銅銭（古寛永銭）以外は、18世紀以降の新しいものが多かった。

縄文時代の土器片は、前期条痕文系土器・中期阿玉台式・加曽利Ｅ式・後期堀之内式期のものが出



第４図　確認調査トレンチ配置図及び遺構配置図（１）



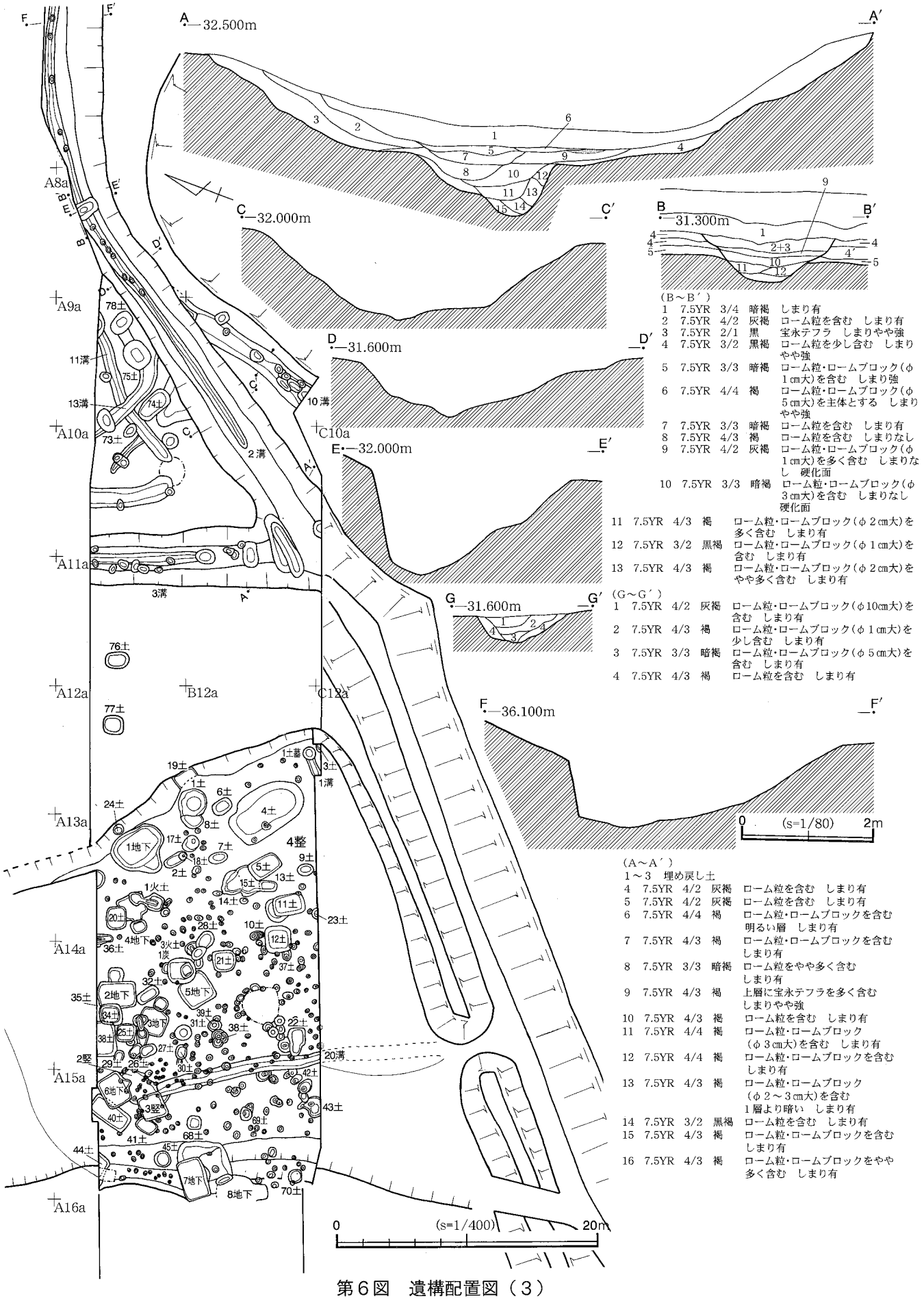
（A～A′・B～B′）
1 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を少し含む しまり有

（C～C′・D～D′）
1 7.5YR 4/2 灰褐 表土 しまり有
2 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む しまり強
3 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を含む しまりやや強
4 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒をやや多く含む しまりやや強
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む しまりやや強
6 7.5YR 3/1 黒褐 ソフトロームを含む しまり強
7 7.5YR 4/4 褐 ソフトロームを含む しまりやや強・（盛土）
8 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ソフトロームを含む しまり有・
9 7.5YR 4/4 褐 ローム粒を含む しまり有
10 7.5YR 4/3 褐 ローム粒をやや多く含む しまり有
11 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ソフトロームを含む しまり有
12 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む しまり有
13 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ソフトロームを含む しまり有（盛土）
14 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒を含む しまり有
15 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまり有

（F～F′）
1 7.5YR 4/3 褐 表土
2 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒を含む E～E′①と対応
3 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を含む 〃 ② 〃
4 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒をやや多く含む
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ソフトロームを少し含む 〃 ③ 〃
6 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ソフトロームを少し含む 〃 ④ 〃
7 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロック（2㎝大）ソフトロームを含む 〃 ⑤ 〃
8 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒を含む
9 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・焼土粒を含む

（E～E′）
1 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を多く含む しまり有
2 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまり有
3 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ソフトロームブロックを含む しまり有
4 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を少し含む しまり有
6 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む しまり有
7 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を多く含む しまりやや強
8 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を多く含む しまりやや強
9 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロック（φ6㎝大）を含む しまりやや強
10 7.5YR 4/1 褐灰 ローム粒を含む しまり有
11 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む しまりやや強
12 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまり有
13 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む しまり有
14 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
15 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
16 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロックを含む しまり有
①～⑤はF～F′の2～7層（4層除く）と共通

第5図 遺構配置図（2）



(B～B′)

1	7.5YR	3/4	暗褐	しまり有
2	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒を含む　しまり有
3	7.5YR	2/1	黒	宝永テフラ　しまりやや強
4	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒を少し含む　しまりやや強
5	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック(φ1㎝大)を含む　しまり強
6	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロック(φ5㎝大)を主体とする　しまりやや強
7	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒を含む　しまり有
8	7.5YR	4/3	褐	ローム粒を含む　しまりなし
9	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック(φ1㎝大)を多く含む　しまりなし　硬化面
10	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック(φ3㎝大)を含む　しまりなし　硬化面
11	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック(φ2㎝大)を多く含む　しまり有
12	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・ロームブロック(φ1㎝大)を含む　しまり有
13	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック(φ2㎝大)をやや多く含む　しまり有

(G～G′)

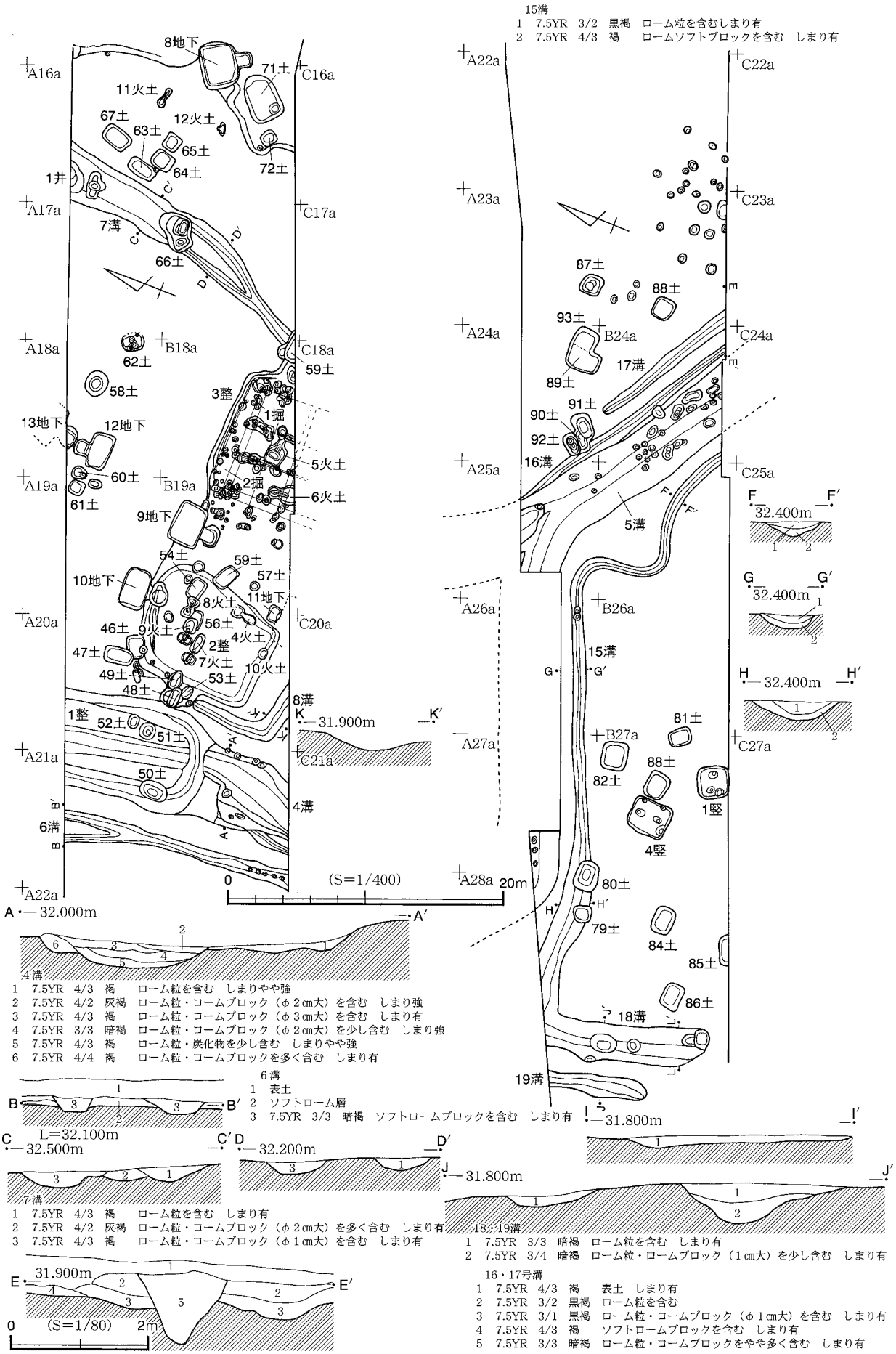
1	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック(φ10㎝大)を含む　しまり有
2	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック(φ1㎝大)を少し含む　しまり有
3	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック(φ5㎝大)を含む　しまり有
4	7.5YR	4/3	褐	ローム粒を含む　しまり有

(A～A′)

1～3　埋め戻し土

4	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒を含む　しまり有
5	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒を含む　しまり有
6	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロックを含む　明るい層　しまり有
7	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
8	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒をやや多く含む　しまり有
9	7.5YR	4/3	褐	上層に宝永テフラを多く含む　しまりやや強
10	7.5YR	4/3	褐	ローム粒を含む　しまり有
11	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロック(φ3㎝大)を含む　しまり有
12	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
13	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック(φ2～3㎝大)を含む　1層より暗い　しまり有
14	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒を含む　しまり有
15	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
16	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロックをやや多く含む　しまり有

第６図　遺構配置図（３）


15溝
1 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒を含むしまり有
2 7.5YR 4/3 褐 ロームソフトブロックを含む しまり有
8地下
71土
11火土
12火土
67土
63土
65土
64土
72土
1井
7溝
66土
62土
58土
59土
3整
1掘
13地下
12地下
60土
61土
2掘
5火土
6火土
9地下
54土
59土
57土
10地下
11地下
8火土
56土
46土
9火土
4火土
2整
47土
7火土
10火土
49土
53土
48土
8溝
1整
52土
51土
50土
4溝
6溝
(S=1/400)
0
20m
A 32.000m
A′
4溝
1 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまりやや強
2 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）を含む しまり強
3 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ3cm大）を含む しまり有
4 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）を少し含む しまり強
5 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・炭化物を少し含む しまりやや強
6 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロックを多く含む しまり有
6溝
1 表土
2 ソフトローム層
3 7.5YR 3/3 暗褐 ソフトロームブロックを含む しまり有
L=32.100m
C 32.500m
C′
D 32.200m
D′
7溝
1 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまり有
2 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）を多く含む しまり有
3 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）を含む しまり有
E 31.900m
E′
(S=1/80)
2m
87土
88土
93土
B24a
17溝
89土
90土
91土
92土
16溝
5溝
F 32.400m
F′
G 32.400m
G′
H 32.400m
H′
15溝
81土
B27a
88土
82土
1竪
4竪
80土
79土
84土
85土
86土
18溝
19溝
I 31.800m
I′
J 31.800m
J′
18・19溝
1 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を含む しまり有
2 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロック（1cm大）を少し含む しまり有
16・17号溝
1 7.5YR 4/3 褐 表土 しまり有
2 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒を含む
3 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）を含む しまり有
4 7.5YR 4/3 褐 ソフトロームブロックを含む しまり有
5 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロックをやや多く含む しまり有

第７図　遺構配置図（４）

土しており、条痕文系土器の出土が最も多かった。須恵器と土師器は、古墳時代後期から奈良時代までのものがある。古代以前土器は、微量であり本来的に遺構に伴うようなものはないと考えられる。

2　検出された遺構と遺物

a　地下式坑

第１表　地下式坑一覧

新番号	旧番号	地区	主室規模(m)				竪坑規模(m)			遺物			切合関係	時代	備考	図版番号
			長軸	短軸	深さ	高さ	長軸	短軸	深さ	骨	土器・陶磁器	その他				
１号地下式坑	C-016	A13b	3.55	2.8	1.33		1.4		0.5	獣骨	渥美･常滑甕･鉢(8型式)･瀬戸茶壺･瀬戸三足盤(後Ⅲ)	石	４整	中世 15ｃ		8
２号地下式坑	C-027	A14a･b	2.25	2	1.4		1.05	1	1.22	獣骨	常滑甕片･縁釉小皿(後Ⅲ～Ⅳ)	石	４整･34･35土	中世 15ｃ後半	見込み鉄釉付着･うるし補修痕	8
３号地下式坑	C-028	A14d	2.15	1.85	1.63	1.15	1.15	1	1			石	４整・２火土	中世		9
４号地下式坑	C-029	a13d	2.2	1.8	1.48	1	1.1	1.08	1.3			石	４整･20土･１火土	中世		10
５号地下式坑	C-034	B14a	2.5	2.35	2.4	2	1.15	1.1	1.75				４整･１炭	中世		
６号地下式坑	C-054	A15a･b	2.35	1.9	1.1						瀬戸入子（前Ⅲ～中）	石	４整・２竪･40土	中世		10
７号地下式坑	C-060	B15c	2.75	2.15	2.26	1.6					常滑甕(6b型式)･縁釉小皿(後Ⅳ古)	茶臼･石	４整	中世 14～15ｃ	竪坑部は破壊	11
８号地下式坑	C-062	B15c･B16a	2.82	2.34	2		1.2	1	1.3		常滑鉢(10型式)･渥美甕片		４整	中世 15c後半		11
９号地下式坑	C-064	B19a	2.65	2.16	1.85	1.4					常滑甕(9型式)･縁釉小皿（後Ⅳ古）	茶臼･石･転用瓦片	２・３整	中世 16ｃ	遺物多数	12
10号地下式坑	C-065	A19d	2.6	1.7	2.66	1.45	1.7	1.2	1.68				２整	中世	天井残存･主室空洞	12
11号地下式坑	C-084	B19d					1	0.75	1.53				２整	中世	主室は調査区外	13
12号地下式坑	C-087	A18c･d	2.33	1.6	2	1	1.2	1	1.45				(13地下)	中世	天井残存･主室空洞	13
13号地下式坑	C-088	A18c							0.27				(12地下)	中世	天井残存　主室は調査区外	13

地下式坑は、計13基検出された。計測値等は表にあるので省略するが、注目点のみ記述しておく。

１号地下式坑　出土遺物の内、獣骨の多くは確認面、少量の歯が床面近くから出土した。15（常滑鉢片）・42（茶壺片？）などの遺物は埋土のかなり上層で出土しており、その状況から主室天井壁の崩落に伴い流入した遺物と考えられる。

２号地下式坑　一部を攪乱により破壊されている。その攪乱最下部から獣骨、49（縁釉小皿）も埋土上部からの出土であり、流入土中に含有されていた遺物と考えられる。

３号地下式坑　全体的に残存具合いがよい遺構で、天井壁・横穴・竪坑平面形等地下式坑の形状をよく残す典型的な遺構といえる。

４号地下式坑　主室の一部は崩落せずに残存しており、横穴の形状を良く残している。崩落した天井壁の上面に１号火葬土壙が形成されている。

５号地下式坑　主室内部の天井壁が崩落しているが、やや天頂方向に膨らむドーム型の天井を呈した可能性がある。ハードローム層よりも下層の砂層や粘土層も掘削して主室をつくっている。１号炭窯が竪坑部を破壊している。

６号地下式坑　竪坑よりも斜坑に近い入口を有し、床面に柱穴が二箇所ある。破壊が著しく、堆積状況などは不明だが、崩落天井壁は確認されていないようである。

７号地下式坑　この遺構も他の遺構との複合から、堆積状況が不明である。36（常滑甕）と46（縁釉小皿）などが出土しているが、埋土中からの出土で本来的にこの遺構に伴うものかは疑わしい。

８号地下式坑　埋土中に天井壁と考えられる堆積が見られない。形状的には地下式坑と考えることが妥当だが、天井壁の痕跡が見いだせないことをどのように解釈すべきかは課題であろう。出土した遺物は埋土中のものである。

９号地下式坑　天井部全体が陥没していた。遺物は、床面直上のものもあるが、大半は竪坑部からの流入土中に含有されていたようである。出土遺物中に茶臼があったが、整理段階に所在不明となり、

出土状居の写真以外、実測図等は掲載していない。

10号地下式坑　主室の天井部は完存しており、竪坑からの流入土があるものの、半分程度しか埋まっておらず空洞化していた。内壁にはバチ状工具による整形痕が明瞭に見られた。

11号地下式坑　竪坑部しか掘削していない。主室もある程度の土が流入しているようである。

12号地下式坑　13号地下式坑の竪坑と切り合っているが、前後関係は不明である。主室は空洞化しており、床面に５cm 程の黒色土層が広がっていた。

13号地下式坑　竪坑部しか掘削していない。天井部は残存しているようであるが、主室内にはある程度の流入土がはいっている。１～５層の並行堆積は、竪坑部が完全に埋填された後に堆積したと考えられ、遺構検出面までの堆積層が後世の大規模な整地が行われたことを伺わせ、本来の遺構掘削面が完全に破壊されていることを表していると考えられる。

３～５・７・９・10・12号地下式坑の７基は天井部が残存あるいは推定できたが、５・７号地下式坑は主室天井部が大幅に崩落しており、得られた数値を主体的に評価はできない。１・２・６・８号地下式坑は完全に天井壁は崩落しており、主室高は計測できなかった。11・13号地下式坑は、主室部分が調査区域外で完掘していないので竪坑のデータしかわからないが、写真等の記録によると天井壁が残存している様子が伺える。なお、３・４・９・10・12号地下式坑の５基は、多少の崩落があるものの天井部が残存あるいは高さを復元でき、その容積を推定できるものである。

第２表　地下式坑主室データ一覧

	長　軸	短　軸	床面積	高　さ	容　積	深　さ	深－高	横穴径	備　考
３号地下式坑	2.15	1.85	3.98	1.15	4.57	1.63	0.48	0.8	
４号地下式坑	2.2	1.8	3.96	1	3.96	1.48	0.48	0.7	横穴は方形
９号地下式坑	2.65	2.16	5.72	1.4	8.01	1.85	0.45	不明	
10号地下式坑	2.6	1.7	4.42	1.45	6.41	2.66	1.21	0.85	
12号地下式坑	2.33	1.6	3.73	1	3.73	2	1	0.65	
平　均　値	2.386	1.822	4.36	1.2	5.336	1.83	0.724	0.75	単位は「m」

上記の表をみると、５基の主室高の平均は約1.2m、容積の平均が約5.4m^3 となる。床面積は、主室の調査をしていない11・13号地下式坑を除いた11基の平均が約5.37m^2 で、上記５基の平均は約4.4m^2 となる。検出面からの深さの平均は、1.83m で、深さから主室の高さを差し引くと平均約0.724m となる。これらのデータと実測図面を検討すると、主室について以下のような傾向が伺える。

床平面形は、竪坑を中心に左右に広い横長方形を呈し、高さは１m 強ほどしかなく主室内で人間が活発に活動することはままならない規模である。主室内は完全に埋没していないものが多く、自然に土砂が室内に流入したと考えられる。つまり、意図的な閉塞活動は行われなかったと考えられるのである。横穴は不整円形が多いが、４号地下式坑のように明らかに方形を呈するものがあり、不整円形の形状は本来方形に近いものもあったと予想される。写真図版４の10号地下式坑と同５の12号地下式坑の内壁ケズリ状況からすると、幅20cm 前後の手バチ状工具によりハードローム層をケズリ込んでいる様子が伺える。隅などは意外に細かく丁寧な成形をしている。

竪坑部の平面形は、１・６・７・９・10号地下式坑を除き、隅丸の方形を呈する。９・10号地下式坑は、円形である。１・６号地下式坑は、円形に近い縁辺部から主室に向けてややきつい階段状の凹

凸を敷設する斜路のような形状を呈することから、正確には「竪坑」とはならず、「斜坑」と解釈した方がよいかもしれない。７号地下式坑は竪坑と思われるが、土坑状の別遺構に破壊されているので、形状が不明瞭である。平面規模（径）的には、約１ｍ前後である。２・４・８・９号地下式坑は主室底面近くまたは主室から0.2m 程の高さまで竪坑が掘られており、３・５・10～12号地下式坑は主室高の中位あたりまでしか掘られておらず、明瞭な段を形成している。９・10号地下式坑の竪坑平面形は円形を呈しており、２号台地整形区画の北縁に並列し、その形状に規制されている。平面形が方形の１～８号地下式坑が４号台地整形区画内にあることから、その造営時期あるいは造営者の技術などの系譜に相違がある可能性が考えられる。

遺物は、１～４・７～９号地下式坑から出土したが、９号地下式坑の床面出土遺物以外は、崩落後の埋土中か、竪坑からの流入土中に含有されたものであり、これらの遺構の造営時期を的確に反映するとは考えられない。しかし、近世に関わる遺物の含有は見られないことから造営時期が中世に属し、崩落や土の流入も中世段階であったと考えたい。

ｂ　土坑

土坑の総数は93基だが、中世が35基、近世が９基（３・12・22・50・65・73・74・78・89号土坑）、中近世が47基、近代が２基の内訳となる。中近世としたものの多くは中世段階と考えられるが、遺物の出土がなかったり、重複関係が把握できないなどの不確定要素が多いことから便宜上「中近世」とした。また、多くが台地整形区画内に存在しており、周囲の状況から近代には下がり得ないと判断したという要素もある。

数が多く、際だった特徴を有さないものに関しては一覧表に記すことで略説とし、特徴的なものに関して詳述することにする。

１・34号土坑は、粘土貼り土坑である。**１号土坑**は、４号台地整形区画の北端に位置し、８・19号土坑と切り合い関係にある。土層図から19号土坑よりも新しいことがわかり、調査担当者の観察により８号土坑よりも古いことが確認されている。粘土は、土坑の底部に貼られており、墓壙や貯蔵用土坑とは性格が異なり、漏水対策用の粘土ではないかと考えられる。**34号土坑**も４号台地整形区画内にあり、33号土坑よりも古く２号地下式坑よりも新しい。両方とも付近に井戸などの採水施設がないことから貯水に関わる遺構とも考えがたく、その性格は不明である。

多くの粘土片を含む褐色土の土が埋土のものとして、**５・11・13・14号号土坑**がある。これらの遺構は、４号台地整形区画内にあり、近接してあることなどから同じ時期に形成された遺構である可能性が高い。**５号土坑**は、15号土坑よりも新しく、縁釉小皿（後Ⅳ古・15世紀前半）が出土している。

12号土坑は、土坑としたが炭化物の出土具合から炭窯である可能性が高い。獣骨らしき骨片や肥前系磁器碗が出土しており、近世の所産と考えられる。

２・５～９・12～14・17・28・32・35・37・59号土坑からは、獣骨が出土している。59号土坑を除き、他の全ての土坑が４号台地整形区画内の土坑である。

２号土坑は、馬の骨で、下顎骨の一部と足の一部が出土した。常滑焼きの捏ね鉢（９～10型式・15世紀代）が出土している。18号土坑よりも新しい遺構である。**３号土坑**は、１号土壙墓のすぐ東側に位置し、土層図から宝永の火山灰（1707年）よりも新しい遺構であることがわかる。**６号土坑**は、切

第３表　土坑一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物			切合関係	時代	備考	図版番号
				長軸	短軸	深さ	骨	土器･陶磁器	その他				
１号土坑	C-002	B12ｃ	円形	(2.00)	2.00	0.95		常滑甕･緑釉小皿(後Ⅲ～Ⅳ)･カワラケ･瀬戸茶壺	鉄滓･被熱粘土塊･石	４整･８土	中世 15C後半	粘土貼り	14
２号土坑	C-003	A13ｂ	隅丸長方形	(1.60)	0.94	0.18	獣骨	常滑こね鉢(9型式)		４整･18土	中世 16C		14
３号土坑	C-006	C12b	不明	1/4以外は調査区外。規模不明。						４整	近世17Ｃ以降		15
４号土坑	C-007	B12d･B13b	長方形	6.00	3.50	0.10		常滑甕片		４整	中世		15
５号土坑	C-008	B13b	長方形	2.35	1.62	0.83	獣骨	緑釉小皿(後Ⅳ古)		４整･15土	中世		16
６号土坑	C-009	B12c	長方形	1.36	1.10	0.53	獣骨	瀬戸茶壺		４整	中世 15C		15
７号土坑	C-010	B13a	楕円形	1.13	0.90	0.27	獣骨		鉄滓	４整	中近世		15
８号土坑	C-011	B13a	楕円	1.58	(1.16)	0.22	獣骨	カワラケ･浅碗(後Ⅰ･Ⅱ)		４整･１土	中近世		14
９号土坑	C-012	B13b	楕円	1.12	0.85	0.25	獣骨			４整	中近世		16
10号土坑	C-013	B13d	不整形	1.33	0.72	0.15				４整･12土	中近世		16
11号土坑	C-014	B13d	長方形	2.44	1.56	0.70				４整	中世		16
12号土坑	C-015	B13d･B14b	方形	2.10	2.10	0.63	獣骨	磁器(肥前)		４整･10土･37土	近世	炭窯か？	16
13号土坑	C-017	B13d	長方形	?	0.86	0.57	獣骨			４整･15土	中世		16
14号土坑	C-018	B13a･c	不整形	2.05	1.59	0.71	獣骨			４整･15土	中世		16
15号土坑	C-019	B13a～d	長方形？	2.55	1.28？	0.63				４整･５土･15土･13土	中世		16
16号土坑	C-020	A13a	円形？	1.25	?	0.40		常滑甕片		４整	中世		
17号土坑	C-021	B13a	楕円形	1.26	1.05	0.35	獣骨			４整	中近世	中央に柱穴	14
18号土坑	C-022	A13a	円形	0.68	0.68	0.29			鉄滓	４整･２土	中世		14
19号土坑	C-023	A12a･B12a	方形？	1.80	(1.25)	0.30				４整	中世		14
20号土坑	C-024	A13c	長方形	1.67	1.41	0.32				４整･４地下･21土	中近世		17
21号土坑	C-025	B14a	方形	1.60	1.58	0.45			祥符通宝他１点･鉄滓	４整･20土	中世		17
22号土坑	C-031	B14d	不整形	2.16	1.20	0.32				４整･３溝	近世		17
23号土坑	C-032	B14b	楕円？	1/2以外は調査区外。規模不明。						４整	中近世		16
24号土坑	C-033	C13a	円形	1.25	1.17	0.69				４整	中近世		17
25号土坑	C-036	A14d	方形	1.39	1.41	0.37		緑釉小皿(後Ⅲ～Ⅳ)･磁器碗･焙烙		４整･２火土	近代		18
26号土坑	C-037	A14d	楕円形	1.40	0.90	0.15				４整･27土･２火土	中近世		17
27号土坑	C-038	A14d	楕円形	1.24	0.90	0.20				４整･26土･２火土	中近世		17
28号土坑	C-039	B13c	不整形	1.56	1.28？	0.46	獣骨			４整･３火土	中近世		18
29号土坑	C-040	A14d	楕円形	1.13	0.73	0.17				４整	中近世		17
30号土坑	C-041	A14d	不整円	1.10	0.90	0.36				４整	中近世		18
31号土坑	C-042	A14d･B14c	円形	1.15	1.15	0.52				４整	中近世		18
32号土坑	C-043	A14ｂ	長方形	1.71	0.95	0.60	獣骨		鉄環	４整	中近世		18
33号土坑	C-045	A14c	長方形？	2.25	?	0.55				４整･34土	中近世		18
34号土坑	C-046	A14c	長方形？	1.80?	1.74	?				４整･33土･２地下･25土	中世	粘土貼り	18
35号土坑	C-047	A14c	不明	?	?	0.50	獣骨			４整･２地下･34土	中近世		18
36号土坑	C-048	A13c	長方形	?	0.62	0.90				４整	中近世		19
37号土坑	C-049	B14b	楕円	1.10？	0.76	0.36	獣骨			４整･12土	中世		16
38号土坑	C-051	B14c	不整形	1.20	1.10	0.62			石	４整･38土	中近世		19
39号土坑	C-052	B14c	円形	0.95	0.95	0.54				４整･39土	中近世		19
40号土坑	C-053	A15a	長方形	3.25	1.50	0.73			砥石	４整･６地下	中世		10
41号土坑	C-057	A15b	長方形	1.50	1.10	0.25				４整･３竪	中近世		27
42号土坑	C-058	B15b	円形	1.10	1.00	0.45				４整･43土	中近世	平成12年度調査分に含めず	19
43号土坑	C-059	B15b	不整形	1.55	?	0.40				４整･42土	中近世	平成12年度調査分に含めず	19
44号土坑	C-061	A15c	方形？	?	?	0.60			鉄滓	４整	中近世	(攪乱で半壊)	19
45号土坑	C-063	A15d	円形	1.25	1.25	0.17				４整	中近世		19
46号土坑	C-066	A20b	長方形	3.30	2.50	0.20				２整･47土	中近世		20
47号土坑	C-067	A20b	長方形	3.17	2.05	0.25				46土	中近世		20
48号土坑	C-068	B20c	長方形	1.00	0.65	2.30		常滑甕片･瀬戸瓶子(前)		２整･49土･53土	中世	最上層に宝永テフラ	20
49号土坑	C-069	B20c	長方形	1.63	1.00	0.85		緑釉小皿･渥美甕片		２整･48土	中世		20

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物			切合関係	時代	備考	図版番号
				長軸	短軸	深さ	骨	土器･陶磁器	その他				
50号土坑	C-071	A21b	楕円形	2.06	1.47	2.41				1整	近世	覆土中に多量の宝永テフラ	21
51号土坑	C-072	A20d	不整円	1.15	1.05	0.28			石	1整	中世	1整内	21
52号土坑	C-073	A20d	不整円	0.96	0.77	0.30				1整	中世	1整内	21
53号土坑	C-076	B20c	不整形	1.00	0.78	0.85				2整･48土	中世		20
54号土坑	C-080	B19c	長方形	1.30	0.92	0.53				2整･8火	中世		21
55号土坑	C-081	B19c･d	長方形	1.90	1.03	0.43				2整	中世		21
56号土坑	C-082	B20a	長方形	1.70	1.00	0.37				2整･8・9火	中世		21
57号土坑	C-085	B19d	円形	0.80	0.80	0.14					中世		21
58号土坑	C-086	A18a･b	円形	2.70	2.70	3.30					中世		21
59号土坑	C-089	B18b	不明	1/2以外は調査区外。規模不明。			獣骨			3整･7溝	中世		23
60号土坑	C-090	A18c	不整円	1.08	0.90	0.20					中世		23
61号土坑	C-091	A19a	方形	1.10	1.00	0.32					中近世		23
62号土坑	C-092	A18b	長方形	1.56	1.20	0.35					中近世		23
63号土坑	C-093	A16d	長方形	2.02	0.96	0.61					中近世		23
64号土坑	C-094	A16d･B16c	長方形	1.60	1.33	0.49			鉄板片		中近世		23
65号土坑	C-095	B16c	方形	1.24	1.20	0.56		磁器2点			近世		23
66号土坑	C-096	B17a	長方形？	1.26	1.10?	1.10		カワラケ･常滑甕片･鉢片		7溝	中世	7号溝内	22
67号土坑	C-097	A19b･d	長方形	1.80	1.43	0.36		常滑甕片			中世		23
68号土坑	C-100	B15a	円形	1.05	1.00	0.25				4整	中世		23
69号土坑	C-101	B15a	不整円	1.30	0.95	0.40				4整	中世		24
70号土坑	C-102	B15b	方形	0.96	0.90	0.10				4整	中世		24
71号土坑	C-103	B16b	長方形？	3.46	2.20	0.72		常滑捏ね鉢(9型式)･甕(9型式)･瀬戸平碗(後Ⅰ～Ⅱ)	砥石･石	4整	中世		24
72号土坑	C-104	B16b･d	方形	1.20	1.10	0.33				4整	中世		24
73号土坑	C-105	A9c	楕円形	1.65	0.90	1.86				13溝	近世	覆土中に多量の宝永テフラ	25
74号土坑	C-106	A9d	楕円形	2.50	1.30	0.57		近世瓦	砥石	11溝	近世		25
75号土坑	C-107	A9d	楕円形	2.00	1.68	2.26				13溝	中近世		25
76号土坑	C-108	A11c･d	長方形	1.27	0.80	0.15					中近世		24
77号土坑	C-109	A12a･b	方形	1.22	1.30	0.26					中近世		24
78号土坑	C-111	A9a･d	楕円形	1.76	1.20	1.80				13溝	近世		25
79号土坑	C-112	A28b	方形	1.39	1.35	0.35			石2点	18溝	中近世	15号溝と重複(新旧不明)	24
80号土坑	C-113	A28b	長方形	2.06	1.70	1.00				18溝	中近世	15号溝と重複(新旧不明)	26
81号土坑	C-115	B27b	長方形	1.72	1.28	0.33					中近世		26
82号土坑	C-116	B27a	長方形	2.00	1.79	0.35					中近世		26
83号土坑	C-117	B27a	長方形	1.66	1.56	0.42			砥石1点		中近世		26
84号土坑	C-118	B28a	長方形	1.96	1.47	0.48					近代		26
85号土坑	C-119	B28d	長方形?	2.00	?	0.30					中近世	1/2は調査区外。	26
86号土坑	C-120	B28d	長方形	1.95	1.42	0.41		常滑片1点，近現代遺物数点			中近世	遺物は混入の可能性あり	26
87号土坑	C-121	A23d	方形	1.25	1.25	0.12			銅銭1点		中近世	遺物は遺構確認面より検出	27
88号土坑	C-122	B23c	方形	1.25	1.25	0.20					中近世		27
89号土坑	C-123	A23b	長方形	2.35	1.46	0.40		擂り鉢1点(近世か)		93土	近世		27
90号土坑	C-124	A24d	不整楕円	1.80	?	1.00				91･92土	中近世		27
91号土坑	C-125	A24d	楕円形	2.00	1.41	1.44			石2点(覆土上層)	90･92土	中近世		27
92号土坑	C-126	A24d	楕円形	1.55	1.00？	1.00				90･91土	中近世		27
93号土坑	C-127	A23b	長方形?	?	1.70	0.40				89土	中近世		27

※（　）：推定値

り合う遺構はないが、瀬戸産の茶壺片（15世紀）が出土している。**13号土坑**は、14・15号土坑と切り合い関係にあり、14号号土坑よりも古い遺構であることがわかっている。**28号土坑**は、３号火葬土壙よりも新しい遺構である。**32号土坑**から出土した獣骨は、最下層からではなくやや上層から出土し、部分破片である。**37号土坑**は12号土坑よりも新しい。

50・73号土坑は、埋土中に宝永テフラが混ざる層があり、埋没状況からテフラを掻き込んだような印象を受けることから処理用の穴として利用したものと考えられる。また、48号土坑の最上層にも宝永テフラ層がみられるが、土坑の埋土と考えるよりも１・２号台地整形区画の縁の凹みに堆積した層と考えられる。

中世陶器・土器類が出土した土坑は、１・２・４～６・８・16・25・48・49・66・67・71・**86号土坑**の計14基である。カワラケが出土したのが１・８・66号土坑の３基。常滑焼の甕・鉢片が出土したのが１・２・４・16・48・66・67・86号土坑の８基。渥美甕片が出土したのが49号土坑のみ。瀬戸の陶器類が出土したのが１・５・６・９・25・48・49・71号土坑の８基である。常滑焼製品と瀬戸陶器類がその主体を占めている。瀬戸陶器は、窖窯前期から後期前半（15世紀前半頃）の時期に該当する遺物が出土しており、際だった時期的な偏りはないが、後期前半の遺物がやや多いように思われる。これらの出土した土坑は、全て台地整形区画内につくられた土坑である。陶器・土器類は、意図的に混入されたと判断できる遺物はなく、土坑の廃絶に伴う埋め戻し時に偶然入ったと考えられるものばかりである。つまり、25号土坑のように近世遺物の中に中世陶器が混ざる場合は明らかに偶発的な混入と判断できるが、これらの遺物が単体で出土した場合、時期判定の確固たる根拠とはなり得ないと考えられる。ただ、台地整形区画内につくられた土坑からの出土が多いということは、この区画の埋土中にこれらの遺物が混在していたことが確実であり、台地整形区画の形成が中世段階から開始されていた傍証となる蓋然性は高いと考えられる。

鉄製品が出土した土坑は、１・７・18・21・32・44・64・**87号土坑**の計８基である。これらの内、鉄滓が出土したのが１・７・18・21・44号土坑で、32号土坑で鉄環、21・87号土坑で銅銭、64号土坑で鉄板片が出土した。これらの土坑は、21号土坑で銅銭と鉄滓が一緒に出土している以外は、他に遺物との供伴も全くみられない。鉄滓が出土しているから鍛冶関係遺構かといえばそうとも言えず、21号土坑中に若干の焼土を含むほかには、被熱したような痕跡がみられるものは全くない。32号土坑は部位不明の獣骨が出土しており、鉄環は鼻環のような用途のものかもしれない。

遺物が比較的まとまって出土した土坑に１・**71号土坑**がある。**１号土坑**は、常滑焼の甕片、瀬戸陶器縁釉小皿片と茶壺片、カワラケなどの陶器・土器類の他に、鉄滓・被熱粘土塊・自然礫が出土し、粘土を内壁に張っているなど特徴的な要素が多い土坑である。**71号土坑**は、15世紀代後半に比定される常滑焼鉢・甕とややそれよりも古い要素の見られる瀬戸陶器平碗、砥石と自然礫が出土している。それらが例え同時期所産の遺物でないとしても、近世遺物などの新しい遺物を含まず、陶器類や鉄滓・砥石・自然礫などの遺物のみで構成された場合、新しい時代にわざわざ多くの古く壊れた遺物を収集し、廃棄する可能性は少ないと考えられることから、出土した遺物の下限年代以降の中世段階に廃絶した土坑と考えるのが自然と考えられる。つまり、土坑の中にある程度の量の中世の遺物が混在する場合、中世遺物が散乱した状況下で廃棄され、意図的に埋め戻されなければ、このような状況には

ならないと考えられるのである。

c　火葬土壙

第４表　火葬土壙一覧

新番号	旧番号	地区	主室規模(m)				前室規模(m)			遺物			切合関係	時代	備考	図版
			全長	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	深さ	骨	土器・陶磁器	その他				番号
1号火葬土壙	C-026	A13d	2.27	1.22	1.15	0.22	1	0.7	0.32	人骨片		永楽通宝３点	４整・４地下	中世	16c	28
2号火葬土壙	C-035	A14d	2.35	1.1	0.82	0.37	1.3	0.8	0.35	人骨片		鉄釘？	４整・３地下・26・27土	中世		17
3号火葬土壙	C-050	B14a	2		0.85	0.45		1.05	0.6	人骨片			４整・28土	中世		18
4号火葬土壙	C-070	B19d・B20b	3.64	1.55	1.53	0.77	2.11	1.35	0.1	人骨片	カワラケ		２整	中世	確認時発見のかわらけも同一遺構	28
5号火葬土壙	C-074	B18d	2	1.5	1.4	0.33	0.45	0.4	0.33	人骨片	カワラケ	銅銭・鉄釘	３整・１・２掘	中世	３整より新しい　主室のみ残存	28
6号火葬土壙	C-075	B19b			1.2	0.1	0.85	0.85	0.1	人骨片		銅銭	３整・１・２掘	中世		28
7号火葬土壙	C-077	B20a	1.94	0.96	0.65	0.6	1.2	0.7	0.45	人骨片			２整	中世		28
8号火葬土壙	C-078	B19c	1.65	0.96	0.6	0.3	0.9	0.9	0.25	人骨片			２整・54・56土	中世		29
9号火葬土壙	C-079	B20a	1.7	0.86	0.53	0.6	1	0.85	0.35	人骨片			２整・56土	中世		29
10号火葬土壙	C-083	B20b		0.86	0.6	0.29				人骨片			２整	中世		29
11号火葬土壙	C-098	A16b・B16a	1.6	0.5	0.5	0.1	1.1	0.4	0.05					中世	主室のみ残存	29
12号火葬土壙	C-099	B16a	0.65	1	0.4	0.15								中世	主室のみ残存	29

火葬土壙は、２号台地整形区画内に４・７～９号火葬土壙、３号台地整形区画内に５・６号火葬土壙、４号台地整形区画内に１～３号火葬土壙、４号台地整形区画と７号溝の間の空間に11・12号火葬土壙の計12基が検出された。

火葬土壙は、基本的に焼成室と焚口用の前庭部の二つの土壙状の遺構をトンネルで連結した形状を呈している。前庭部から焼成部へ続くトンネルの下部は溝状になっている。焼成室は長方形または隅丸の方形、前庭部は楕円形または不整楕円形の平面形を呈している。焼成室からは、骨片・古銭・カワラケなどの遺物が出土し、多量の炭化物や灰などを含むことが多い。骨片は焼土や炭化物（炭）と混在していて、大きなものはほとんど含まれていない。前庭部からの出土も見られるが、トンネルから掻き出したような状況が看取される。この状況は、焼成後に前庭部に掻き出して集骨した可能性が考えられる。古銭やカワラケは、その行為の後に焼成部に据え置かれた様子のものが多いが、古銭の中には焼成時から混入していたような痕跡を見出すことができるものも存在する。いずれにしても、これらの様子からこの遺構そのものが「墓」として意識されたものではなく、火葬用の施設として使用されたものと考えたほうが妥当であろう。

１号火葬土壙は、４号地下式坑の上に造られ、４号台地整形区画内の周囲の堆積状況から整形区画に有る程度の土砂が埋没してから構築された遺構であることがわかる。永楽通宝が焼成室内の溝中央から出土し、多量の焼土と共に骨片、炭化物がみられ、その炭化物は竹状の植物が多く含まれていることが看取できた。焼成室と前庭部間のはトンネル天井部が残存していた。

２号火葬土壙は、25号土坑よりも新しく、26号土坑よりも古いことが切り合い関係上確認されている。この遺構もトンネル天井部は残存しており、焼成部に向けて溝状の凹みがある。焼成部から鉄滓と微量の骨片が出土している。焼成部の床面には炭化物が多量に敷かれた状況で検出された。

３号火葬土壙は、28号土坑に切られており、遺構の大半が破壊されている。トンネル下部の溝状の凹みとその周辺で出土した焼土や骨片の散布状況から火葬土壙であると予想される。１・２号火葬土壙と比べ、埋土の色調が炭化物などによる黒色化が進行していないので一見火葬土壙とは考えにくい遺構であったようである。

4号火葬土壙は、7～9号火葬土壙と同じ2号台地整形区画内にあるが、これらの遺構が東西軸に並列するのに対し、南北に軸線を取っている。最下層にはあまり炭化物が含まれず、中位から上層にかけて多く含む層がみられ、しまりがあり焼土化する。地山が焼成により土壌化したものと推察される。つまり、遺構造成時の土層ではなく機能後に形成された土層と考えられる。炭化物は中央の溝状の凹み上部と焼成室の外縁部に特に集中しており、外縁部に関しては長方形の遺構の各辺に並行して出土している。遺物は検出面でカワラケ（第39図-2）が出土している。遺物と遺構を確認した面は、台地整形区画が自然埋没した後の黒色土層中であったので、台地整形区画よりも新しい時期に造営された遺構であることは間違いない。

5号火葬土壙は、3号台地整形区画内にあるが、整形区画内の土層の中位から掘削が行われており、掘立柱建物跡よりも遙かに新しい遺構であることは確実である。しかし、宝永テフラ層よりも下層で検出され、出土したカワラケは中世段階のものと考えられる。その他に、数枚の銅銭塊と鉄釘片が出土している。

6号火葬土壙は、5号火葬土壙のすぐ西側に位置する。検出面は、3号台地整形区画の中位以下であったが、焼成部の南半が調査区域外になっていたことから、詳細な土層を観察することができた。遺構は、台地整形区画の埋土の②層下面からの切り込みが確認できた。②層の下部に宝永テフラがみられることから整形区画が近世段階にも凹みとして視認できていたことを裏付けていると思われる。掘り込み面から底面までの深さは約50cmを測り、焼成部の遺構の掘削深度が意外に深いことが判明した。埋土の最上層（1層）は、ロームブロックやローム粒を多く含んだしまりの良い土で、人為的な埋め戻しによる堆積土であることがわかる。遺物は、焼成部に骨片が多く残っており、その中から銅銭が1枚出土している。前庭部との間にはトンネル状の天井壁などは残存していなかったが、同種の遺構との比較から本来的には高架していたと考えられる。

7号火葬土壙は、比較的良好に遺存している遺構である。長方形の焼成部に対し、直交するようにトンネル部が敷設され、不整楕円形の前庭部が付属している。遺構の深度は深く、埋土の残存状況も良好である。最下層（2層）は、炭を主体とする焼土と骨片を含む層で、1層はロームブロックやローム粒を多く含んだしまりの良い土であり、6号火葬土壙と同様に遺構を廃棄する段階で意図的な埋め戻し行った結果と考えられる。遺物は、骨片の他に鉄滓が微量出土している。

8号火葬土壙は、9号火葬土壙と54号土坑よりも新しいことがわかっている。トンネル部の天井壁は残存していないが、焼成室と前庭部、それらを繋ぐ溝状の凹みは平面的に良好に確認できる。この遺構も6・7号火葬土壙と同様に埋土の状況に人為的な埋め戻しの状況が看取できる。

9号火葬土壙は、形状的・遺存状況的に7号火葬土壙とよく似ている。56号土坑よりも新しい遺構であることがわかっている。

4・7～9号火葬土壙、54～56号土坑は、2号台地整形区画よりも全てが新しい遺構であり、それぞれの切り合い関係から短期間に継続性を持って形成された遺構と判断できる。また、8・9号火葬土壙が土坑を切って造営されていることは、土坑と火葬土壙と間に積極的な関係が見いだせないと判断できる。つまり、2号台地整形区画の凹みを利用して、土坑と火葬土壙がある程度の間断期を経てそれぞれ別の用途を持って造営されただけと考えたい。

10号火葬土壙は、焼成部の最下層のみが確認されただけである。他の火葬土壙が台地整形区画よりも新しい遺構であることから考えると、この遺構も同様の状況であったと推測される。しかし、溝状の凹みなどの付属施設の痕跡が全くないことから、単純な土坑状の穴の中で火葬を行った施設とも考えられる。炭・骨片が主体の層があることから火葬土壙の一つとしてとらえているが、機能的に同種のものでも形状的に異なるものの可能性も捨て切れはしない。

11・12号火葬土壙は、平面的に火葬土壙状であることと、骨片と炭化物が微量に確認できたために火葬土壙として認識したものである。他の火葬土壙と違い、台地整形区画のような凹みではなく、4号台地整形区画と7号溝との間に位置する高みに形成されている。地山での検出のため、遺構の上半は表土除去段階に削平されていると考えられ、遺構の最下部の一部がかろうじで検出されたものと考えられる。また、炭層のような焼成を行ったと積極的に首肯出来るような痕跡もなく、この遺構も典型的な火葬土壙とは最終形状をややことにする遺構とも考えられる。他の遺構との切り合い関係などもなく、形成時期の推定根拠は全くないが、他の火葬土壙と時期を大きく隔たることはないように思われる。

d　土壙墓

第5表　土壙墓一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物			切合関係	時代	備考	図版番号
				長軸	短軸	深さ	骨	土器・陶磁器	その他				
1号土壙墓	C-005	B12d	円形	1.1	0.99	0.71	人頭骨他		鉄鍋・寛永通宝6	4整・1号溝	江戸	付編1	15・42

この遺構は、4号台地整形区画の南東隅、3号土坑のすぐ北側に位置する。平面形は円形である。4号台地整形区画の肩部に若干の流れ込み（第42図-6層）が形成された後に遺構を造っている。

遺物は、寛永通宝（古寛永）が6枚（六文銭）と鉄鍋、人骨が出土している。「古寛永」とは、寛永通宝が1636年に初鋳され、1668年に通称「文銭」の鋳造が開始されるまでの短期間に主に流通していた寛永通宝で、裏が無紋で太く明瞭な字体であることが特徴である。出土した古寛永は、その字体の特徴から17世紀第3四半期までの間に鋳造された可能性が考えられる。人骨は、頭蓋骨と鎖骨・軸椎・頸椎・胸骨・上腕骨・肋骨の部位があり、頭蓋骨と鎖骨・軸椎・頸椎・胸骨の一部が鉄鍋内に意図的に納められたような状態で出土した。付編1に詳しいが、この頭骨の古病理学的な所見として悪病に罹患した40歳代の男性であった可能性が高く、江戸時代の記録に散見される悪病に対する忌避行為としての「鍋被り埋葬」という特殊な埋葬形態の事例として理解することができる。このような事例は、関東地方では今回の事例も含めて16例が確認されており、全てに罹病の痕跡がみられるわけではないものの疾病と埋葬形態との関連を考える上で貴重な事例といえる。

古寛永の六文銭の出土する土壙墓は17世紀代のものが多く、この土壙墓が掘削された遺構面の直上に宝永テフラ（1707年・宝永四年降灰）が堆積していることから、この遺構は17世紀後半に造られたとするのが妥当と考えている。

ここで土壙墓と台地整形区画の関係について留意すべき点を挙げておきたい。第35図の4号台地整形区画南壁土層図では、土壙墓上層に宝永テフラ層があり、その上に三層（Ⅰ～Ⅲ層）の土層があることがわかる。単純に捉えればこの三層は近世の堆積土ということになる。しかし、整形区画内にある他の遺構の中に明らかに中世に属する遺構群が存在しており、遺構全てが整形区画の底面からの掘削とは考えがたい。近世初頭に耕作や凹みを大規模に再掘削したなどの可能性もあるが、そのような

痕跡は見いだせないことから不自然な解釈といえる。つまり、この整形区画の存続時期の主体を中世と捉える限り、この層序では疑問が生ずるということである。調査時の分層や遺構の切り合い関係の解釈によってその判断は異なることになるが、現状で検証手段は見いだすことはできない。調査担当者は、並行堆積している三層と土壙墓の立ち上がりの関係が調査段階で不明瞭であったため、場合によっては土壙墓の立ち上がりが三層内となる可能性も考えられるとしている。

e　竪穴建物跡

第６表　竪穴状遺構一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物	切合関係	時代	備考	図版番号
				長軸	短軸	深さ	土器・陶磁器				
１号竪穴建物跡	C-004	B-27b	長方形	2.43	2.06	0.86	カワラケ・常滑甕片(10～11型式)・被熱粘土塊		中世・16C	柱穴３・階段有り	30
２号竪穴建物跡	C-055	A-15b	長方形	4.25	2.15	0.25		４整・３竪・20溝・６地下	中世	ランダムに柱穴有り	30
３号竪穴建物跡	C-056	A-15b	方形	2	1.9	0.48		４整・２竪・41土	中世	柱穴３？	30
４号竪穴建物跡	C-114	B-27c	長方形	2.83	2.42	0.5	常滑甕片		中世	柱穴４・階段有り	29

この遺構は、検出時は方形土坑のように思われる平面プランだが、底面の柱穴、出入口用の階段状施設が敷設されていたり、炉状の焼土範囲がみられる場合があるなどの特徴から上屋を持つ建物のような遺構と推定されている。栃木県国分寺町の下古館遺跡で同種の遺構群が多数検出され、「竪穴遺構」と呼称されている。千葉市内でも中世遺跡の調査でしばし見られる遺構であり、土気東遺跡群の黒ハギ遺跡などの検出例が本遺跡で検出されたものと類似点が多い。

１号竪穴建物跡は、底面に３カ所の柱穴が見られ、西壁に階段状施設が見られる典型的な竪穴建物跡である。埋土は、ロームブロックや粒が多く入り、しまりがあることなどから意図的な埋め戻し状況が看取され、５層には粘土粒が含まれていた。遺物は、砥石に転用された常滑焼片（第40図-24）が出土している。

２号竪穴建物跡は、本遺跡で検出された竪穴建物跡の中で最も長辺の長い長方形の平面形を呈している。４号台地整形区画内にあり、20号溝よりも古く、３号竪穴建物跡と６号地下式坑よりも新しいことがわかっている。底面の壁際に７つ柱穴、中央に東西の並ぶ柱穴列がある。遺構の重複が激しく、遺構の把握が不十分となったため、堆積状況は不明である。

３号竪穴建物跡は、２号竪穴建物跡と重複しているが、前後関係は不明である。41号土坑と20号溝よりも古いことがわかっている。底面に４つの柱穴がみられる。

４号竪穴建物跡は、南壁に階段状施設が付設され、中央部に２つ、東壁際に２つの軽つの柱穴がみられる。３層には白色粘土粒を多く含まれ、１号竪穴建物跡の５層と同様の傾向が見られた。１・４号竪穴建物跡は近接しており、形状や埋土の状況などをふまえると同時期の所産である可能性が高いと考えられる。

f　井戸

第７表　井戸一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)		遺物	切合関係	時代	備考	図版番号
				径	深さ					
1号井戸	C-110	A16c	円形？	1.00	2～	なし	７溝	中世	７号溝内	22

この遺構は、７号溝内の北壁際にある。７号溝の４層上面から掘削が行われている。つまり、７号溝が機能していた段階で、多少の堆積土がある状況下の溝底部から掘り込まれていると解釈できる。底面から2.3m 程まで埋土の除去を行ったが、さらに深くまで掘削が行われていることが判明したため、作業上の危険性を考慮して全掘することはしなかった。埋土中に多くのロームブロックが含まれ

るなどの人為的な埋め戻し状況が確認できた。遺物の出土がないので、形成時期の特定はできないが、７号溝が機能していた時期の所産であることは間違いない。

g　炭窯

第８表　炭窯一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物	切合関係	時代	備考	図版番号
				長軸	短軸	深さ					
１号炭窯	C-030	A14b・B14a	方形	2.00	1.90	0.77	なし	４整・５地下	近世		30

この遺構は、５号地下式坑よりも新しいことがわかっている。最下層は炭層で、遺存状況から比較的新しい時代であることがわかった。具体的な時期の比定はできないが、近世の所産であると考えられる。12号土坑も堆積状況や遺構の形状・規模などから炭窯の可能性が高いと考えられる。炭窯と12号土坑は４号台地整形区画内にあり、台地整形区画の埋土内から掘削が行われ、近世段階にこの台地整形区画の凹みが何らかの作業空間として利用されていたことを示している。

h　掘立柱建物跡

第９表　掘立柱建物跡一覧

新番号	旧番号	地区	平面形	規模(m)			遺物	切合関係	時代	備考	図版番号
				長辺	短辺	柱穴数					
１号掘立柱建物跡	B-001	B18b・c・d	不明	7.40	4～	9	銅銭・砥石・石	３整・５・６火土	中世 15～16ｃ	１掘と２掘は建て替え，先後関係は不明	31
２号掘立柱建物跡	B-002	B18b・c・d	不明	8.00	4～	9	常滑甕片・石	３整・５・６火土	中世 15～16ｃ		31

３号台地整形区画内で２棟分以上の掘立柱建物の柱穴が検出され、それらの柱穴群の中から調査段階で把握することができた掘立柱建物跡が２棟分あった。これらは、同一箇所に重複して検出されていることから、建て替えに伴う柱穴群と考えられる。２棟とも南側の調査区域外に遺構が延びていると考えられ、正確な柱穴数・規模は不明である。

１号掘立柱建物跡は、東西３間、南北２間以上の総柱の建物と考えられるが、南側の１間分の柱間距離（Ｐ５-８の列とP10-12の列の間）が短く（約１m)、軒先状の空間であった可能性もある。この場合は、これ以上南側に遺構が大きく展開するとは考えにくく、東側の柱穴列が２つ（Ｐ５・９に相当)、東側から２列目の柱穴列が１つ（P10に相当）あると想定できる。しかし、南側の柱間距離が短い柱穴列が他の建物に伴うもので、Ｐ１～４の列とＰ５～８の列の柱間距離と同じ距離と推定するならば、調査区外に柱穴群があると想定される。

なお、掘立柱建物跡は相互の前後関係は不明だが、重複する５・６号火葬土壙よりも掘立柱建物跡の方が古いことがわかっている。

２号掘立柱建物跡も東西３間、南北２間以上の総柱の建物と考えられる。１号掘立柱建物跡に比べ柱穴距離に際だった差違は見られないことから、Ｐ９・10が存在する可能性は高い。しかし、さらに南側に遺構が延びるかは不明である。１間の平均距離は約2.4m を測る。

これらの遺構は、調査段階の所見を基に関連づけているが、第34図を観察すると幾つかの可能性が生じる。台地整形区画の壁際に小規模な柱穴の列、Ｐ４・８・12の列のさらに西側約1.2m 程の距離の位置に柱穴列など平面的に建物や柱穴列を想定することが可能となる。つまり、いくらでも都合の良い解釈が可能ということなってしまう。従って、調査時における所見が最も妥当な根拠となると考えられる。

i　台地整形区画

第10表　台地整形区画一覧

新番号	旧番号	地区	遺物		切合関係	時代	備考	図版番号
			土器・陶磁器	その他				
1号台地整形区画	X-001	A20c・d・A21a・b・B20c・B21a	常滑甕片・鉢片(6a以前)・壺片（9形式）・瀬戸縁釉小皿(後Ⅲ～Ⅳ)・瀬戸平椀(後Ⅱ前後)・内耳土器		4溝・50～52土	中世 15c	覆土中位に宝永テフラ	32
2号台地整形区画	X-002	B19c・d・B20a・b	カワラケ・常滑甕片・鉢片・縁釉小皿（後Ⅲ～Ⅳ）	石	7～9火土・10・11地下・	中世 15～16c		33
3号台地整形区画	X-003	B18b・c・d	カワラケ・常滑・縁釉小皿（後Ⅰ～Ⅱ）・盤（後）	石	1・2掘・5・6火土	中世 15～16c	1・2掘の区画・覆土中位に宝永テフラ	34
4号台地整形区画	X-004	A12d・B12c・d・A13a-d・B13a-d・A14a-d・B14a-d・A15a-d・B15a-d	常滑甕片・瀬戸茶壺・青磁	銅銭・石	（第6図参照）	中世 15～16c		35

この遺構は、台地上や緩斜面などを意図的に地山のローム層まで掘削し、落ち込み状やテラス状の空間をつくり、その中に他種の遺構を造営する遺構である。つまり、平地を利用すれば容易に形成しうる空間を大規模な造成を行い、何かしらの目的のために人為的な空間をつくりあげた結果できた遺構といえる。千葉市では、生実城跡、遠坪遺跡、猪鼻城跡、黒ハギ遺跡、都町山王遺跡、南屋敷遺跡などの中世遺跡において検出され、この遺構が検出されると中世遺跡の可能性が高いと判断される要素となっている。区画内には多くの遺構がつくられ、地下式坑・土坑・土壙墓・掘立柱建物跡・柱穴群などが見られる。しかし、つくられる遺構に偏りは見られないことから、一元的な利用を目的としたものではなく、機能的には多目的な空間であった可能性が高い。また、近世にも凹み状の遺構の痕跡が残っていたようで、土壙墓や炭窯などの近世遺構群も検出された。

1号台地整形区画は、遺構の南側が検出されており、北側は調査区域外のためどこまで展開しているかは不明である。現地形的にも平坦な畑地が広がっており、確認は不可能であった。中央を南北方向に4号溝と重複しているが、溝よりも新しい遺構であることが北壁土層図から理解できる。床面から約20cmほどの高さの覆土中から焼土、炭化物のブロックが点在して確認された。これらは、火葬土壙墓のような人骨片は含んでおらず、焚き火痕のような状態で検出された。51・52号土坑はその焼土などの直下で検出されているが因果関係は不明である。焼土などの検出された層は、6層の宝永テフラを含んだ層よりも下層であった。それよりもさらに下層は、人為的な版築を行ったかのごとくに水平に硬化面が広がっていたことがわかっている。西端と南端に溝状の凹みがあることが平面的にも北壁土層図からもわかり、この硬化面を削って溝状の凹みがつくられていることが看取される。また、2・4・7・14層は、9層以下の硬化層（面）を削っていることは明らかなことから、同所に再掘削を行って遺構を造営した可能性も考えられる。なお、当初、硬化面の存在と南に延びる4号溝の関係から道路上の遺構と調査担当者は考えていたようだが、溝との前後関係が判明したことから別遺構と判断したようである。50号土坑内には不自然な堆積で宝永テフラ層がみられ、73号土坑と同様にテフラを掻き集め、埋める目的でつくられた土坑の可能性が考えられる。

遺物は総体的に少ないが、13世紀代から15世紀前半頃までの陶器片が出土している。

2号台地整形区画は、1号台地整形区画の東側に位置し、3号台地整形区画と巨視的に見ると同一の落ち込み内に形成されている。遺構は、南北に長軸を持つ台形気味な長方形の平面形を呈している。4・7～9号火葬土壙、54～56号土坑は、2号台地整形区画よりも全てが新しい遺構であることがわかっているが、区画のどの層からのものであるかは不明である。ピットが8個底面と肩部にあるが、区画との前後関係は不明である。

3号台地整形区画は、掘立柱建物跡と柱穴群が遺構の最下層からつくられていることがわかっており、北東コーナーが掘立柱建物跡の形状に即していることからも、この遺構が掘立柱建物跡と密接な関わり合いがあることがわかる。多数ある柱穴は幾度かの建物の建て替えや塀状の施設に伴う柱穴と思われ、この区画が居住域の一部である可能性を示唆していると考えられる。9・10号地下式坑と区画との間に明確な前後関係を示唆する根拠はないが、竪坑部と区画北壁との位置関係から区画が機能していた頃に地下式坑も機能していたと考えたほうが妥当である。なお、2号台地整形区画は、位置や3号台地整形区画の北壁の展開状況から3号台地整形区画の一部に含まれるようにも見受けられ、相互の関係は不明だが、密接な関係があると考えられる。しかし、5～9号火葬土壙は区画内につくられているが、掘立柱建物跡よりも明らかに新しい遺構であり、区画との直接的な関係はないと考えたい。つまり、遺構上半を表土除去で削平され、下層部分をわずかに確認できた11・12号火葬土壙のような土壙が、周辺の区画外の平坦地に存在していた可能性も考慮し、区画＝埋葬空間という考え方が本遺跡では成立し得ないことを表していると考えているのである。

4号台地整形区画は、区画の中では最も多くの遺構が重複している遺構である。20号溝は、現況でも凹みとして認識が可能でいつ頃につくられたものかは不明だが、全ての遺構よりも新しいことから近世以降の枝道のような遺構ではないかと考えられる。土壙墓や炭窯などの近世遺構も含まれるが、大方が中世段階の所産と考えている。区画内の中で最も多く検出されたのがピットで、建物や柵列などと考えられる。調査段階で対応関係の判明したものがないので、建物などの復元は行っていない。区画の西南部分に土坑や地下式坑などの遺構が少ない部分があり、そこに密集するピットの中には建物として成立するものもあると考えられ、この空間の遺構分布状況から、1・2号掘立柱建物跡と軸方位を同じくする建物があった可能性も考えられる。

火葬土壙は、1号火葬土壙が4号地下式坑よりも新しく、整形区画の埋没途上につくられたことがわかっており、2・3号火葬土壙も新旧の切り合い関係が見いだせる土坑があることなどから、整形区画の当初につくられた遺構ではないと考えられる。

土坑の中には、2号火葬土壙よりも新しい26号土坑や、整形区画の東壁を壊してつくられた19号土坑など明らかに整形区画の埋没途上につくられた土坑があり、南壁の土層堆積状況からすると近世に属する可能性のある土坑もある。

土壙墓のところでも指摘したが、土壙墓と宝永テフラを含む1層の関係とⅠ～Ⅲ層の関係を図面通り解釈するならば、Ⅰ～Ⅲ層は18世紀以降の堆積となってしまう。これらの層が整形区画全域に分布している場合、火葬土壙や地下式坑も近世に含まれる可能性が出てくる。Ⅰ層は表土層なので現代から近世の遺構面が含まれているといえようが、近世に大規模な再掘削でも行わない限り、Ⅱ・Ⅲ層が近世に堆積したものと捉えるには無理があるように思われる。7・8層は20号溝の埋土で、Ⅲ層上面からの掘り込みであり、20号溝が近世遺構の遺構と予想できることから、Ⅱ層も近世に形成された可能性が考えられる。つまり、Ⅰ・Ⅱ層は近世以降の堆積で、Ⅲ層以下が中世以前の堆積と考えられるのである。調査担当者は、土壙墓の立ち上がりは、Ⅲ層よりも上部まであがる可能性もあったとしていることから、南壁の分層・解釈に手違いがあった可能性が高い。

j　溝状遺構

第11表　溝状遺構一覧

新番号	旧番号	遺物			時代	特徴	備考	図版番号
		骨	土器・陶磁器	その他				
1号溝状遺構	D-001				中世			15
2号溝状遺構	D-002		常滑甕片・鉢(5～6・9型式)		13c後半～		覆土中位に宝永テフラ	
3号溝状遺構	D-003	獣骨5体以上	渥美甕片	鉄環	中世			36
4号溝状遺構	D-004		カワラケ・常滑甕片・渥美甕片・瀬戸平碗（後Ⅲ）	銅銭・茶臼・鉄・石・軽石	中世			
5号溝状遺構	D-005		常滑甕片・渥美甕片	石	中世		覆土中位に宝永テフラ	
6号溝状遺構	D-006		近世陶器		中世			37
7号溝状遺構	D-007	獣骨		石	中世		66土・1井と同時期	
8号溝状遺構	D-008		瀬戸袴腰形香炉(18c前半)・瀬戸折縁深皿（中Ⅳ）		中世			22
9号溝状遺構	D-009	獣骨	常滑甕片		中世			
10号溝状遺構	D-010	獣骨	常滑甕片	中世				
11号溝状遺構	D-011				中世			25
12号溝状遺構	D-012				中世			25
13号溝状遺構	D-013				中世			25
14号溝状遺構	D-014	獣骨			中世			
15号溝状遺構	D-015		瀬戸茶壺		近代			
16号溝状遺構	D-016		瀬戸徳利（近世）	砥石・石	17C以降			
17号溝状遺構	D-017				中近世			
18号溝状遺構	D-018				中近世		19溝と一連の遺構か/15溝とも繋がる	
19号溝状遺構	D-019				中近世			
20号溝状遺構	D-003						4整内の溝	

この遺構は、20条検出されている。この内、2・3・4・5・10・12・20号溝状遺構は、形状と堆積土中の硬化面の存在などから、道として機能していた遺構であると予想される。2・5号溝状遺構は、近世の古図や字切図などから旦谷村（町）と谷当村（町）の村界として機能していた旧道と合致することがわかっている。

1号溝状遺構は1号土壙墓と重複関係があるが、新旧関係は不明で、3号土坑よりも古い遺構であることがわかっている。

2号溝状遺構は、調査区の東半部分を蛇行するように東西に走る、旧道跡である。この遺構は、南側に展開する自然の谷地形に制約されて蛇行している。断面形状に際だった特徴はないが、部分的に底部に浅い柱穴列が並ぶとことがあったり、3号溝状遺構との分岐部分が他所に比べて深く掘削されている傾向が見られる。A区付近の未掘削部分の南肩には溝状遺構の掘削に伴い排出された土砂を土盛り状に盛っている様子がうかがえる。この状況は、現況でも確認でき、調査対象区域外でも土盛りが延長してみられることが確認されている。東端で12号溝状遺構と分岐しているが、これらの遺構は、どちらも道として機能していたようである。B区の西側で10号溝状遺構に分岐しているが、相互の前後関係は不明である。A9a区付近に密集する13号溝状遺構などの遺構との新旧関係も不明である。第6図のB-B'の土層図にあるとおり、土坑状の遺構が2号溝状遺構の埋土中から切り込まれている。なお、第6図にもあるとおり、現況で溝と土盛りを視認することが可能であり、この土盛りは、その終息具合から4号台地整形区画とも密接な関わりがあると予想される。

3号溝状遺構は、A11a付近で2号溝状遺構と分岐し、北方向に延びている。2号溝状遺構との合流部に2号溝状遺構に対して並行の長楕円形の土坑状落ち込みが見られる。第6図A-A'の土層図を観ると、溝状遺構の底面に意図的に掘られた土坑であり、以外に古い段階につくられたと予想できる。あたかも、2号溝状遺構から3号溝状遺構へ容易な進入をさせないための障壁のような印象を受ける。埋土の下部には硬化した層（7～10層）があり、道路として機能していた遺構と考えられる。

この遺構埋土中から、第36図の①から⑤の番号を付した獣骨（馬）が5カ所に分散して出土した。

①から④の獣骨は、埋土の中位以上から出土しており、溝の際や斜面部に投げ込まれたような状態が看取された。③は調査区域外にも広がっているようで、よく遺存した状態で出土した。⑤は溝状遺構の底面硬化部分下の浅い土坑状の凹みの中から出土し、①から④のものよりも明らかに古いものであることがわかっている。

4号溝状遺構は、1号台地整形区画よりも古い遺構である。底面が硬化しており、道路として機能していた遺構と考えられる。遺物は、15世紀前半代に比定される35(常滑焼・壺片)や56(瀬戸平碗)の土器が硬化層内から出土していることから、中世には造成された可能性が高い道路と考えている。

5号溝状遺構は、2号溝状遺構とつながる道路状の遺構と考えられる。遺構の北端で、北方向と西方向に分岐しているようである。第37図のD-D'とE-E'の土層図では、この溝状遺構の中央に土盛り状の硬化層がみられ、左右に溝状の凹みがつくられていることがわかる。つまり、埋土を除去してしまえば丸底断面形の溝状遺構となるが、機能段階においては硬化層土盛りを挟んで2時期の掘削が行われたことがわかるのである。また、硬化層土盛りが中央に残存しているということは、この部分が最も古い段階で道路として機能していたことを示しており、その後に西側(土層図右側)の溝状遺構、さらに東側の溝状遺構という順につくられたこともわかる。2号溝状遺構ではこのような傾向は見られないことから、同一遺構でも地点によって補修・改修などによる差違が認められることがわかる。

2・5号溝状遺構に共通する事象としては、埋土中に宝永テフラが散見できることが挙げられる。5号溝状遺構の硬化層内の9層がそれにあたる。硬化層内にあるということは、この遺構の古い段階が18世紀初頭前後に道路として機能していたことを示している。また、9層の下には10層しかないことから硬化層を形成した道路もこの時期を大きく上らない時期と想定できる。

この溝状遺構に並行して、15～17号溝状遺構が走っている。16・17号溝状遺構は5号溝状遺構の北側に延びる溝、15号溝状遺構は西側に延びる溝に並行すると推測される。15号溝状遺構は、さらに18号溝状遺構と合流し、19号溝状遺構と並列して北に延びると推測される。16・17号溝状遺構は、5号溝状遺構と北端で重複するが、5号溝状遺構が最低3時期に造営されたことがわかっていることから、いずれの時期かに付随する溝と考えられる。

6号溝状遺構は、1号台地整形区画と4号溝状遺構の西側に並行して南北に延び、北端で二股に分岐する。切り合い関係・遺物が不明瞭なため上限時期の特定はできないが、近世の陶器片が埋土に混在しており、近世段階には機能していた枝道のような遺構と考えられる。4号溝状遺構よりも新しい可能性が高いが、並行していることから何らかの関連性が想定される。

7号溝状遺構は、66号土坑と1号井戸と同時期に機能していた遺構と思われる。66号土坑は有段の複合土坑のような形状を呈しており、その埋土の状況から7号溝状遺構の底面からの掘り込みの可能性が高く、1号井戸も同様である。66号土坑よりも南側は北側よりも浅く、6号溝状遺構と同様に、浅く途中で二股に分かれている。1号井戸の南側にある凹み底部は焼土化していた。南端は59号土坑と3号台地整形区画の端に接しており、その切り合い関係から7号溝状遺構の方が古いと考えられる。

8号溝状遺構は、2号台地整形区画の南西角の形状に即して屈曲している。調査区南壁で、整形区画と溝の間に土盛りなどの痕跡は見いだせなかったことから、単純な浅い溝状遺構と考えられる。なお、調査区全体が南側に微傾斜していることから、整形区画内に雨水などが流れ込まないように工夫

した配水施設の可能性も考えられる。

9号溝状遺構は、3号溝状遺構の東側に並列して北に延びている。3号溝状遺構との間に土盛りなどの痕跡はみられなかった。

10号溝状遺構は2号溝状遺構と合流するが、その前後関係は不明である。2号溝状遺構よりも浅く、底面にピット状の凹みがみられる。2号溝状遺構から分岐する枝道と考えている。

11号と13号溝状遺構は交差しており、交点の切り合い関係から11号溝状遺構が新しいことがわかっている。**11号溝状遺構**は、攪乱により不明瞭だが9号溝状遺構と一連の遺構と考えられる。また、2・3号溝状遺構の分岐点の角に並行してつくられているようである。しかし、9号溝状遺構と同様に土盛りなどの痕跡は見いだせなかった。

12号溝状遺構は調査区域の最東端にあり、2号溝状遺構から分岐している。確認調査によるトレンチで検出されたので一部しか確認できていない。第5図のE-E'の土層図をみると、北東に延びてゆく2号溝状遺構のほうが新しいように見受けられる。7～11層が確実にこの遺構にともなう土層であろう。12～14層の土坑状の切り込みは、かなり新しいものと思われ、近世以降ではなかろうか。なお、免谷津遺跡の確認調査グリッド（第43図：2B'-a・3B'-a・4B'-c・5B'-c）で確認された道路状遺構はその方向性から同じ遺構である可能性が高い。

13号溝状遺構は、11号溝状遺構よりも古い遺構である。73・75・78号土坑と重複するが、新旧関係は確認できていない。これらの土坑は、規模・形状的によく似ており、同時期の所産のように思われる。73号土坑の埋土に宝永テフラが掻き込んだような層があり、50号土坑と同様にテフラ処理のための穴の可能性が考えられる。つまり、18世紀初頭頃の土坑と考えられ、75・78も同じ可能性がある。

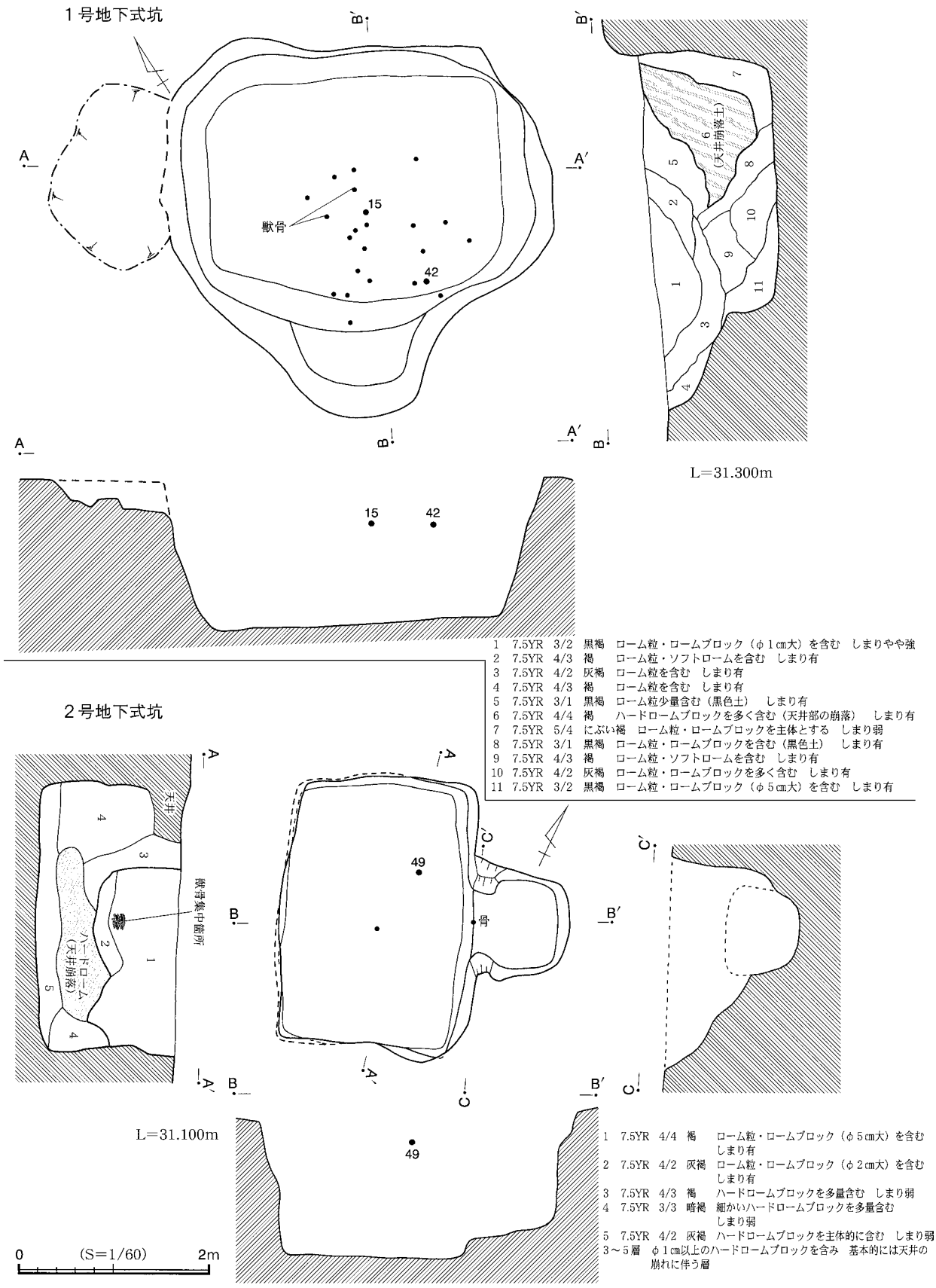
14号溝状遺構は調査区域東端にあり、2号溝状遺構に並行して北東方向に延びている。第5図のE-E'の土層図をみると、2号溝状遺構よりも新しい遺構であり、表土層から掘り込んでいるようなので近現代の遺構の可能性も考えられる。

15号溝状遺構は、先述したように西側に分岐した5号溝状遺構に並行して延び、18号溝状遺構と合流している。5号溝状遺構とこの遺構の間には土盛り状の高まりがあり、18・19号溝状遺構の間にも土盛りが続くことが現況で確認されている。これらの溝は、この土盛りを構築する際にできた凹みの可能性が高い。この土盛りは、南側調査区外にあったとされる「真照院」跡を囲む土盛りの可能性が高く、5号溝状遺構と共に院の寺域を画する遺構の一つではないかと推測される。

16・17号溝状遺構は並列し、5号溝状遺構に並行する。並行しつつも北端で重複するようだが新旧関係は不明である。形状や埋土の状況が6号溝状遺構とよく似ており、一連の区画用の溝と考えられる。

18・19号溝状遺構も並列しているが、現況でこれらの間に土盛り状の高まりがあることから、この高まりを挟む溝と考えられる。

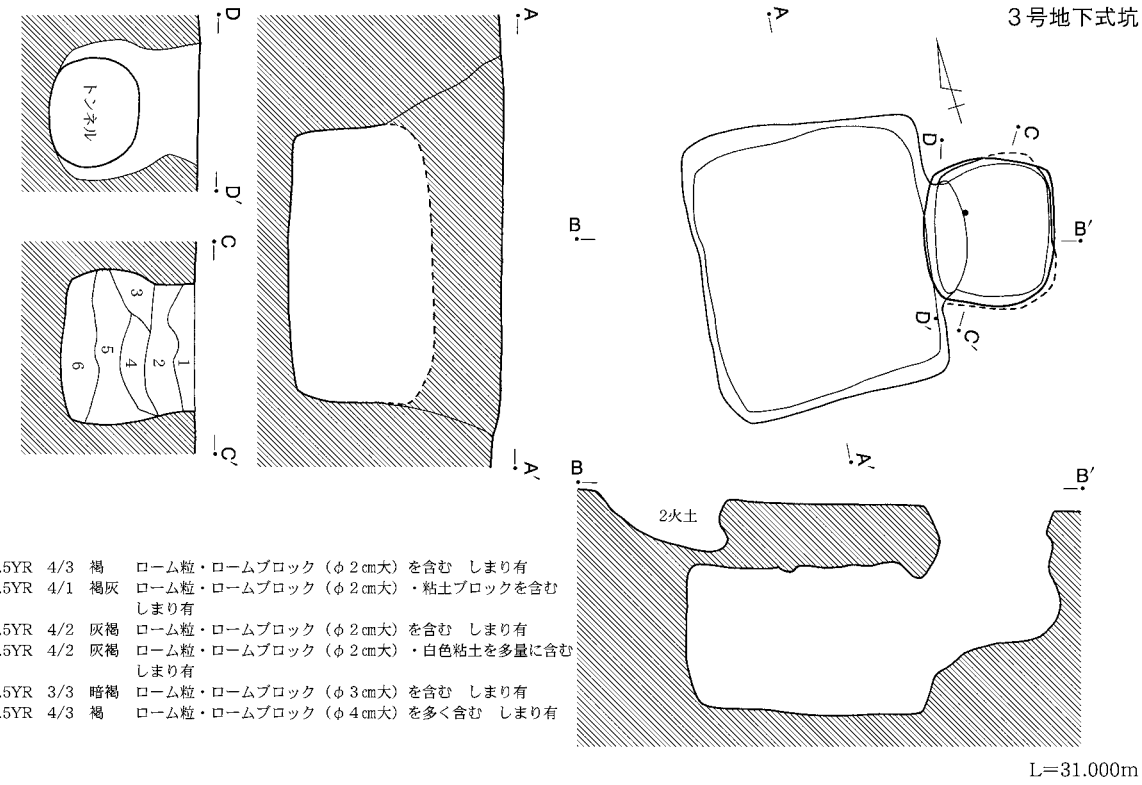
20号溝状遺構は、4号台地整形区画内にあり、周囲の遺構群全てよりも新しい遺構であることがわかっている。現況でも凹みがわかり、枝道として利用された遺構と思われる。



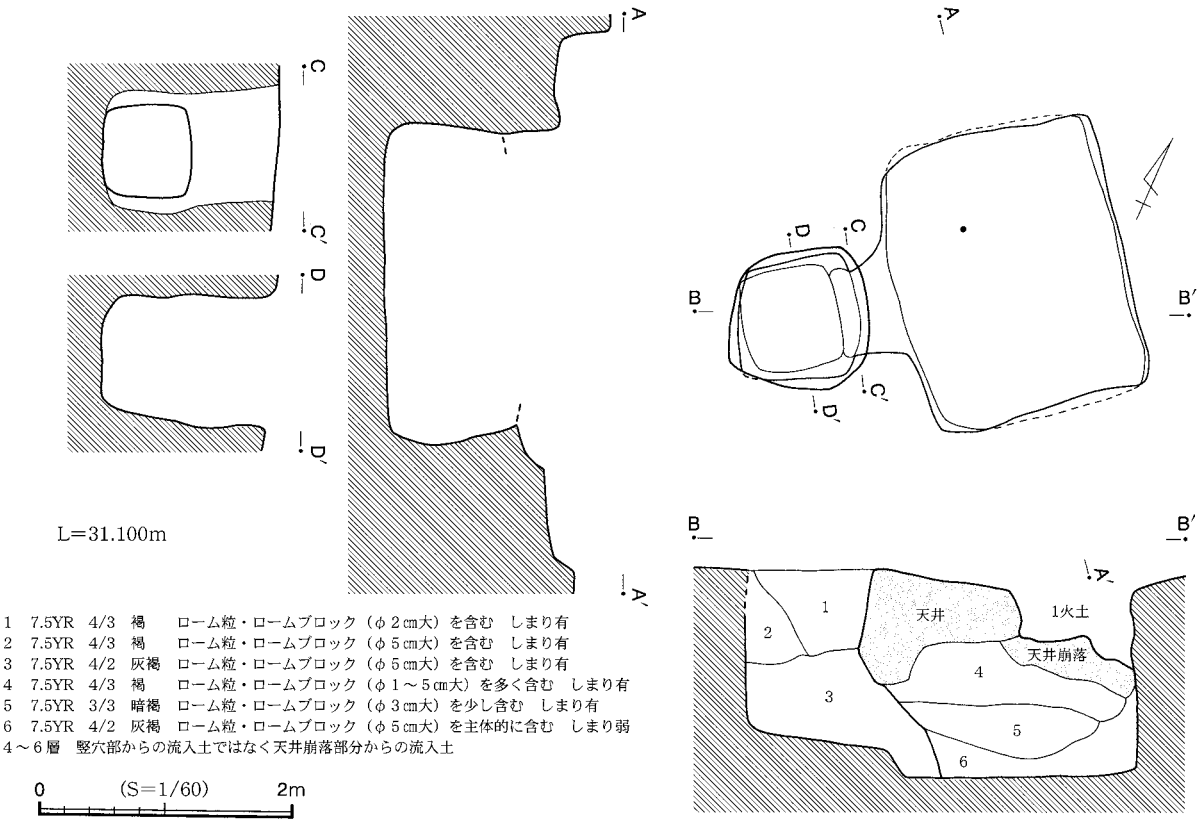
1 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む しまりやや強
2 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ソフトロームを含む しまり有
3 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり有
4 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を含む しまり有
5 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒少量含む（黒色土） しまり有
6 7.5YR 4/4 褐 ハードロームブロックを多く含む（天井部の崩落） しまり有
7 7.5YR 5/4 にぶい褐 ローム粒・ロームブロックを主体とする しまり弱
8 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・ロームブロックを含む（黒色土） しまり有
9 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ソフトロームを含む しまり有
10 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロックを多く含む しまり有
11 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む しまり有

1 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む しまり有
2 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
3 7.5YR 4/3 褐 ハードロームブロックを多量含む しまり弱
4 7.5YR 3/3 暗褐 細かいハードロームブロックを多量含む しまり弱
5 7.5YR 4/2 灰褐 ハードロームブロックを主体的に含む しまり弱
3～5層 φ1㎝以上のハードロームブロックを含み 基本的には天井の崩れに伴う層

第8図 1・2号地下式坑



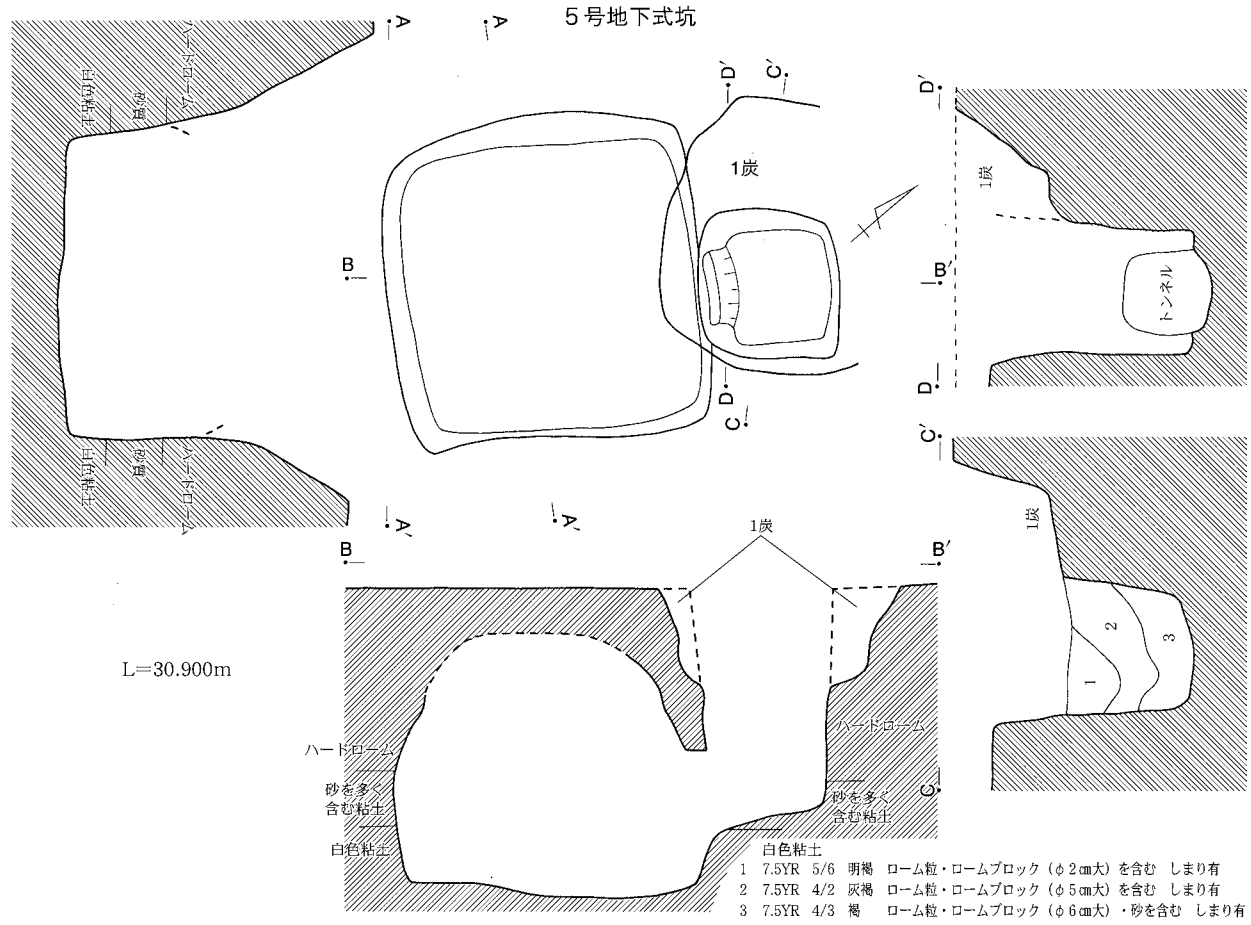
1　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
2　7.5YR　4/1　褐灰　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）・粘土ブロックを含む　しまり有
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
4　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）・白色粘土を多量に含む　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有
6　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を多く含む　しまり有

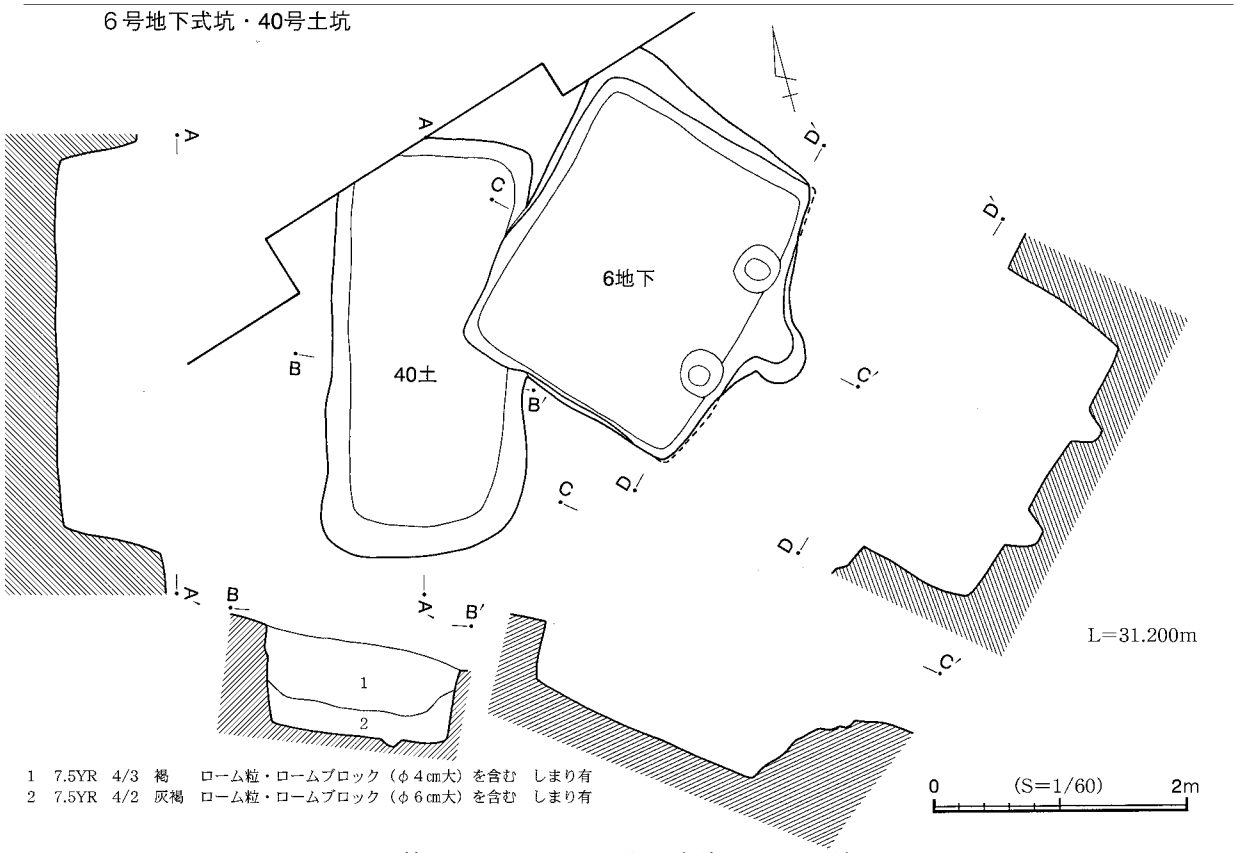


1　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
2　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む　しまり有
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む　しまり有
4　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1～5㎝大）を多く含む　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を少し含む　しまり有
6　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を主体的に含む　しまり弱
4～6層　竪穴部からの流入土ではなく天井崩落部分からの流入土

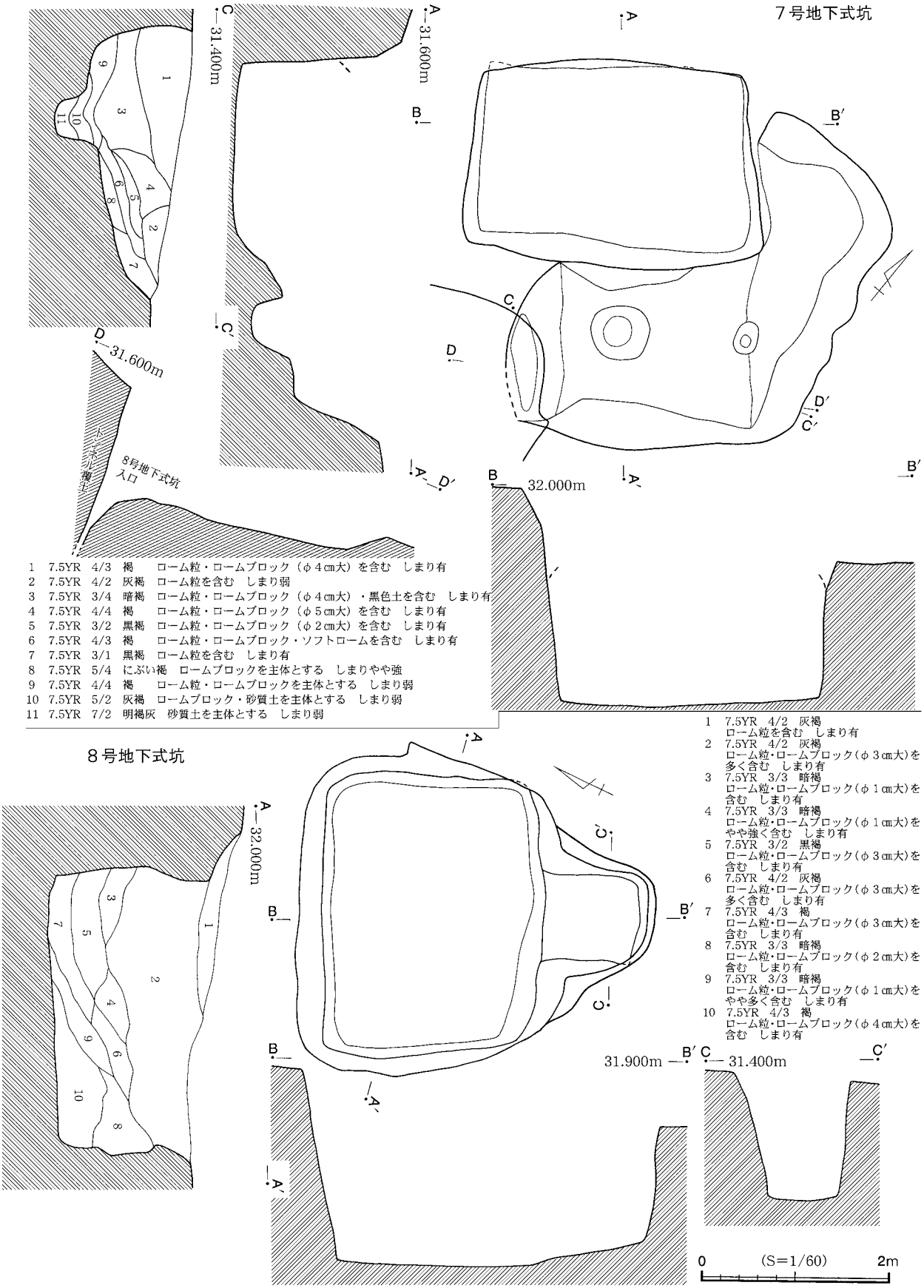
0　(S=1/60)　2m

第9図　3・4号地下式坑





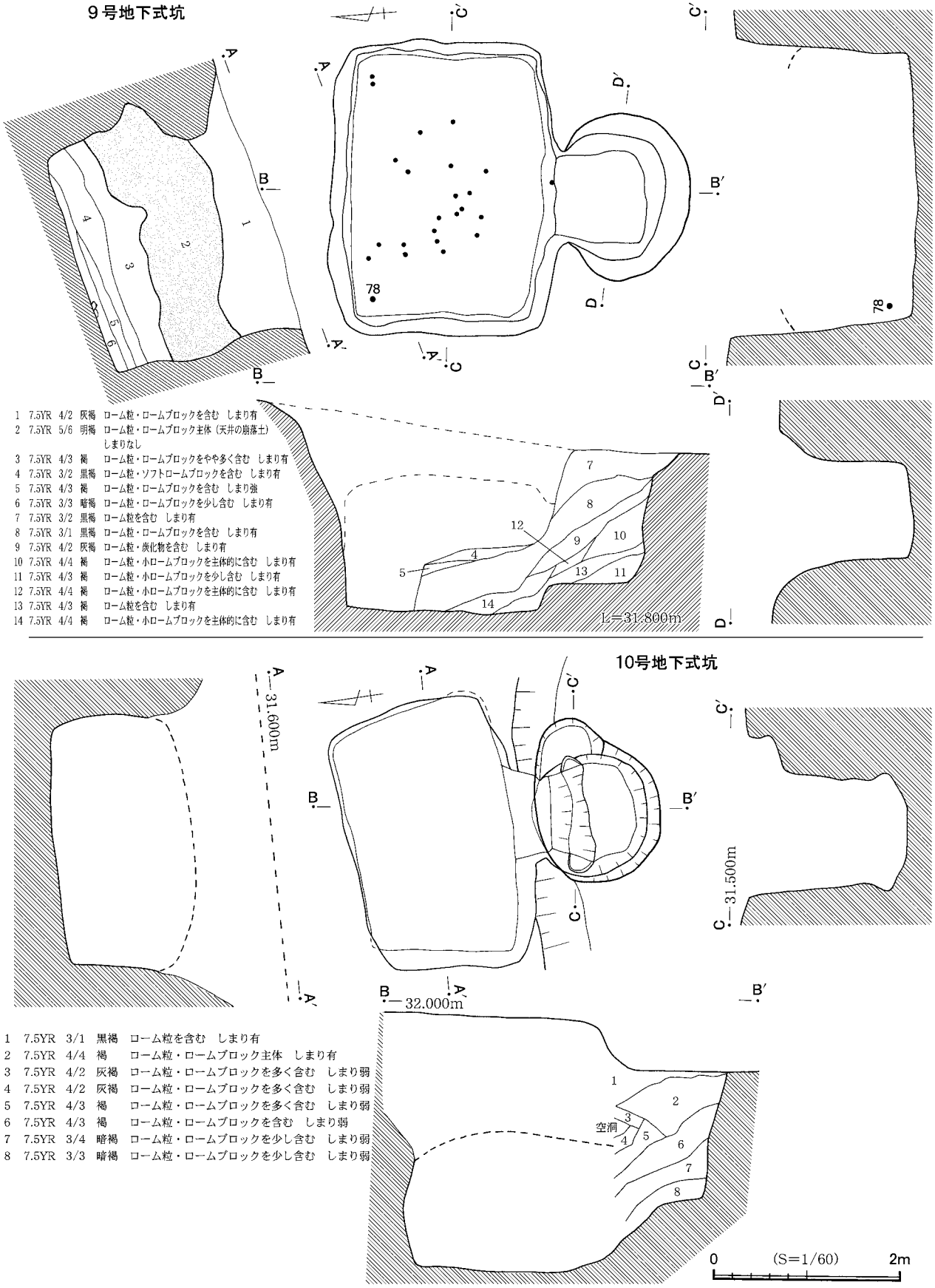
第10図　5・6号地下式坑・40号土坑



1 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を含む しまり有
2 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり弱
3 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）・黒色土を含む しまり有
4 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を含む しまり有
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
6 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック・ソフトロームを含む しまり有
7 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒を含む しまり有
8 7.5YR 5/4 にぶい褐 ロームブロックを主体とする しまりやや強
9 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロックを主体とする しまり弱
10 7.5YR 5/2 灰褐 ロームブロック・砂質土を主体とする しまり弱
11 7.5YR 7/2 明褐灰 砂質土を主体とする しまり弱

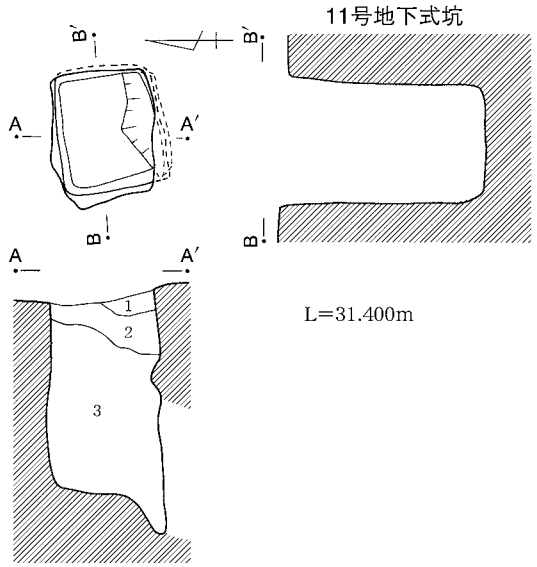
1 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり有
2 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を多く含む しまり有
3 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む しまり有
4 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）をやや強く含む しまり有
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む しまり有
6 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を多く含む しまり有
7 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む しまり有
8 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む しまり有
9 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）をやや多く含む しまり有
10 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を含む しまり有

第11図 7・8号地下式坑



第12図　9・10号地下式坑

11号地下式坑



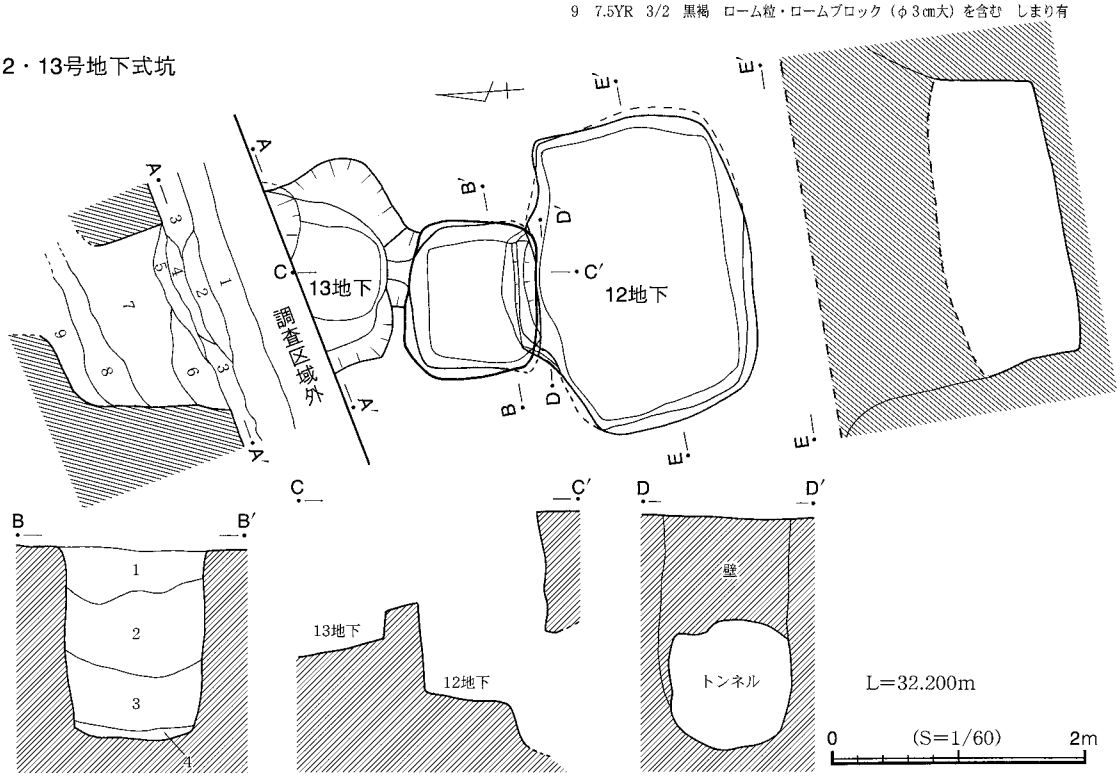
1　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロックを含む　しまりやや強
2　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を主体的に含む　しまりやや強
3　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ4～5㎝大）を主体的に含む　しまりやや強

※11号地下式坑は主室が調査区域外のため竪坑のみの調査しかしていない。

12号地下式坑
1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を主体的に含む　しまり弱
2　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を主体的に含む　しまり弱
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を主体的に含む　しまり弱
4　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒を少し含む　しまり有

13号地下式坑
1　7.5YR　4/2　灰褐　表土　しまり有
2　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・焼土粒・炭化物を含む　しまり強
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック・ソフトブロックを含む　しまり有
4　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む　しまり強
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を多く含む　しまり強
6　7.5YR　4/3　褐　ローム粒を多く含む　しまり有
7　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
8　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）をやや多く含む　しまり有
9　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有

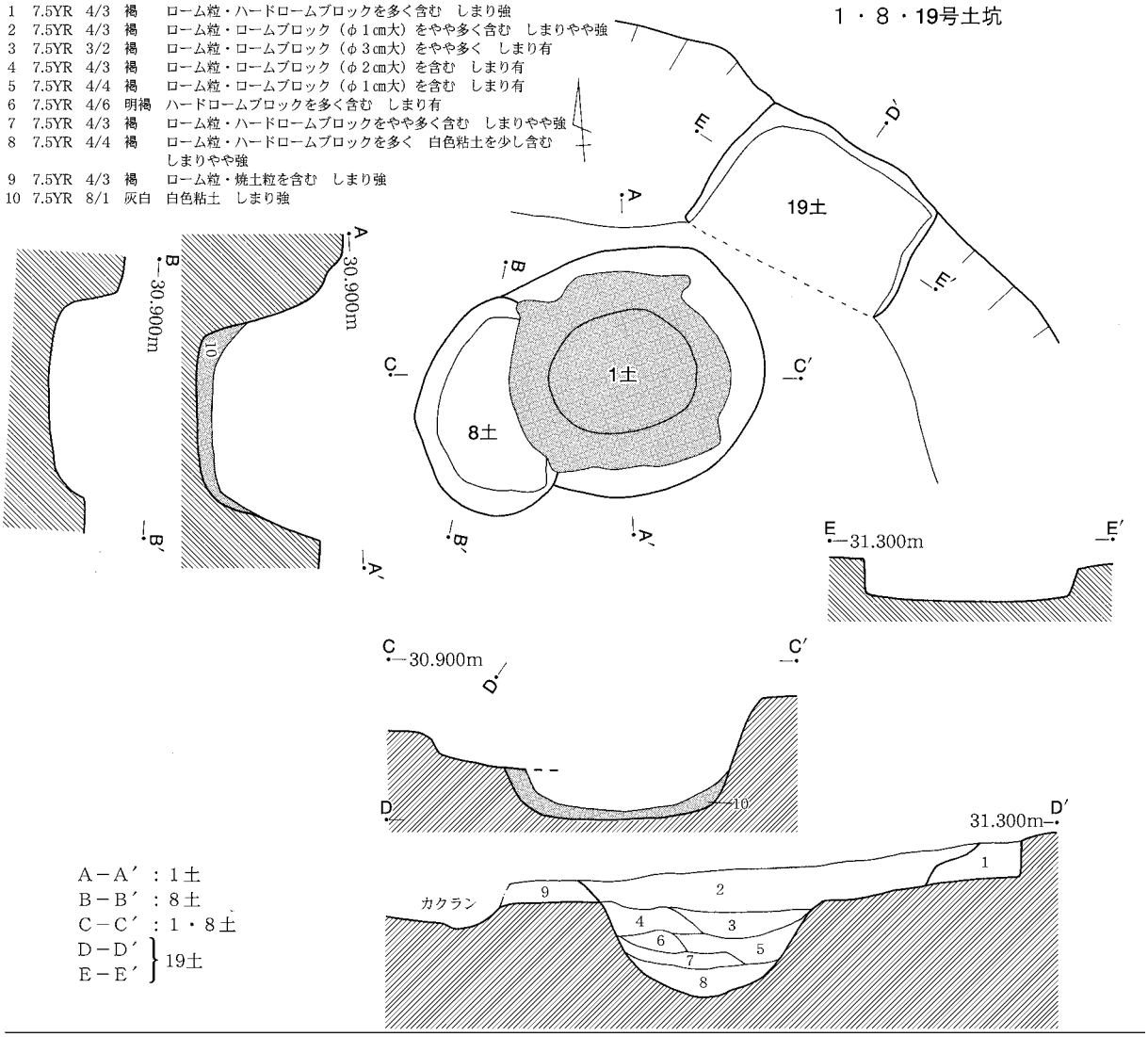
12・13号地下式坑



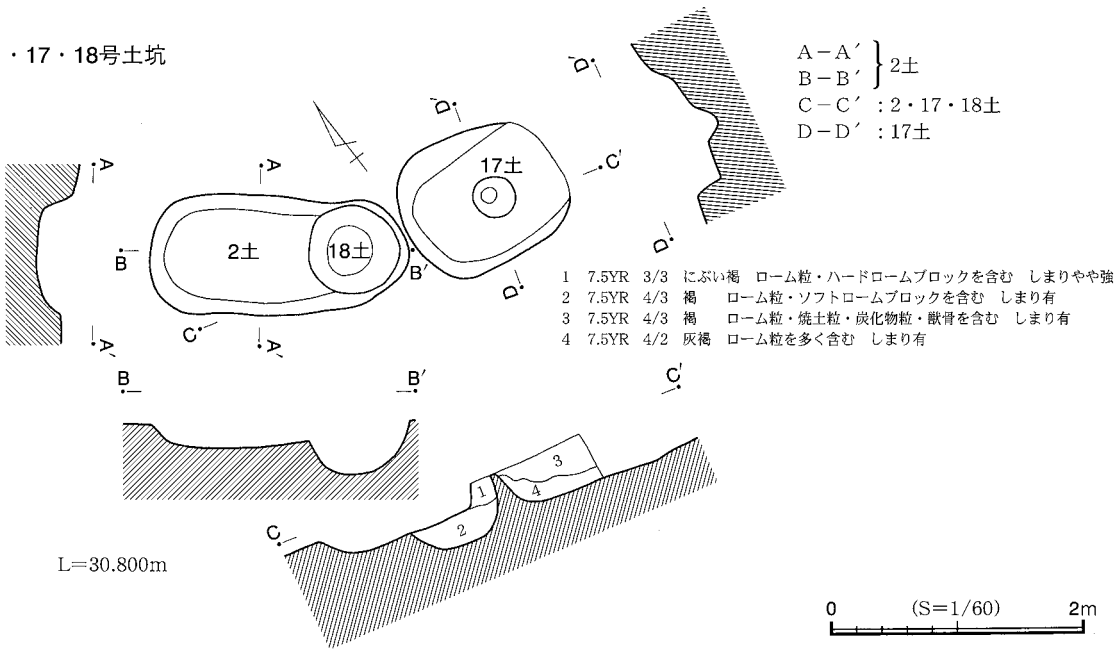
第13図　11～13号地下式坑

1　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ハードロームブロックを多く含む　しまり強
2　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）をやや多く含む　しまりやや強
3　7.5YR　3/2　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）をやや多く　しまり有
4　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
5　7.5YR　4/4　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
6　7.5YR　4/6　明褐　ハードロームブロックを多く含む　しまり有
7　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ハードロームブロックをやや多く含む　しまりやや強
8　7.5YR　4/4　褐　　ローム粒・ハードロームブロックを多く　白色粘土を少し含む　しまりやや強
9　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・焼土粒を含む　しまり強
10　7.5YR　8/1　灰白　白色粘土　しまり強

1・8・19号土坑

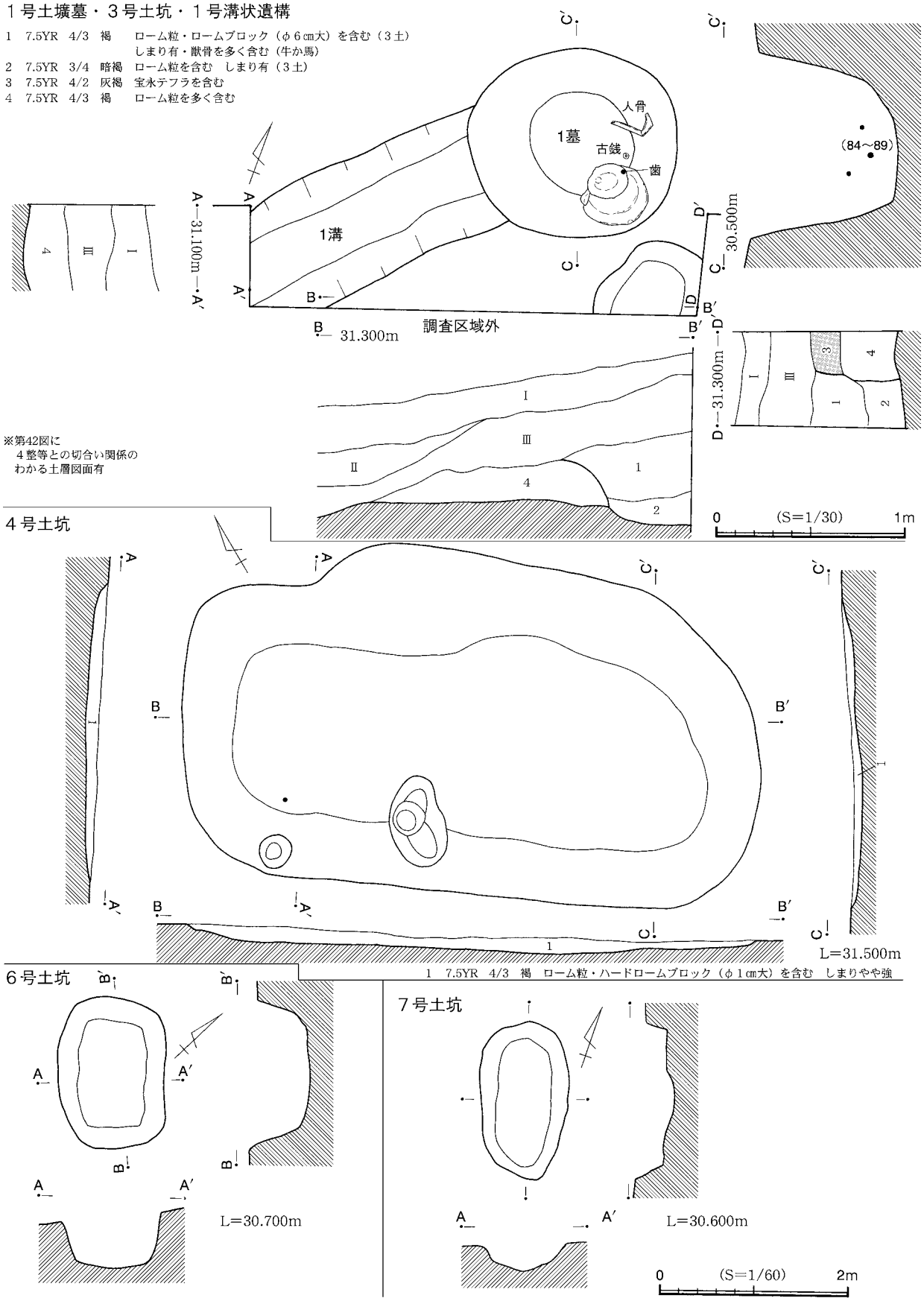


2・17・18号土坑

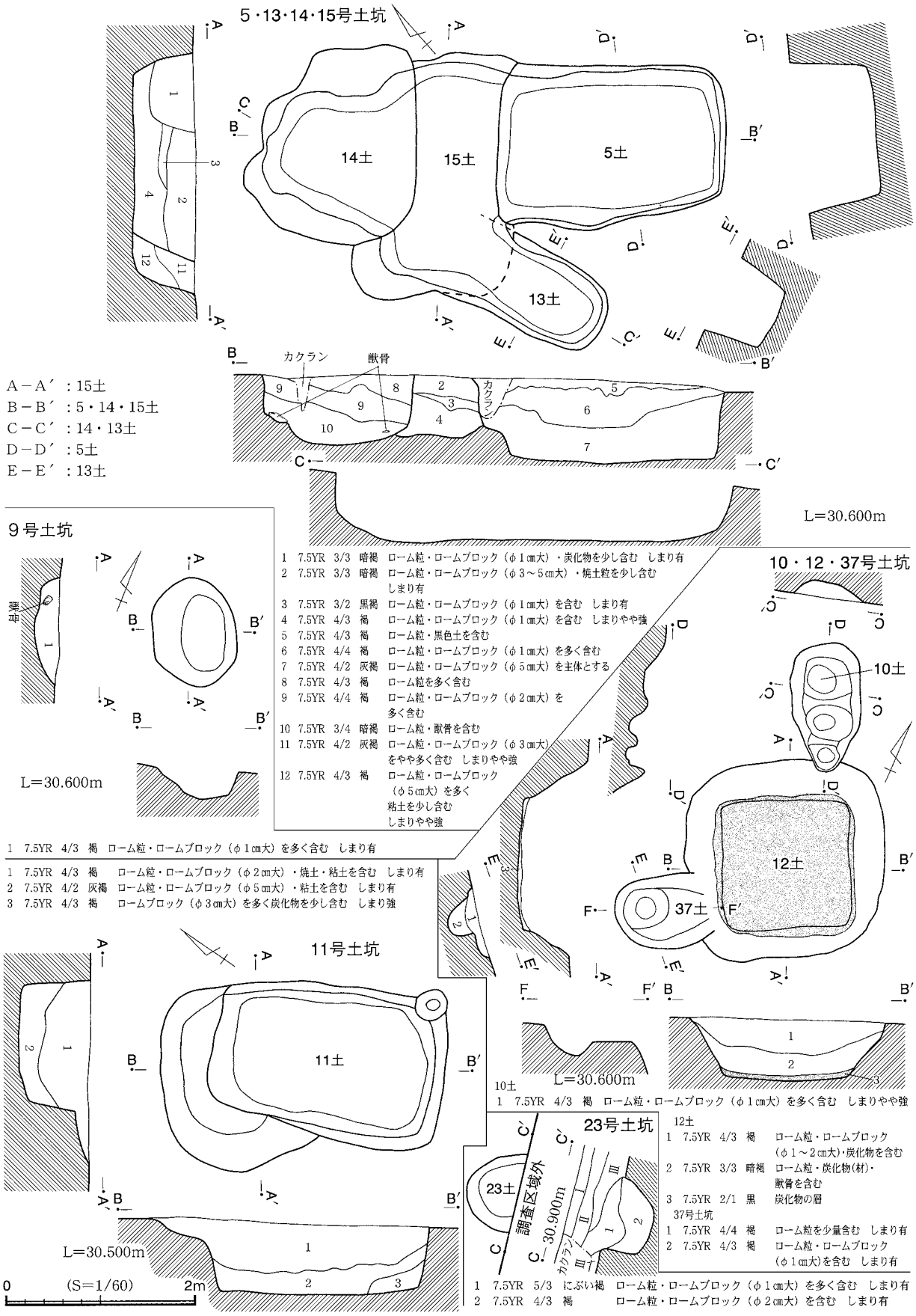


1　7.5YR　3/3　にぶい褐　ローム粒・ハードロームブロックを含む　しまりやや強
2　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ソフトロームブロックを含む　しまり有
3　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・焼土粒・炭化物粒・獣骨を含む　しまり有
4　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を多く含む　しまり有

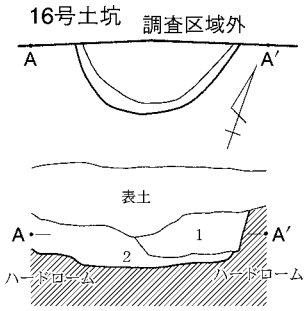
第14図　1・2・8・17～19号土坑

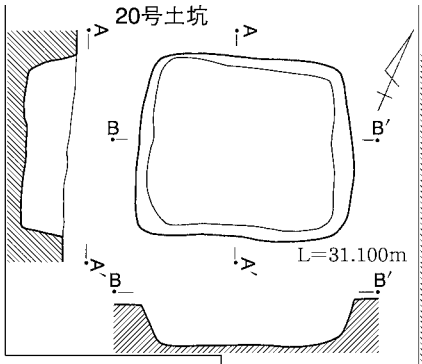


第15図　1号土壙墓・1号溝状遺構・3・4・6・7号土坑



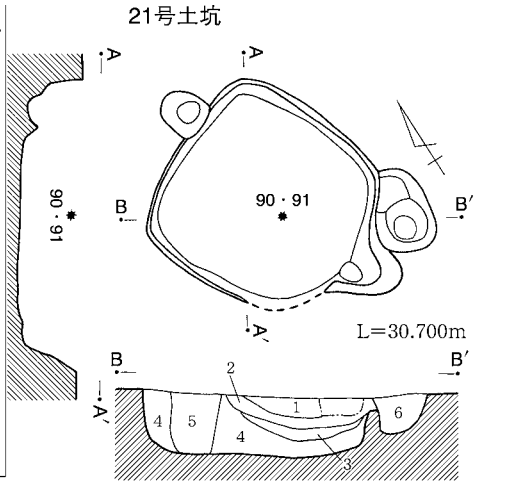
第16図　5・9～15・23・37号土坑



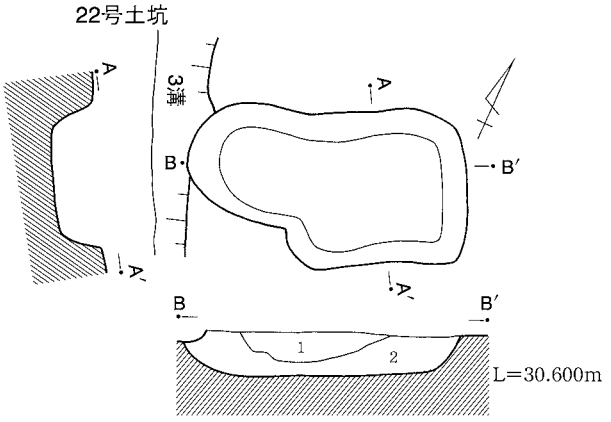


1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロックを呑む　しまり有
2　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・焼土粒を含む　しまり有

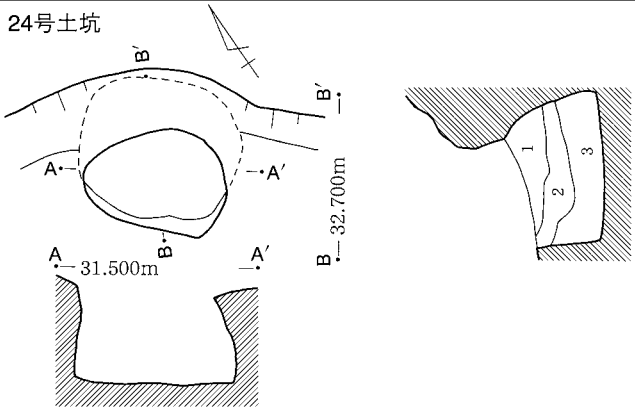
1　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒・ハードロームブロック（φ1～10cm大）を含む　しまり有



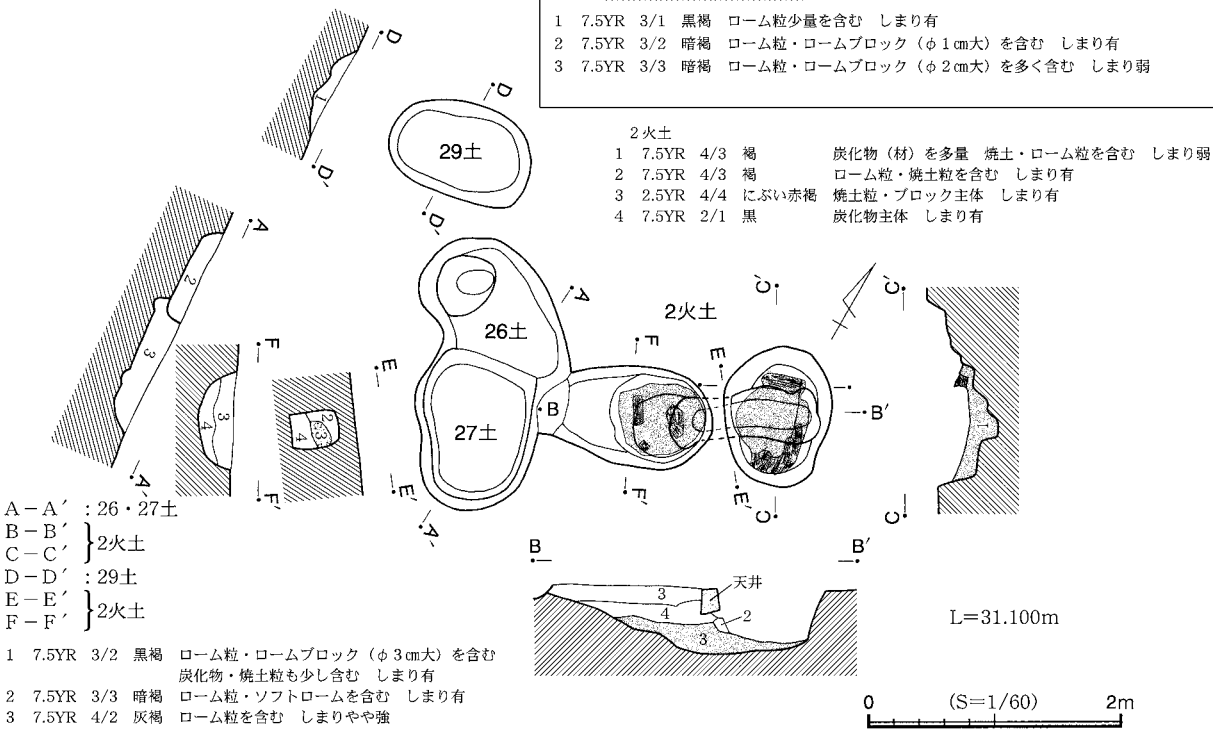
1　7.5YR　4/1　褐灰　ローム粒・ロームブロック（φ3cm大）・焼土ブロック・炭化物を多く含む　しまりやや強
2　7.5YR　4/2　褐灰　ローム粒・ロームブロック（φ3cm大）を多く含む　しまりやや強
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック・焼土粒を含む　しまり有
4　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロックを主体的に含む　しまり有
5　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）を含む　しまり有
6　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ1cm以下）を含む　しまり有



1　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）を含む　しまり有
2　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ3cm大）を多く含む　しまり有



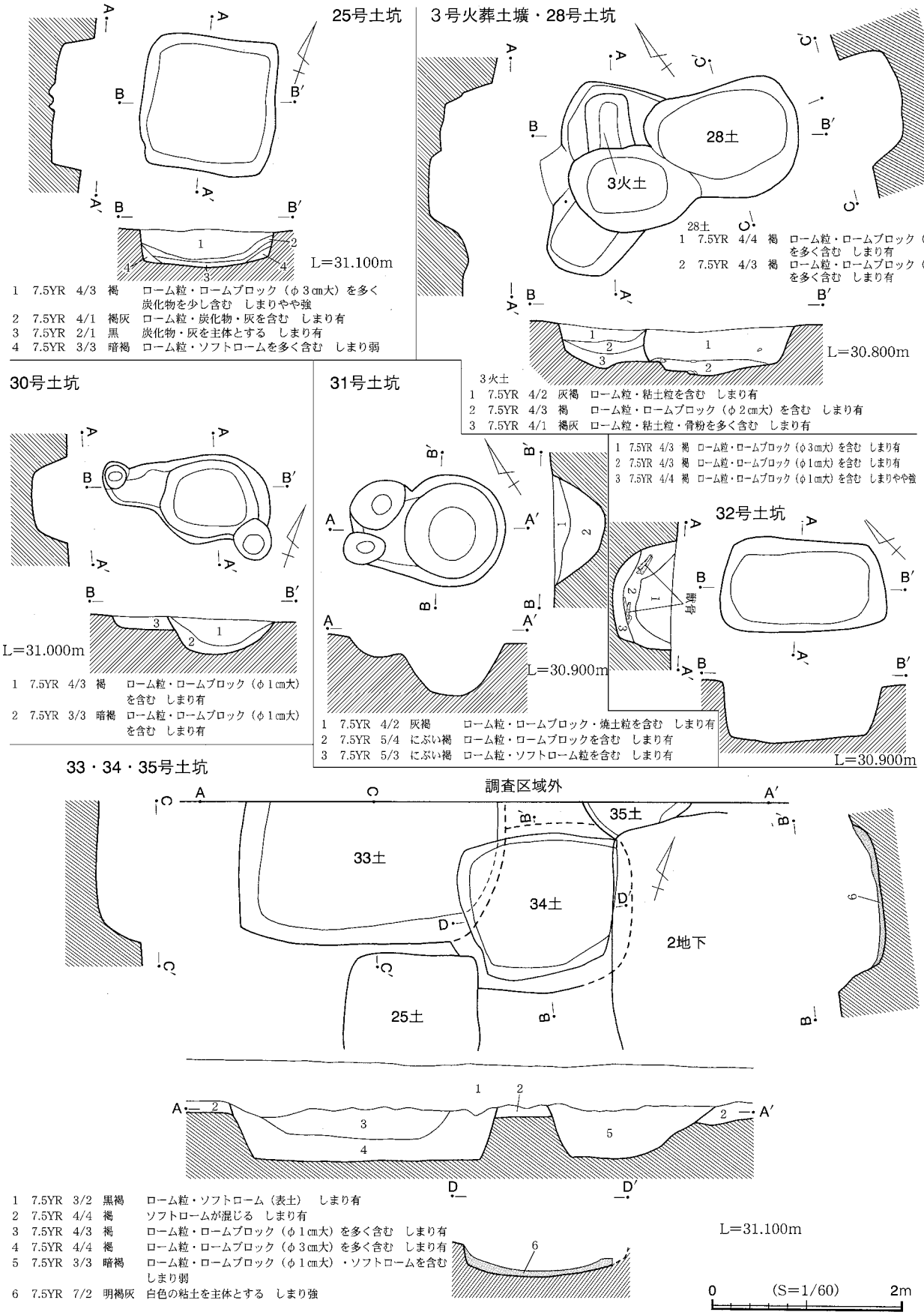
1　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒少量を含む　しまり有
2　7.5YR　3/2　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）を含む　しまり有
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）を多く含む　しまり弱



2火土
1　7.5YR　4/3　褐　炭化物（材）を多量　焼土・ローム粒を含む　しまり弱
2　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・焼土粒を含む　しまり有
3　2.5YR　4/4　にぶい赤褐　焼土粒・ブロック主体　しまり有
4　7.5YR　2/1　黒　炭化物主体　しまり有

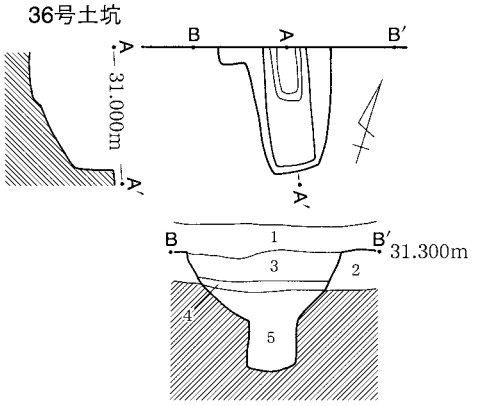
1　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ロームブロック（φ3cm大）を含む
炭化物・焼土粒も少し含む　しまり有
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ソフトロームを含む　しまり有
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む　しまりやや強

第17図　2号火葬土壙・20～22・24・26・27・29号土坑



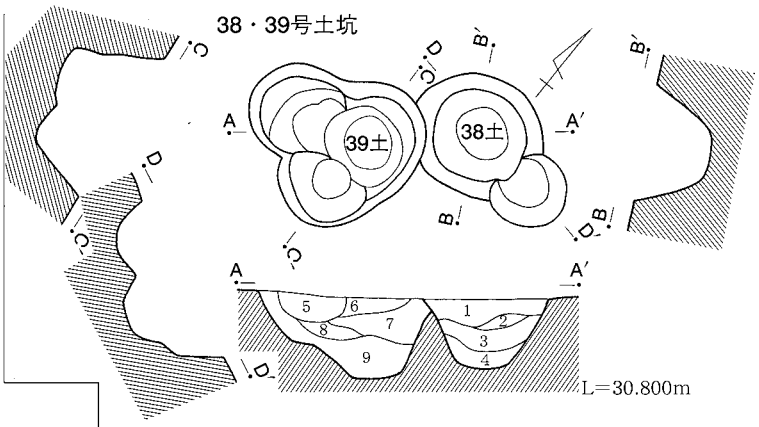
第18図　3号火葬土壙・25・28・30～35号土坑

36号土坑



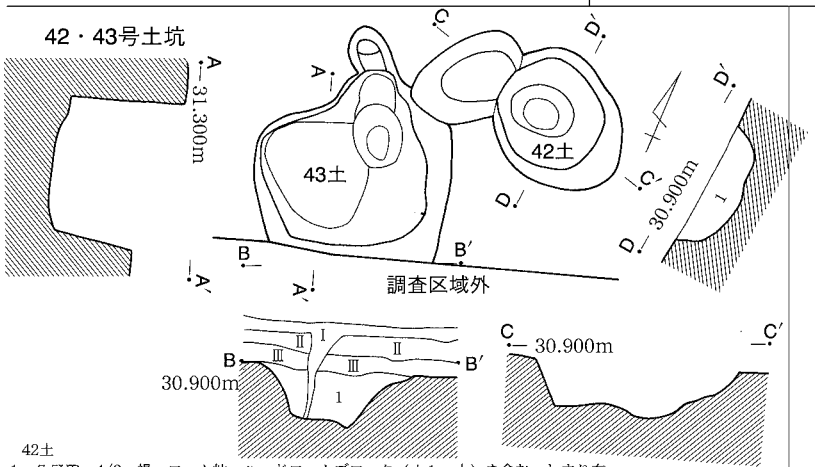
1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む　しまり有
2　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ソフトロームを含む　しまり有
3　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
4　7.5YR　4/1　褐灰　炭化物・灰を含む　しまり有
5　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり弱

38・39号土坑



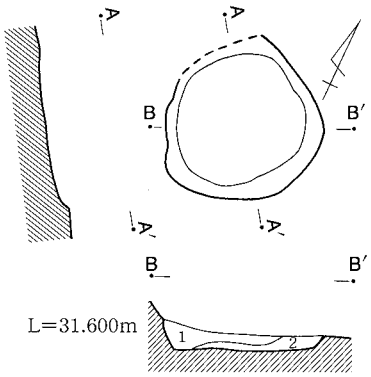
1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまりやや強
2　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒を含む　しまりやや強
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
4　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）・焼土粒を含む　しまり有
6　7.5YR　4/4　褐　ソフトローム主体　しまり有
7　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を含む　しまり有
8　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒を含む　しまり有
9　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を多く含む　しまり有

42・43号土坑



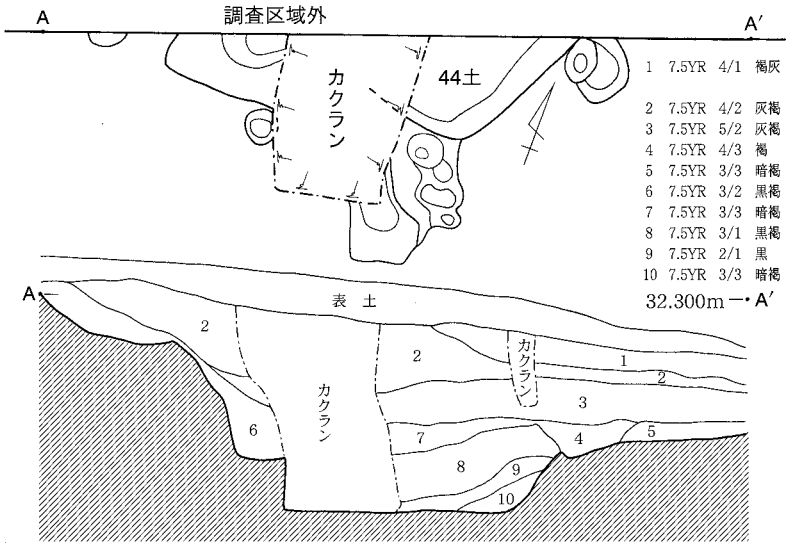
42土
1　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ハードロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
43土
1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ハードロームブロック（φ5㎝大）を多量に含む　しまり強

45号土坑



1　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒を含む　しまり有
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有

44号土坑

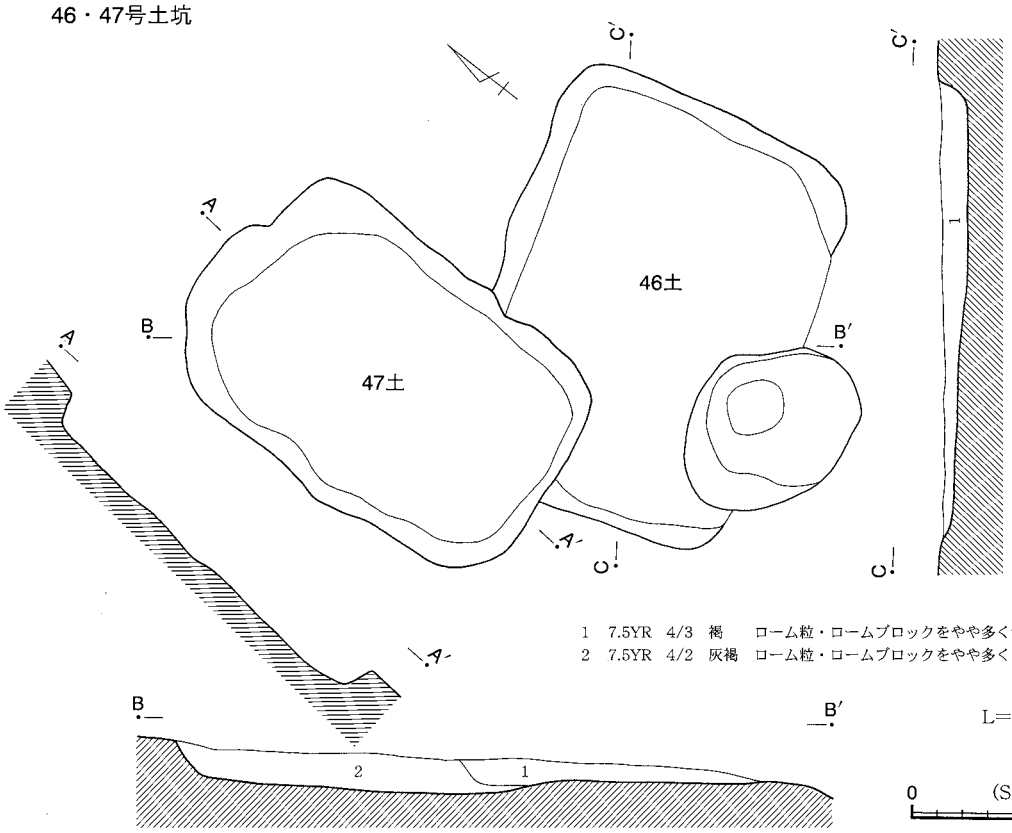


1　7.5YR　4/1　褐灰　ロームブロック・炭化物を多く含み　硬化面あり　道の痕跡　しまり強
2　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）・炭化物を含む　しまり有
3　7.5YR　5/2　灰褐　ローム粒を含む　しまり有
4　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロックをやや多く含む　しまり有
6　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
7　7.5YR　3/3　暗褐　3層と8層の漸移層　黒色土と灰褐色土が混じる　しまり有
8　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒・焼土粒を少し含む　しまり有
9　7.5YR　2/1　黒　ローム粒・ハードロームブロックを多く含む　しまり有
10　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒を多く含む　しまり有

0　(S=1/60)　2m

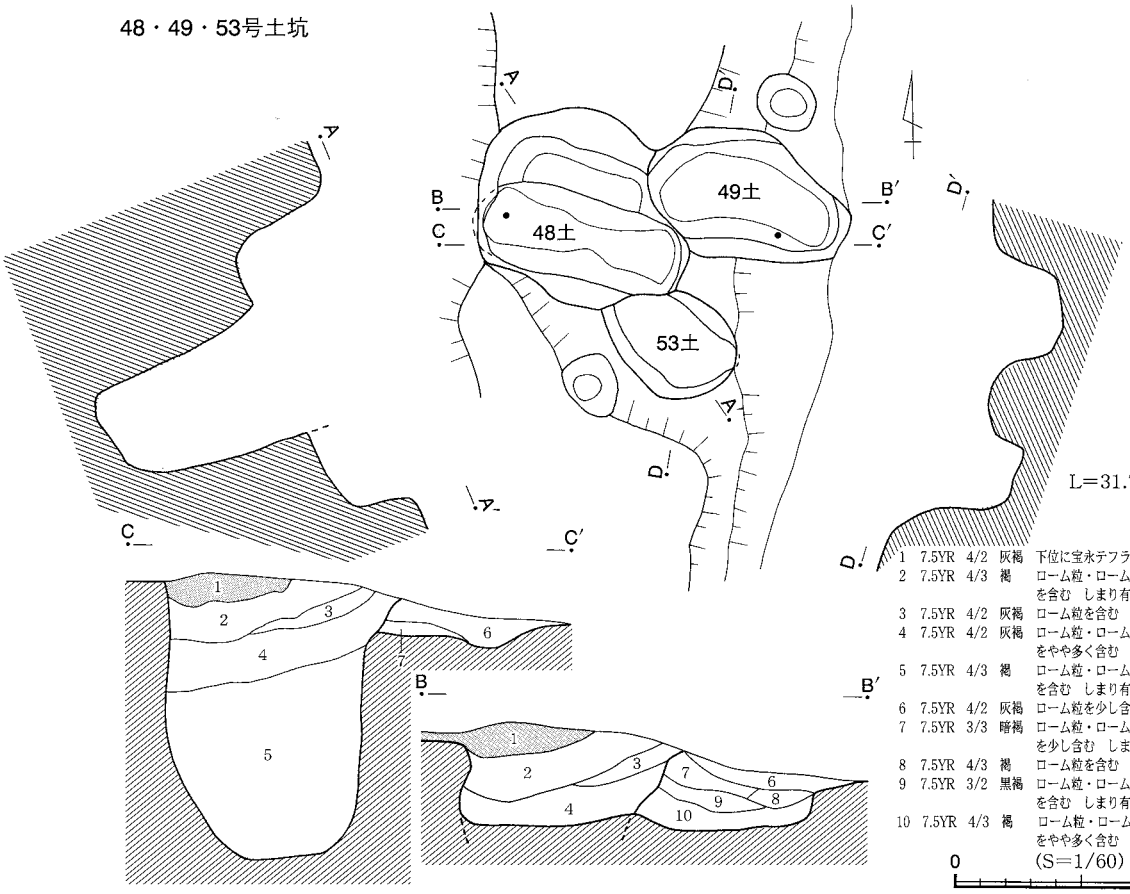
第19図　36・38・39・42～45号土坑

46・47号土坑



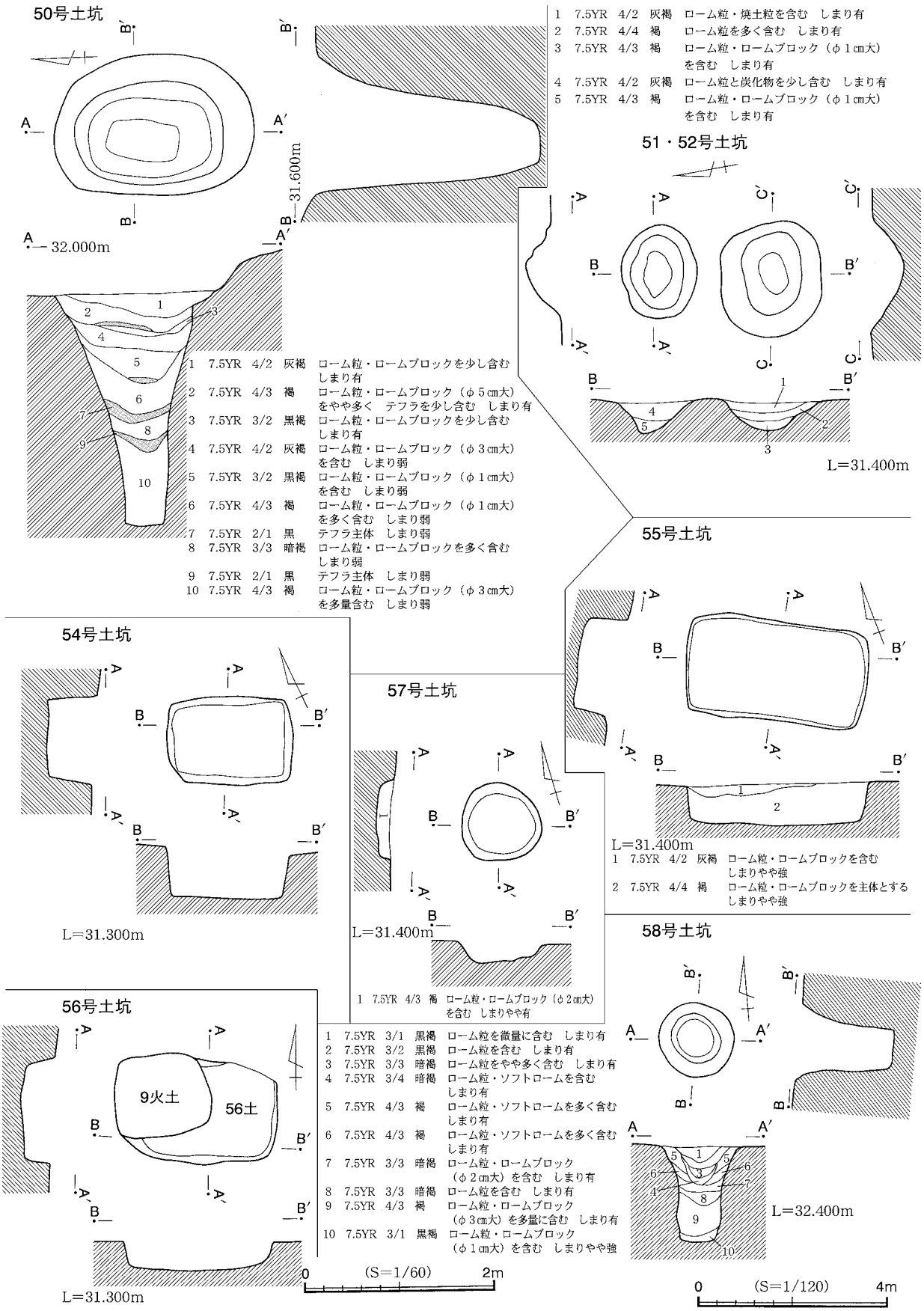
1　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ローム ブロックをやや多く含む　しまり有
2　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ローム ブロックをやや多く　炭化物を少し含む　しまり有

48・49・53号土坑

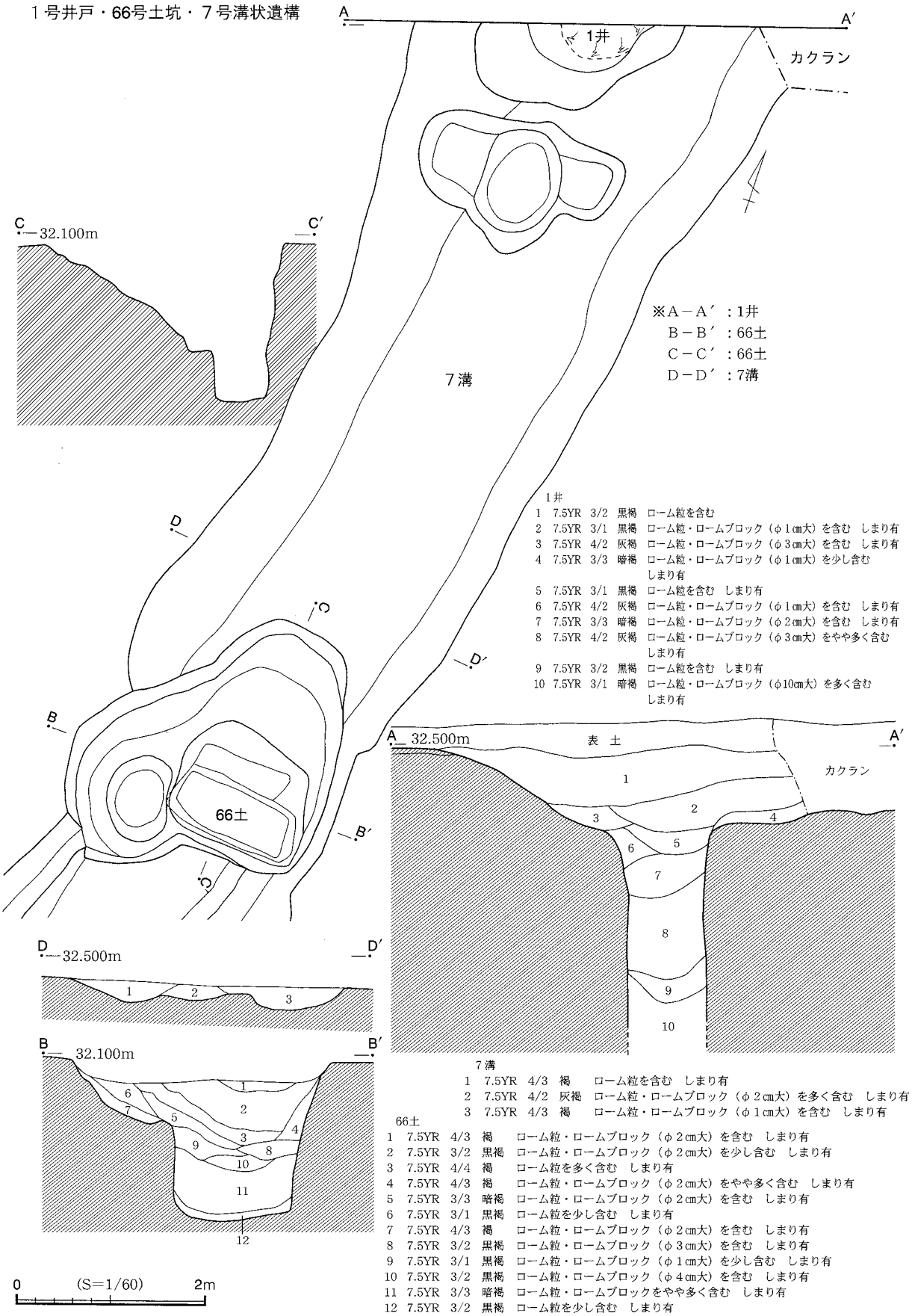


1　7.5YR　4/2　灰褐　下位に宝永テフラを多く含む　しまり有
2　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ローム ブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む
4　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ローム ブロック（φ5㎝大）をやや多く含む　しまり有
5　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ローム ブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有
6　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を少し含む　しまり有
7　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ローム ブロック（φ1㎝大）を少し含む　しまり有
8　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒を含む　しまり有
9　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ローム ブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
10　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ローム ブロック（φ5㎝大）をやや多く含む　しまり有

第20図　46～49・53号土坑



第21図　50～52・54～58号土坑



1井

1	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒を含む
2	7.5YR	3/1	黒褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
3	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有
4	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を少し含む　しまり有
5	7.5YR	3/1	黒褐	ローム粒を含む　しまり有
6	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
7	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
8	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）をやや多く含む　しまり有
9	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒を含む　しまり有
10	7.5YR	3/1	暗褐	ローム粒・ロームブロック（φ10㎝大）を多く含む　しまり有

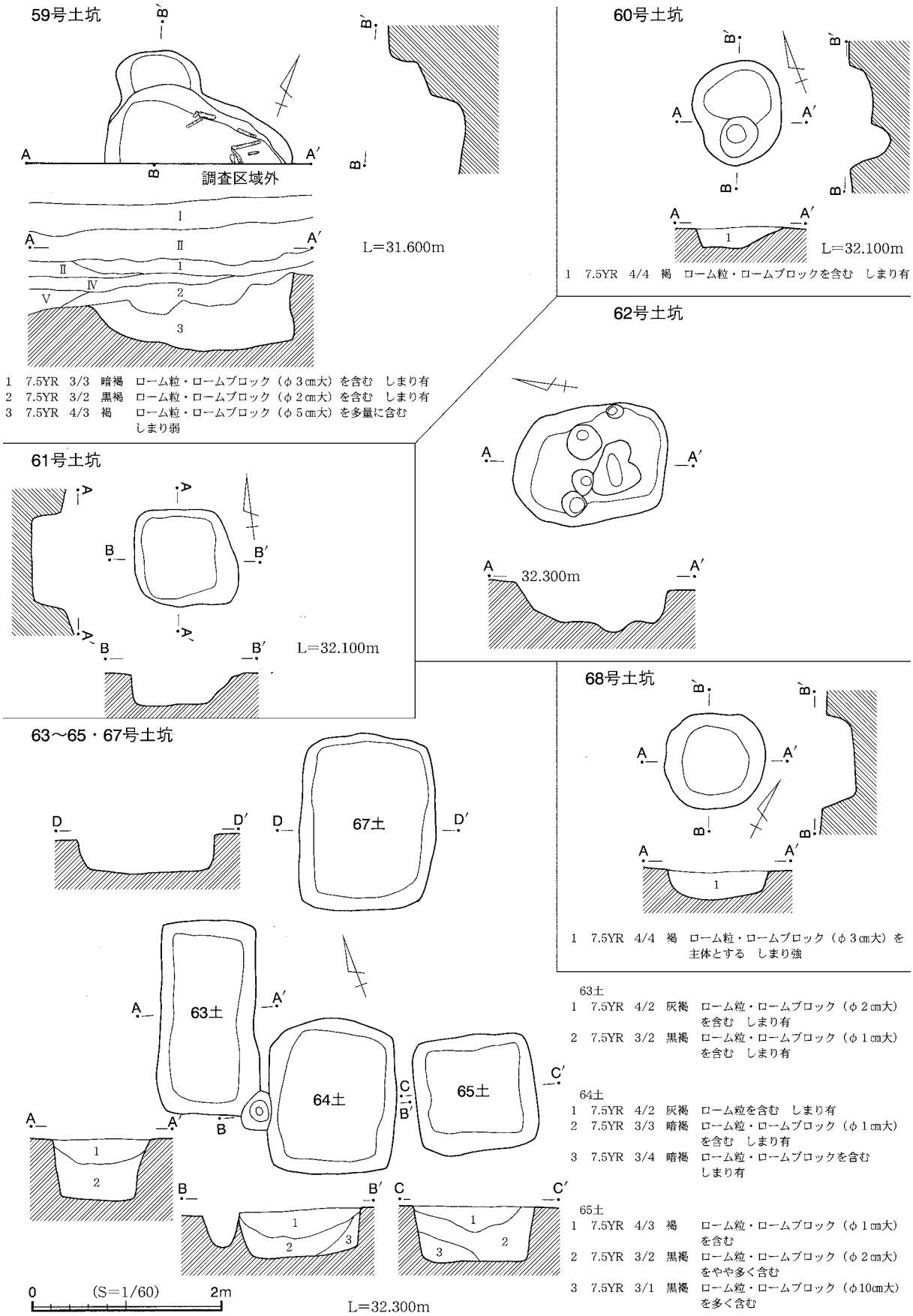
7溝

1	7.5YR	4/3	褐	ローム粒を含む　しまり有
2	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を多く含む　しまり有
3	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有

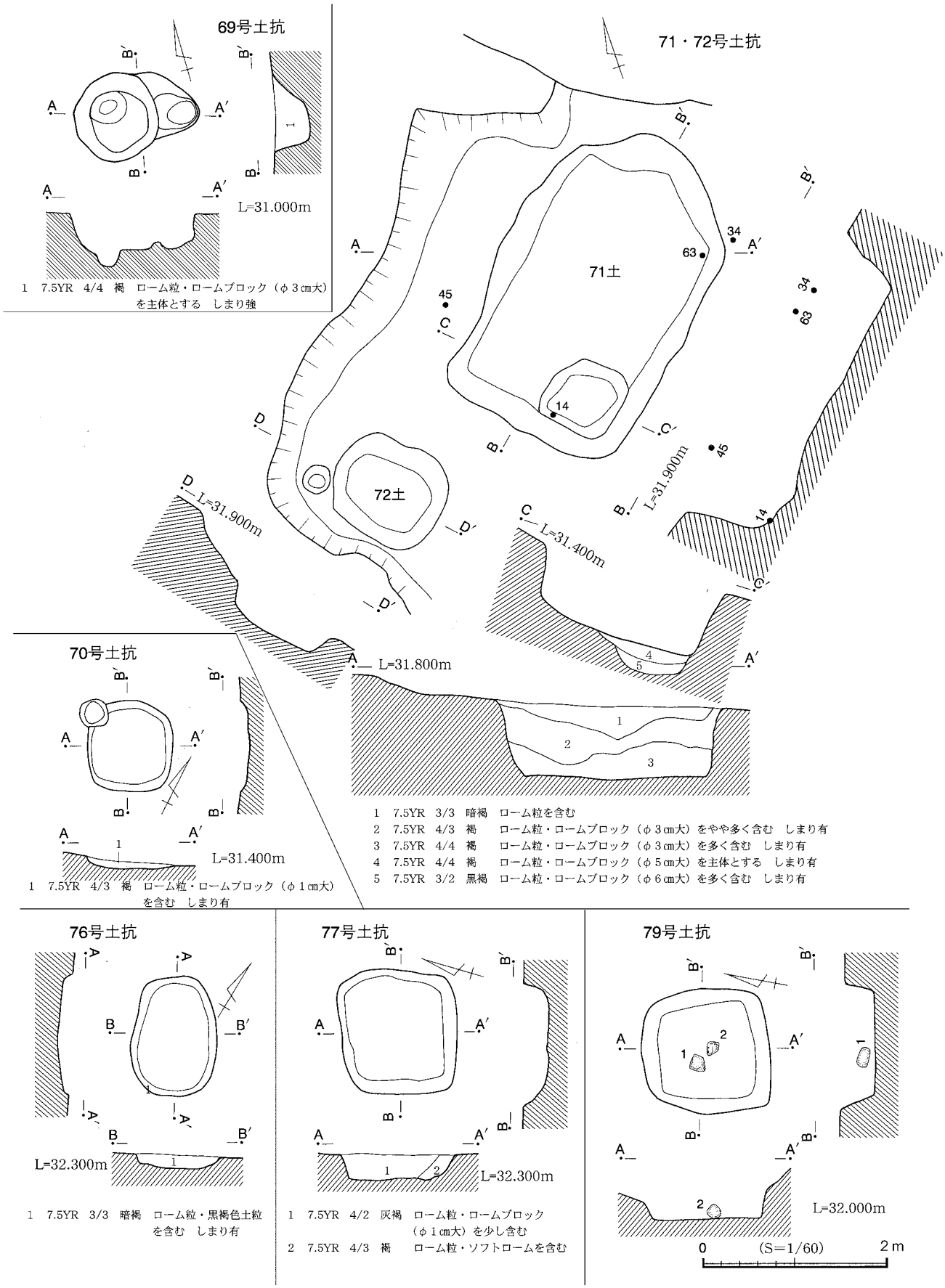
66土

1	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
2	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を少し含む　しまり有
3	7.5YR	4/4	褐	ローム粒を多く含む　しまり有
4	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）をやや多く含む　しまり有
5	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
6	7.5YR	3/1	黒褐	ローム粒を少し含む　しまり有
7	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む　しまり有
8	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有
9	7.5YR	3/1	黒褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を少し含む　しまり有
10	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を含む　しまり有
11	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・ロームブロックをやや多く含む　しまり有
12	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒を少し含む　しまり有

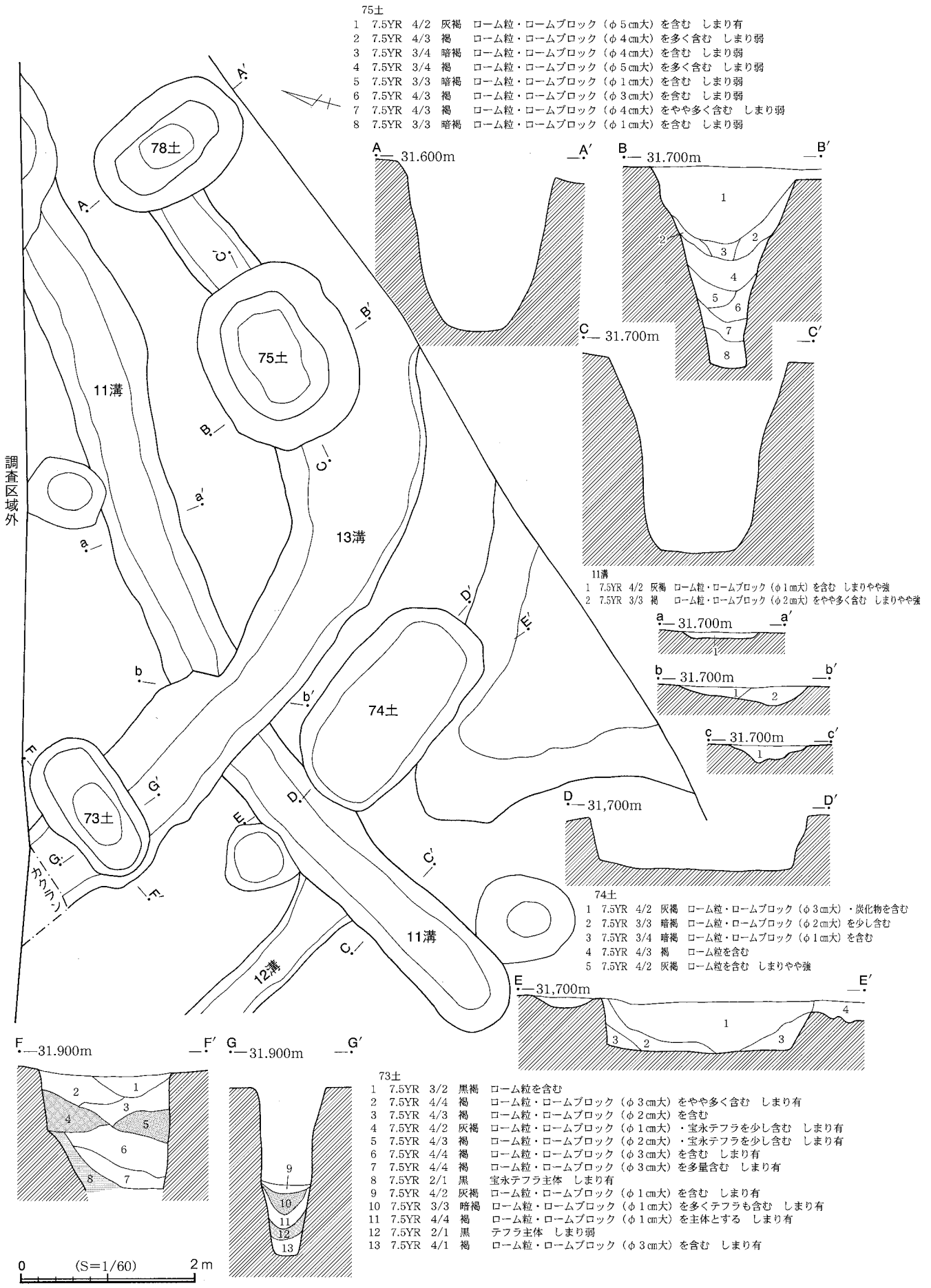
第22図　1号井戸・7号溝状遺構・66号土坑



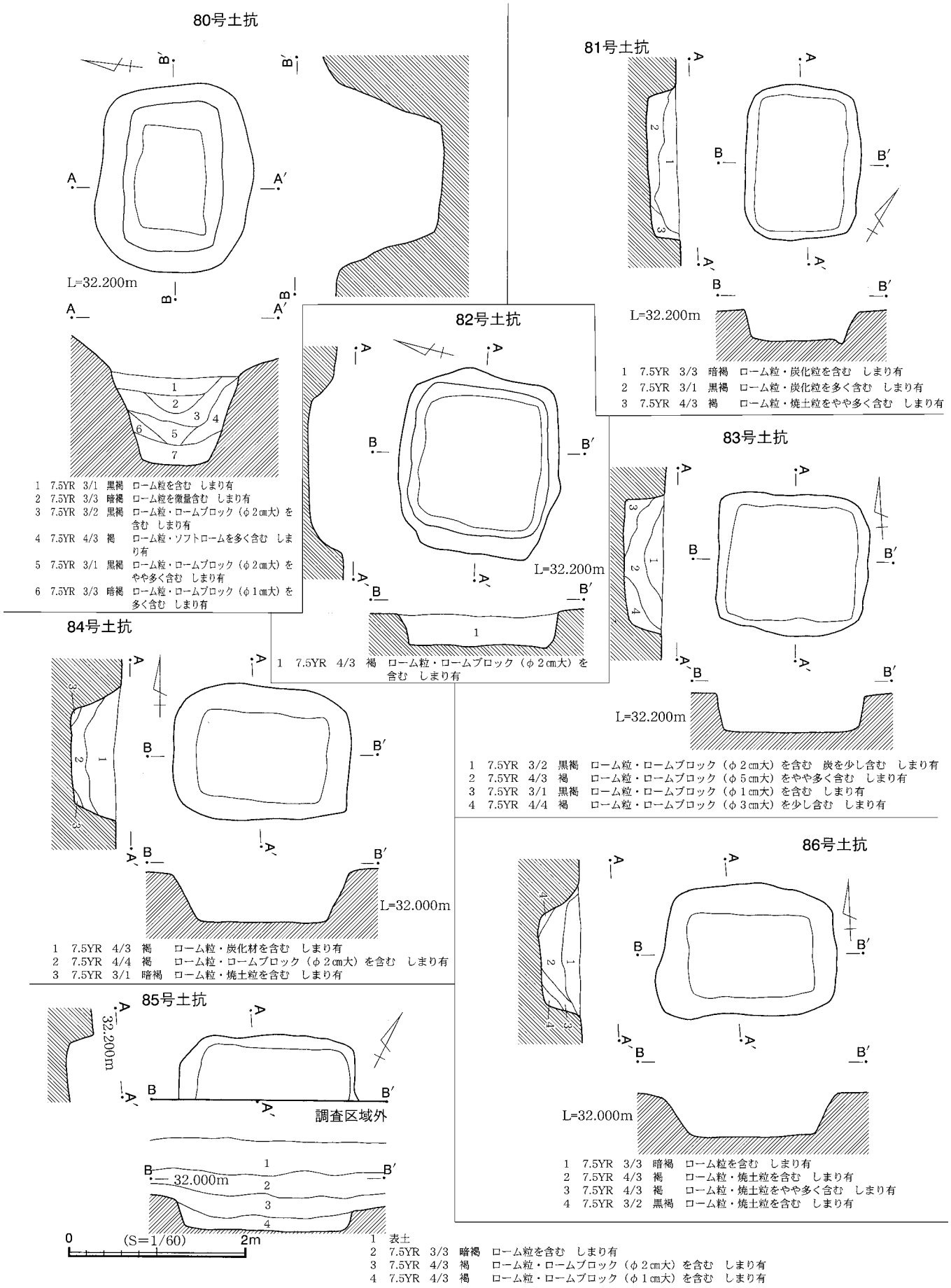
第23図　59～65・67・68号土坑



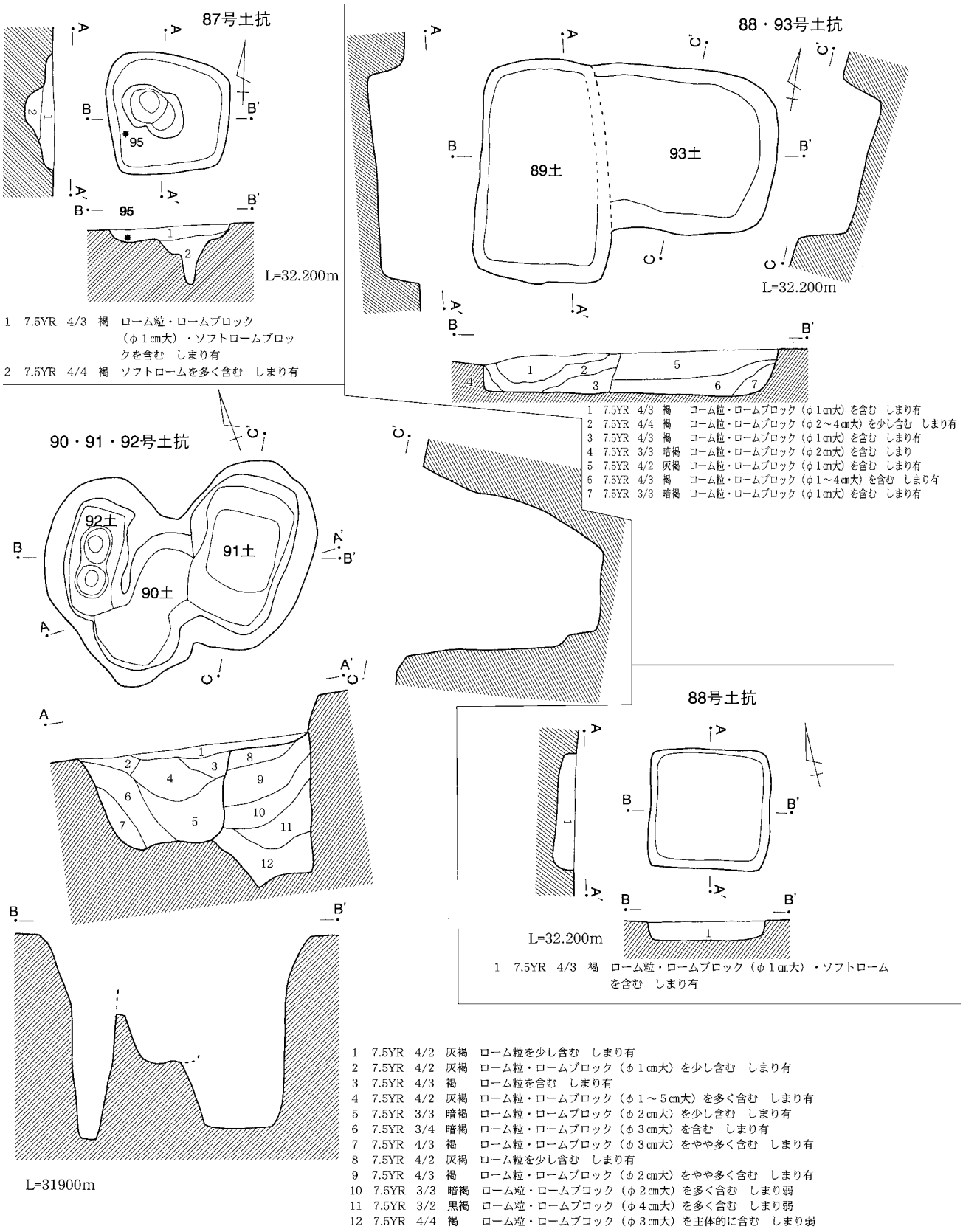
第24図　69～72・76・77・79号土抗



第25図　73～75・78号土抗・11～13号溝状遺構

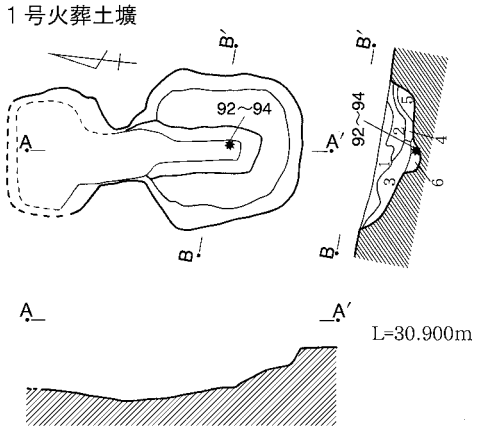


第26図　80～86号土抗



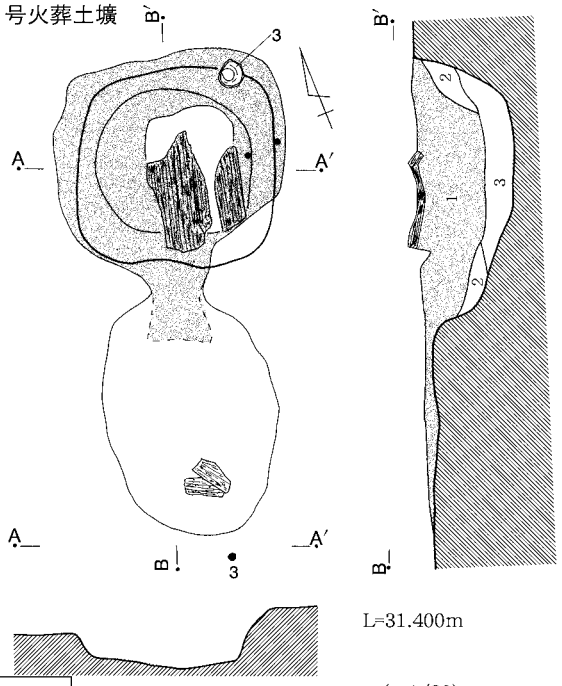
第27図　87～93号土抗

1号火葬土壙



1　2.5YR　3/2　暗赤褐　　焼土粒を含む　しまりやや強
2　2.5YR　3/3　暗赤褐　　焼土・炭化物・白色の繊維状のものを含む　しまり有
3　2.5YR　3/3　暗赤褐　　焼土ブロック・炭化物を多量に含む　しまり有
4　2.5YR　4/4　にぶい赤褐　白色の繊維状のものを主体的に含む　しまり弱
5　2.5YR　3/2　暗赤褐　　焼土ブロックを含む　しまり弱
6　2.5YR　4/4　にぶい赤褐　焼土粒を含む　古銭（天通銭）を含む　しまり有

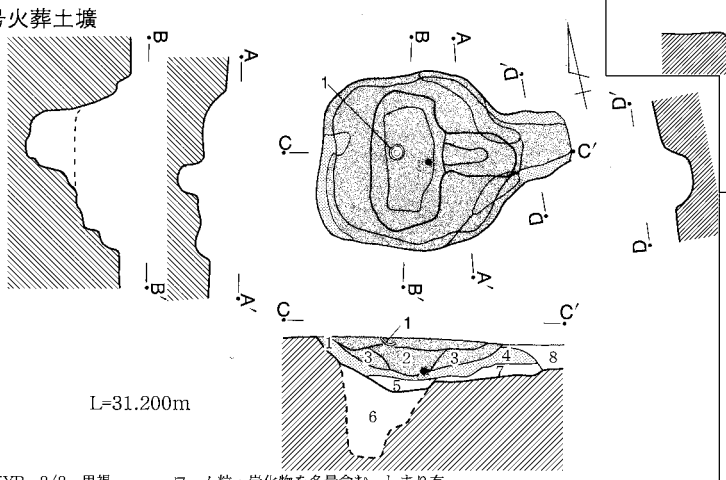
4号火葬土壙



0　(s=1/80)　1m

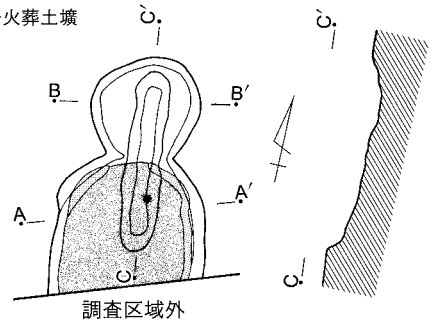
1　7.5YR　2/1　黒　　炭化物を主体とする　灰化した骨を少し含む　しまり弱
2　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・炭化粒を含む　しまり有
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・炭化粒を少し含む　しまり有

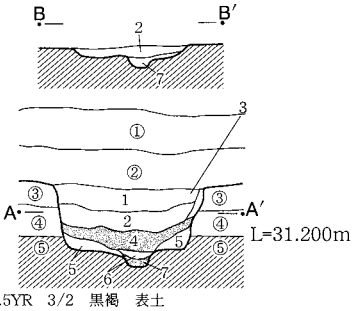
5号火葬土壙



1　7.5YR　2/2　黒褐　　ローム粒・炭化物を多量含む　しまり有
2　7.5YR　2/1　黒　　炭化物主体　しまり有
3　2.5YR　3/2　暗赤褐　焼土・炭化物を多く含む　しまり有
4　2.5YR　3/4　暗赤褐　焼土主体・炭化物・骨粉を含む　しまり有
5　7.5YR　3/3　暗褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
6　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を多量含む　しまり有
7　2.5YR　4/3　にぶい赤褐　ローム粒・焼土を含む　しまり有
8　2.5YR　3/3　暗褐　　ローム粒・焼土粒を含む　しまり有

6号火葬土壙

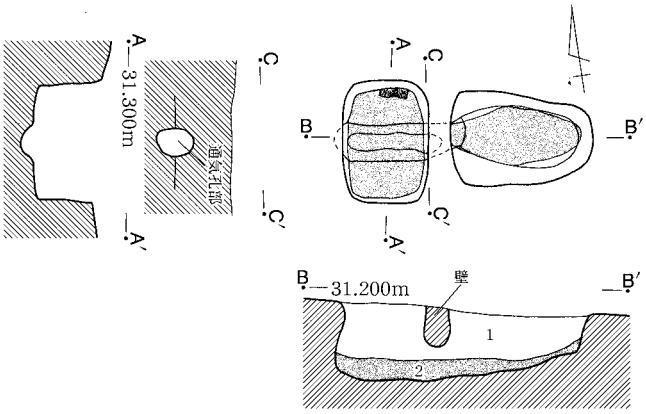




①　7.5YR　3/2　黒褐　表土
②　7.5YR　4/2　灰褐　層中下位に宝永テフラを含む
③　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・焼土粒を含む
④　7.5YR　2/2　黒褐　ローム粒・焼土粒を少し含む
⑤　7.5YR　2/2　黒褐　ローム粒・焼土粒をやや多く含む
1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を少し含む　しまり有
2　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・焼土粒を少し含む　しまり有
3　2.5YR　4/2　灰赤　焼土粒を含む　しまり有
4　7.5YR　3/3　暗褐　炭化物を主体的に含み灰褐色土を少し含む　しまり弱
5　2.5YR　4/2　灰赤　焼土粒・焼土ブロックを多く含む　しまり有
6　7.5YR　4/2　灰褐　炭化物を少し含む　しまり有
7　7.5YR　4/1　黒　　炭化物主体　しまり有

0　2m

7号火葬土壙

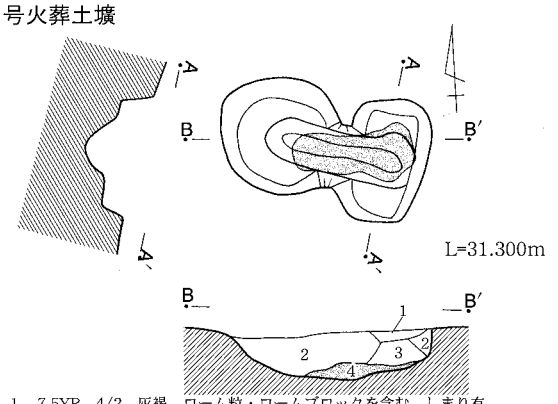


1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロックを主体的に含む　しまり有
2　7.5YR　2/1　黒　炭を主体とし焼土・骨を含む

（※1・5～7火土は s=1/60）

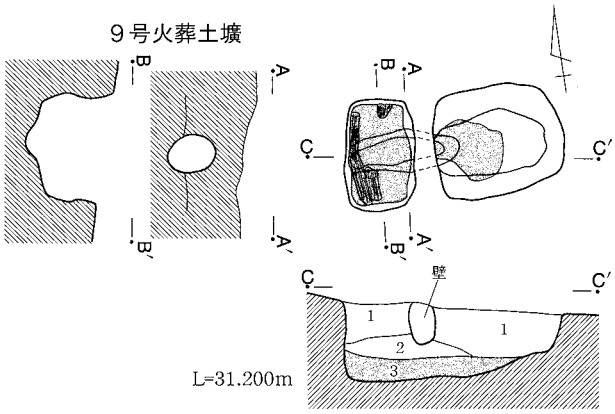
第28図　1・4～7号火葬土壙

8号火葬土壙



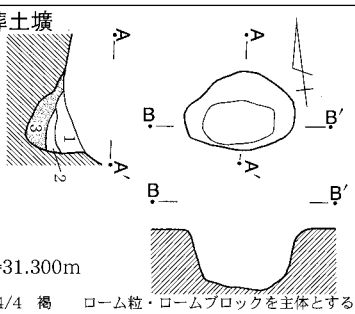
1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
2　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロックを主体とする　しまり有
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒を少し含む　しまり有
4　7.5YR　2/1　黒　炭化物を主体とし　焼土・骨粉を含む　しまり弱

9号火葬土壙



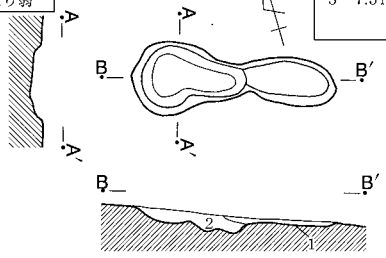
1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロックを主体とする　しまり有
2　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒を少し含む
3　7.5YR　2/1　黒　炭化物（材）を主体とし　焼土・骨片を含む　しまり有

10号火葬土壙



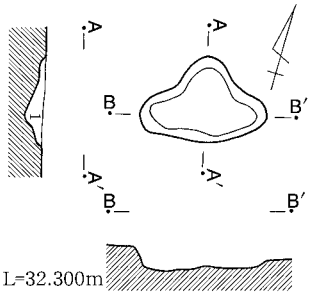
1　7.5YR　4/4　褐　ローム粒・ロームブロックを主体とする　しまり有
2　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を少し含む　しまり有
3　7.5YR　2/1　黒　炭を多量含む　骨片を含む　しまり有

11号火葬土壙



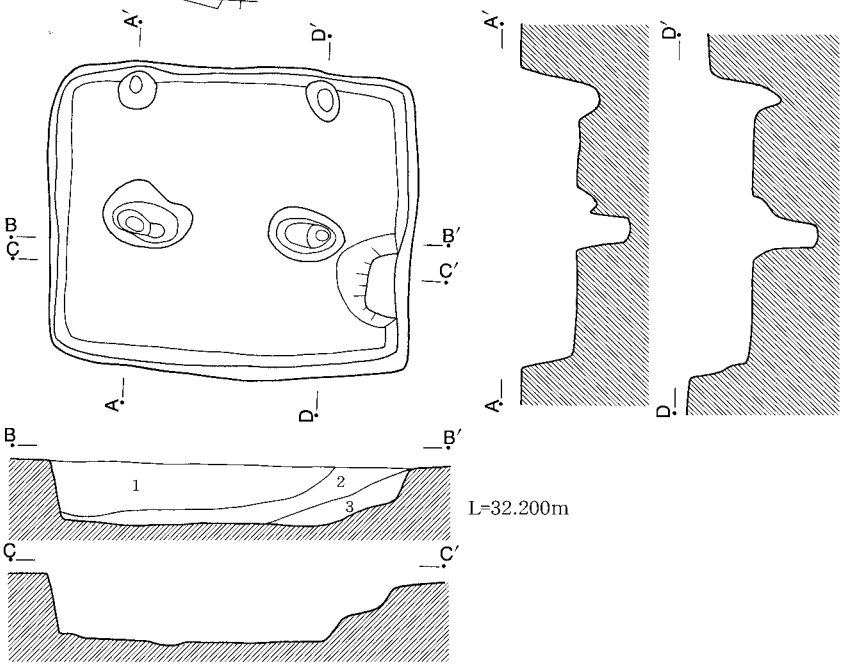
1　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒・ソフトロームブロックを含むしまり有
2　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ソフトロームブロック・骨片・焼土・炭化物を含む　しまり有

12号火葬土壙



1　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ソフトロームブロック・焼土物・骨片を含む　しまり有

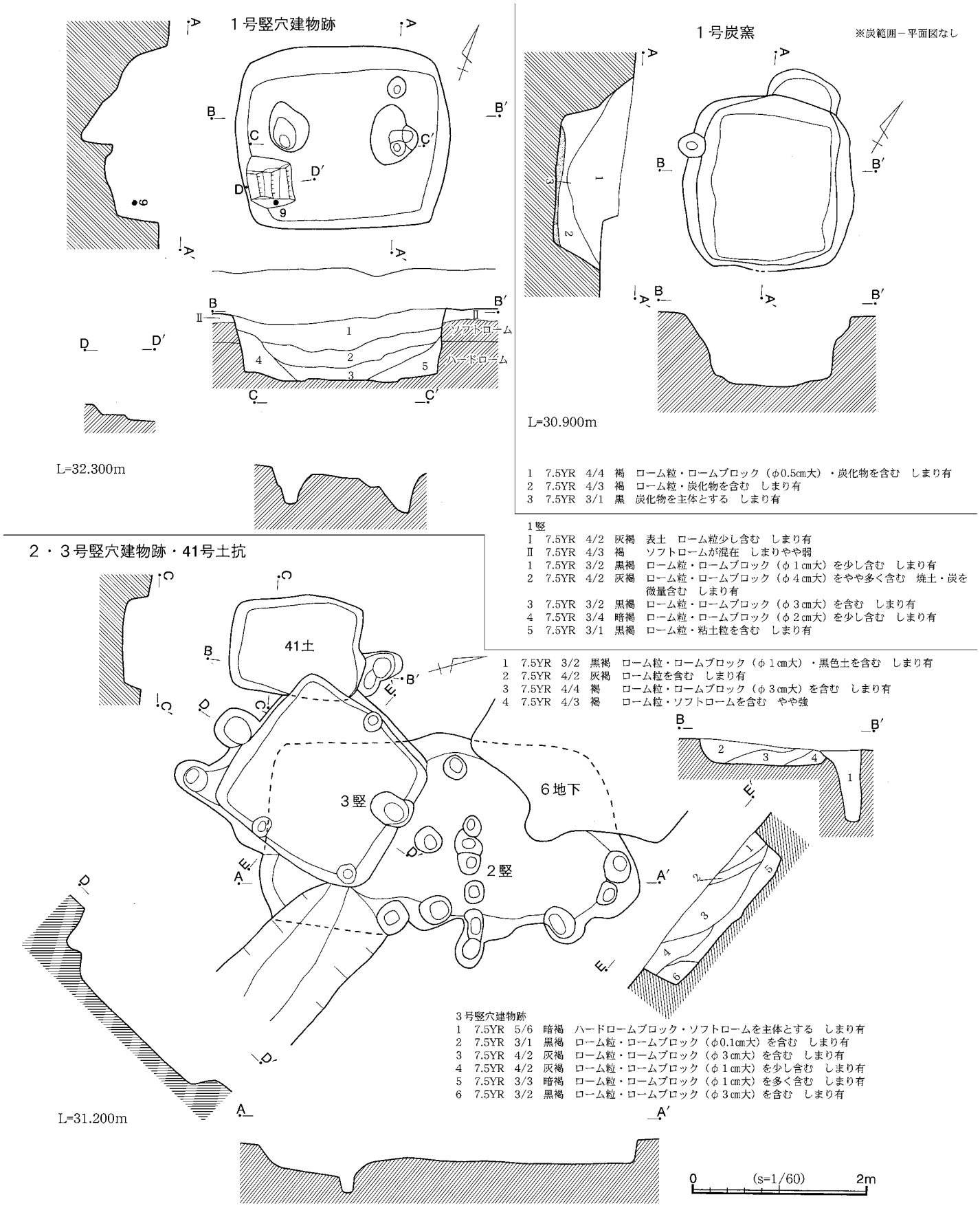
4号竪穴建物跡



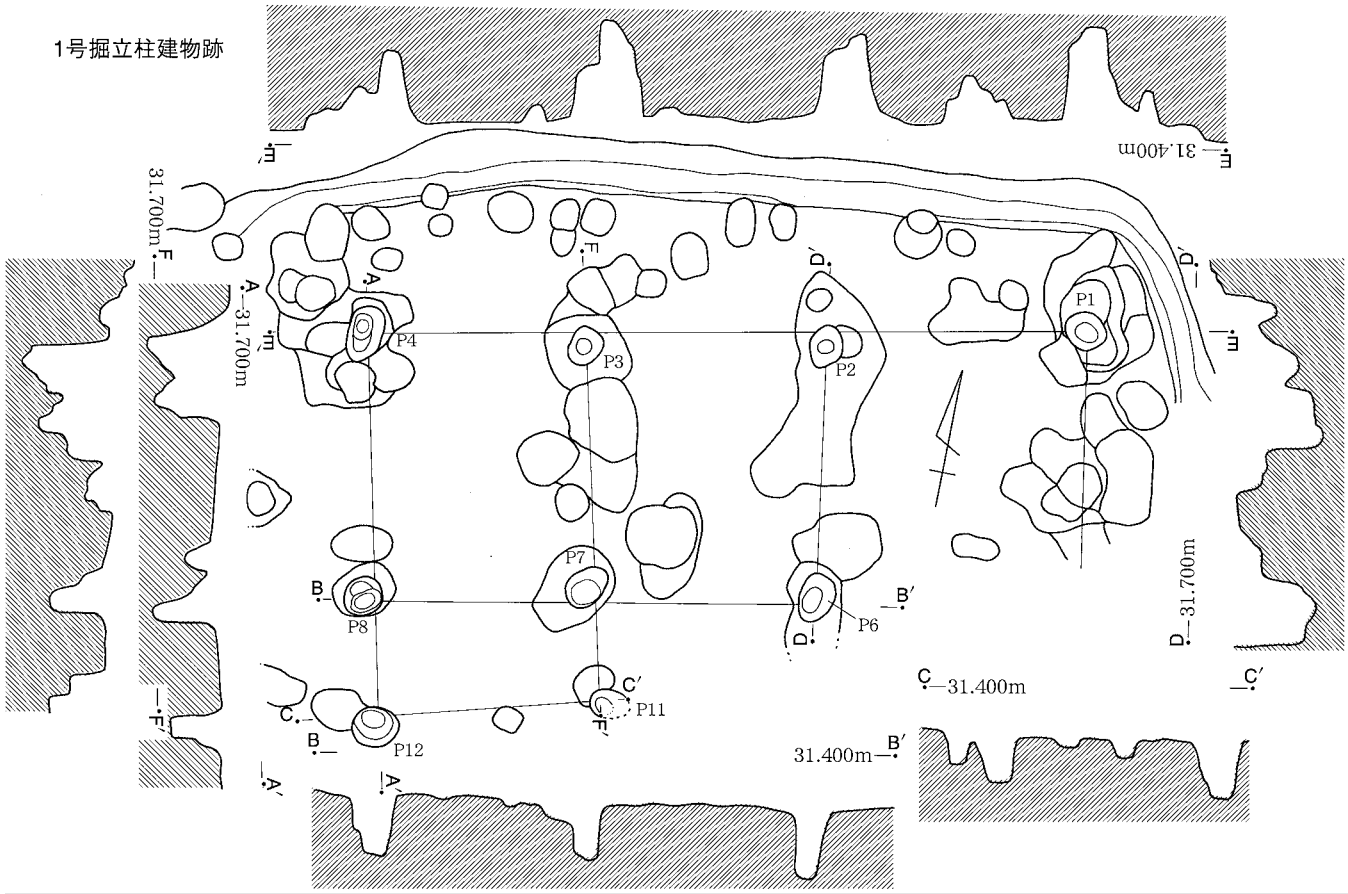
1　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）・黒色土粒を含む　しまり有
2　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒・ロームブロック（φ2cm大）を含む　しまり有
3　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・ロームブロック（φ1cm大）・白色粘土粒を含む　しまり有

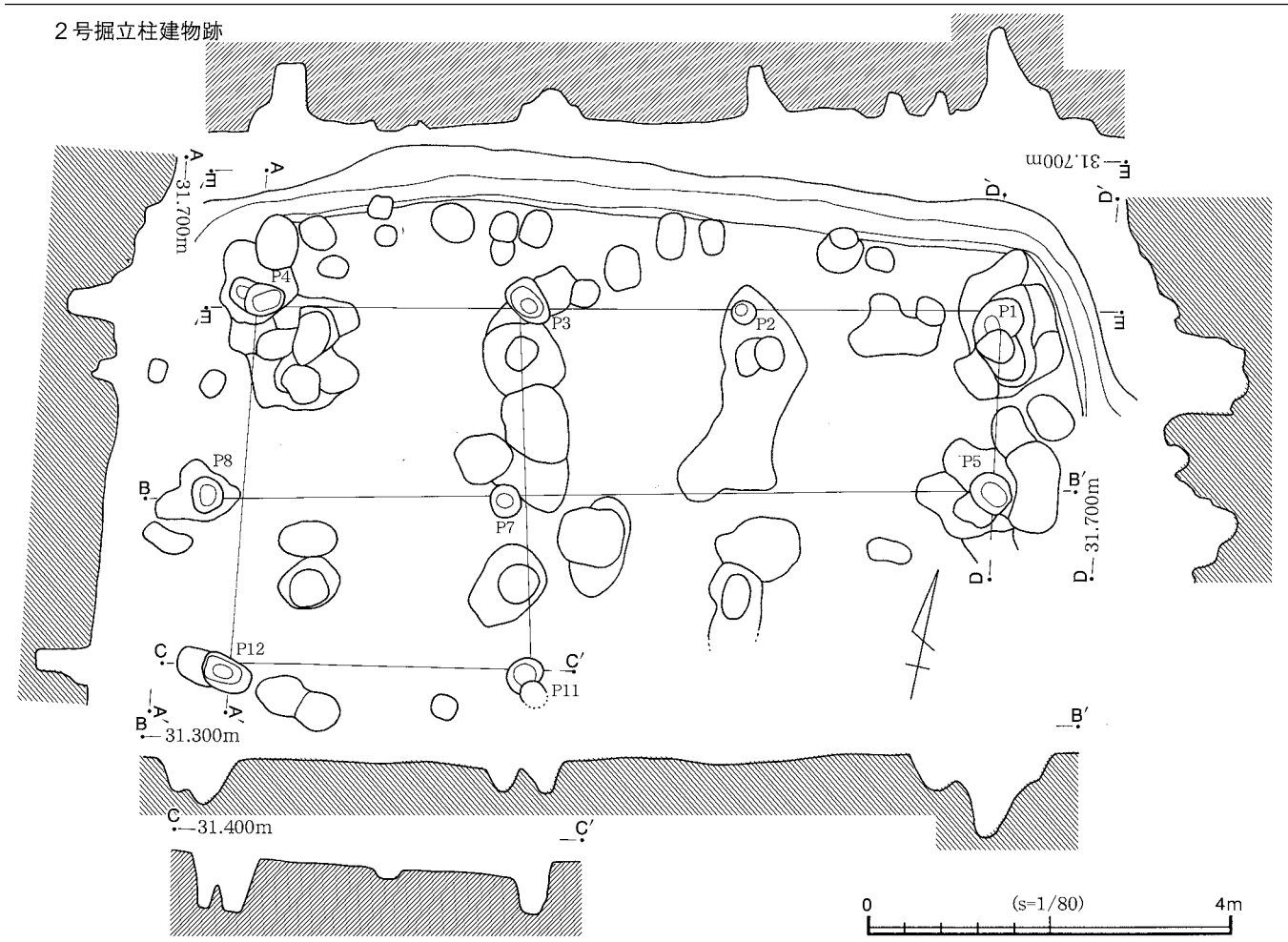
0　(s=1/60)　2m

第29図　8～12号火葬土壙・4号竪穴建物跡

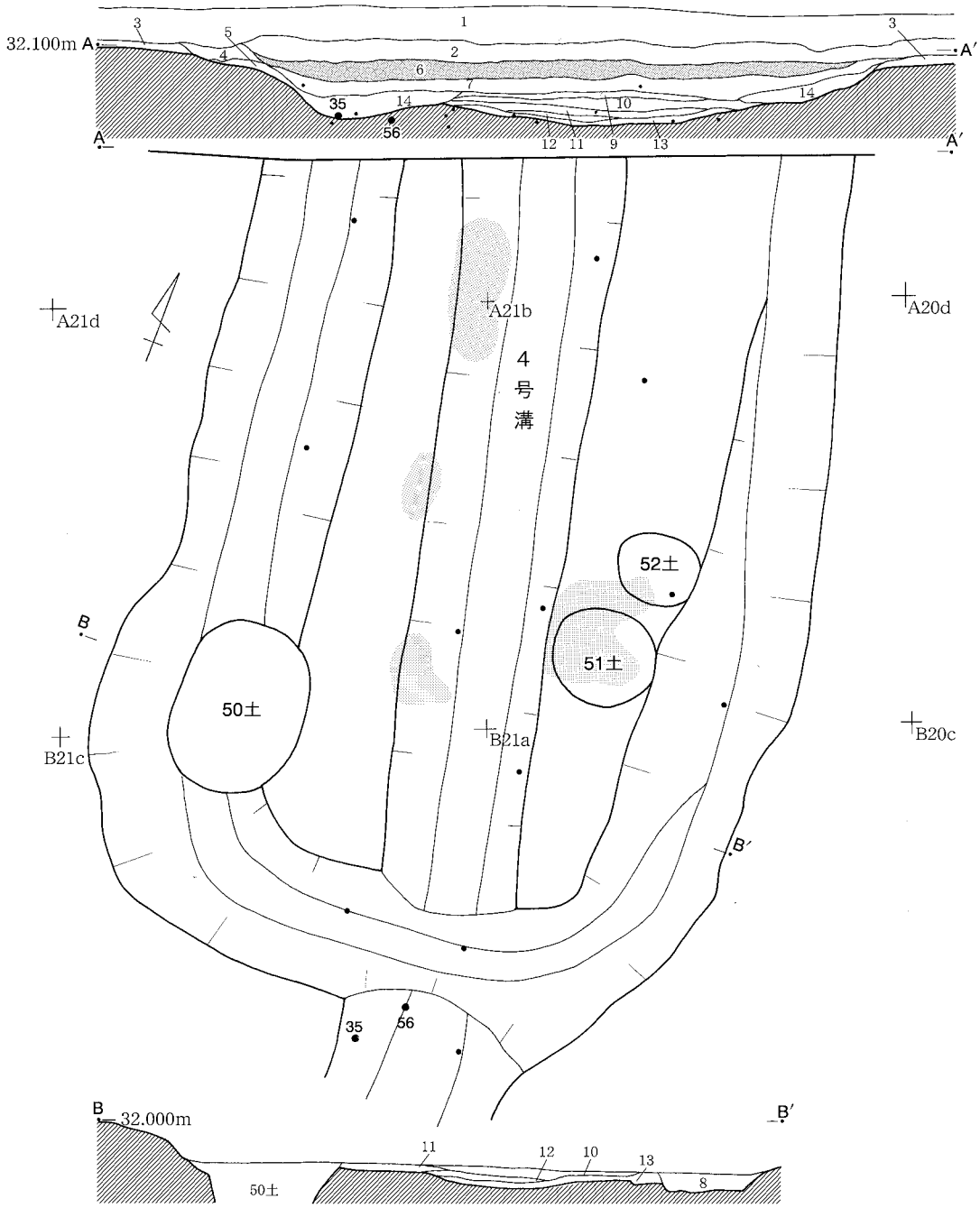


第30図 第1～3号竪穴建物跡・1号炭窯・41号土抗





第31図　1・2号掘立柱建物跡

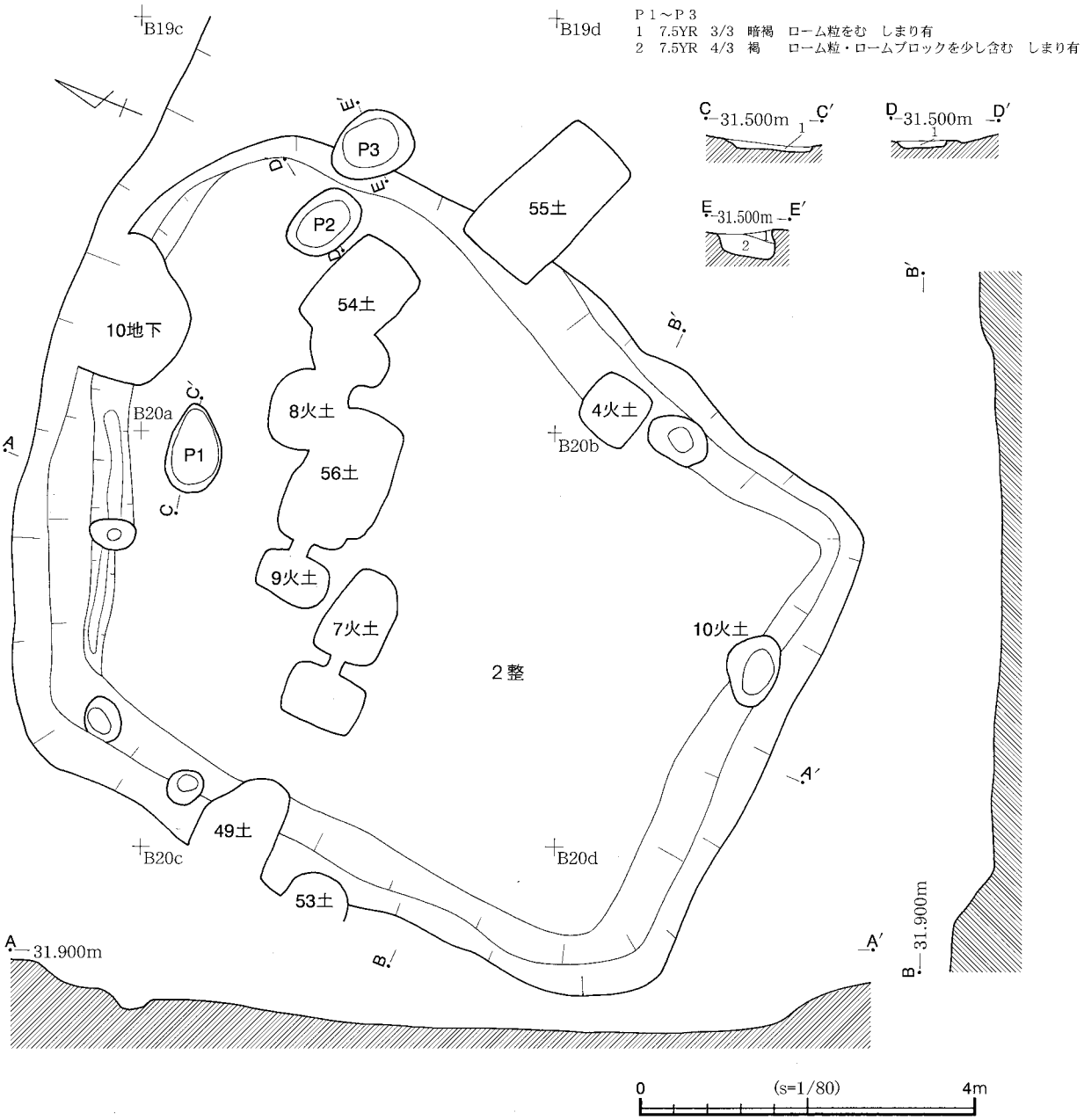


1　7.5YR　4/2　灰褐　表土（耕作土）焼土・炭化物を多く含む
2　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・炭化物を含む
3　7.5YR　4/4　褐　ソフトロームを多く含む
4　7.5YR　4/3　褐　ローム・ロームブロックを含む
5　7.5YR　4/4　褐　ロームブロックを多く含む
6　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・宝永のテフラを含む
7　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1　大）を含む
8　7.5YR　3/3　暗褐　ローム・ロームブロックをやや多く含む　14層の覆土と似る　4層とペアで道路遺構の側溝とみるべきか。しかし、レベルが違う点がある
9　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・焼土を多く含む　この層の焼土は5溝の覆土中に於て7面的な広がりを見せる
※1～9はしまり有り

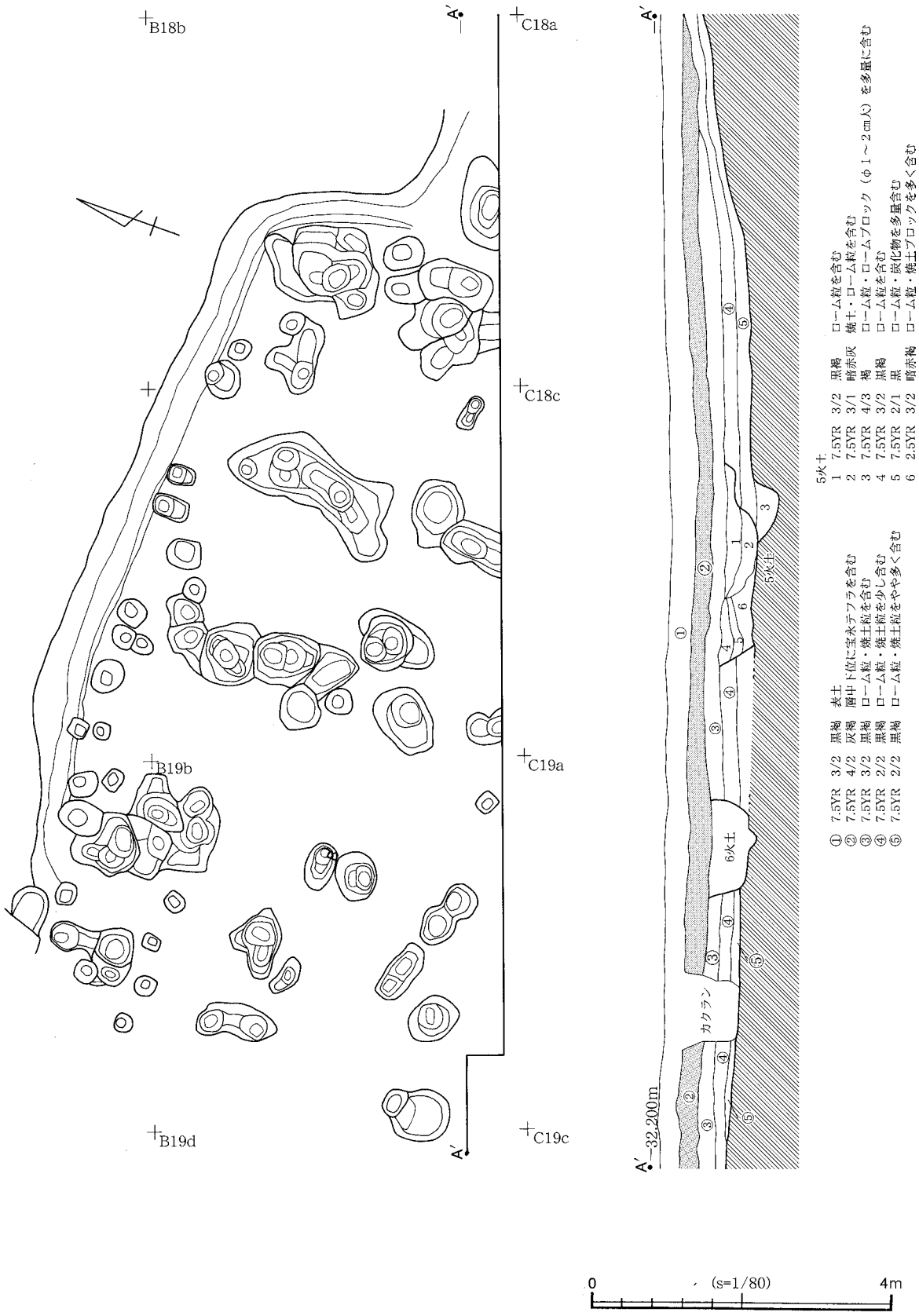
10　7.5YR　4/3　褐　ローム粒を微量含む　しまりやや強
11　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を微量含む　しまりやや強
12　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を微量含む　粘土質　しまりやや強
13　7.5YR　4/4　褐　ローム・ハードロームを多く含む　しまり強
※10～13の水平な土層は、人為的なものであろう
14　7.5YR　3/3　暗褐　ローム・ロームブロックをやや多く含む　しまり有

0　(s=1/80)　4m

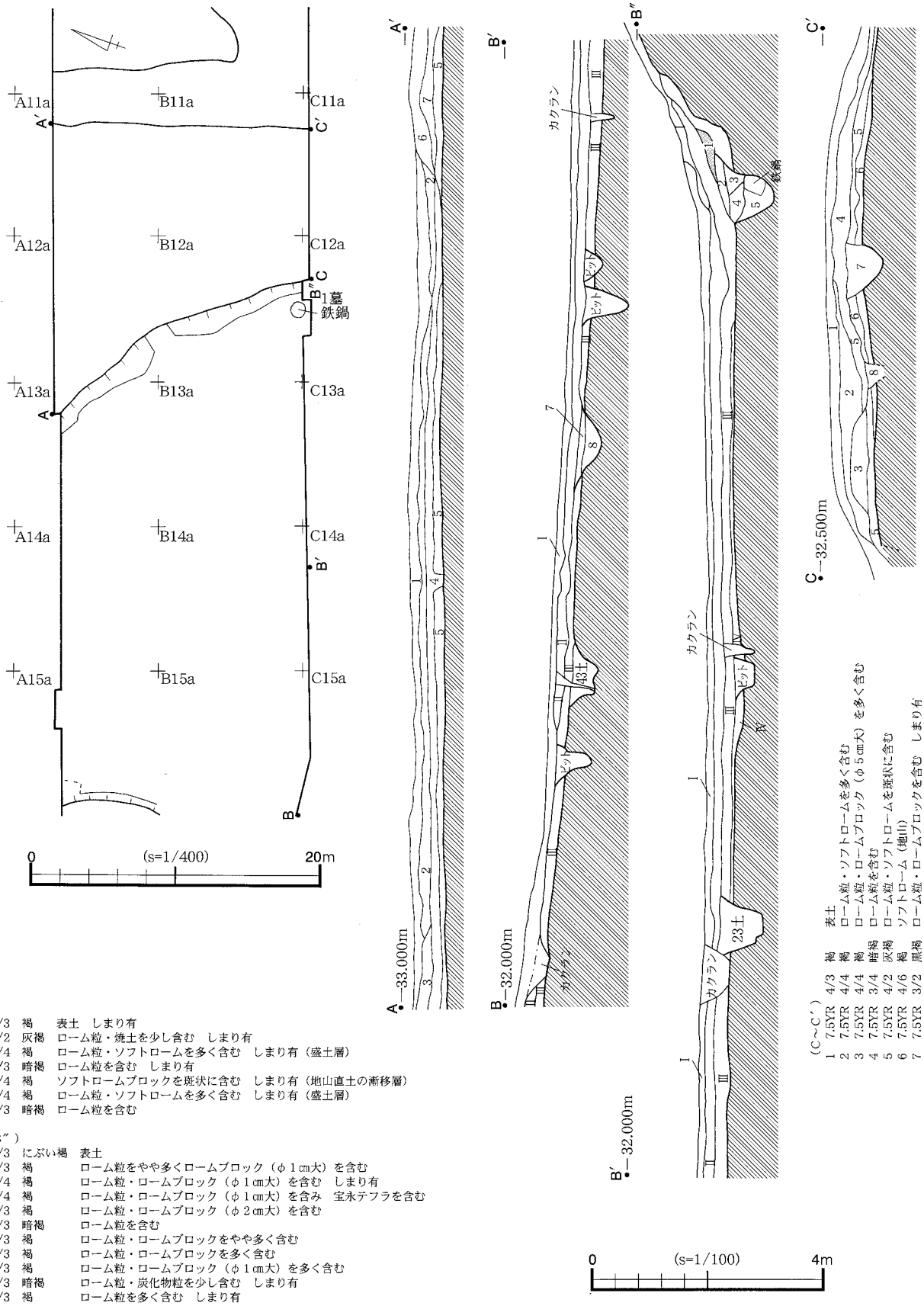
第32図　1号台地整形区画・4号溝状遺構



第33図　２号台地整形区画



第34図　３号台地整形区画



（A～A′）

1	7.5YR	4/3	褐	表土　しまり有
2	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・焼土を少し含む　しまり有
3	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ソフトロームを多く含む　しまり有（盛土層）
4	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒を含む　しまり有
5	7.5YR	4/4	褐	ソフトロームブロックを斑状に含む　しまり有（地山直土の漸移層）
6	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ソフトロームを多く含む　しまり有（盛土層）
7	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒を含む

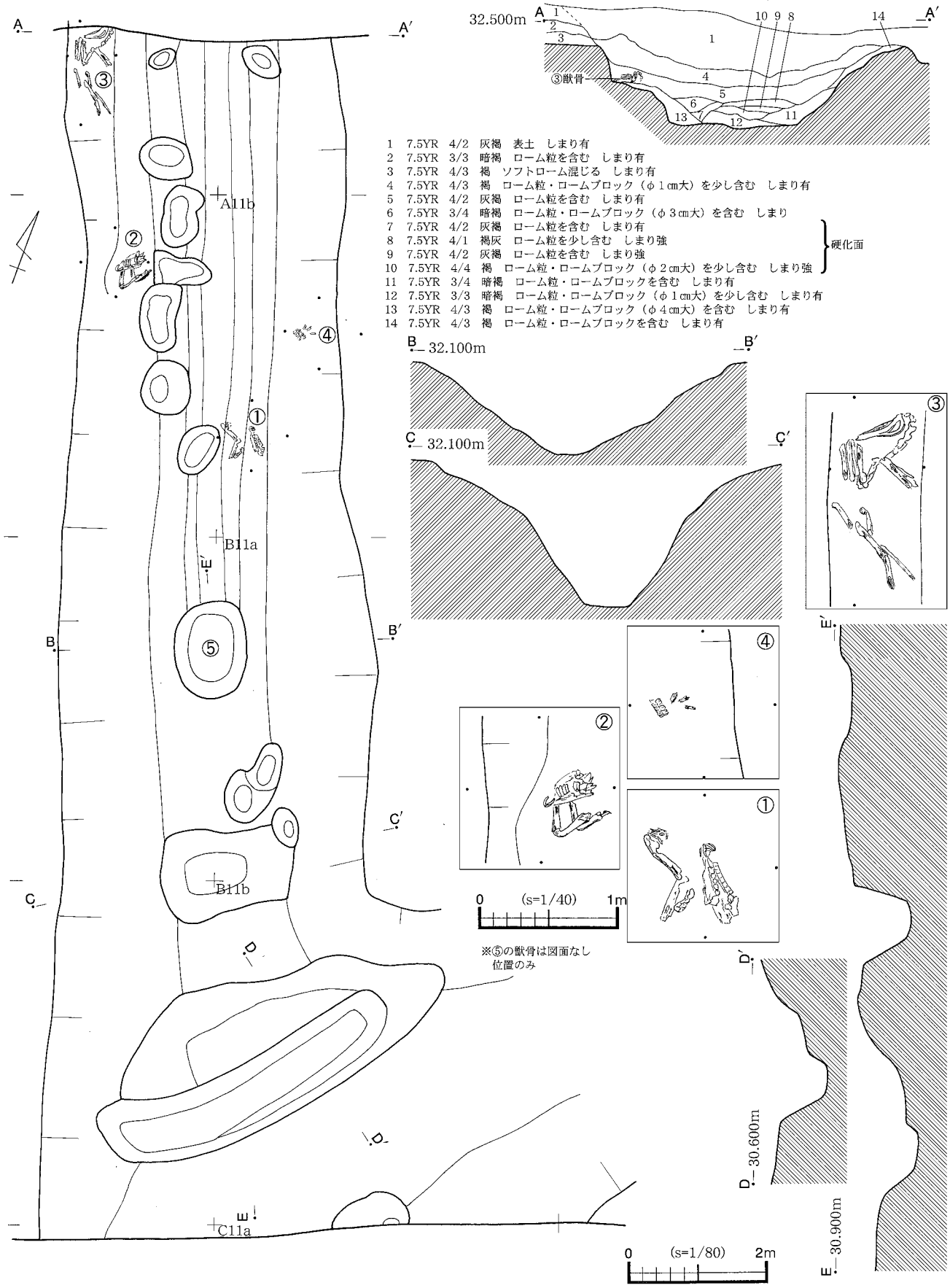
（B～B′～B″）

Ⅰ	7.5YR	5/3	にぶい褐	表土
Ⅱ	7.5YR	4/3	褐	ローム粒をやや多くロームブロック（φ1㎝大）を含む
Ⅲ	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
1	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含み　宝永テフラを含む
2	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を含む
3	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒を含む
4	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロックをやや多く含む
5	7.5YR	4/3	褐	ローム粒・ロームブロックを多く含む
6	7.5YR	3/3	褐	ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を多く含む
7	7.5YR	3/3	暗褐	ローム粒・炭化物粒を少し含む　しまり有
8	7.5YR	4/3	褐	ローム粒を多く含む　しまり有

（C～C′）

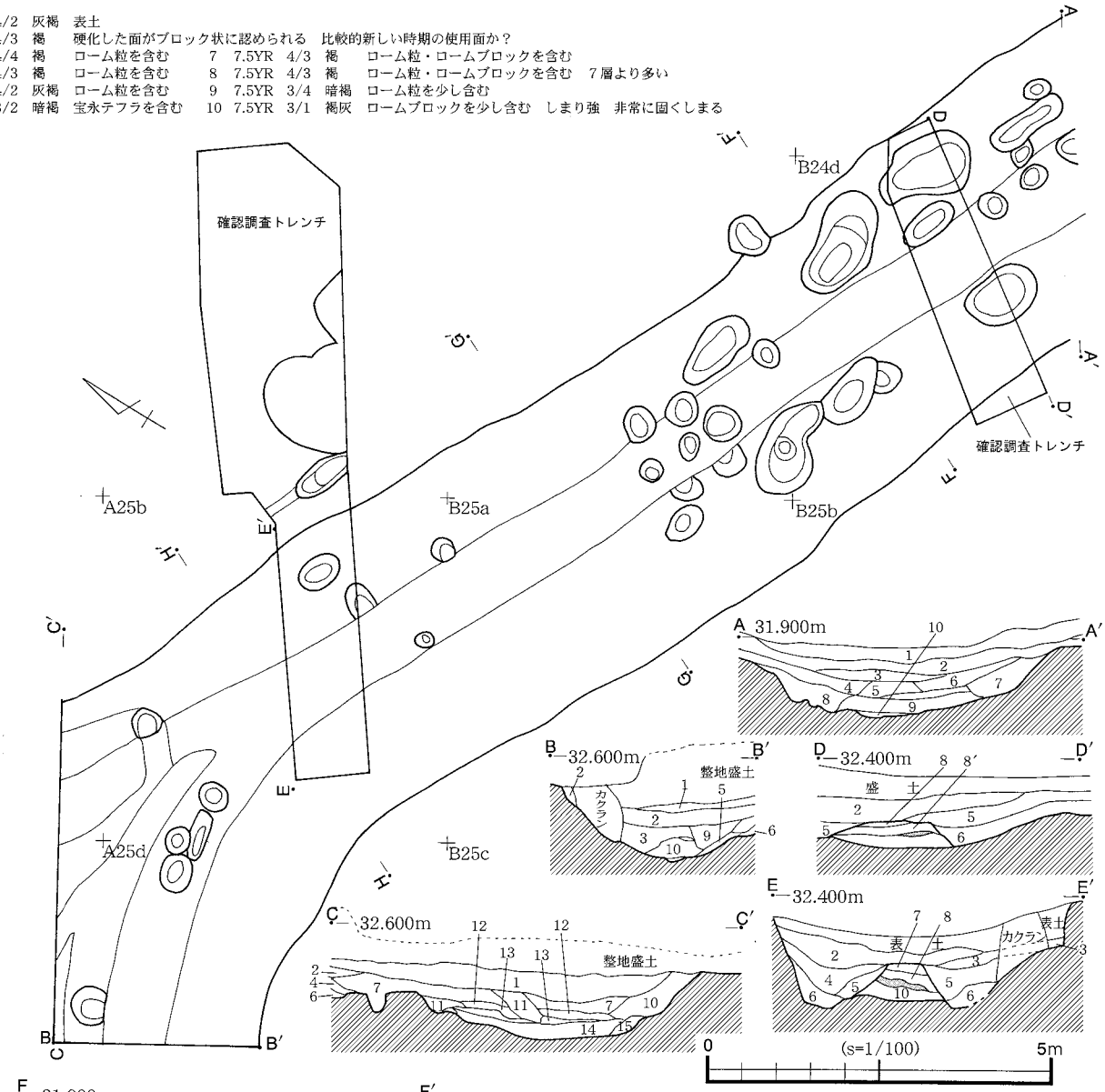
1	7.5YR	4/3	褐	表土
2	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ソフトロームを多く含む
3	7.5YR	4/4	褐	ローム粒・ロームブロック（φ5㎝大）を多く含む
4	7.5YR	3/4	暗褐	ローム粒を含む
5	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒・ソフトロームを斑状に含む
6	7.5YR	4/6	褐	ソフトローム（地山）
7	7.5YR	3/2	黒褐	ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
8	7.5YR	4/2	灰褐	ローム粒に含む　しまり有

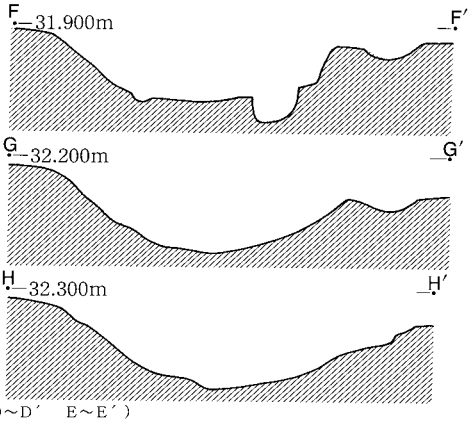
第35図　４号台地整形区画


32.500m
A
A′
③獣骨
1 7.5YR 4/2 灰褐 表土 しまり有
2 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を含む しまり有
3 7.5YR 4/3 褐 ソフトローム混じる しまり有
4 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を少し含む しまり有
5 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり有
6 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む しまり
7 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり有
8 7.5YR 4/1 褐灰 ローム粒を少し含む しまり強
9 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒を含む しまり強
10 7.5YR 4/4 褐 ローム粒・ロームブロック（φ2㎝大）を少し含む しまり強
11 7.5YR 3/4 暗褐 ローム粒・ロームブロックを含む しまり有
12 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を少し含む しまり有
13 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック（φ4㎝大）を含む しまり有
14 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロックを含む しまり有
硬化面
A11b
B11a
B11b
C11a
32.100m
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
30.600m
30.900m
0 (s=1/40) 1m
0 (s=1/80) 2m
※⑤の獣骨は図面なし
位置のみ

第36図　３号溝状遺構

（A～A′）
1　7.5YR　4/2　灰褐　表土
2　7.5YR　4/3　褐　　硬化した面がブロック状に認められる　比較的新しい時期の使用面か？
3　7.5YR　4/4　褐　　ローム粒を含む
4　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒を含む
5　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む
6　7.5YR　3/2　暗褐　宝永テフラを含む
7　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロックを含む
8　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロックを含む　7層より多い
9　7.5YR　3/4　暗褐　ローム粒を少し含む
10　7.5YR　3/1　褐灰　ロームブロックを少し含む　しまり強　非常に固くしまる

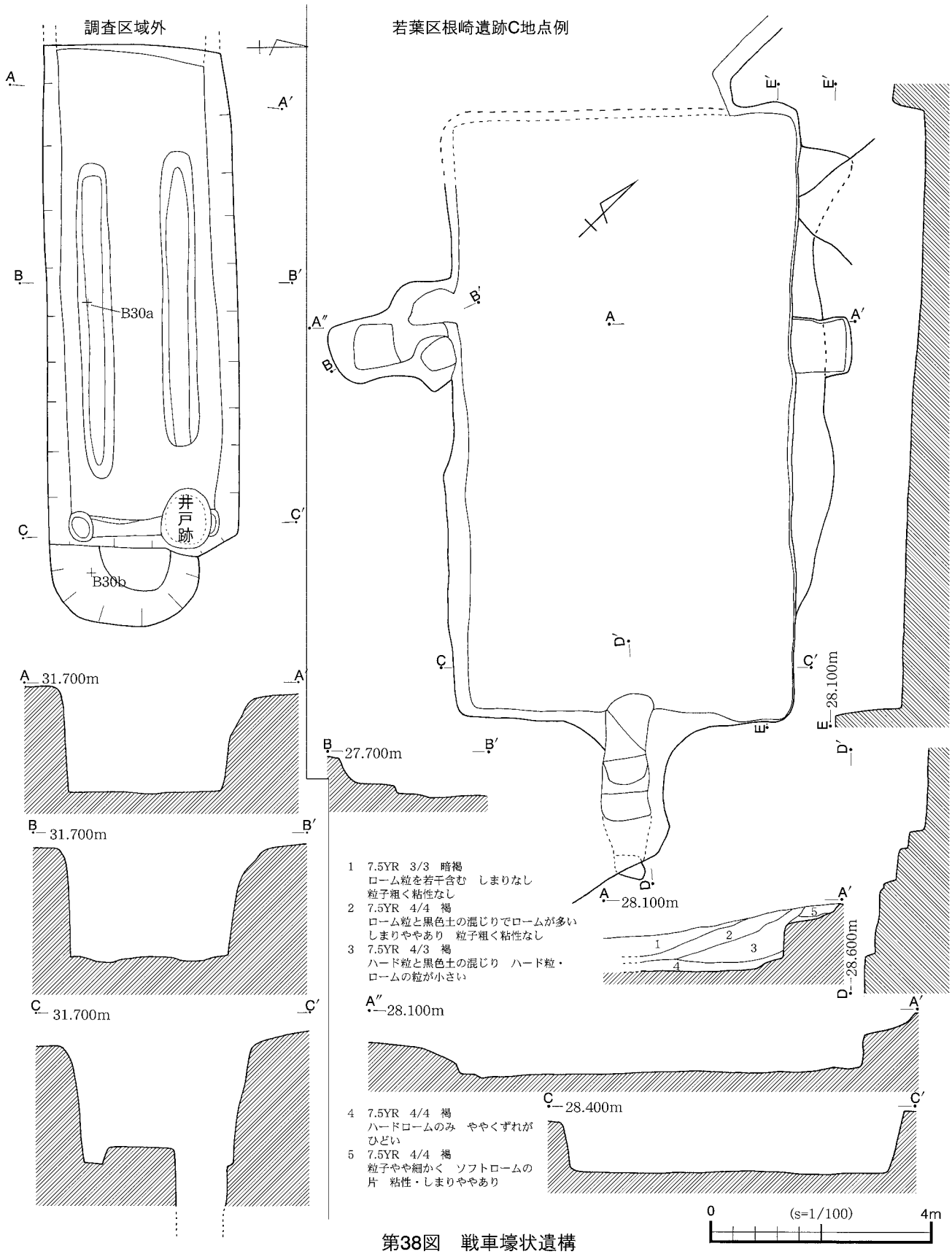




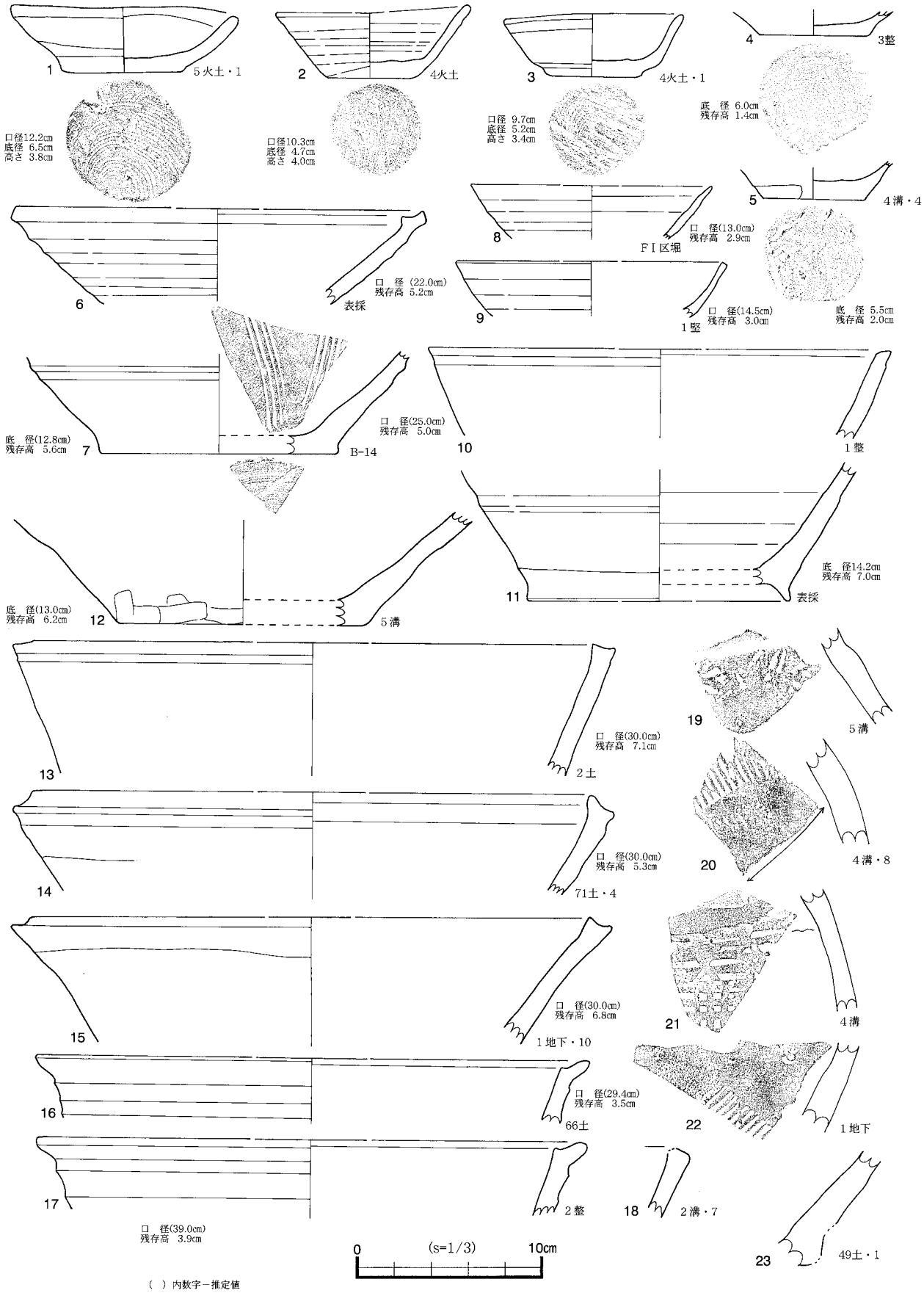
（B～B′　C～C′）
1　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒を含む　しまり有
2　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・炭化物粒を含む　しまり有
3　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・硬化ブロックを少し含む　しまり有
4　7.5YR　3/4　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ3㎝大）を含む　しまり有
5　7.5YR　4/2　灰褐　ソフトロームブロックを含む　しまり有
6　7.5YR　4/3　灰褐　ローム粒・ロームブロック・ソフトロームブロックを含む　しまり有
7　7.5YR　4/4　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）をやや多く含む　しまり有
8　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒をやや多く含む　しまり有
9　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒を少し含む　しまり有
10　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
11　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロック（φ1㎝大）を含む　しまり有
12　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒を少し含む　しまり有
13　7.5YR　4/3　褐　　ソフトロームブロックを少し含む　しまり有・やや硬化
14　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒を多く含む　しまり有

（D～D′　E～E′）
1　7.5YR　4/2　灰褐　表土　しまり有
2　7.5YR　4/4　褐　　ローム粒を含む　しまり有
3　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒を少し含む　しまり有
4　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロックを多く含む　しまり有
5　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒を含む　しまり有
6　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ロームブロックを含む　しまり有
7　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む　しまり強
8　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒・ソフトロームを含む　しまり強・硬化面
9　7.5YR　3/3　暗褐　宝永テフラを含む　しまり強
10　7.5YR　3/4　暗褐　ローム粒を少し含む　しまり強

第37図　５号溝状遺構

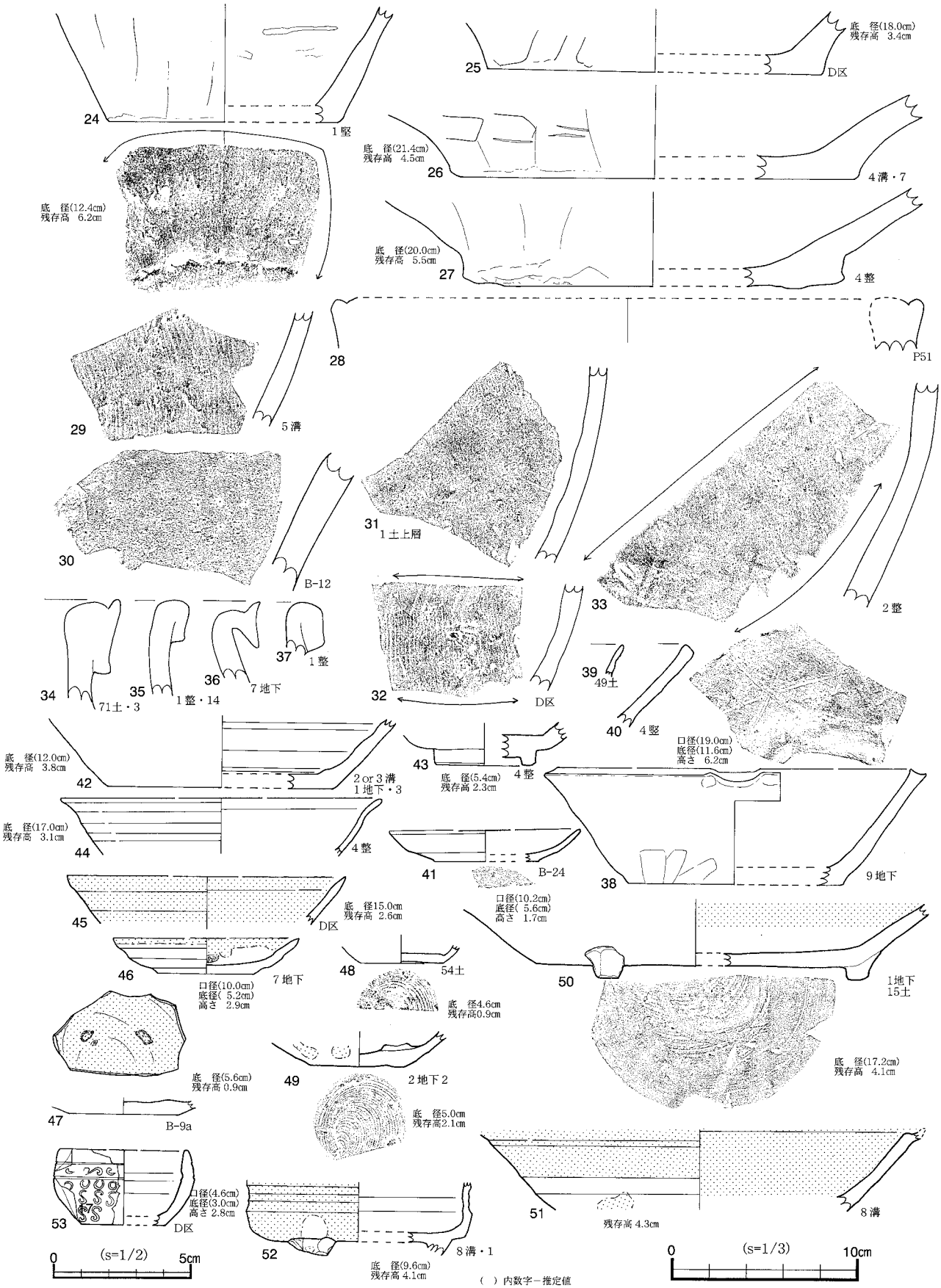

調査区域外
若葉区根崎遺跡C地点例
B30a
B30b
井戸跡
A 31.700m
B 31.700m
C 31.700m
B 27.700m
A 28.100m
A″ 28.100m
C 28.400m
E 28.100m
D 28.600m
1 7.5YR 3/3 暗褐
ローム粒を若干含む しまりなし
粒子粗く粘性なし
2 7.5YR 4/4 褐
ローム粒と黒色土の混じりでロームが多い
しまりややあり 粒子粗く粘性なし
3 7.5YR 4/3 褐
ハード粒と黒色土の混じり ハード粒・
ロームの粒が小さい
4 7.5YR 4/4 褐
ハードロームのみ ややくずれが
ひどい
5 7.5YR 4/4 褐
粒子やや細かく ソフトロームの
片 粘性・しまりややあり
0 (s=1/100) 4m

第38図 戦車壕状遺構

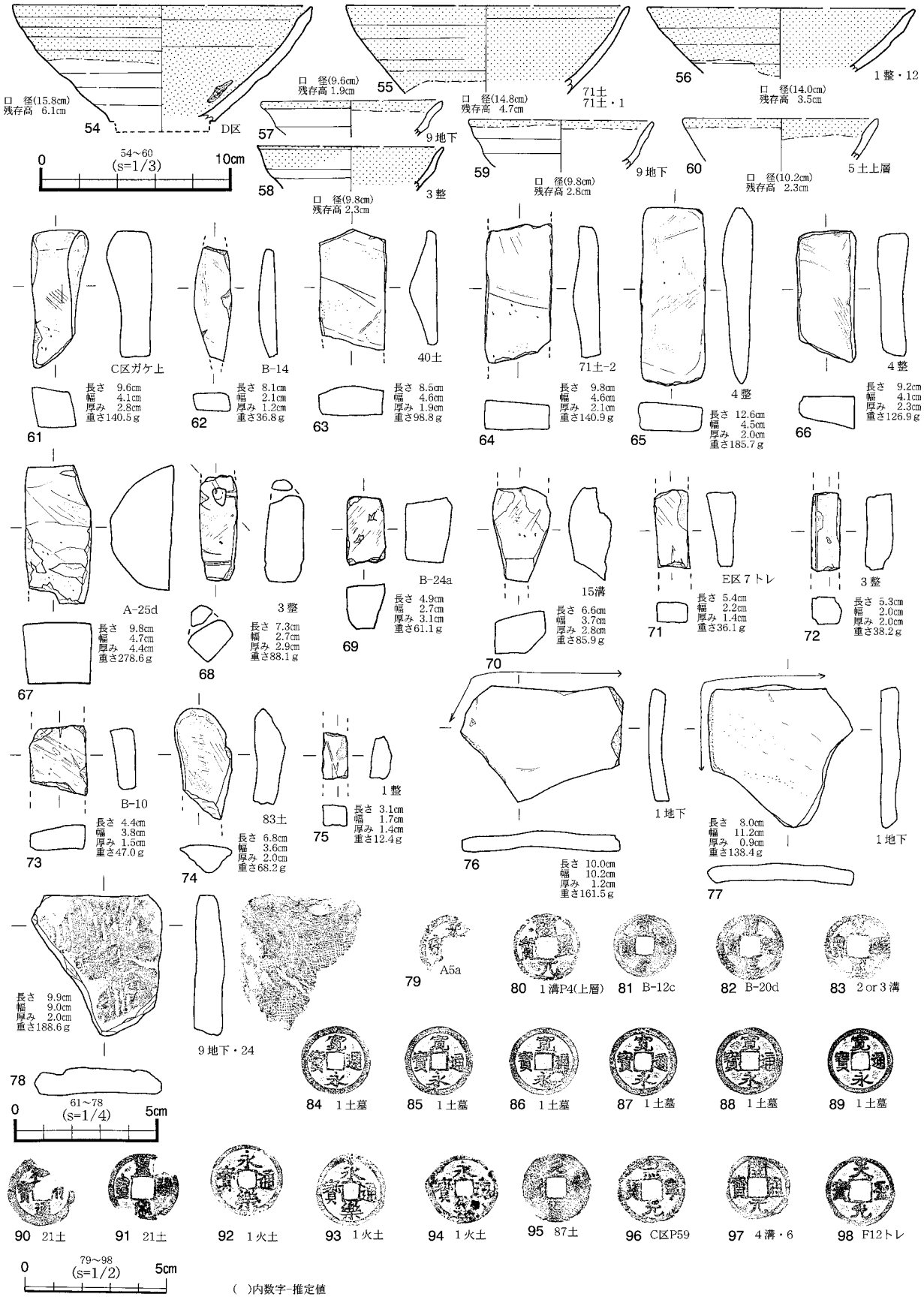


( ) 内数字－推定値

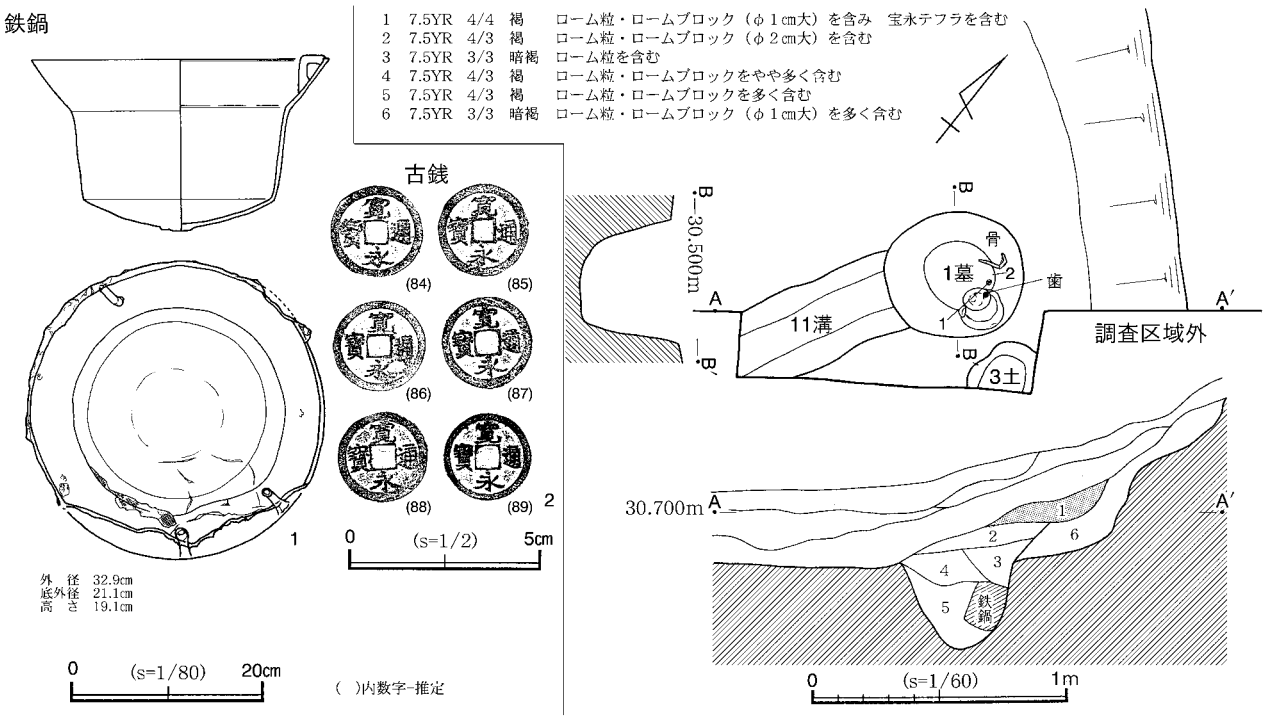
第39図　堀之内城跡出土遺物(1)



第40図　堀之内城跡出土遺物(2)



第41図　堀之内城跡出土遺物(3)



第42図　１号土壙墓及び出土遺物

k　戦車壕状遺構（第38図）

この遺構は，調査時に他の遺構に比べしまりが悪く，時期的に新しい埋没であると予想された。周辺住人の方々への聞き込み調査により，戦時中米軍上陸対策の一環として軍の指導により作られた戦車用の塹壕であることが判明した。長辺９m，短片3.4m，深さ1.9m を測り，床面に２条の轍状の２条の凹みが平行して検出された。これは，キャタピラ，若しくは自動車などの轍の痕跡と考えられる。遺構の北壁は崩落しており形状が不明確だったが，こちら側が谷の奥側で，南側が遺構が終わっていることから谷が開口する南側に向かって車両が配置される構造となっているようである。井戸跡は，明確に井戸とは言い難いもののとても深く，底の確認はできていない。時期的に明確な根拠はないが，戦車壕状遺構よりも古い可能性が高い。

同じ図面の右側は、若葉区の根崎遺跡Ｃ地点で検出された戦車壕の可能性が指摘された戦時中の遺構である。図面を作図していたものの紙幅の関係上未報告であったためこの場を借りて，掲載した。根崎遺跡では，この遺構の他に３箇所同様の遺構が確認されている。近年，戦時中の軍関係遺構の検出が全国でも盛んに報告されるようになってきた。千葉市では，昭和63年に「旧鉄道連隊材料廠煉瓦建築」が県指定の文化財として認定されているのを始め，「千葉聯隊司令部」「陸軍病院」（国立病院）「鉄道第１聯隊・材料廠・作業場（現千葉公園）」「陸軍兵器補給廠」・「陸軍歩兵学校」「気球聯隊」「陸軍戦車学校」「陸軍防空学校（陸軍高射学校）」「陸軍下志津飛行学校」他などの軍関連施設が存在し，記録に残っていない施設も数多くある。近年の発掘調査でも，旧陸軍演習場跡の若葉区愛生遺跡では，演習用と実戦用の小銃弾や砲弾片，通信ケーブルや塹壕跡が検出されている。その他にも海老遺跡，南屋敷遺跡，餅ヶ崎遺跡，園生遺跡，土気東遺跡群・黒ハギ遺跡などで，防空壕，蛸壺塹壕，戦車用の敷設道路，射撃訓練場跡などの遺構が検出されており，戦時中，戦前の地域史の一端を補う資料が増加しており，今後そのような遺構の検討も重要な課題といえるだろう。

第12表　堀之内城跡出土遺物一覧（カワラケ）

図番号	遺　構　名	地区名	型　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
1	5号火葬墓	B-18d		完形品	C-74・1	底部静止糸切り	○	○
2	4号火葬墓	B-20b		口縁部一部欠損	C-70　C-70・3	右回転整形・底部静止糸切り	○	○
3	4号火葬墓	B-20b		口縁部1/2欠損	C-70・1	見込みナデ・底部右回転糸切	○	○
4	3号台地整形区画			底部	X-3	見込み弱いナデ・右回転糸切	○	○
5	4号溝状遺構			底部	D-4・4	底部右回転糸切り	○	○
8		FⅠ区		口縁部	FⅠ区堀		○	
9	1号竪穴建物跡	B-27b		口縁部	FⅠ区C-04		○	
	1号竪穴建物跡	B-27b		口縁部	C-04			
	1号土坑	B-12c		胴部下半～底部	C-02			
	2号台地整形区画			底部	X-2			
	4号火葬墓	B-20b			C-70・2			
	66号土坑	B-17a		口縁部	C-96			
	8号土坑	B-13a		胴部	C-011			
		A-6d		底部	A-6d			
		B-13		口縁部	B-13グリッド			
		A-15d		底部	A-15d・2			
		D区		口縁部・胴部	D区			

第13表　堀之内城跡出土遺物一覧（渥美）

図番号	遺　構　名	地区名	時　期	器形・部位	注　　記	備　　考	実測	拓本
19	5号溝状遺構			甕・胴部	D-005		○	○
20	4号溝状遺構			甕・胴部	D-4・8	叩き痕あり　外面灰釉	○	○
21	4号溝状遺構			甕・胴部	D-4	叩き痕あり　内面横ナデ	○	○
22	1号地下式坑	A-13b		甕・胴部	C-16・11	叩き痕あり　内面灰釉	○	○
23	49号土坑	B-20a		甕・底部	C-69・1		○	
	2号溝状遺構			甕・胴部	D-2・2	外面鉛釉？		
	4号溝状遺構			甕・胴部	D-4・10			
	5号溝状遺構			甕・胴部	D-005	叩き痕あり	○	○
	5号溝状遺構			甕・胴部	D-4	破片を砥石に転用		
	8号地下式坑	B-16a		甕・胴部	C-62			

第14表　堀之内城跡出土遺物一覧（常滑・甕）

図番号	遺　構　名	地区名	型　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
24	1号竪穴建物跡	B-27b		底部	C-04・1	破片を砥石に転用	○	○
25		D区		底部	D区		○	
26	4号溝状遺構			底部	D-4・7	内面に灰釉	○	
27	4号台地整形区画			底部	X-4	内面に灰釉	○	
28	P-51	A-14d	11～12形式	口縁部	P-51		○	
29	5号溝状遺構			胴部	D-5	外面にハケメ調整	○	○
30		B-12		胴部	B-12		○	○
31	1号土坑	B-12c		胴部	C区C-02上層		○	○
32		D区		胴部	D区	破片を砥石に転用	○	○
33	1号台地整形区画			胴部	X-2	破片を砥石に転用	○	○
34	71号土坑	B-16b	9型式	口縁部	C-103・3		○	
36	7号地下式坑	B-15c	6b型式	口縁部	C-60		○	
12	5号溝状遺構			底部	D-005		○	
	2号溝状遺構			胴部	D-2・1			
	2号溝状遺構			胴部	D-2・3			
	4号溝状遺構			胴部	D-4・1			
	4号溝状遺構			胴部	D-4・2			
	4号溝状遺構			胴部	D-4			
	4号溝状遺構			底部	D-4			
	5号溝状遺構			胴部	D-5			
	5号溝状遺構			底部	D-5			
	9号溝状遺構			口縁部	D-9	破損		
	10号溝状遺構			胴部	D-10			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・4			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・7			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・8			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・9			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・11			
	1号台地整形区画			胴部	X-1・13			
	2号台地整形区画			胴部	X-2			
	4号台地整形区画			胴部	X-4			
	2号掘立柱建物跡	B-18d		胴部	B-002			
	2号掘立柱建物跡	B-18d		胴部	B-002			
		B-14c		胴部	P-59			
		D区		胴部	D区			
		D区		口縁部	D区	細片		
		E区		胴部	E区1トレ			
		B-25d		胴部	B-25d			
	1号土坑	B-12c		胴部	C-02			
	4号土坑	B-12d		胴部	C-07・1			
76	1号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・20	破片を砥石に転用	○	
77	1号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・22	破片を砥石に転用	○	
	1号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・1			

（常滑・甕）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・２	４・13と接合		
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・４	２・13と接合		
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・８			
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・１３	２・４と接合		
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・１４			
	１号地下式坑	A-13b		胴部	C-16・１５			
	16号土坑	A-13a		胴部	C-20	接合		
	２号地下式坑	A-14a		頸部～口縁下半	C-27			
	７号地下式坑	B-15c		胴部	C-60			
	８号地下式坑	B-16a		胴部	C-62			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・８			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・１０			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・１１			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・１２			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・２０			
	９号地下式坑	B-19a			C-64・２１			
	９号地下式坑	B-19a			C-64竪坑部覆土中位			
	48号土坑	B-20c		胴部	C-68・１			
	66号土坑	B-17a		胴部	C96			
	67号土坑	A-16d		胴部	C-97			
	86号土坑	B-28d		胴部	C-120			

第15表　堀之内城跡出土遺物一覧（常滑・壺）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
					表採			
35	１号台地整形区画		９形式	口縁部	X-1・１４		○	
37	１号台地整形区画		９形式	口縁部	X-1		○	

第16表　堀之内城跡出土遺物一覧（常滑・鉢）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
11			５～６形式	底部	表採	高台付	○	
13	２号土坑	A-13b	９型式	口縁部	C-03	口唇部付近に灰釉	○	
14	７１号土坑	B-16b	９型式	口縁部	C-103		○	
15	１号地下式坑	A-13b	８型式	口縁部	C-16・１０		○	
16	６６号土坑	B-17a		口縁部	C-96		○	
17	２号台地整形区画			口縁部	X-2		○	
18	２号溝状遺構		９型式	口縁部	D-2・７		○	
38	９号地下式坑	B-19a	９型式	口縁部～底部	C-64		○	○
40	４号竪穴建物跡	B-27c	７型式	鉢？・口縁部	C-114	被熱発泡	○	
	１号台地整形区画		6a型式以前		X-1・３	13世紀半ば以前		
	２号溝状遺構			底部	D-2・４			
	２号溝状遺構		５～６形式	底部	D-2・６	高台付		
	８号地下式坑	B-15c	10形式	口縁部	C-62		○	
		Ｃ区		胴部	Ｃ区			
		Ｄ区	5～6形式？	胴部	Ｄ区			

第17表　堀之内城跡出土遺物一覧（在地産内耳土器）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
10	１号台地整形区画				X-1・２		○	

第18表　堀之内城跡出土遺物一覧（瓦質土器）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
52				口縁部	Ｄ区	小型壺	○	

第19表　堀之内城跡出土遺物一覧（中世輸入陶磁器・青磁）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
43	４号台地整形区画			Ⅰ類	X-4	碗	○	
44	４号台地整形区画			Ｄ類	X-4	碗	○	

第20表　堀之内城跡出土遺物一覧（国産陶器類）

図番号	遺　構　名	地区名	時期・型式	器形・部位	注　　記	備　　考	実測	拓本
6			後Ⅳ古	志戸呂擂鉢	表採？		○	
7		B-14	後Ⅳ	瀬戸擂鉢	B-14グリッド		○	○
39	49号土坑	B-20a		緑釉小皿	C-69		○	
41		B-24a		志戸呂小皿	B-24a		○	○
45		Ｄ区	後Ⅲ	平碗・口縁部	Ｄ区		○	
46	７号地下式坑	B-15c	後Ⅳ古	緑釉小皿	C-60	約1/2残存	○	
47		B-9a	後Ⅰ～Ⅱ	緑釉小皿・底部	B-9a		○	
49	２号地下式坑	A-14a	後Ⅲ～Ⅳ	緑釉小皿・底部	C-27・２	断面に何か付着	○	○
50	１号地下式坑	A-13b	後Ⅲ	盤類・底部	C-16・１９		○	○
51	８号溝状遺構		中Ⅳ	折縁深皿	D-8		○	
52	８号溝状遺構		18世紀前半	瀬戸香炉	D-8・１		○	
54		Ｄ区	後Ⅲ	平碗・口縁部	Ｄ区		○	
55	71号土坑	B-16b	後Ⅰ～Ⅱ	平碗・口縁部	C-103・C-103・１		○	
56	４号溝状遺構		後Ⅲ	平碗・口縁部	X-1・１２		○	
58	３号台地整形区画		後Ⅰ～Ⅱ	緑釉小皿・口縁部	X-3		○	

（国産陶器類）

図番号	遺　構　名	地区名	時期・型式	器形・部位	注　　記	備　　考	実測	拓本
60	５号土坑	B-13b	後Ⅳ古	縁釉小皿・口縁部	C-08上層		○	
57　59	９号地下式坑	B-19a	後Ⅳ古	縁釉小皿・口縁部	C-064		○	
	１号台地整形区画		後Ⅲ～Ⅳ	縁釉小皿・底部	X-1・６			
	１号台地整形区画		中Ⅲ・Ⅳ	折縁深皿	X-1・１０			
	１号土坑	B-12c	後Ⅲ～Ⅳ	縁釉小皿・底部	C-02上層			
	25号土坑	A-14d	後Ⅲ～Ⅳ	縁釉小皿・底部	C-36			
	３号台地整形区画		後	盤類・底部	X-3			
	48号土坑	B-20c	前	瓶子	C-68			
48	６号地下式坑	A-15a	前Ⅲ～中Ⅱ	入子・底部	C-54		○	○
	８号土坑	B-12a	後Ⅰ～Ⅱ	浅碗	C-011			
		B-1	前	瓶子	B-1グリッド			

第21表　堀之内城跡出土遺物一覧（瀬戸茶壺）

図番号	遺　構　名	地区名	型　　式	部　　位	注　　記	備　　考	実測	拓本
42	溝・１号地下式坑	A-13b	後期	底部	C-01・C-16・３	これらは同一固体	○	
	15号溝状遺構		後期	胴部	D-15			
	１号地下式坑	A-13b	後期	胴部	C-16・１２・９			
	溝		後期	胴部	C-01			
	６号土坑	B-12c		胴部	C-09			
	溝・１号土坑・４号台地整形区画	B-12c		胴部	C-01・C-02・X-4			

第22表　堀之内城跡出土遺物一覧（石材）

図番号	遺　構　名	地区名	状　　態	備　　考	注記・ラベル		実測	拓本
	１号土坑	B-12c			C-002			
	１号地下式坑	A-13b	煤		C-016・５			
	１号地下式坑	A-13b			C-016・６			
	１号地下式坑	A-13b	煤		C-016・７			
	１号地下式坑	A-13b	煤		C-016・１８			
	１号地下式坑	A-13b	焼・煤		C-016・２１			
	１号地下式坑	A-13b	煤		C-016・２３			
	１号地下式坑	A-13b	煤		C-016			
	２号地下式坑	A-14a	煤		C-027・３			
	３号地下式坑	A-14d			C-028・１			
	４号地下式坑	A-13d	煤		C-029・１			
	４号地下式坑	A-13d	煤		C-029一括			
	38号土坑	B-14c	煤		C-051一括			
	６号地下式坑	A-15a			C-054			
	７号地下式坑	B-15c			C-060一括			
	７号地下式坑	B-15c	煤		C-060			
	９号地下式坑	B-19a	焼・煤		C-064・１			
	９号地下式坑	B-19a	焼・煤		C-064・２			
	９号地下式坑	B-19a		石臼片？	C-064・３			
	９号地下式坑	B-19a	煤		C-064・５			
	９号地下式坑	B-19a	焼・煤		C-064・６			
	９号地下式坑	B-19a	煤		C-064・７			
	９号地下式坑	B-19a	煤		C-064・１４			
	９号地下式坑	B-19a		使用痕あり	C-064・１９			
	９号地下式坑	B-19a	焼・煤	煤特に多く付着	C-064・２２			
	９号地下式坑	B-19a	焼・煤		C-064・２３			
	９号地下式坑	B-19a			C-064一括			
	９号地下式坑	B-19a	焼		C-064			
	51号土坑	A-20d		板碑片？	C-072			
	71号土坑	B-16b	煤		C-103			
	79号土坑	A-28b	焼・煤		C-112・１			
	79号土坑	A-28b	煤		C-112・２			
	91号土坑	A-24d			C-125			
	４号溝状遺構				D-4・５			
	５号溝状遺構				D-005			
	７号溝状遺構		被熱発泡		D-007一括			
	16号溝状遺構			板碑片？	D-016一括			
	２号台地整形区画				X-002一括			
	２号台地整形区画	B-20a	煤		X-002一括			
	３号台地整形区画	B-18d			X-003一括			
	４号台地整形区画		煤		X-4			
		B-14d	焼・煤		P-49内			
		A-15d			A-15d			
		A-25d			A-25d			
	１号掘立柱建物跡	B-18d	焼・煤		B-001			
	２・３号掘立柱建物跡	B-18d			B-002･003			
		B-10	煤		B-10グリッド一括			
		B-20c			B-20c一括			
		Ｃ区		板碑片？	Ｃ区崖上一括			
		Ｃ区		磨り石？	Ｃ区			
		Ｄ区	被熱発泡		Ｄ区⑭トレンチ			

（石材）

図番号	遺構名	地区名	状態	注記・ラベル	備考
		D区	焼・煤	D区	
		E区		E区①トレンチ一括	
		E区		E区９トレ	
		ＦⅠ区		ＦⅠ区堀	

第23表　堀之内城跡出土遺物一覧（砥石他）

図番号	遺構名	地区名	用途	注記・ラベル	備考	実測
61		C区	砥石	C区崖上		○
62		B-14	砥石	B-14グリッド	煤	○
63	40号土坑	A-15a	砥石	C-53		○
64	71号土坑	B-16b	砥石	C-103・２		○
65	４号台地整形区画		砥石	X-4		○
66	４号台地整形区画		砥石	X-4		○
67		A-25d	砥石	A-25d		○
68	３号台地整形区画		砥石	X-3	貫通孔あり	○
69		B-24a	砥石	B-24a		○
70	15号溝状遺構		砥石	D-015		○
71		E区	砥石	E区７トレンチ一括		○
72	３号台地整形区画		砥石	X-3		○
73		B-10	砥石	B-10		○
74	83号土坑	B-27a	砥石	C-117		○
75	１号台地整形区画		砥石	X-1		○
	１号台地整形区画		砥石	X-1・５		
	４号溝状遺構		軽石	D-4	被熱発泡著しい	
		D区	軽石	D区	被熱発泡著しい	
	１号土坑	B-12c	被熱粘土塊	C-02	スサ入り	
	１号竪穴建物跡	ＦⅠ区	被熱粘土塊	C-004		
	３号台地整形区画		羽口？	X-3	被熱粘土の表面にガラス質の固体が付着。	
	７・８号地下式坑	B-15c	？	C-60・C-62	被熱して脆くなった砂岩？若しくは粘土塊？	

第24表　堀之内城跡出土遺物一覧（鉄製品）

図番号	遺構名	地区名	種類	注記・ラベル	備考
	１号土坑	B-12c	鉄滓塊	C-02	
	18号土坑	A-13b	鉄片	C-022一括	
	21号土坑	B-13c	不明	C-025	
	２号火葬土壙	A-14d	釘？	C-035	
	32号土坑	A-14b	鉄環	C-043	
	４４号土坑	A-15c	鉄滓塊	C-061	
	５号火葬土壙	B-18d	鉄釘	C-074	
	64号土坑	A-16d	鉄板片	C-094	
	３号溝状遺構		鉄環	D-003獣骨②	馬の鼻環か？
	１号台地整形区画		鉄滓付砂岩	X-001	
	２号台地整形区画		鉄釘？	X-002	
		A-15d・３	鉄滓	A-15d・３	
		B-26a	鉄滓	B-26a	

第25表　堀之内城跡出土遺物一覧（瓦）

図番号	遺構名	地区名	注記・ラベル	備考	実測	拓本
78	9号地下式坑	B-19a	C-064・24	砥石に転用	○	○

第26表　堀之内城跡出土遺物一覧（骨類）

図番号	遺構名	地区名	種類	注記・ラベル	備考
	１号地下式坑	A-13b	獣骨	C-016	
	２号地下式坑	A-14a	獣骨	C-027	
	２号土坑	A-13b	獣骨	C-003	
	５号土坑	B-13b	獣骨	C-008	
	６号土坑	B-12c	獣骨	C-009	
	７号土坑	B-13a	獣骨	C-010	
	８号土坑	B-13a	獣骨	C-011	
	９号土坑	B-１３ｂ	獣骨	C-012	
	12号土坑	B-13d	獣骨	C-015	
	14号土坑	B-13c	獣骨	C-018	
	17号土坑	B-13a	獣骨	C-021	
	28号土坑	B-12c	獣骨	C-039	
	32号土坑	A-14b	獣骨	C-043	
	35号土坑	A-14a	獣骨	C-047	
	37号土坑		獣骨	C-049	
	３号溝状遺構		獣骨		①～⑤の５ケ所で出土
	７号溝状遺構		獣骨		
	10号溝状遺構		獣骨		
	14号溝状遺構		獣骨		
	１号土壙墓	B-12d	人骨	C-005	銅銭

第27表　堀之内城跡出土遺物一覧（銭）

図番号	遺　構　名	地区名	種　　類	重さ	長径	短径	厚み	注記・ラベル	備　　考	実測	拓本
79		A5a	聖宋元宝	1.8			0.11	A5a			○
80	1号掘立柱建物跡	B-18d	開元通宝	2.3	2.43	2.24	0.12	B-001P4一括上層			○
81		B12c	寛永通宝	2.2	2.29	2.28	0.08	B12c	新		○
82	（4号溝状遺構）	B20d	紹聖元宝	2.6	2.38	2.37	0.11	B20d（D004）			○
83	3号溝状遺構？		皇宋通宝	1.4	2.33	2.3	0.06	C-001			○
84	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	4.1	2.46	2.46	0.12	C-005・2	古		○
85	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	4.7	2.45	2.44	0.15	C-005・2	古		○
86	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	4.2	2.44	2.43	0.13	C-005・2	古		○
87	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	3.3	2.4	2.39	0.11	C-005・2	古		○
88	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	3.3	2.39	2.38	0.09	C-005・2	古		○
89	1号土壙墓	B-12d	寛永通宝	3.3	2.32	2.31	0.11	C-005・2	古		○
90	21号土坑	B-14a	祥符通宝	1.7	2.51		0.11	C-025・1			○
91	21号土坑	B-14a	皇宋通宝	1.8	2.45		0.1	C-025一括			○
92	1号火葬土壙	A-13c	永楽通宝	3.1	2.59	2.57	0.13	C-026・1			○
93	1号火葬土壙	A-13c	永楽通宝	3.3	2.45		0.13	C-026・1			○
94	1号火葬土壙	A-13c	永楽通宝	3.5	2.63	2.42	0.13	C-026・1			○
95	87号土坑	A-23d	元豊通宝	3.2	2.47	2.46	0.12	C-121			○
96		B-14c	熙寧元宝	2.3	2.41	2.38	0.14	C区P59一括			○
97	4号溝状遺構		開元通宝	2.6	2.26	2.26	0.11	D-004・6			○
98			天聖元宝	2.7	2.5	2.51	0.1	FⅠ2トレ			○
	5号火葬土壙	B-18d	治平元宝他	21.7				C-074・3	数枚固まっている		
	6号火葬土壙	B-19b	皇宋通宝？	2.2	2.44		0.13	C-075一括			

第28表　堀之内城跡出土遺物一覧（縄文時代～奈良・平安時代）

遺　構　名	地区名	時　　期	種　　類	型　式　名	注記・ラベル	備考
5号溝状遺構		古代	須恵器	―	D-2･5	
9号地下式坑	B-19a	古代	須恵器	―	C-064	
1号掘立柱建物跡-P4	B-18d	古代	須恵器	不明	B-1-P4	
4号竪穴建物跡	B-27c	古代	土師器	不明	C-114一括	
		古代	土師器	不明	E区-8	
		古代	土師器	不明	FⅠ区堀	
3号地下式坑	A-14d	古墳時代？	土師器	（後期）	C-28	
3号台地整形区画		古墳時代後期	須恵器・土師器		X-3	
15号溝状遺構		縄文時代後期	縄文土器	堀之内？	D-15	
4号溝状遺構		縄文時代後期	縄文土器	堀之内？	D-4	
2号掘立柱建物跡	B-18d	縄文時代後期？	縄文土器	不明	B-2・3	
		縄文時代後期？	縄文土器	不明	D区⑪トレンチ	
		縄文時代後期？	縄文土器	不明	E区1トレ	
		縄文時代後期？	縄文土器	不明	ホリノウチ	
		縄文時代前期	縄文土器	条痕文	A区2トレンチ一括	
		縄文時代前期	縄文土器	条痕文	FⅢ区①トレンチ一括	
	B-2b	縄文時代前期？	縄文土器？	条痕文？	B-2b一括	
4号台地整形区画		縄文時代前期・後期	縄文土器・石鏃	条痕文・堀之内	X-4	
	B-25d	縄文時代中期	縄文土器	加曽利E式	B-25d一括	
		縄文時代中期？	縄文土器	不明	E区7トレ	
9号溝状遺構		中期	縄文土器	阿玉台	D-9	
1号台地整形区画		不明	縄文土器	不明	X-1	
	A-6d	不明	縄文土器	不明	A-6d一括	
		不明	縄文土器	不明	D区	
		不明	石材	不明	FⅢ区②トレンチ一括	
4号溝状遺構		不明	土師器	不明	D-4	
		不明	土師器	不明	D区	
		不明	土師器	不明	B-15グリッド	

※重さは「g」、長径・短径・厚みは「cm」の単位となる。

Ⅳ　免谷津遺跡の調査

1　調査の概要

この遺跡は、鹿島川左岸の標高約30mを測る台地上に立地する。平成11年度と平成12年度の二カ年にわたり、確認調査と一部本調査を実施した。

平成11年度の確認調査時は、縄文時代前期の土壙１基、中期末葉（加曽利ＥⅣ式期）の竪穴住居跡１軒、中世以降の道路状遺構１条の遺構を検出した。土壙は完掘し、住居跡は北側半分をすでに削平で失っていたことから南側半分の調査を実施した。縄文土器は、中期阿玉台式・加曽利ＥⅣ式・後期堀之内式の土器片が計28点、土師器は、古墳時代前期の土器片を中心に計22点、近世陶器碗１点の遺物が出土している。

平成12年度は、確認調査を実施した後、遺構が確認された地点について遺構の完掘を行うために部分的な本調査を実施した。縄文時代後期（加曽利Ｂ式期）の土壙１基、古墳時代前期の竪穴住居跡２軒、中世以降の溝状遺構１条を検出した。古墳時代前期の２号住居跡から比較的まとまった遺物が出土している。縄文時代後期の土壙からも土器が出土した。

2　検出された遺構と遺物

a　縄文時代の遺構と遺物

１号住居跡は、８B-2b・d区で検出された。北半を道路造成時に削平されており、残存していた南側半部の壁柱穴を８個検出した。平面形は円形と考えられ、推定復元しても３m前後の直径となる。炉の痕跡は全く確認されなかった。Ｐ１から遺物（１）がややまとまって出土したが、この遺物以外には何も出土しなかった。１は、口縁部が1/4程残存していた。口縁部をやや幅広の沈線で区画し、沈線より下部に縄文を施文している。その特徴から縄文時代中期末葉の加曽利ＥⅣ式期の比定される遺物と考えられる。

１号土壙は、縄文時代前期の土壙と考えられる。長軸長１m、短軸長0.65m、深さ0.73mを測る。土壙内下部から遺物は出土していないが、上層部と周囲の覆土中から前期条痕文系の土器の細片が混在していた。

２号土壙は、６Ｂ１a・c付近の本調査実施区域で検出された。北側半分は道路の下になるため未調査である。調査担当者は風倒木の可能性も強いとしているものの、２の加曽利Ｂ式の土器が出土しており、遺構が絡んでいる可能性が高いと判断し土壙として掲載した。

遺物のみ出土したグリッドがいくつかある。２Ｂ２b・２Ｂ５bグリッドから中期・阿玉台式が３点、１Ｂ３dグリッドから後期・堀之内式が２点出土している。その他に、中期と思われる土器片が全域から微量だが出土している。

b　古墳時代の遺構と遺物

２・３号住居跡は、６Ｂ１a・c付近の本調査区域で検出された。２軒は隣接している。

２号住居跡は、南側半分が調査区域外なため全体像は不明だが、平面形が一辺約4.5m程の方形と推定される。中央よりやや西寄りに炉が敷設される。北東隅に柱穴が１穴（P1）あるが、主柱穴ではなくその用途は不明である。台付甕２点（１・２）、平底の甕１点（３）、高坏２点（４・５）、胴部は球形を呈し、口縁部が内彎しつつ立ち上がる壺１点（６）、器台２点（７・８）と甕を中心とす

る別個体の破片が少量出土している。

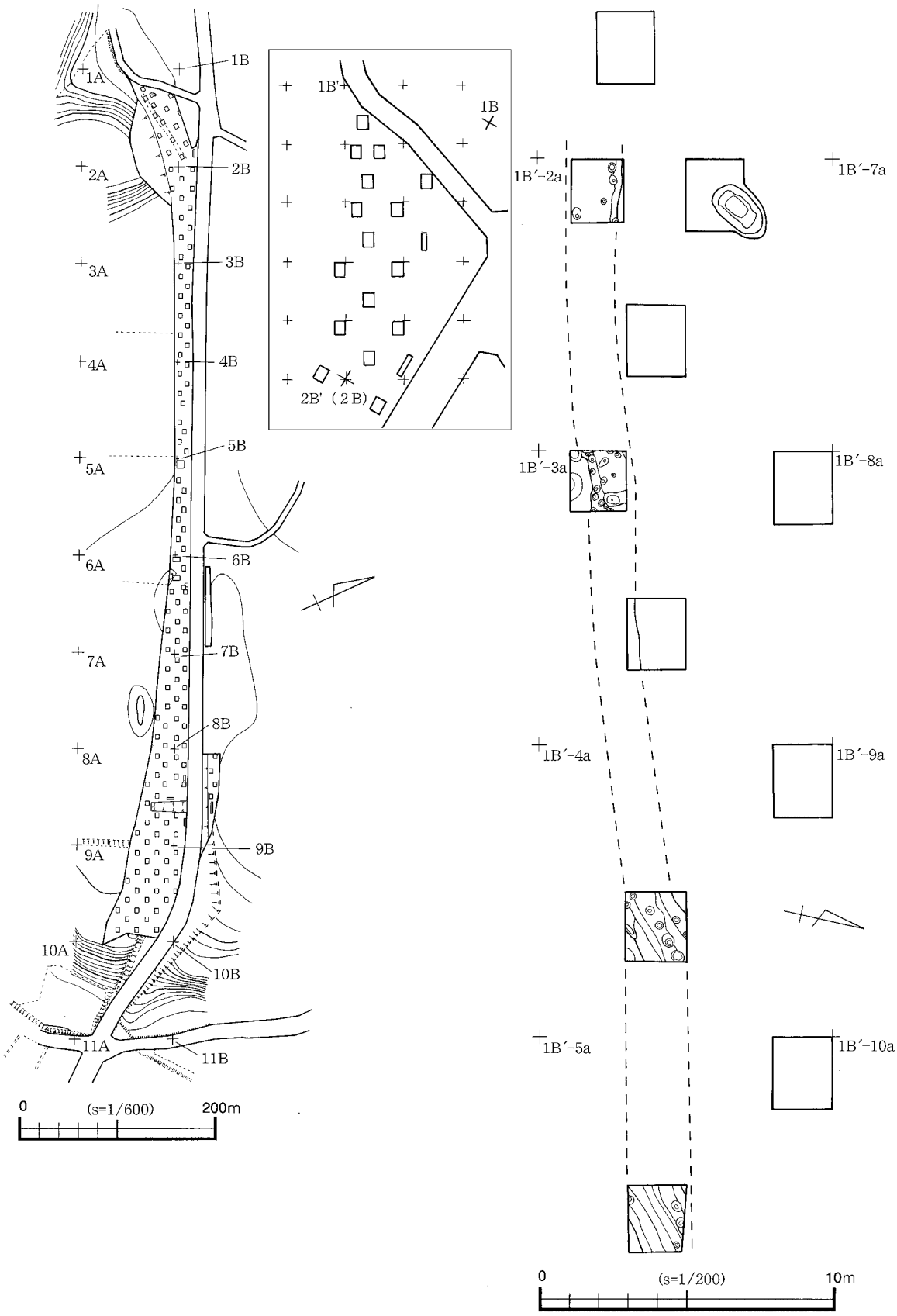
これらの遺物は、古墳時代前期に比定でき、住居跡内の一括資料として千葉市では数少ない事例の一つといえる。特に、器台は所謂「異形器台」と呼称されるものの一類型と考えられ、千葉市域では村田服部遺跡の埋没河川覆土包含層内出土のものと大森第２遺跡の第８－Ａ号址で同様の形態のものが出土しており、類例が極めて少なく貴重な事例といえる。

１と２は、完形の台付甕である。口唇部キザミ、胴部外面の斜位のハケメ、台端部の平坦化、胴部外面下半に付着した煤、内底部の黒斑や有機物の付着、脱色・剥落系斑紋などは共通の特徴である。１の口縁部は丁寧な横ナデで、２の外面は縦位のナデである。１の内壁は丁寧にナデ整えられ、部分的にミガキを施しているような印象を受ける。台部内面には胴底部の丸味は見られないことから、上部の塞がった台部と胴部を接合していると考えられる。２の台部内面には胴底部の丸味が顕著に見られ、末広がり筒台状の台部を胴底部に貼り付けているような印象を受ける。また、１の台部内面調整は、不定方向のハケメが施されるが、２はケズリのままである。２の胴部内面は、ナデだが調整工具端部に不揃いな凹凸が多くあったようで、一見粗いハケメに見えてしまう。口縁部の形状は、１が頸部で弱い曲線を描くようにくの字に外反するが、２は明瞭な頸部を捉えにくく、胴部から口縁部に漸次移行しつつ弱く外反している。これらの土器は一見してよく似ており、前述のように共通の調整などが見られることから産地は同じと考えられる。細部を見ると成形・調整技法的に差異が見られるが、大きさ・製作者の癖・感情差などからくる微妙な差の現れと考えたい。外面に付着した煤、内部に残る有機物や斑紋のつき方などから類推して煮沸具としての利用目的は共通である印象をうける。なお、内面に残存する有機物や黒斑の位置が底部付近に顕著であるといったことは、単に水を煮沸させていたというよりも有機物を煮て、更に焦がしてしまった結果、付着したものと想像する。

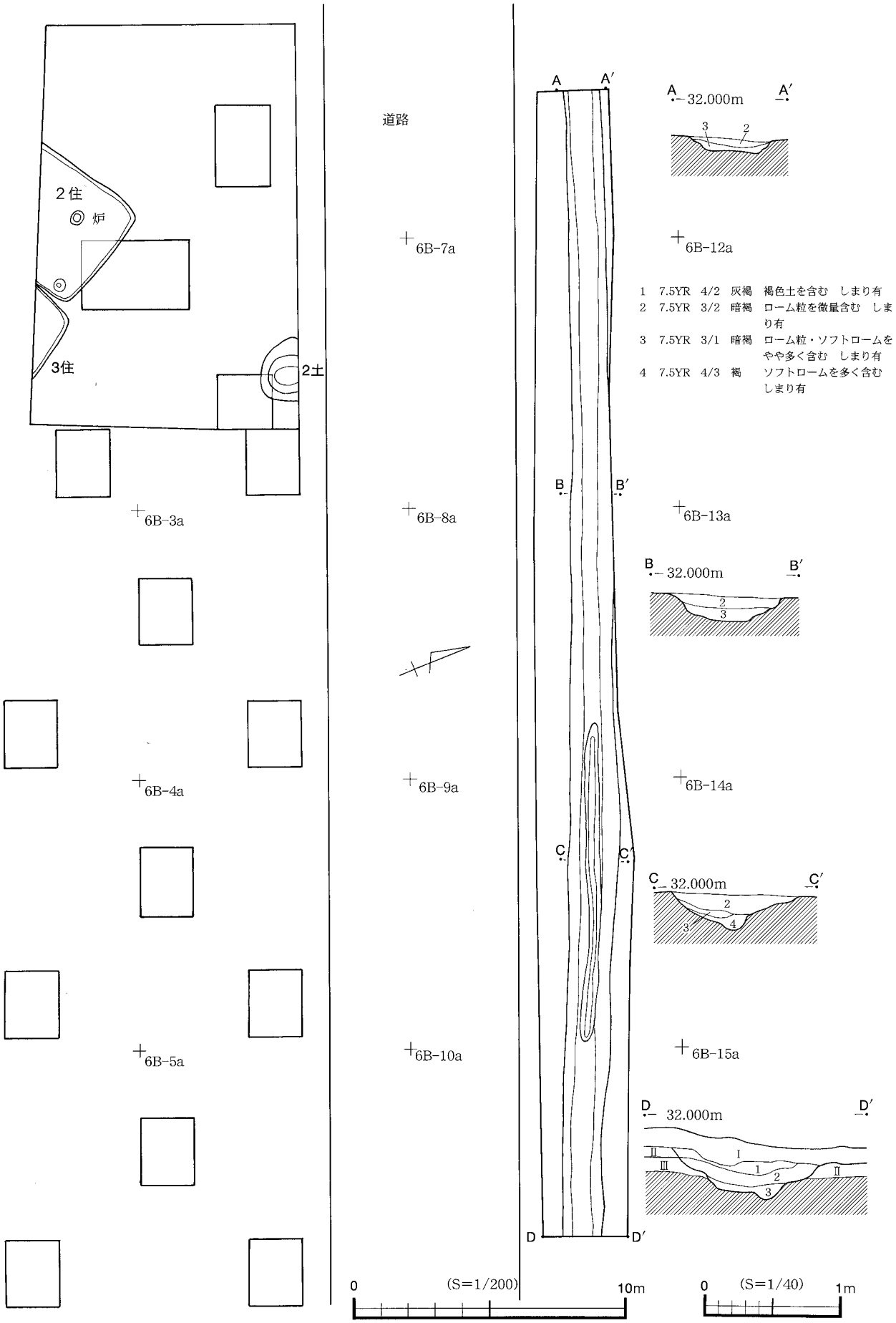
３の平底の甕は、口縁部を欠損するが胴部はほぼ完存する。外面をケズリの後に丁寧にナデ、下半はミガキに近い部分も見られる。胴部はやや扁平気味の楕円形を呈し、胴部中位に最大径がある。底部は下方に顕著に突出している。内面は上半を丁寧な横ナデ、中位より下半をミガキで調整している。外面中位上半から肩部に煤、内面底部付近に焦げと思われる多くの炭化物が付着している。全体的な色調は煤のせいで濃い焦げ茶か暗黒褐色にみえるが、本来の色調は明褐色系である。つまり、火を焚くが直火ではない状態の中で煤が付着するような使用がされていたと推測される。内面の有機物付着部分よりも上方には、器壁本来の色が抜け落ち、剥離したような斑紋が多くみられる。このような特徴は、有機物が付着しその有機物による化学反応で器壁色が脱色・剥落したかの印象を受け、煮沸容器の内面にしばし見られる痕跡である。このような痕跡の呼称名を「脱色・剥落系斑紋」といった語彙あたりが妥当であろうか。

４と５は、赤彩された高坏である。１はほぼ完形、２は杯部口縁端部と脚端部を欠損する。

異形器台（７・８）は、受部の一部に焼成前に施された抉りがみられ、抉り部分端部の面取りを行い整えられているが、受部口唇の大半は手捏状態に近い粗い整形を行っているにすぎない。脚部端は両方共に平坦面を呈しており、口唇部の不整形部分を切り取った上で平坦面をナデで調整しているような印象を受ける。７は内外面共にナデ調整で整えられ、８はハケ状工具による粗いケズリの後に強く押し撫で、絞り込むように斜位のナデ調整を施している。特に受部内面と基部のあたりに斜めに押

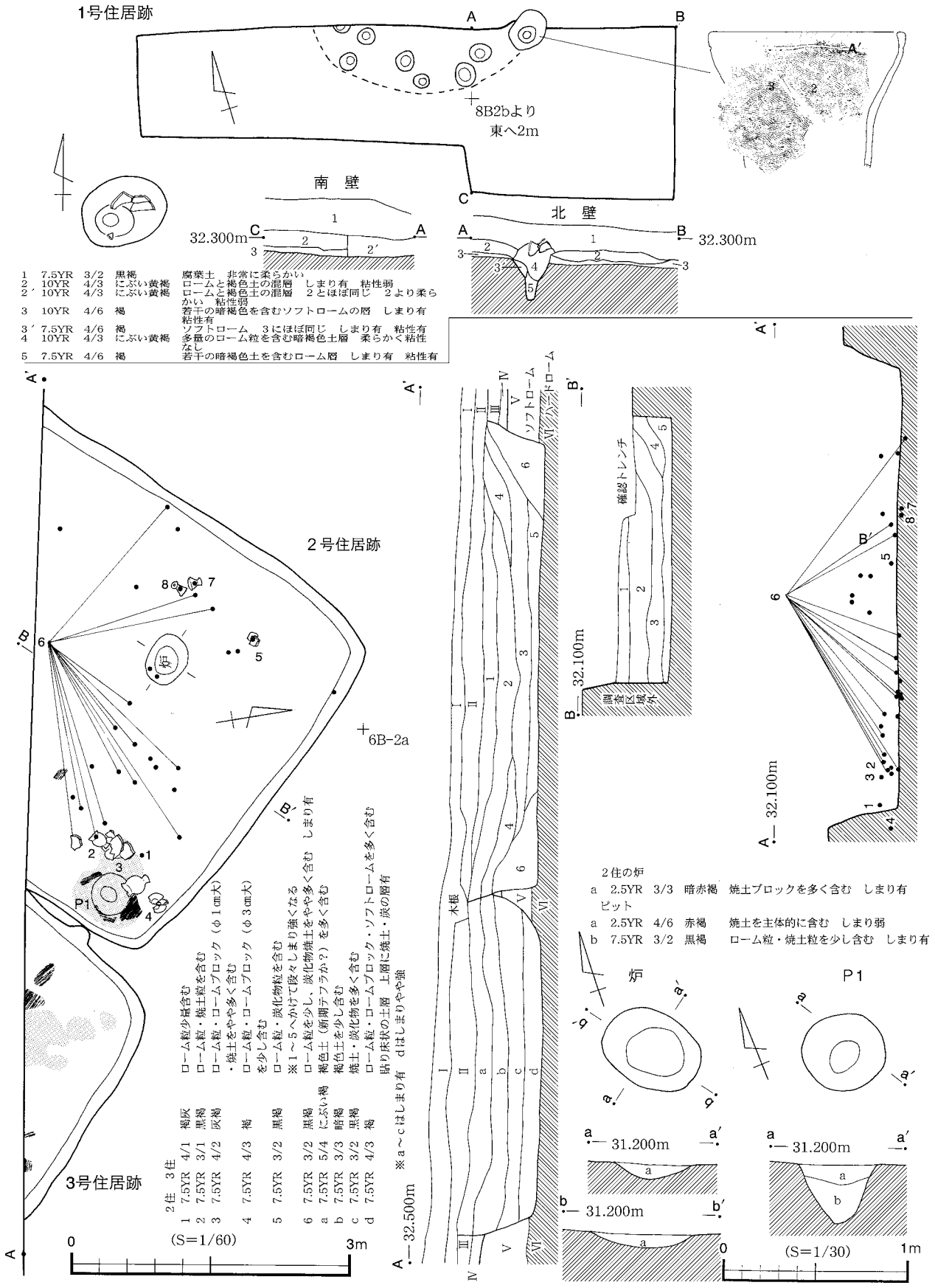


第43図　免谷津遺跡トレンチ配置図（1）

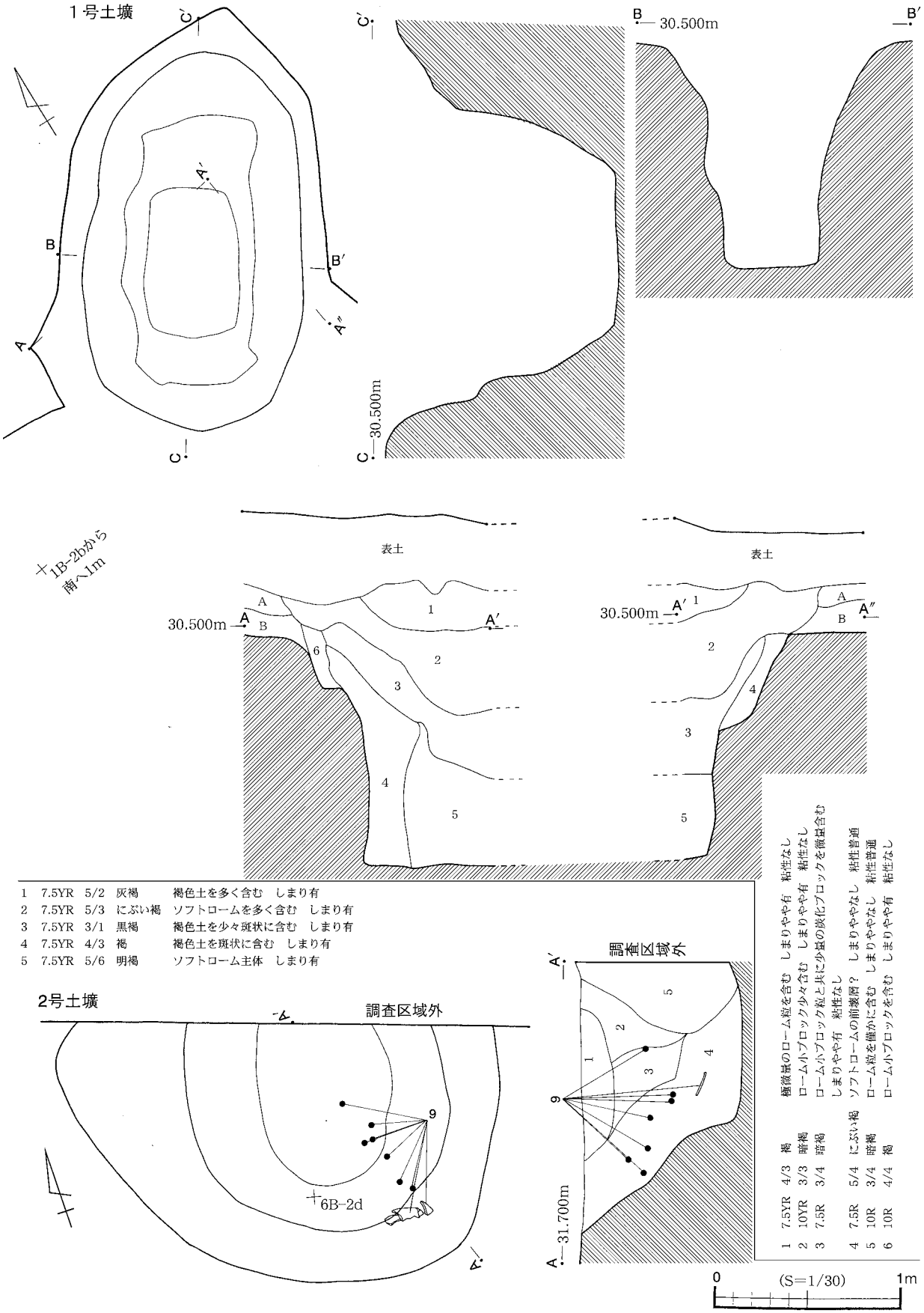


第44図　免谷津遺跡トレンチ配置図（2）

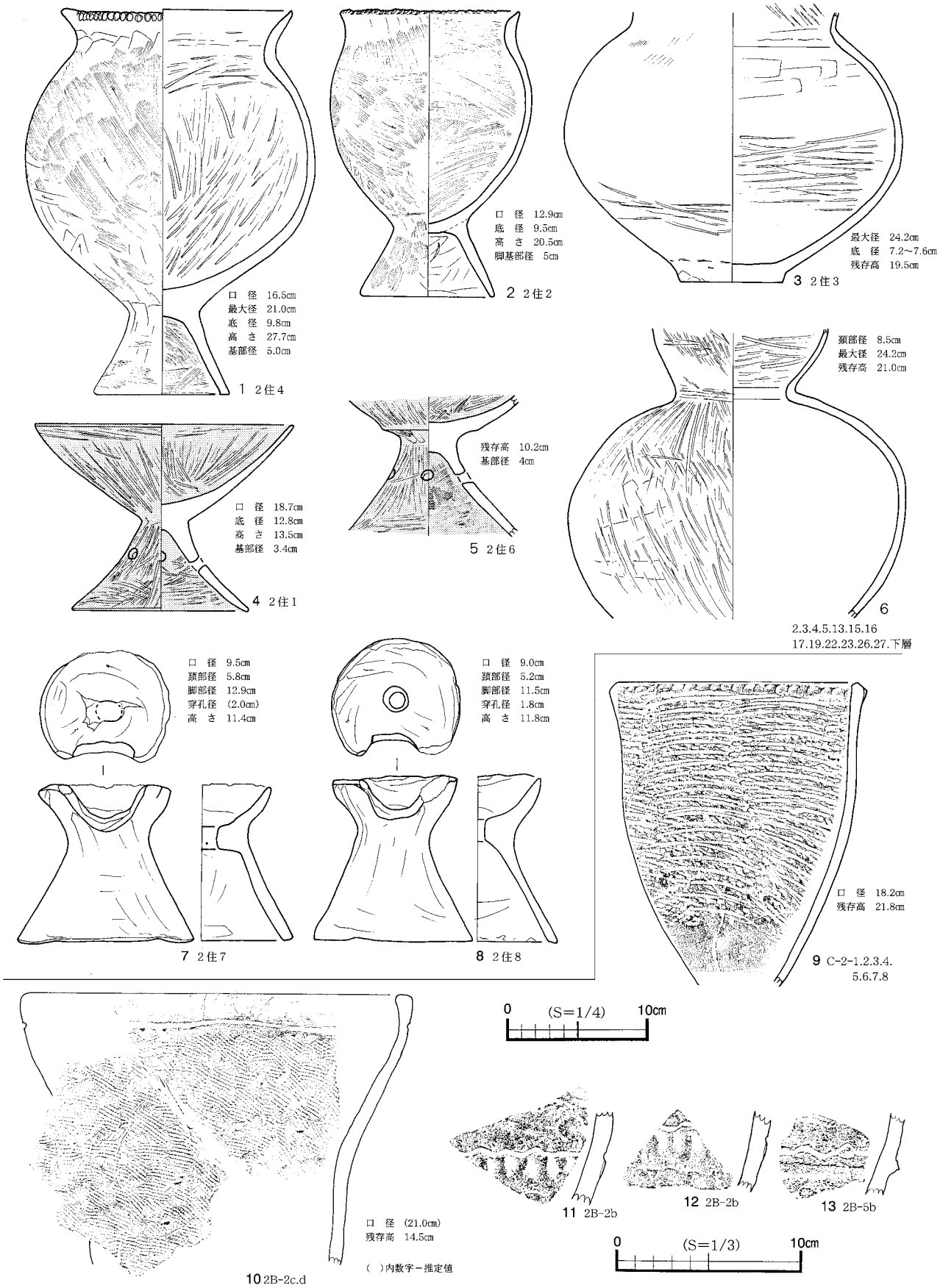
第45図　免谷津遺跡トレンチ配置図(3)


1号住居跡
8B2bより
東へ2m
南 壁
北 壁
32.300m
1 7.5YR 3/2 黒褐 腐葉土 非常に柔らかい
2 10YR 4/3 にぶい黄褐 ロームと褐色土の混層 しまり有 粘性弱
2′ 10YR 4/3 にぶい黄褐 ロームと褐色土の混層 2とほぼ同じ 2より柔らかい 粘性弱
3 10YR 4/6 褐 若干の暗褐色を含むソフトロームの層 しまり有 粘性有
3′ 7.5YR 4/6 褐 ソフトローム 3にほぼ同じ しまり有 粘性有
4 10YR 4/3 にぶい黄褐 多量のローム粒を含む暗褐色土層 柔らかく粘性なし
5 7.5YR 4/6 褐 若干の暗褐色土を含むローム層 しまり有 粘性有
2号住居跡
6B-2a
3号住居跡
2住 3住
1 7.5YR 4/1 褐灰 ローム粒少量含む
2 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・焼土粒を含む
3 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ローム・焼土をやや多く含む
4 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ローム・ブロック（φ1cm大）
5 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・ローム・ブロック（φ3cm大）を少し含む
6 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・炭化物粒を含む
a 7.5YR 5/4 にぶい褐 ※1～5へかけて徐々しまり強くなる
b 7.5YR 3/3 暗褐 ローム粒を少し、炭化物焼土をやや多く含む しまり有
c 7.5YR 3/2 黒褐 褐色土（新期テフラか？）を多く含む
d 7.5YR 4/3 褐 焼土・炭化物を多く含む
※a～cはしまり有 dはしまりやや強
貼り床状の土層 上層に焼土・炭の層有
(S=1/60)
0
3m
32.500m
ソフトローム
ローム
木根
確認トレンチ
調査区域外
32.100m
2住の炉
a 2.5YR 3/3 暗赤褐 焼土ブロックを多く含む しまり有
ピット
a 2.5YR 4/6 赤褐 焼土を主体的に含む しまり弱
b 7.5YR 3/2 黒褐 ローム粒・焼土粒を少し含む しまり有
炉
P1
31.200m
(S=1/30)
1m

第46図　2・3号住居跡


1号土壌
B
B′
A
A′
A″
C
C′
30.500m
表土
1B-2bから
南へ1m
1 7.5YR 5/2 灰褐 褐色土を多く含む しまり有
2 7.5YR 5/3 にぶい褐 ソフトロームを多く含む しまり有
3 7.5YR 3/1 黒褐 褐色土を少々斑状に含む しまり有
4 7.5YR 4/3 褐 褐色土を斑状に含む しまり有
5 7.5YR 5/6 明褐 ソフトローム主体 しまり有
2号土壌
調査区域外
6B-2d
9
31.700m
1 7.5YR 4/3 褐 極微量のローム粒を含む しまりやや有 粘性なし
2 10YR 3/3 暗褐 ローム小ブロック少々含む しまりやや有 粘性なし
3 7.5R 3/4 暗褐 ローム小ブロック粒と共に少量の炭化ブロックを微量含む しまりやや有 粘性なし
4 7.5R 5/4 にぶい褐 ソフトロームの前壌層？ しまりややなし 粘性普通
5 10R 3/4 暗褐 ローム粒を僅かに含む しまりややなし 粘性普通
6 10R 4/4 褐 ローム小ブロックを含む しまりやや有 粘性なし
0 (S=1/30) 1m

第47図　1・2号土壌



第48図　免谷津遺跡出土遺物

し撫でるような痕跡が顕著である。穿孔は、全体の器形を成形した後に穿ち、ナデで整えている。微妙な調整差はあるが、二つとも基本的に同じ成形技法を用いている。因みに、他の土器の調整が良好なのに対し、やや粗さが目立つといったことから粗製土器のような印象を受ける。成形にかんしての粗さは手捏土器に近く、脚端部の面取り部分の切り口の良さと対照的な印象を受ける。

6は、口縁端部を欠損し、口縁部下半から胴部下半までが接合できる壺型の土器である。未接合の破片の中に同一個体らしき平底の底部の破片がある。口縁部は内彎しつつ立ち上がり、上方になるにつれて器壁が薄くなっている。その薄さ加減からさらに内彎しつつ丸く納まる単純口縁が予想される。胴部はわずかにつぶれ気味の球形を呈しており、最大径は胴部中位にあると考えられる。口縁部の内外面と胴部外面には極めて精緻にミガキが施されており、他の土器がハケメ調整が主体であるのに対して目を引く存在である。内面は丁寧にナデ調整を施すが、やや脆く器壁の荒れが目立つ。口縁内面の下半と基部内面には、平均5mm大の脱色・剥落系斑紋が多くみられる。

この土器は、胎土・器形・調整技法的に在地産とは考えにくいものの、口縁部の内彎・胴部の扁平気味の球胴化・ミガキによる最終調整の精緻さ、特に器形的な類似性を周辺地域の古墳時代前期の土器様式の中に見いだせない点で特異な土器といえよう。如何せん、口縁端部と、底部の状況が把握しきれていないことから全体的なイメージも定かでないのが致命的である。

3号住居跡は、2号住居跡のすぐ東側で並んで検出された。平面形は方形と考えられるが北東角しか確認できていないので規模は不明である。出土遺物も住居跡に明確に伴うと考えられるものはない。

c　その他の時代の遺構

第44図にある溝状遺構は、遺物などはないので時期の断定はできないが、掘り込み面が表土から浅いことから近世以降の所産と推定される。また、下層のしまりがよく、現道に併走していることから道として利用されていたと考えられる。

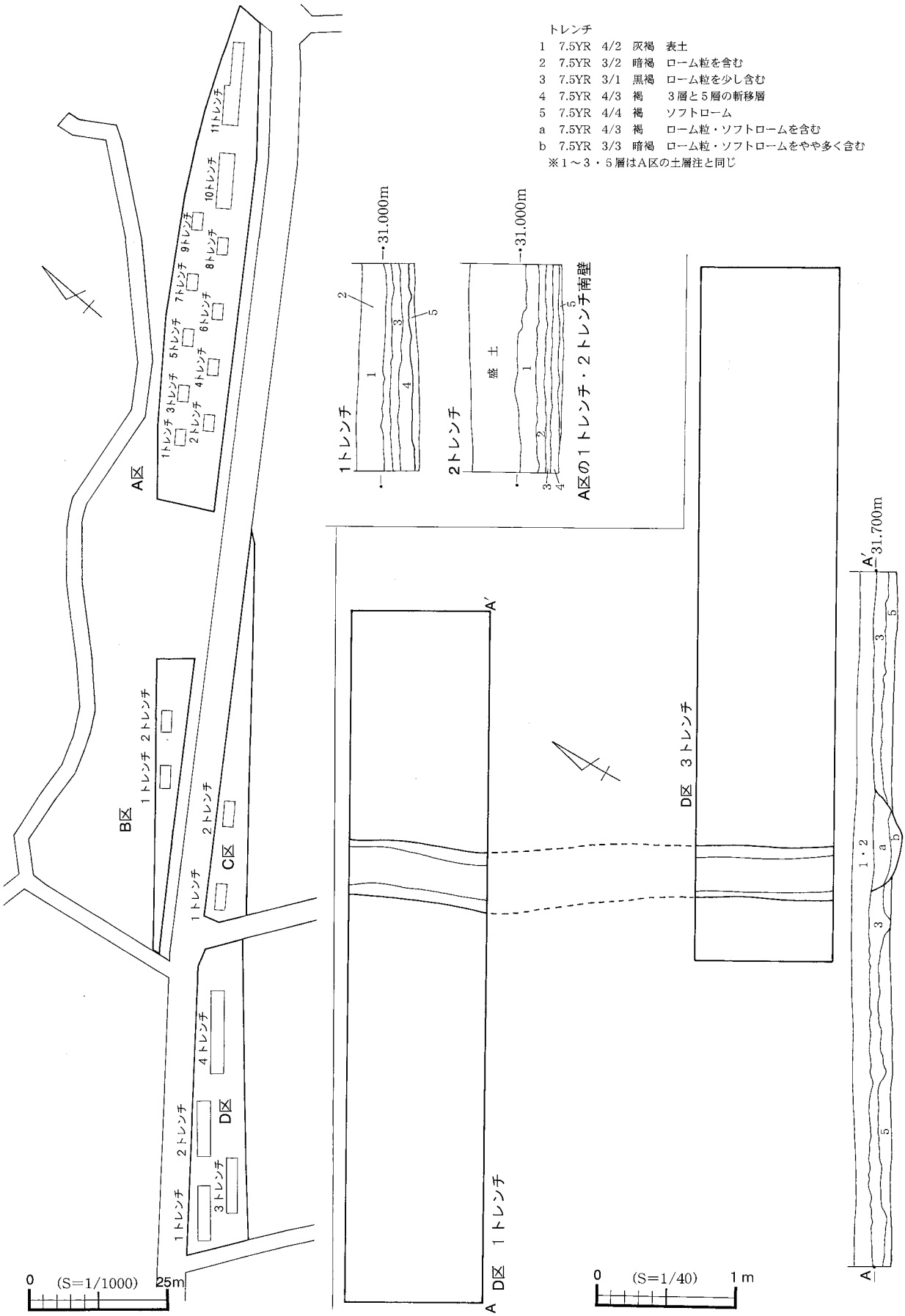
Ⅴ　志保多遺跡の調査

調査の概要と成果

調査は、平成13年7月16日～同年9月28日の期間、全対象面積2,011m^{2}に対して255m^{2}の確認調査を堀之内城跡の本調査と並行して実施した。第49図にあるとおり、A区～D区の4地区に細分し、それぞれの調査区に任意のトレンチを設定した。

調査の結果、A区～C区にかけては遺構が確認されず、D区の1・3トレンチで溝状遺構を検出した。遺物は、全域で土器が7点、石片1点の合計8点にすぎない。その内、A区の2トレンチから縄文時代中期の加曽利EⅢ式に比定される土器、4トレンチから奈良時代の須恵器片、6トレンチから型式不明の縄文土器片が出土している。D区の2トレンチからは、縄文時代前期の黒は益城に比定される土器片が出土している。

前述のD区溝状遺構は、表土層直下からの掘り込みが確認でき、古い時期の遺構とは考えにくい。遺物などの検証材料がないので時期的な確証は持てないが、覆土の状況から近世遺構の所産と考えたい。なお、土層の多遺跡状況も調査区全域でほぼ均一であり、古来より人為のあまり及ばない範囲であったことが伺える。



第49図　志保多遺跡トレンチ配置図

Ⅵ　まとめ

本報告書では，堀之内城跡，免谷津遺跡，志保多遺跡の３遺跡を扱っていることから，それぞれを整理し，その後に細部の検討を行うことにしたい。

堀之内城跡は城跡として遺跡の登録がされているが，今回の調査において城郭に関わると考えられる遺構は全く検出されなかった。その代わり，中世の居住域と推定される遺構の一画と旦谷村・谷当村の村界道とその枝道などの遺構を検出することができた。

遺構は，中世遺構が地下式坑13基・土坑35基・火葬土壙12基・溝状遺構20条・台地整形区画４箇所・掘立柱建物跡２棟・井戸１基・竪穴建物跡４基，中近世遺構が土坑47基，近世遺構が土坑９基・土壙墓１基・炭窯１基，近代遺構が戦車壕状遺構１箇所・土坑２基が検出された。

遺物の総量は，獣骨類を除く土器・石材類・金属製品類などを合計して356点しか出土していない。その内，縄文時代から古墳時代後期頃までの遺物が51点（約15％）あるが，これらは各時代の遺構に伴うものはなく，全て包含層や中世遺構埋土中に混入したものばかりである。また，18世紀代の瀬戸香炉と１号土壙墓から出土した鉄鍋・古寛永６枚と幾点かの石材，陶磁器類３点を除いたものが中世段階の遺物と考えられる。中世の遺物は，在地産カワラケ・内耳土器・瓦質土器，渥美焼甕・常滑焼甕・壺・捏鉢，貿易陶磁器の青磁碗，瀬戸美濃製の陶器（擂鉢・縁釉小皿・平碗・浅碗・盤類・折縁深皿・瓶子・入子），石材（自然石・板碑片・磨石？），砥石・軽石・被熱粘土塊・羽口片，鉄片・鉄環・鉄釘などの鉄製品と鉄滓，瓦片（古代瓦を砥石に転用？），獣骨（馬），銅銭などが出土した。

免谷津遺跡は，縄文時代中期末葉の住居跡１軒・前期と後期の土壙２基，古墳時代前期の住居跡２軒，中世の溝状遺構１条を検出した。縄文時代中期の遺物は，住居跡周辺から東側の台地斜面にかけて分布していたが，遺構は他に確認できなかった。前期と後期も同様である。古墳時代前期の土器は，千葉市域での前期遺跡の調査事例が少ないことから遺物組成を捉える上で貴重な類例となった。特に，異形器台の千葉市域での出土例は，大森第２遺跡と村田服部遺跡の２箇所しか知られていないことからも貴重な類例となった。なお，中世の溝状遺構は堀之内城跡の12号溝状遺構と同一と考えられる。

志保多遺跡は，一条の溝状遺構が検出されただけで，際だった調査成果は得られなかった。

遺構　台地整形区画は，人為的に地山を削り込むことで空間を造成し，その中に地下式坑・土坑・墓・掘立柱建物跡・ピットなどがつくられる遺構である。平坦な場所につくれば容易に形成できる空間をわざわざ地表面を削り，造成することに何かしらの意図がある遺構である。この遺構の中には，ピットが無数にみられ，これらは掘立柱建物跡のような建物に伴う柱穴が主なものと考えられるが，柵列や農作業などに利用した杭なども多く含まれていると考えられ，建物として認識できるものを抽出することは極めて難しい。１・２号掘立柱建物跡のように配列が明瞭なものもあるが，調査段階で対応関係が認識できなかった場合，把握しきれないものが多い。区画は，総じて長期間利用されていたことがわかっているが，利用目的は居住域だけとは限らないようである。また，遺構の多くが重複してつくられ続け，廃棄時にわざわざ埋め戻された形跡がみられるものが多く，空間の再利用が恒常的に行われていたと予想される。４号台地整形区画の南西部には，柱穴が主体を占める空間があり，それを避けるように地下式坑や土坑が配置されることから，建物空間と貯蔵穴（土坑）や地下室（地下式坑）とを区別して利用していることがわかる。２・３号台地整形区画は４号ほど建物がつくられな

いが，北側の縁につくられた地下式坑の位置や８号溝状遺構の区画状況から明確な空間造成意識が伺える。南壁の土層図を観察した結果，造営開始時期に差があったとしても２～４号台地整形区画は併存していた可能性が高いと考えられる。また，居住域としての空間利用が失われた後に，墓域または葬送空間として利用されたことが，火葬土壙と区画の埋土の関係から理解できる。出土した銅銭やカワラケから火葬土壙は中世段階の所産であり，３号台地整形区画の掘立柱建物跡と火葬土壙との関係から土壙が形成された頃に建物は存続していなかったことは明瞭である。また，近世の遺構群も区画内につくられており，区画が近世初頭には明確な凹みとして残存していたことがわかる。近世段階にこの凹みを大規模に再掘削したような痕跡がみられないことから，区画造成当初の利用形態を継続していたわけではなく，偶然その凹みを利用して炭窯や土壙墓をつくったものと推測される。１号台地整形区画は他の区画とはやや様相を異にしており，４号溝状遺構の上に平面的にU字状の溝状の凹みを削りだして造営している。その後、区画が自然に堆積した後の凹みに土坑が３基つくられているだけである。わざわざ地山を削り込んで遺構を造営しているので台地整形区画としたが，本来的な利用目的の異なる遺構と捉えなければならないであろう。４号溝状遺構は，その堆積状況から道状の遺構であることは間違いなく，この遺構と２号台地整形区画が全く重複することがないことから，これらの間に時期的な併存関係が成立する可能性が考えられる。よって，その溝状遺構よりも新しい１号台地整形区画は，他の区画よりも新しいものである可能性が考えられる。ただし，１号台地整形区画と８号溝状遺構が終息する部分が位置的に一致することは，前者が２号台地整形区画の前庭道路で後者が南側の区画溝である可能性も考えられ，全く無関係なものとも考えられない。

台地整形区画とは，地山を意図的に空間を造成する遺構を総じてつけられた名称であり，遺構本来の目的を多様に解釈するための便宜上の呼称でしかないのである。今回検出された遺構にも，居住域・道状遺構・墓域・葬送空間などとして利用された可能性があることから，今後さらに多くの利用手段を見いだされることも考えられる。他の同類の成果をふまえた検討が望まれる遺構である。

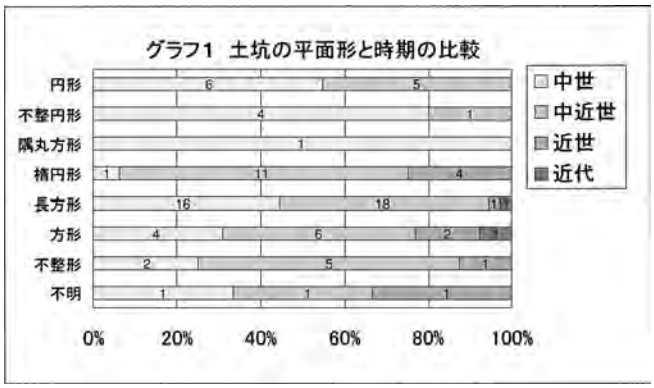
検出された20条の溝状遺構は，道状遺構と区画溝の２種類が含まれている。前者にあたるのは１～５・10・12・20号溝状遺構で，後者はそれ以外となる。道状遺構は，基本的に埋土中に人間が闊歩していたことでつくられたと考えられる硬化面や硬化層がある場合が多い。また，第２図にある村界道と形状的に一致しており，近世には確実に機能していた道であることがわかっている。さらに，埋土中に宝永テフラ（宝永４年・1707年降灰）が確認されることが多く，遅くとも18世紀初頭には成立していたようだが，テフラ層よりも下に土層が形成されており，さらに形成時期が古くなることがわかる。出土する遺物も古くは13世紀代の遺物がみられ，15世紀前半頃の遺物がやや多いように思われる。周辺の区画がこの道状遺構に形状に即していることなどから，中世段階には道として利用されていた可能性も考えられる。近世を通じて道として利用され，形状的に現代まで視認できる状況で村界道として残存してきたようである。区画溝は，13号溝状遺構を除いて，全てが道状の溝状遺構や台地整形区画の形状に沿っていたり（８・９・11・14～17号），谷状地形の上端肩部に巡るよう（６・７・18・19号）につくられることから，道や自然地形と人為的な空間を区分するための区画溝と考えた方が妥当である。６号と17・18号溝状遺構は，自然地形的な現況と照らして同一の可能性が高い。15号は18号と連結し，５号の内側を区画する溝と考えられる。この区画内には竪穴建物跡と土坑があり，南

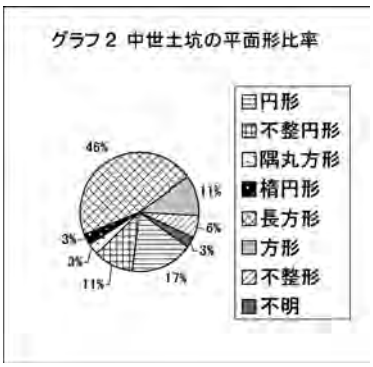
側の調査区域外には旧真照院跡との位置関係からこの寺院跡との密接な関係が想定される。真照院の創建時期は不明だが，延宝二年（1674年）に当院の住職であった果裕法師の名が金親町の金光院所蔵の過去帳にみられることから，17世紀後半には存在していたようである。竪穴建物跡は，中世段階の遺構と考えられていることから15号溝状遺構のつくる区画が当院と関わりがあるとすれば，中世には当院の前身施設があった可能性がでてくるであろう。

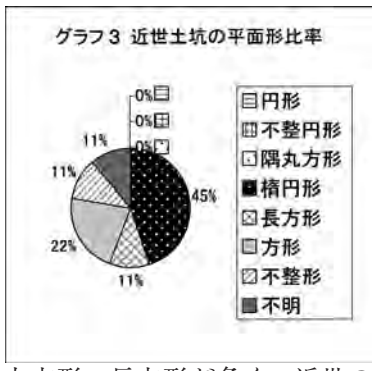
土坑の平面形は，円形・隅丸長方形・長方形・方形・楕円形・不整形などが見られ，平面形の不明なものが３基ある。これらを，推定時期的に区分してみると以下のようになる。

第29表　土坑の平面形と時期別集計表

	中世	中近世	近世	近代	合計
円形	6	5			11
不整円形	4	1			5
隅丸方形	1				1
楕円形	1	11	4		16
長方形	16	18	1	1	36
方形	4	6	2	1	13
不整形	2	5	1		8
不明	1	1	1		3
合計	35	47	9	2	93







中世の土坑は，円形・不整円形・隅丸方形・長方形が多く，近世の土坑は，楕円形・方形がやや多いようである。中近世のいずれに属するかが不明なものが47基もあるため，平面形状から時期的な傾向を的確に示すことはできない。近世の土坑に円形・不整円形・隅丸方形などの丸形系の平面形のものが全くないのが特徴の一つであろう。では，方形系のものが近世かといえばそうでもなく，長方形のもの多くが中世に属し，方形のものもやや中世が多い。つまり，方形系の中に近世に属するものもあるので注意を要するということがわかったにすぎない。近代のものは全て方形系なので，時代が下るにつれて方形系の平面形が多くなる傾向があると考えられる。これらの傾向で時期的な傾向を表したとは考えないが，今後の中世遺跡の報告をする中で注意を払うべき視点と考えられる。

遺物　堀之内城跡の古代以前の遺物を除く遺物の大半は，時期比定のできない中世段階の破片ばかりである。最も多量に出土しているのは，常滑製品で甕・壺・鉢を合計して97点である。次が石材の69点であるが，必ずしも中世に属するものばかりではなく，近世のものも多く含まれていると考えられる。その次が，国産陶磁器類で多くが瀬戸美濃製品で茶壺とあわせて35点である。これらに続き，銅銭，砥石他，カワラケの順となり，輸入陶磁器，瓦質土器，内耳土器などは極めて少ない。

これらの内，時期の比定できる常滑製品と国産陶磁器類を取り上げ，その傾向をみてみたい。

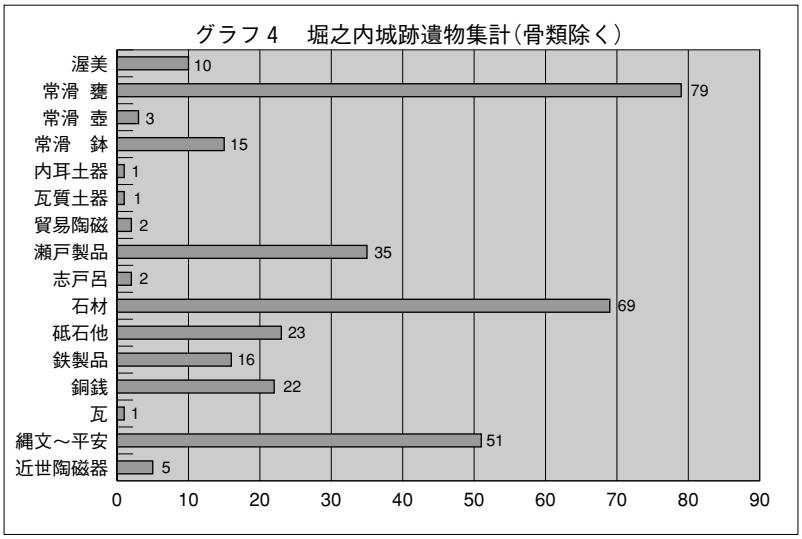
まず，常滑製品だが，13世紀中頃のものから16世紀中頃までのものがみられ，最も出土量の多い時期は９型式（15世紀前半）である。２・71号土坑・９号地下式坑・１号台地整形区画・２号溝状遺構から出土している。土坑は４号台地整形区画内にあり，地下式坑は２・３号台地整形区画内にある。２号溝状遺構以外は全て台地整形区画内の遺構であり，これらの遺構が廃棄される段階に９形式の遺物がすでに細片化していたことを示している。つまり，台地整形区画が機能していて，遺構が造営されていた時期を15世紀前半頃と考えてる根拠となり得るということである。遺構に伴う５～６型式（13世紀中頃）のものは２号溝状遺構しか出土していないが，２号溝状遺構のどの付近で出土したのかが不明なので，率直にこの時期の遺構とは考えられない。６a・b型式（13世紀第３四半期・第４四半期）のものは１号台地整形区画と７号地下式坑から出土している。前者は４号溝状遺構を切っていることからこれに伴うものかもしれない。７型式（14世紀前半）のものが４号竪穴建物跡から出土している。この遺構周辺の遺構からは，この遺物以外に時期を比定できる遺物がないが，15号溝状遺構に区画された空間周辺が，14世紀前半頃に機能していた空間であった可能性を示唆しているかもしれない。８型式（14世紀後半）のものは，１号地下式坑から出土している。10型式（15世紀後半）のものは８号地下式坑から出土している。11～12型式（16世紀代）のものは，４号台地整形区画内のピットから出土した。次ぎに，国産陶磁器類であるが，13世紀から15世紀中頃までのものがみられ，後Ⅰから後Ⅳ古の段階までの後期（14世紀後半から15世紀中頃）までのものが16点（55％）とその主体を占めている。地下式坑の内，１・２・６・７・９号から出土しており，６号の13世紀末から14世紀前半の入子以外は全て後期の遺物ばかりである。入子は，千葉県内でも極めて珍しい出土例であり，鎌倉時代の御家人クラスの屋敷跡が検出された千葉市の黒ハギ遺跡で２点，佐原市の鴇崎天神台遺跡で１点出土しているにすぎない。堀之内城跡で検出された遺構群が，御家人クラスの屋敷跡とは現状では考えにくいものの，遺跡の性格を考える上で重要な要素となる遺物といえよう。１号台地整形区画からは，中Ⅲ・Ⅳ期（14世紀前半）の折縁深皿が出土しており，常滑6a期の遺物と共に４号溝状遺構に伴う遺物である可能性が考えられる。

まとめると，中世遺構の形成時期の主体は15世紀前半で，古くは13世紀，新しくは16世紀代まであることがわかった。道路は，４号溝状遺構が14世紀前半頃には存在していた可能性があり，台地整形区画と溝状遺構との位置関係からもそれぞれの遺構が中世段階に形成されたものと考えられる。

獣骨だが、堀之内城跡から出土した獣骨は全て馬で、獣骨総量に比して、頭骨に関わる部位の出土量が多く、全身骨格が揃うものはないことがわかった。出土状況から見ると、土坑の場合は覆土中に単純廃棄された場合が多く、特別な意図を持った廃棄とは考えにくい。溝状遺構の場合、特に集中する３号溝状遺構の場合でも、遺構内部にバラバラにされた部位を頭、足などの大きな単位で無差別に廃棄した様子が伺えた。これらの事象は、この場が馬の「捨場」として利用されていたことを物語っていると推測される。また、「捨場」として廃棄行為が継続的に行われ、特定の部位の選択はされずとも解体されるかある程度の腐敗が進行した後に廃棄されたと推測される。この「捨場」は、旦谷村と谷当村の村界を画する道と旧真照院という寺域の末端に位置しており、４号台地整形区画内で検出された土壙墓（ハンセン氏病に罹患した人を埋葬したと考えられる近世初頭の鍋被り埋葬の事例）も考慮すると、「捨場」が忌避空間として認識されていたと考えられるのかもしれない。

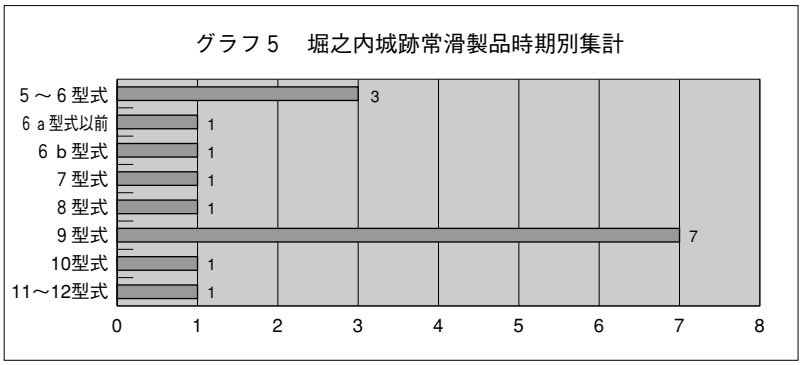
第30表　堀之内城跡出土遺物集計（骨類を除く）

産地・種別等	個　　数
カワラケ	21
渥美	10
常滑　甕	79
常滑　壺	3
常滑　鉢	15
内耳土器	1
瓦質土器	1
輸入陶磁器	2
瀬戸製品	35
志戸呂	2
石材	69
砥石他	23
鉄製品	16
銅銭	22
瓦	1
縄文～古墳	51
近世陶磁器	5
	356



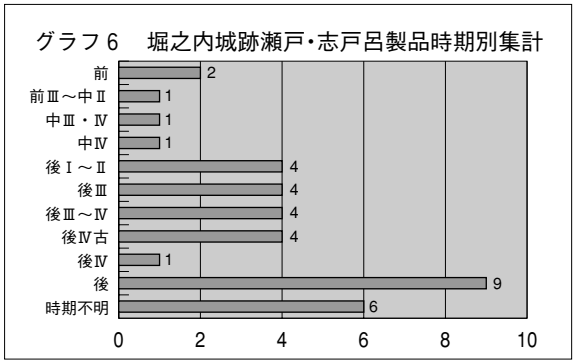
第31表　堀之内城跡出土常滑製品（甕・壺・鉢）時期別集計

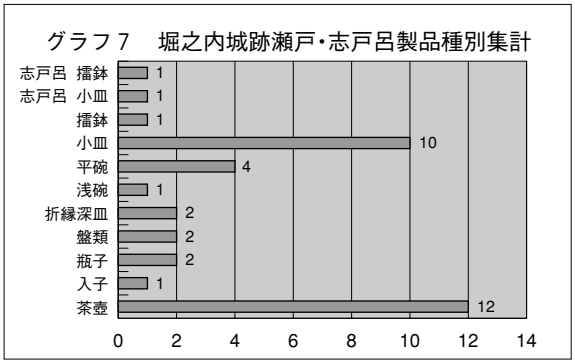
時　　期	個　　数
５～６形式	3
６ａ型式以前	1
６ｂ型式	1
７型式	1
８形式	1
９型式	7
10形式	1
11～12形式	1
不明	81
	97



第32表　堀之内城跡瀬戸・志戸呂製品集計表

	志戸呂		瀬　　戸									個　数
	擂鉢	小皿	擂鉢	小皿	平碗	浅碗	折縁深皿	盤類	瓶子	入子	茶壺	
前									2			2
前Ⅲ～中Ⅱ										1		1
中Ⅲ・Ⅳ							1					1
中Ⅳ							1					1
後Ⅰ～Ⅱ				2	1	1						4
後Ⅲ					3			1				4
後Ⅲ～Ⅳ				4								4
後Ⅳ古	1			3								4
後Ⅳ			1									1
後								1			8	9
時期不明		1		1							4	6
	1	1	1	10	4	1	2	2	2	1	12	37





付編１　堀之内城跡出土の鉄鍋を被った近世人骨について

松村博文（国立科学博物館）
谷畑美帆（東京都老人総合研究所）

緒言

堀之内城跡遺跡は千葉市若葉区谷当町に位置し、平成12年度に千葉市文化財調査協会により発掘調査がおこなわれた。その際に、鉄鍋を被った埋葬人骨１体と火葬人骨３体が検出された。火葬人骨は完全に灰化した骨粉がわずかに残るのみであり、原形を保った骨片等は全く残存しない。鉄鍋をともなう人骨は、頭骨は鉄鍋の下で、ほぼ完全な状態で保存されていた。しかし、胴部と四肢骨は、左鎖骨、軸椎、頸椎１点、上部の胸椎２点、左上腕骨の骨体片、肋骨の破片７点のみが残存し、他は消失していた。鉄鍋を被った人骨は、関東周辺のいくつかの遺跡からの出土例が知られており、江戸時代の記録によると、多くの場合被葬者はハンセン氏病や梅毒あるいは結核など、いわゆる当時の悪病に罹患していたとされている。今回出土した頭骨にも梨状口の左辺縁部に古病理学的な所見が認められる。本例は斯様に極めて興味深い埋葬例であるので、人骨の形態学的所見のみならず、古病理学的所見についても詳細を報告することとした。頭骨と歯の計測値はそれぞれ表１と表２に、写真は図１と図２に示した。

形態学的所見

保存状態は、左頭頂骨と眉間の表面の一部がやや腐食しており、右頬骨弓と鼻骨の先端失われている以外はほぼ完全である。ただし下顎骨は左下顎体の一部のみ残存する。額の傾斜、眉弓の発達、乳様突起の大きさなどから、被葬者は男性と推定される。縫合の癒合、歯の咬耗の程度から熟年前半（40歳代）と推定される。以下に頭骨の形態学的所見を記す。

（前面観）額は比較的狭いが、前頭結節は弱い。前頭縫合も、前頭縫合鼻上痕跡も無い。眉間隆起はこの部分が破損しているため明確ではないが、中程度であった痕跡がうかがえる。眉弓隆起は弱い。鼻根陥入、鼻根弯曲および鼻根水平弯曲も弱く平坦である。上顎骨前頭突起は水平を向き、前頭骨頬骨突起は強く張り出す。眼窩上縁は直線的である。眼窩上孔は右には無いが、左は弱く切痕を形成する。眼窩口は低く、眼窩口長軸は比較的強く傾斜する。副眼窩下孔は左右ともに無い。前鼻窩は浅く、梨状孔下縁は正常な右は成人型を呈する。左は後述するように病変のため正常ではない。頬骨の横への張り出しは強い。上顎骨歯槽突起は中程度の大きさである。視束管二分は左右ともに認められない。

（側面観）額はやや傾斜し、前頭骨矢状弯曲は中程度である。側頭筋線は弱く、乳突上陵も弱い。また乳突上溝も浅い。乳様突起は大きく、男性的である。頭頂切痕骨は無い。頬骨後裂は左右ともに認められない。

（後面観）鼓室板の厚さは中程度、外耳孔の形態は斜楕円形を呈する。プテリオンは正常である。側頭下稜は中程度の鋭さである。前鼻棘は弱い。輪郭の形態は Haberrer の家形に類する。外後頭隆起は中程度、上項線は明瞭であるが、下項線は不明瞭である。項平面は中程度の粗面状を呈する。インカ骨は無いが、ラムダ小骨を認める。横後頭縫合痕跡は左右ともに無い。

（上面観）輪郭の形態は類楔形にちかい。冠状縫合鍵歯は多く、走行もやや複雑である。外板の縫合

癒着はないが、内板は癒着が進行している。矢状縫合の鍵歯の数は中程度、走行は単純である。外板に癒着はないが、内板では完全な癒合を認める。ラムダ縫合の鍵歯は多いが、走行は単純である。ラムダ縫合の外板癒着は半分程度、内板は完全に癒着している。

（底面観）大後頭孔は菱形を呈する。後頭顆の二分化傾向は左右ともに無い。頚静脈の二分化は右にのみ認められる。卵円孔の二分化、口蓋隆起、舌下神経管の二分化、内側口蓋管骨橋および翼棘孔骨橋は認められない。顆管は右は大きく開存するが、左は欠如する。鼓室骨裂孔は左右ともに無い。咬耗は Broca の１度強ほど。右第２と第３大臼歯の隣接面にカリエスが認められる。歯石の沈着は無い。残存する歯は以下の歯式に示されるとおりである。

8	7	6	5	4	3	2	○	○	2	3	4	5	6	7	○
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	5	6	/	/

○ 歯は残存しないが歯槽開放、 / 歯も歯槽も残存せず

古病理学的所見

本個体は、鉄鍋が被せられていたことなどからみて、「ハンセン氏病」の所見を示す可能性がある。同病による骨病変の典型的所見は、中足骨・中指骨における骨吸収である。ハンセン氏病に罹患した場合、手足の指骨の先端から骨吸収が生じ、その先端は、鉛筆を削ったような特異な様相を呈する。今回の場合は遺存状態が不良であり、頭蓋骨以外の部位がほとんど出土していないことから古病理学的診断は困難を極めた。しかし本個体においては、鼻腔付近すなわち、梨状口の左辺縁部に慢性骨髄炎の所見が観察されている。したがって、炎症性変化については明らかであり、ハンセン氏病の可能性が大きい。

結語

本遺跡にて出土した人骨は、熟年前半の男性のものと推定された。検出された部位は、頭蓋と胸郭の上部を構成する骨の一部のみである。従って、一次埋葬ではないことは明らかである。この被葬者は一次埋葬の後さほど時を経ずに、頭部と頸部から胸郭上部が部分的につながった状態で鍋とともに二次埋葬されたのではないかと考えられる。古病理学的所見として、鼻腔付近すなわち、梨状口の左辺縁部に慢性骨髄炎の所見が観察されたことから、ハンセン氏病の可能性が指摘された。悪病による「鍋被り埋葬」の風習を裏付ける人骨である。

「鍋被り埋葬」は中世から実施されている特殊埋葬の一つであり全国各地でみられる。関東地方では、都市近郊において今回の報告例を含めて16例が確認されている。こうした埋葬が施された被葬者の中には、ハンセン氏病の所見を持つ個体が含まれていることから（馬場・梶ヶ山、1991；梶ヶ山・馬場、1999、2000など）、疾病と埋葬形態との関連性に関する研究も少なくない（桜井、1996）。中・近世における埋葬遺構の発掘調査は、これまで数多く実施されてきたが、通常の埋葬においてハンセン氏病の所見を明確に示す個体は極めて希である。これはこうした所見をもつ個体が、特殊な扱いをされ、一般の埋葬地とは異なった場所に葬られたことなどによるのではないかとも考えられる。波平（1988）は、特殊埋葬は、他殺、自殺、水死、特定の疾病による死亡（ハンセン氏病・梅毒・結核など）や幼児の死亡に対しておこなわれたと考えている。恐らく、こういった異常死の場合は、特異埋

正面観

後面観

右側面観

左側面観

底面観

上面観

図１　堀之内城跡より出土したヒト頭骨

葬を施すことが供養にもなっていたのであろうが、ハンセン氏病などの場合は、当時の社会における疾病観などとも結び付けられていた可能性がある（立川、1971；保立、1998；山本、1993）。中・近世では、ハンセン氏病に罹患した者は、「むら」などの共同体から切り離されていたようである。絵巻物においても、ハンセン氏病患者は、通常の人々と異なった様相で描かれており、当時においても差別化が確認されている（黒田、1986）。　残念ながらこうした患者の埋葬形態については、現段階では不明であるが、医学知識に乏しかった当時においては、ハンセン氏病は非常に強い感染力を持ち、遺伝するとも考えられていた。そのため、ハンセン氏病に罹患すると、この病気が子孫に代々続くことがないように本人が希望して、通常の埋葬地とは異なった姥捨て山に遺体を捨てるように依頼するという逸話もある（東村山市史、1987）。ハンセン氏病については、らい予防法廃止以前、差別や偏見が社会的常識となっていたが（大貫、1995）、こうした特定の疾病と疾病観及び埋葬に関する考察も今後実施していかなければならないであろう。

文献

大貫恵美子（1995）『日本人の疾病観』　岩波書店
梶ヶ山真理・馬場悠男（1999）「臼久保遺跡出土人骨」『臼久保遺跡』　かながわ考古学財団，pp.825-828.
梶ヶ山真理・馬場悠男（2000）「大塚堂遺跡出土人骨」『大塚堂遺跡　付編』　かながわ考古学財団，pp.55-57.
黒田日出男（1986）『姿としぐさの中世史』　平凡社
桜井準也（1996）「近世の鍋かぶり人骨について」『江戸時代の墓と葬制』
立川昭二（1971）『病気の社会史』　NHKブックス
東京都東村山市編纂　（1987）　『東村山市史』
馬場悠男・梶ヶ山真理（1991）「俵ヶ谷遺跡出土人骨」『俵ヶ谷遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第54集，pp.273-283.
保立道久（1998）『物語の中世』　東京大学出版会
波平恵美子（1988）「異常死者の葬法と習俗」『仏教民俗学大系４』　名著出版
山本俊一（1993）『日本らい史』　東京大学出版会

図２　慢性の炎症性変化を示す鼻腔左辺縁

表１　頭骨計測値（mm）

マルチン番号及び計測項目		マルチン番号及び計測項目	
1.頭骨最大長	186	48.上顔高	67
5.頭骨底長	176	48:46.ｳｨﾙﾋｮｰ氏示数	65.6
8.頭骨最大幅	148	51.眼窩幅	41
8:1.頭長幅示数	79.6	52.眼窩高	35
9.最小前頭幅	98	54.鼻幅	24
10.最大前頭幅	121	55.鼻高	50
17.ﾊﾞｼｵﾝ･ﾌﾟﾚｸﾞﾏ高	134	60.上顎歯槽長	58
40.顔長	98	61.上顎歯槽幅	59
43.上顔幅	110	62.口蓋長	48
45.頬骨弓幅	142	63.口蓋高	35
46.中顔幅	102		

表２　歯冠計測値（mm）

	左		右	
	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径
上顎　中切歯				
側切歯	7.35	6.37	7.37	6.56
犬歯	7.61	8.25	7.71	8.06
第1小臼歯	6.49	9.45	6.83	9.38
第2小臼歯	6.69	8.74	6.45	8.64
第1大臼歯	10.33	11.29	10.29	11.20
第2大臼歯	9.05	10.91	9.02	10.91

付編２　堀之内城跡出土の獣骨の分析

植月　学（東京芸術大学）

緒言

堀之内城跡の発掘調査では、１・２号地下式坑、２・３・５～９・12・13・14・17・28・32・35・37・59号土坑、３・７・９・10・14号溝状遺構の合計23遺構から多数の馬骨が出土した。これらのうち、13・59号土坑と９号溝状遺構の３遺構については遺存状態が極めて悪かったため分析対象から除外した。ここでは残りの20遺構についての分析結果を報告する。

なお、諸般の事情により、各部位の計測や切歯の同定が不十分であるため、ここでは個体数と部位構成の把握に主眼を置き、年齢構成や体高の復元については今後の課題としたい。

分析結果

種構成　同定できた資料はほとんどが馬であった。他にブタもしくはイノシシが２点出土した。

馬の個体数・年齢構成　最小個体数は23であった（左下顎による）。年齢構成を見ると、幼若獣が５個体、成獣が18個体となる。先述したように切歯の詳細な観察や歯冠高の計測が未済であるため、成獣の中でのより細かい年齢構成は不明である。性別について見ると、犬歯が確認されたのは28号土坑のみであり、雄の最小個体数は１となる。ただし、犬歯は小形であるため、採集漏れも考えられる。

廃棄状況と部位構成　各遺構、取り上げのまとまりごとに検討すると、いずれも最小個体数は１～２であり、一時に廃棄されたのは１頭で、多くても２頭であることが多かったようである。

全体的に頭部が多く、胴部は少ない。そこで、各遺構で頭部と胴部がどのように出土しているかを検討した。表の最後に遺構ごとの上顎、下顎、前肢、後肢それぞれの出土状況を踏まえた推定個体数を示した。前後肢については遺存度の影響が考えられたため、資料２点以上で「１」個体分、１点でも「１？」個体分とみなした。

最小23個体のうち、胴部が全く確認できないのは８遺構８個体分で、全体の約１／３となる。したがって頭部のみを埋めるのは少なくとも主体的なあり方ではなかったと考えられる。また、８例中の３例は遺存度が低いと推測される幼若獣である。さらに、頭部の中でも歯のみが残存していた資料が多いことも合わせると、最初から頭部のみが廃棄されたというよりは、胴部や歯以外の頭骨は消滅してしまった可能性が高い。ここでは部位を同定し得た資料のみを扱っているため、より詳細に観察すれば、頭部のみとした資料でも胴部の破片が混ざっている例が増える可能性が高い。

ただし、全身が存在したと断定できる例はなく、左・右、前・後肢の出土比には偏りがある。やはり遺存度の差に起因する可能性もあるが、後肢が特に少ない点は利用法や解体様式と関わることも考えられる。また、図面・写真記録がある例で見る限り、解剖学的な位置を保っている例はないようであり、全身が揃って廃棄される場合は希であったと推測される。前肢や後肢の各部位はまとまって出土している例が多く、前肢、後肢といった単位で連結した状態で廃棄されることは多かったと推定される。

解体痕　明瞭な解体痕は確認できなかった。ただし、資料はいずれも風化が激しく、表面に切創痕などがあったとしても確認は困難であると判断された。

結語

本遺跡で検出された馬骨はいずれも遺構ごとや調査時に確認されたまとまりごとに１～２頭分が含まれていた。ただ、全身が揃って廃棄された例は確認できなかった。むしろ、頭部、前肢、後肢といった大きなまとまりごとに廃棄される場合が多かったようである。遺存状況が不良であり、解体痕の検討も困難であったため、これらが廃棄以前にどのように利用されたかは明らかにできなかった。

堀之内城跡出土獣骨の部位集計一覧表

遺構 取り上げ No	頭骨	切歯 左/右	犬歯 左/右	上顎 I1	I2	I3	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	P2	P3	P4	M1	M2	M3	下顎 I1	I2	I3	P2	P3	P4	M1	M2	M3	I1	I2	I3	P2	P3	P4	M1	M2	M3	備考
				左												右						左												右						
1地下16,17							P2	P3	P4	M1	M2	M3				P2	P3	P4	M1						P2	P3	P4	M1	M2	M3				P2	P3	P4	M1	M2	M3	
1地下		10															[P3	P4	M1	M2	M3]				[P2 P2	P3	P4]		[M2	M3]				[P2 P2	P3	P4]				
2地下		11					P2 m1	[P3	P4	M1	M2	M3]				P2 m1	P3	P4	M1	M2	M3				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				P2	P3	P4	M1	M2	M3	
3溝 1a				[I1	I2	I3]							[I1	I2	I3]							[I1	I2	I3]	P2	P3	P4	M1]			[I1	I2	I3]	P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
3溝 1b																P2	P3	P4	M1	M2	M3																		
3溝 1b								(P3)～(M2)×2									(P3)～(M2)×3																						
3溝 2		9							P4		M2					P2	[P3	P4	M1	M2]	M3				[P2]	P3	P4							[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
3溝 3−1																																							
3溝 3−3																									[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
3溝 3−4																																							
3溝 3−5																																							
3溝 3−6																																							
3溝 3−7																																							
3溝 3−9																																							
3溝 3−10																																							
3溝 3−11																																							
3溝 3−12																																							
3溝 3−13	頬骨左・右後頭骨	10					[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]																		
3溝 4																(P2)?									[m1	m2	m3]							m1	m2	m3				咬耗弱
3溝 5		4					P2	P3	P4	M1	M2	M3					P3	P4							P2	P3	P4	M1	M2	M3						P4	M1	M2	
3溝 一括																																							
7溝		8					P2	P3	P4	M1	M2	M3																											
7溝							[×	×	×	×	×	×]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
10溝 1																									P～M×3														
14溝		1																							P2	P3	P4	M1	M2	M3				P2	P3	P4	M1	M2	M3	M3咬耗弱
2土																									[P2	P3	P4	M1	M2	M3]										
2土		12					P2	P3	P4	M1	M2	M3				P2	P3	P4	M1	M2	M3													[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
3土																																							
5土		10					P2	P3	P4	M1		M3				P2	P3	P4	M1	M2	M3				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
5土																																							
6土							P2	P3	P4	M1	M2	M3													P2	P3	P4	M1						[P2	P3	P4	M1	M2]		
7土		1						P3～M2×2				M3					P3～M2×1				M3				P2					M3									M3	
8土		6																								P3	P4							[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
9土								m2	m3	(M1)						[m1	m2	m3	(M1)]						[m1	m2	m3	(M1)]						m1	m2	m3	(M1)			
12土		5						m2	m3	M1	(M2)	(M3)								(M2)	(M3)					m2	m3	M1	(M2)	(M3)					m2	m3	M1		(M3)	焼け
14土		5														P2	P3	P4	M1	M2	M3				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
17土		5																							[P2	P3	P4]	M1	M2	M3					P3	P4				咬耗強。老成獣？
28土		24	2?				P2 P2	P3 P3	P4 P4	M1 M1	M2 M2	M3 M3				P2 P2	P3 P3	P4 P4	M1 M1	M2 M2	M3 M3				[P2 [P2	P3 P3	P4 P4	M1 M1	M2 M2	M3] M3]				[P2 [P2	P3 P3	P4 P4	M1 M1	M2 M2	M3] M3]	
32土		7					P2	P3	P4	M1	M2	M3				P2	P3 P3	P4 ～	M1 M2	M2 ×2	M3				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]				[P2	P3	P4	M1	M2	M3]	
35土							m1	m2	m3							m1	m2	m3	(M1)						m1	m2	m3							m1	m2	m3				
37土							m1	m2	m3							m1	m2	m3	(M1)						[m1	m2	m3]	(M1)						[m1	m2	m3	(M1)]			
計							14	15	16	13	11	13				17	18	18	16	13	15				23	23	23	18	15	16				20	22	23	19	16	16	

遺構 取り上げ No	椎骨	肩甲骨 左	肩甲骨 右	上腕骨 左	上腕骨 右	橈骨 左	橈骨 右	尺骨 左	尺骨 右	中手骨 左	中手骨 右	寛骨 左	寛骨 右	大腿骨 左	大腿骨 右	脛骨 左	脛骨 右	踵骨 左	踵骨 右	距骨 左	距骨 右	中足骨 左	中足骨 右	他	推定固定数 成獣頭部	推定固定数 幼若獣頭部	推定固定数 前肢	推定固定数 後肢
		胴部																										
1地下16,17																									1			
1地下					d							p?	p	d	w	s	w		w		w				1		1?	1
2地下		p	p		w	w							p												1	1頭?	1	1?
3溝 1a																												
3溝 1b					d		d																		1		1(右)	
3溝 1b																										1?		
3溝 2				d	d	w	w		p	w	w														1		1	
3溝 3−1																							p					
3溝 3−3															d										下顎1(3−13と同一？)			
3溝 3−4																						w		ブタ？橈骨p				
3溝 3−5																								破片のみ				
3溝 3−6																								手足根				
3溝 3−7										w																		
3溝 3−9							w		p																			
3溝 3−10					w			p																				
3溝 3−11				w																								
3溝 3−12	頸椎×4 胸椎×4	p	p																									
3溝 3−13																									頭1			
3溝 4				d	d	L/Rd		p						L/Rd												下顎1	1	1?
3溝 5					d				p																1		1(右)	
3溝 一括											w													手足根				
7溝																									1			
7溝																												
10溝 1																									1?			
14溝																									下顎1			
2土		p	p	p	d		w			p	w		p			s	s								1		※２土で前後肢一体分	
2土								p									d											
3土					d		p		p		s																1(右)	1
5土																	d		w		w				1			
5土		p	p	d	w		p	p				p	p			s	s?			w	w	p	p				1	1
6土																									1			
7土																									1			
8土																									1			
9土				s(yg)																						1(幼)	1?	
12土																										1(若)		
14土														d	s?										1			1?
17土																s								ブタ？上腕骨d	下顎1			1?
28土		p	p	2	2	px1 wx1	px2		p	p	sx2						s								2		2	1?
32土				s	s	s								L/Rs?			s					px2			1		1	1
35土																										1(幼)		
37土																										1(幼)		
計		5	5	7	12	4	7	4	5	4	4	1	4	2	2	1	3		2	1	3	4	2		18	5	12	5

※3-1～12で前後肢1体分

凡例

顎・歯
I：切歯
P：前臼歯
M：後臼歯
[ ]：顎骨残存範囲
◇：崩出中
( )：未崩出
x：脱落

四肢骨
w：完存
p：近位部
d：遠位部
s：骨幹部

写　真　図　版

堀之内城跡・免谷津遺跡・志保多遺跡航空写真（西から）

同　調査前風景（A 区から西を望む）

同　C 区全景（東から）

同　C 区全景（西から）

同　C 区完掘状況（西から）

図版２

堀之内城跡Ｄ区全景（Ｃ区より西を望む）

同　ＦⅠ区全景①（東から）

同　ＦⅠ区全景②（東から）

同　２号溝状遺構及び旧景観

同　FⅢ区溝②トレンチ

同　１号地下式坑

同　２号地下式坑

同　３号地下式坑

堀之内城跡 3 号地下式坑

同　4 号地下式坑

同　4 号地下式坑

同　5 号地下式坑

同　5 号地下式坑

同　6 号地下式坑

同　7 号地下式坑

同　7 号地下式坑

図版 4

堀之内城跡 8 号地下式坑

同　8 号地下式坑

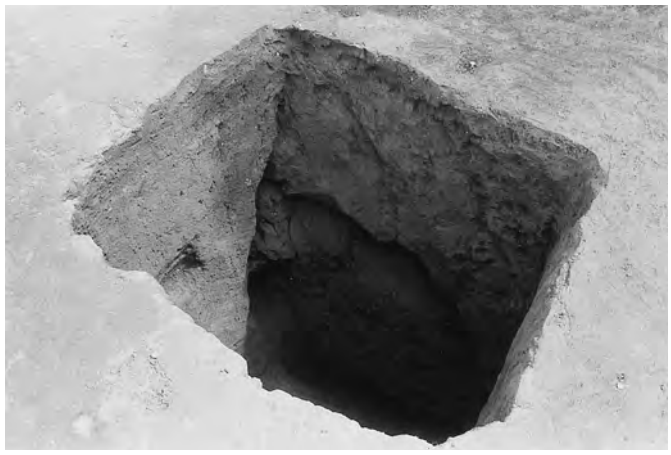
同　9 号地下式坑

同　9 号地下式坑遺物出土状況

同　10号地下式坑

同　10号地下式坑

同　10号地下式坑内壁ケズリ状況



同　11号地下式坑

堀之内城跡12号地下式坑

同　12号地下式坑

同　12号地下式坑内壁ケズリ状況

同　13号地下式坑

同　1号土坑

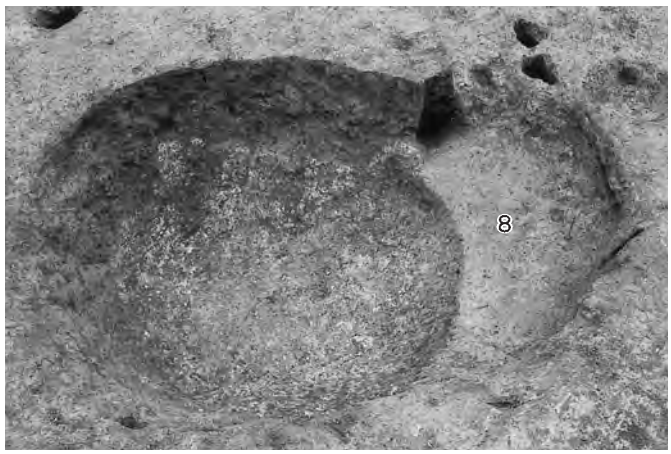
同　2号土坑

同　3号土坑

同　6号土坑

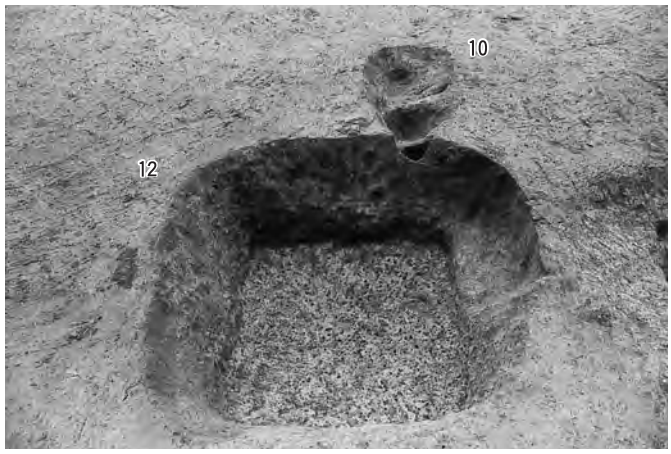
図版 6

堀之内城跡 7 号土坑

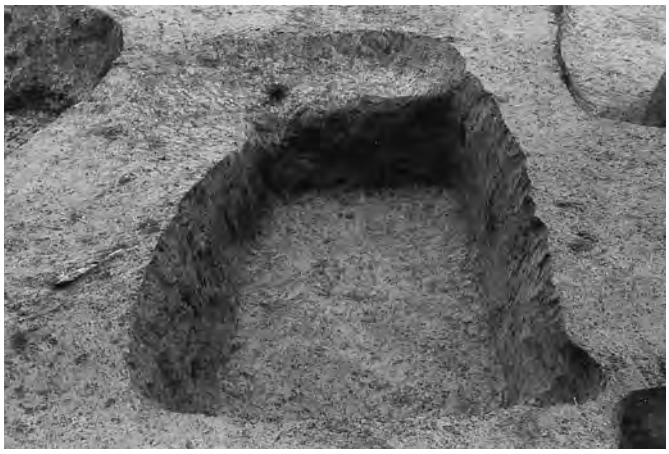


同　8 号土坑

同　9 号土坑

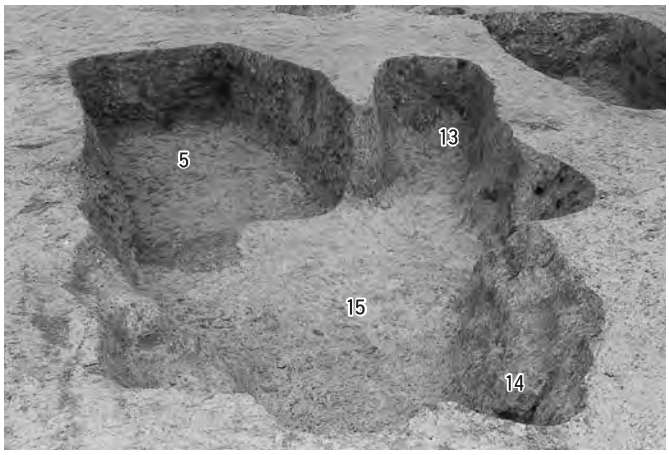


同　10・12号土坑



同　11号土坑

同　5・13・14・15号土坑堆積状況



同　5・13・14・15号土坑完掘

同　14号土坑出土獣骨

堀之内城跡16号土坑

同　17号土坑

同　20号土坑

同　20号土坑

同　21号土坑

同　22号土坑

同　23号土坑

同　24号土坑

堀之内城跡25号土坑

同　26・27号土坑

同　28号土坑

同　28号土坑獣骨出土状況

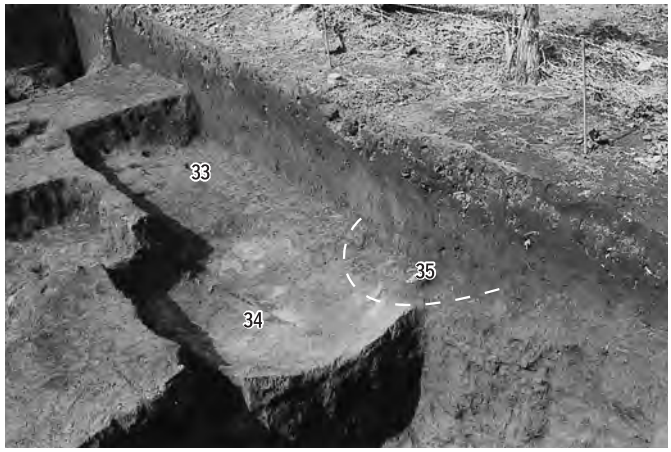
同　29号土坑

同　30号土坑

同　31号土坑

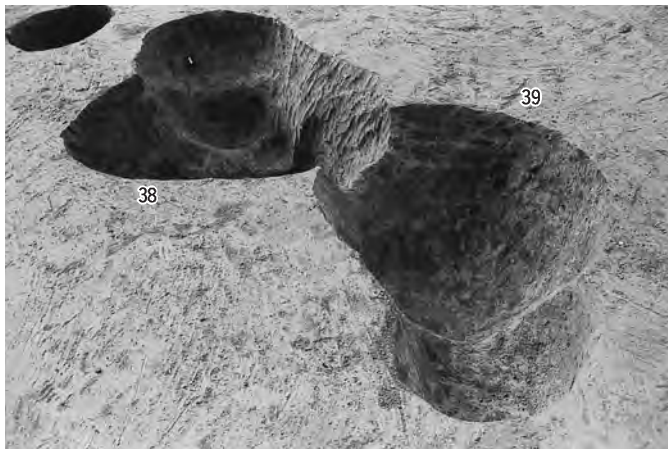
同　32号土坑

堀之内城跡34号土坑



同　33・34・35号土坑

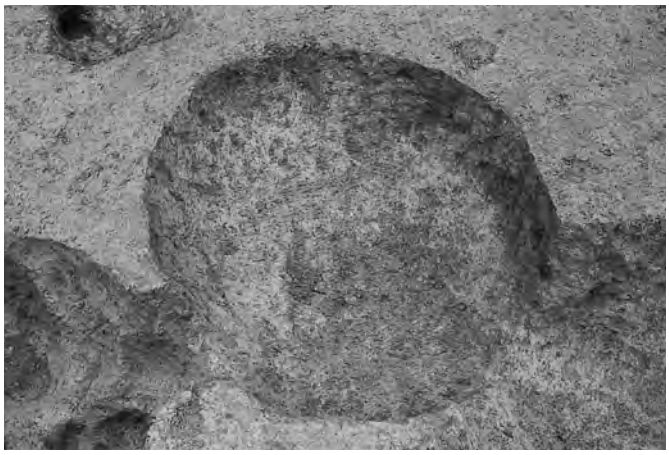
同　37号土坑



同　38・39号土坑

同　40号土坑

同　41号土坑



同　42号土坑

同　43号土坑

堀之内城跡44号土坑

同　45号土坑

同　46・47号土坑

同　48・49・53号土坑

同　50号土坑

同　54号土坑

同　55号土坑

同　56号土坑

堀之内城跡58号土坑

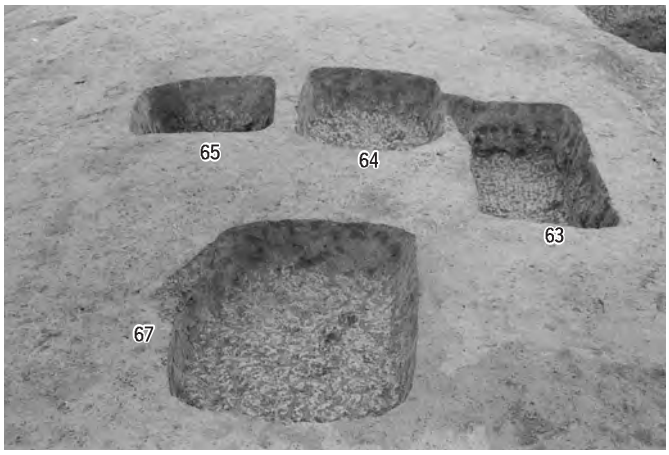
同　59号土坑

同　60号土坑

同　61号土坑

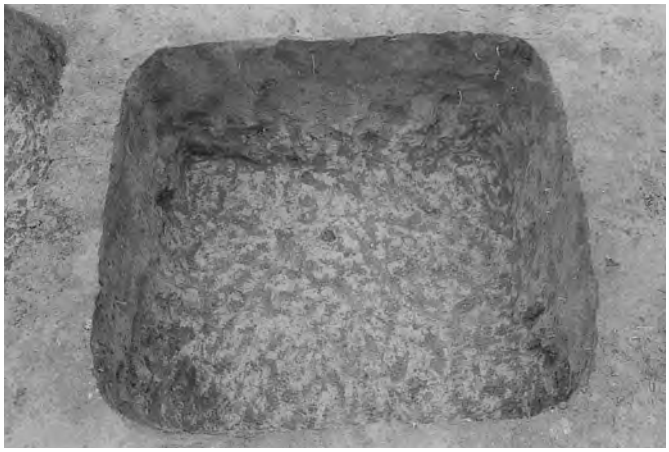
同　62号土坑

同　63号土坑



同　63・64・65・67号土坑

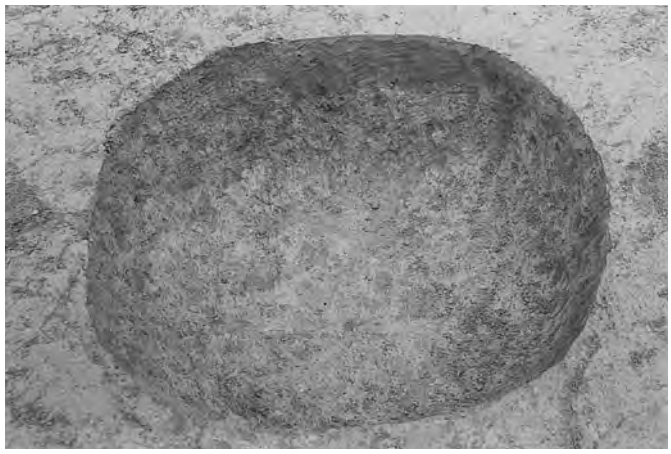
同　64号土坑



堀之内城跡65号土坑

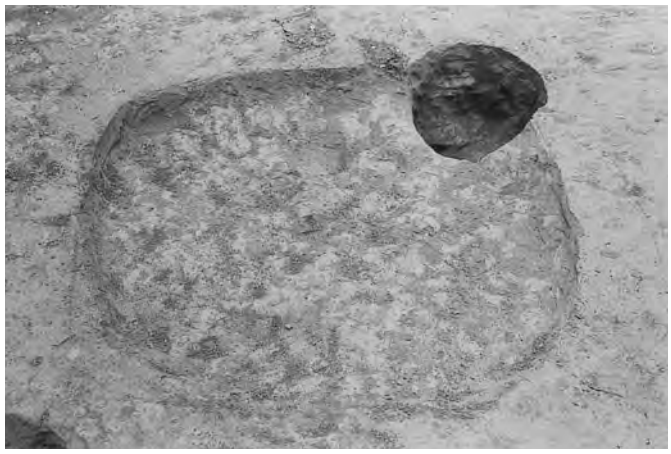
同　66号土坑

同　67号土坑



同　68号土坑

同　69号土坑



同　70号土坑

同　71号土坑

同　72号土坑

堀之内城跡73号土坑

同　75号土坑

同　76号土坑

同　77号土坑

同　79号土坑

同　79号土坑

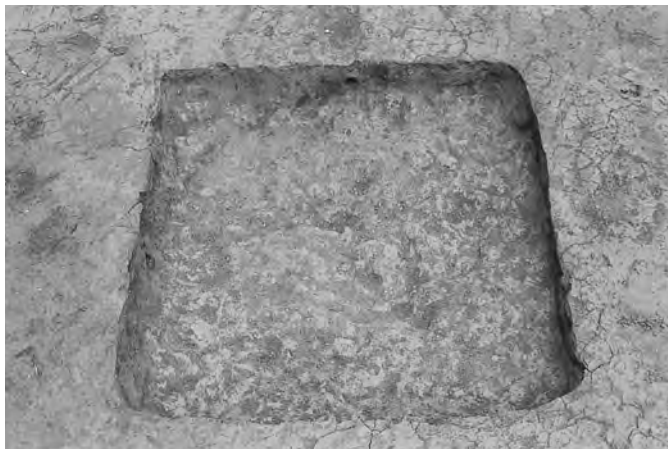
同　80号土坑

同　81号土坑

堀之内城跡82号土坑

同　83号土坑

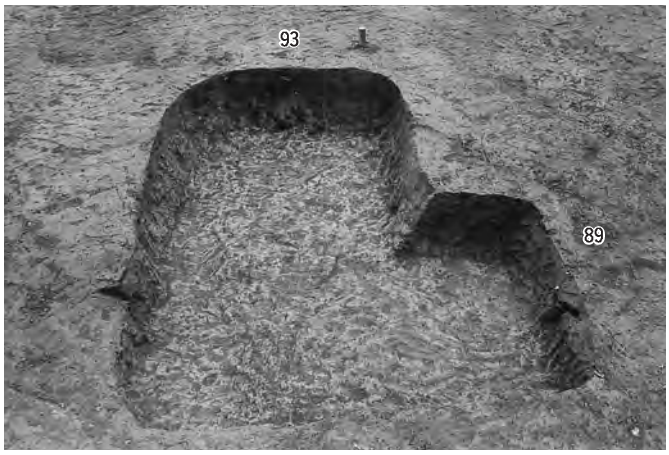
同　84号土坑



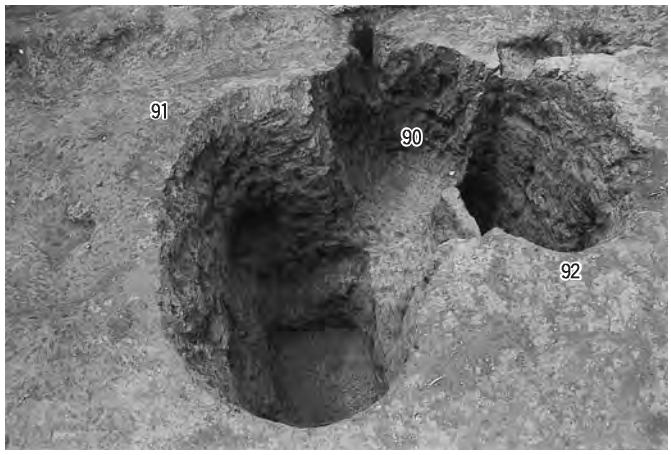
同　85号土坑

同　87号土坑

同　88号土坑



同　89・93号土坑



同　90・91・92号土坑

堀之内城跡１号火葬土壙

同　１号火葬土壙

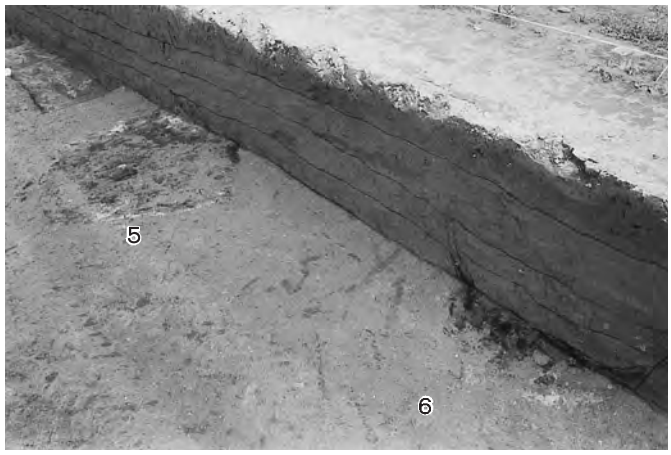
同　２号火葬土壙

同　２号火葬土壙

同　３号火葬土壙

同　４号火葬土壙

同　４号火葬土壙

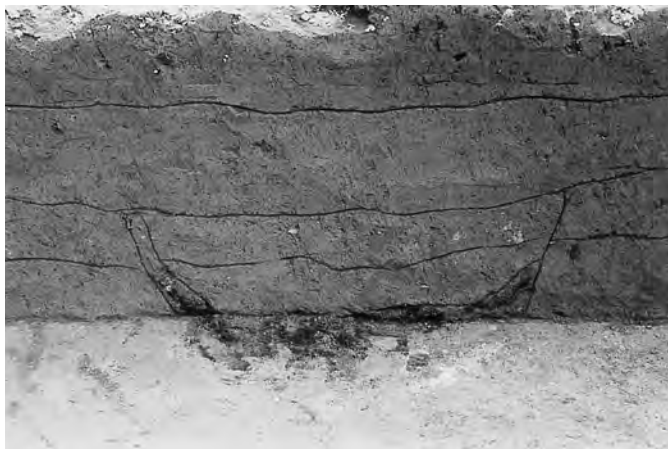


同　５・６号火葬土壙検出状況

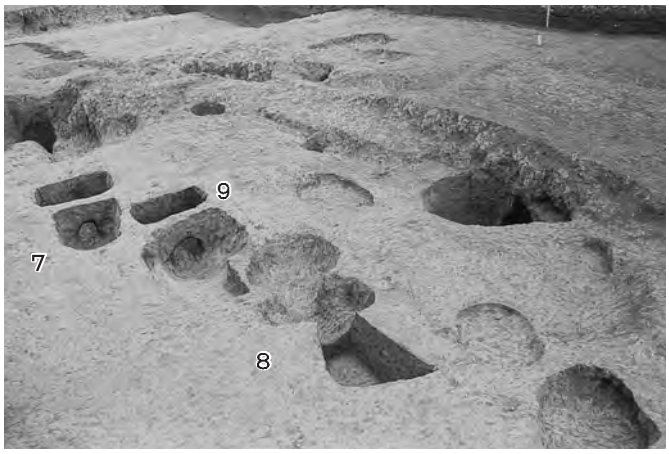
堀之内城跡５号火葬土壙遺物出土状況

同　５号火葬土壙

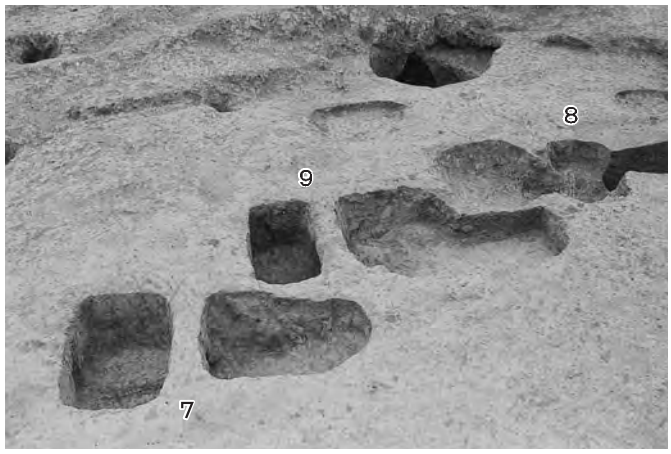
同　６号火葬土壙



同　６号火葬土壙土層状況



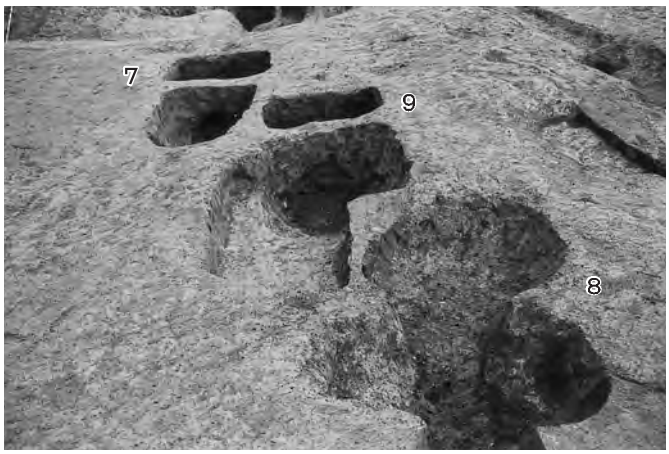
同　２号台地整形区画内火葬土壙群



同　２号台地整形区画内火葬土壙群

同　７号火葬土壙

同　７号火葬土壙



堀之内城跡７・８・９号火葬土壙

同　９号火葬土壙

同　９号火葬土壙

同　10号火葬土壙

同　12号火葬土壙

同　１号土壙墓①

同　１号土壙墓②

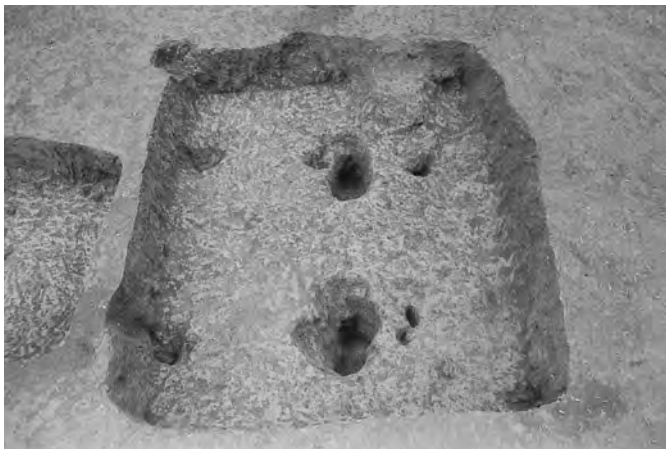
同　１号土壙墓遺物出土状況①

堀之内城跡１号土壙墓遺物出土状況②

同　１号土壙墓完掘

同　１号竪穴建物跡

同　３号竪穴建物跡



同　４号竪穴建物跡

同　４号竪穴建物跡階段近景

同　１号井戸①

同　１号井戸②

堀之内城跡１号炭窯

同　３号台地整形区画、１・２号堀立柱建物跡（西から）

同　３号台地整形区画、１・２号堀立柱建物跡（東から）

同　１号台地整形区画

同　１号台地整形区画、４号溝状遺構

同　１号台地整形区画、４号溝状遺構土層状況

同　２号台地整形区画①

同　２号台地整形区画②

堀之内城跡２号溝状遺構（A 区より西を望む）

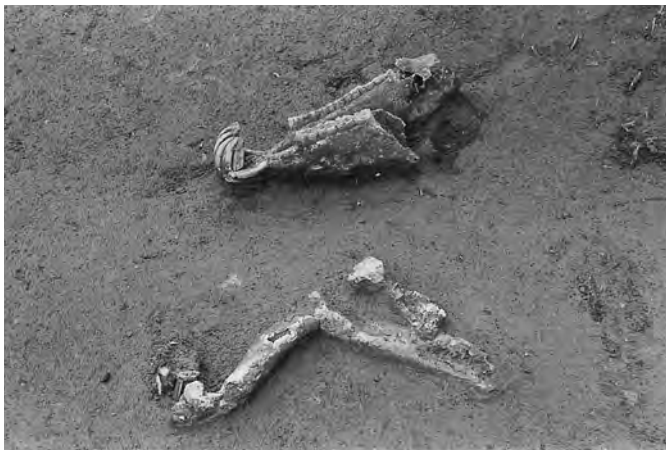
同　２号溝状遺構（B 区から東を望む）

同　２号溝状遺構

同　２・３号溝状遺構（西から）

同　２・３号溝状遺構分岐部分

同　２・３号溝状遺構



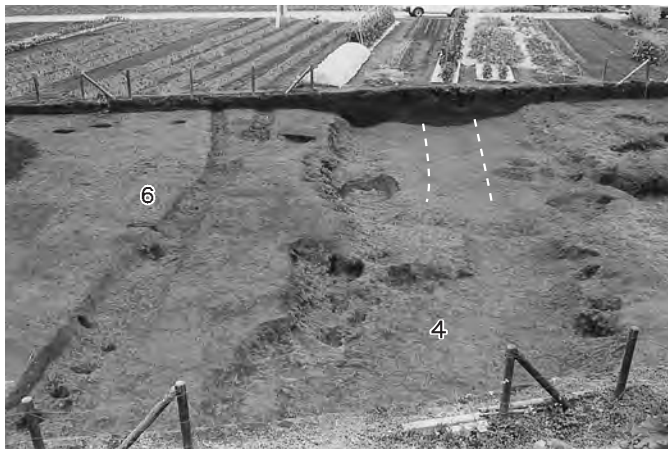
同　３号溝状遺構出土獣骨①

同　３号溝状遺構出土獣骨②

堀之内城跡 3 号溝状遺構出土獣骨③

同　3 号溝状遺構出土獣骨③

同　3 号溝状遺構出土獣骨④



同　4・6 号溝状遺構、1 号台地整形区画

同　5 号溝状遺構（南壁）

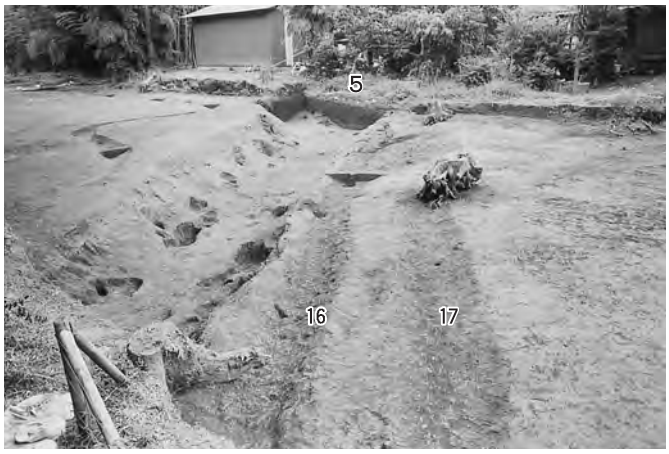
同　7 号溝状遺構

同　9 号溝状遺構出土獣骨

同　9 号溝状遺構出土獣骨

堀之内城跡15号溝状遺構

同　5・15～17号溝状遺構



同　5・16・17号溝状遺構

同　18・19号溝状遺構

同　18・19号溝状遺構

同　20号溝状遺構

同　戦車壕状遺構

同　戦車壕状遺構

免谷津遺跡１号住居跡

同　１号住居跡出土遺物

同　１号土壙

同　２号土壙

同　２号土壙出土遺物

同　２号住居跡

同　２号住居跡出土遺物①

同　２号住居跡出土遺物②

免谷津遺跡１号溝（１B′ー４ｃグリッド）

同　１号溝（１B′ー３ａグリッド）

同　１号溝（１B－５ｄグリッド）

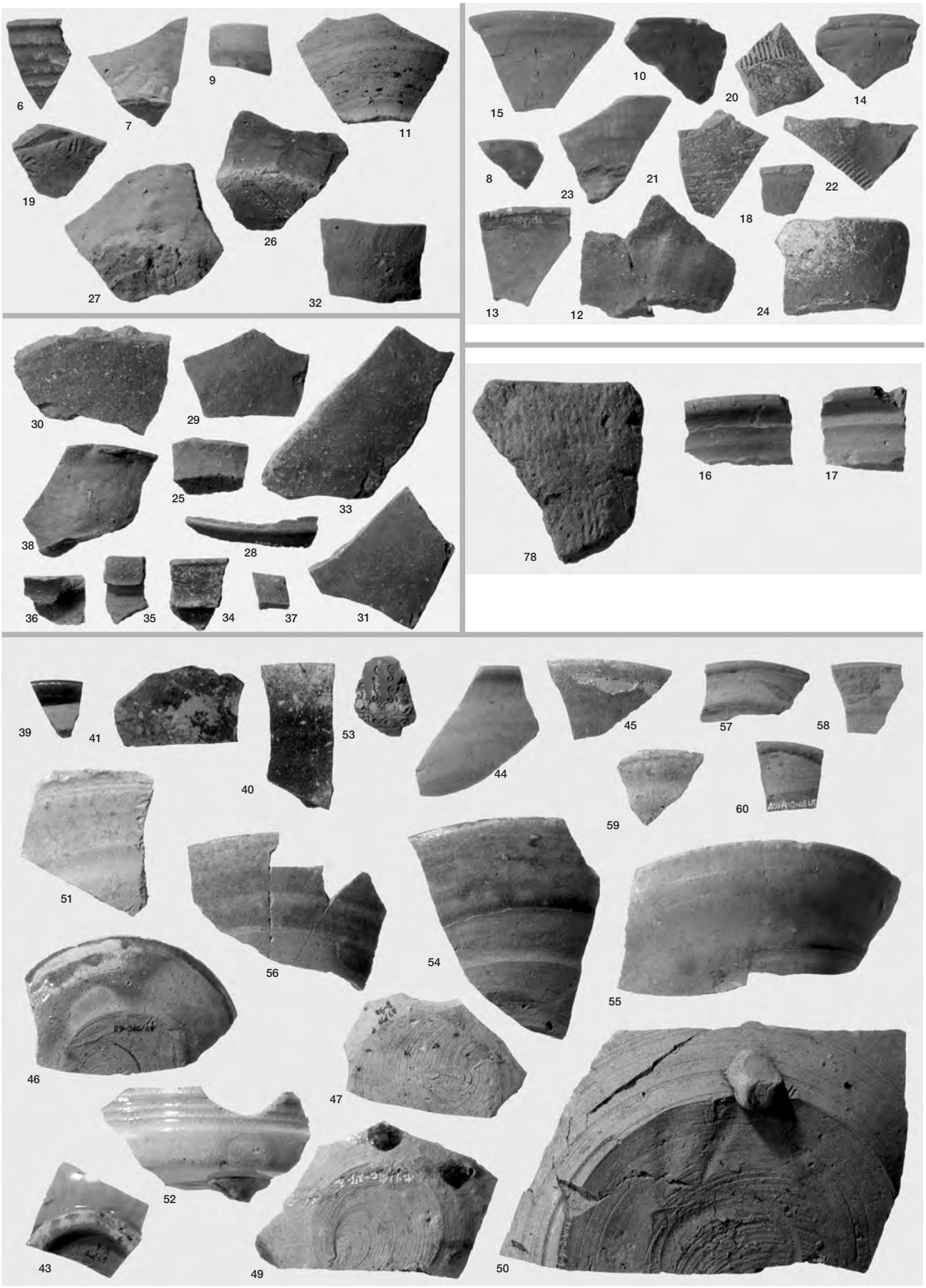
同　２号溝

志保多遺跡Ａ区全景

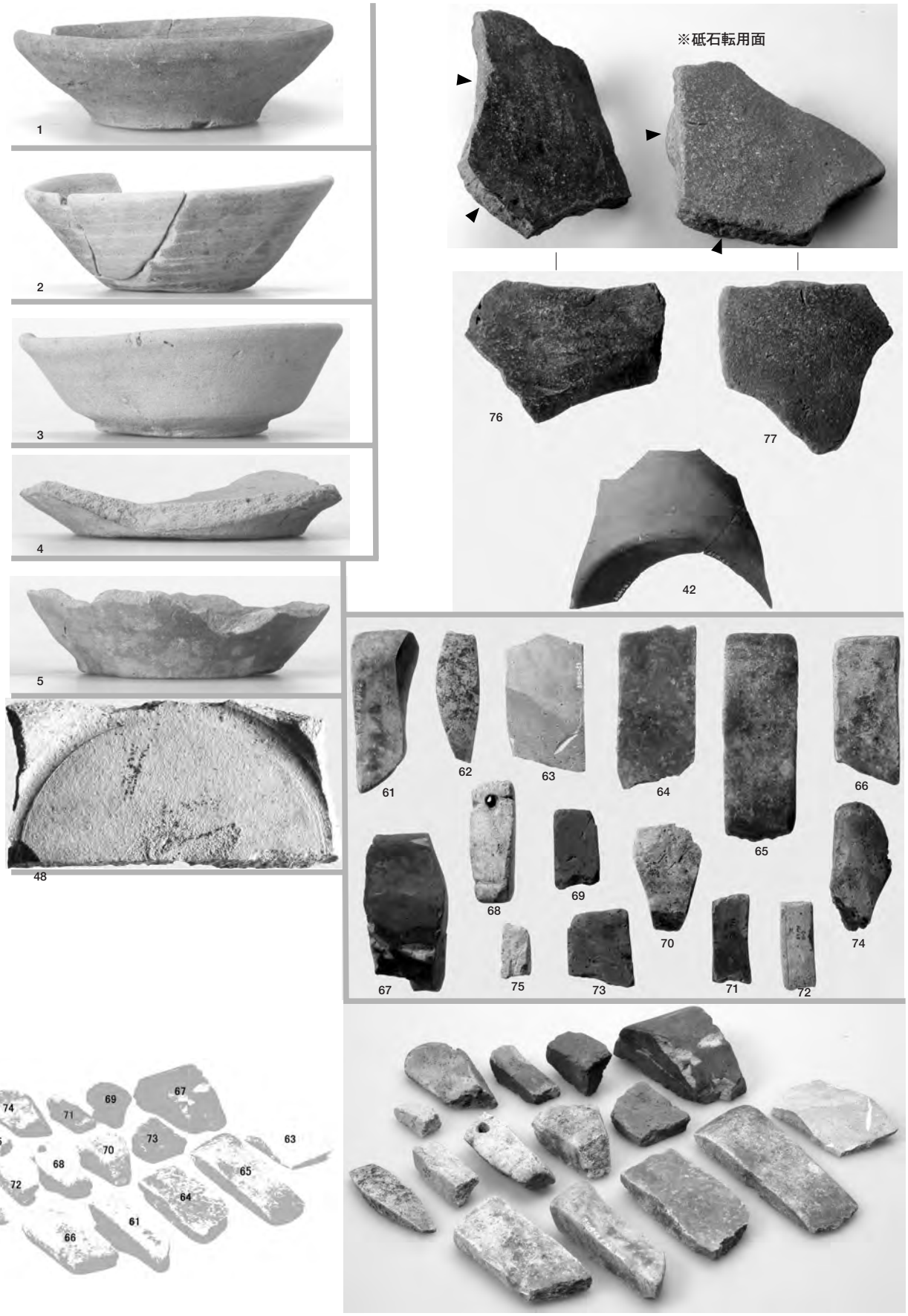
同　Ｃ区全景

同　Ａ区調査風景

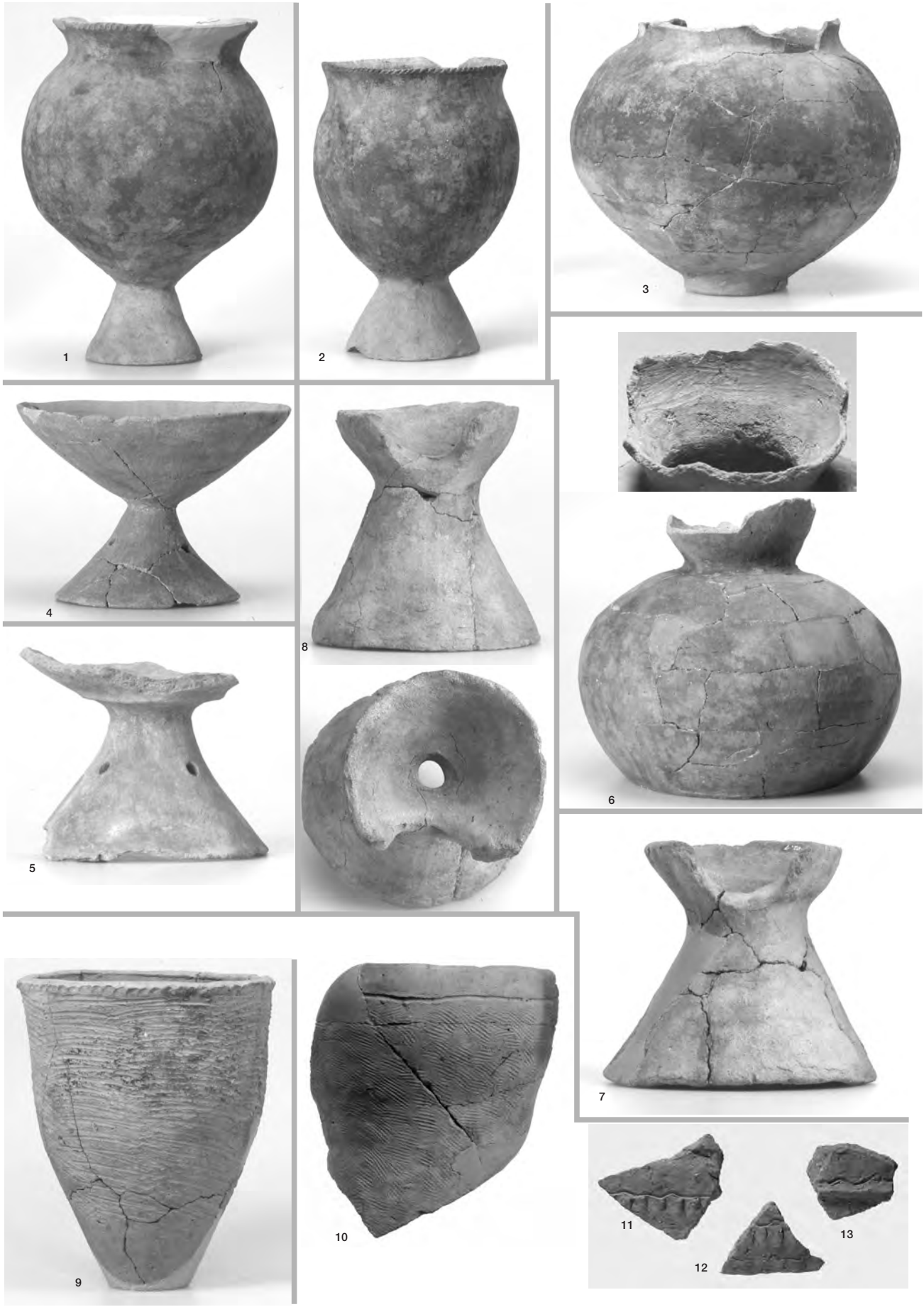
同　Ｄ区１・２トレンチ検出溝


6
7
9
11
19
26
27
32
15
10
20
14
8
23
21
22
18
13
12
24
30
29
25
33
38
28
36
35
34
37
31
78
16
17
39
41
53
40
44
45
57
58
59
60
51
56
54
55
46
47
52
43
49
50

堀之内城跡出土遺物（1）



堀之内城跡出土遺物（2）



免谷津遺跡出土遺物

堀之内城跡１号土壙墓鉄鍋①

同　１号土壙墓鉄鍋②

同　１号土壙墓鉄鍋③

同　１号土壙墓鉄鍋④

同　１号土壙墓鉄鍋と頭骨①

同　１号土壙墓鉄鍋と頭骨②

同　１号土壙墓鉄鍋底部

同　１号土壙墓鉄鍋内側布付着部分

報告書抄録

ふ り が な	ちばし　ほりのうちじょうせき　めんやついせき　しほたいせき
書　　名	千葉市　堀之内城跡　免谷津遺跡　志保多遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	長原　亘
編 集 機 関	財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒260-0814　千葉市中央区南生実町1210　　TEL　043-266-5433
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査機関	調査面積	調査原因
堀之内城跡（ほりのうちじょうせき）	千葉市若葉区谷当町（ちばしわかばく やとうちょう）238番4他	12104	若葉275	35°38′36″	140°12′48″	20000717～20001030 20010401～20010928	1,508m²/8,926m² 5,200m²（本調査）	道路建設事業
免谷津遺跡（めんやついせき）	千葉市若葉区谷当町（ちばしわかばく やとうちょう）947番4他	12104	若葉274	35°38′37″	140°13′03″	19990816～19990914 20000717～20000824	405m²/7,183.88m² 222m²/890.24m²（本調査実施分260m²）	道路建設事業
志保多遺跡（しほたいせき）	千葉市若葉区谷当町（ちばしわかばく やとうちょう）1044番15他	12104	若葉266	35°38′29″	140°12′37″	20020716～20020928	1,508m²/8,926m²	道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀之内城跡	城館跡	中世	地下式坑　13基 土坑　35基 火葬土壙　12基 溝状遺構　20条 台地整形区画　４箇所 掘立柱建物跡　２棟 井戸　１基 竪穴建物跡　４基	陶磁器類・土器類 鉄製品 石製品（砥石など） 銅銭・瓦・獣骨	
		中近世	土坑　47基		
		近世	土壙墓　１基 炭窯　１基 土坑　９基	鉄鍋・人骨・銅銭	土壙墓から鉄鍋を被った頭骨が出土。
		近代	戦車壕状遺構　１箇所 土坑　２基		
免谷津遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　１軒 土壙　２基		
		古墳時代（前期）	竪穴住居跡　２軒		
		中世以降	溝状遺構　１条		
志保多遺跡	包蔵地	中近世	溝状遺構　１条		

千葉市

堀之内城跡　免谷津遺跡　志保多遺跡

平成15年３月31日発行

編集・発行　千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町1-35
財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210
ＴＥＬ　043-266-5433

印　　刷　株式会社　弘報社印刷
千葉市緑区古市場町474-268ちば印刷団地内
ＴＥＬ　043-268-2371（代）